

私がターフで転ぶまで

RKC

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

芽の出ないウマ娘が勝つために努力した結果、ゴール後に力尽き、転倒して大怪我を負う程頑張ってしまう話です。

アプリでネイチャとかタイシンとかのシナリオを見てて、湿度の高い話を書きたいと思ったので書きました。

原作からは設定だけをお借りしています。原作キャラは登場しません。

# 目次

キャラ絵	1
一話 出会い	5
二話 目標	27
三話 新走法	41
四話 ズレる歯車	65
五話 スカウト理由	82
六話 併走	111
七話 敗北の辛気	132
八話 勝ちたがり	158
九話 緊張	177
十話 模擬レース	198
十一話 勝者と敗者	213

十二話 才能	229
十三話 紫苑S 出走表	244
十四話 弱気	258
十五話 天啓	277
十六話 衝動	291
十七話 必要な隔たり	304
十八話 底力	318
十九話 二重奏	335
二十話 決意	355
二十一話 ミサンガ	371
二十二話 傘の下で	383
二十三話 紫苑S 当日	395
二十四話 逃げけん制	408

二十五話 全身全霊

二十六話 創痍

二十七話 病院で

エピソード①

エピソード②

422

438

455

467

493

# キヤラ絵

ノールミサンガ

真面目で行儀の良い優等生。

しかし最近のレースではいまいち結果をだせておらず、自分には才能が足りないのでは、と思い詰めがち。

そんな中で一人のトレーナーと出会い、成長していく。

トレーナー

歳を召しているが、新人トレーナー。口調が荒い。

ノールと出会い、彼女の担当をすることに決める。

担当をする上で、初めはビジネスライクな関係を提案するが、内に秘めた思いがあるようだ。

スーパーチャージャー

ノールの二つ上の先輩。関西弁でノリの良い、ムードメーカー。とはいえ、少し怒りっぽいところも。

彼女自身が編み出した「ジェット走法」をノールに伝授する師匠枠でもある。

ナイトグライダー

ノールとは同級生で、寮の部屋も同じ。顔立ちが非常に端正で、読者モデルをやっている。

顔立ちの良さと歯切れのよい口調からクールな印象を受けるが、実は神経質だった。り、妙な所でポンコツだったりする。

ジェミニシード

ノールとは同級生。自分より遅いノールにトレーナーが付いた事を快く思っておらず、因縁を吹っ掛ける事しばしば。

ノールと模擬レースで直接対決することになるが、その結末は……

す。本文は10000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎで

す。本文は10000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎで

す。本文は10000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎで

す。本文は10000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎで

す。本文は10000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎで

す。本文は10000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎで

す。本文は10000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎで

本文は1000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎです。

本文は1000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎです。

本文は1000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎです。

本文は1000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎです。

本文は1000文字以上ないと投稿できないから、これより下は文字数稼ぎです。



## 一話 出会い

「ハッ……ハッ……ハッ……」

短く息を切らしながら全力で芝を蹴ります。それでも前との距離は縮まりません。

「ハッ……ハッ……ハッ……」

ドクンドクン、と自分の心臓の音だけが聞こえます。それぐらい私の心臓は全力で稼働しています。それでも前との距離は縮まりません。

「……ール!! 一着は……! 二着……!」

実況の声がかすかに耳に入って来ました。

……先頭はもうゴール板を通過したのか……速い、速すぎる。

かくいう私はゴール板まで後100mはある位置にいます。それでも全力で走っている今、6秒足らずでゴール板を通過しますが。

「ハッ……ハッ……ハアッ……ハア……」

ゴール板を通過し、緩やかに速度を落とします。後ろを振り向くと、そこには一人しかいませんでした。つまり私の順位はドベから二番目。ブービー賞です。

「……ハア……」

下を向きながらため息をつきます。

また勝てなかった……。

悔しさから、拳を強く握りました。

ここで自己紹介をば。

私の名前はノールミサンガ。身長は146cm。鹿毛色の髪、その前髪には白のメツシユが入っています。頭の上には動物のような耳、それにズボンの穴からは尻尾が出ています。

つまり私は、世間で言うところのウマ娘という存在です。

ウマ娘とは先に述べた耳と尻尾の特異性に加え、非常に高い身体能力を持ち、特に走力が卓越しております。

そんな私がさっきまで行っていたのはレースです。ウマ娘同士が速さを競うレース。一般的にはトウインクル・シリーズと呼ばれ、スポーツ・エンターテインメントとして有名です。

レースには格があり、上から

GI、GII、GIII、オープンクラス、プレオープンクラス、三勝クラス、二勝クラス、一勝クラス、未勝利・新ウマ娘

などに細分化されています。

え？ 私のグレードですか？ 一応G I I I Iです。さつき走っていたレースもG I I I。

……とはいえ私がG I I I Iのレースに出られているのは運のおかげです。それはなぜかと言うと、オープンクラスのレースで私の前の集団がもつれたせいで失速。その後ろにいた私が一着をとってしまい、なんとかG I I I Iレースへの出走条件を満たせたのです。

まあ、そんな私がG I I I Iのレースに出ても結果はこの通り。……練習はちゃんとしてたんですけどね……。

顔を上げて前を見ると、一着を取ったウマ娘が観客たちに手を振っています。その顔は満面の笑みで、勝者だけに許された表情です。

レースで一着を取ることは榮譽を得るといふ事だけでなく、レースの後の「ウイニングライブ」において、センターで歌って踊れる権利を得る事でもあります。そのためレースに参加するウマ娘は皆が皆、一着を渴望します。

……そういえば私が最後にセンターで踊ったのはいつだったっけ……？

私が最後に先頭でゴールしたのはいつだったっけ……？

いつから私は勝ってないっけ……

「……………ル? ……………ール? ノール?」

「っ! あ、な、何ですか?」

「どないしたんや? ボーっとして。食事も全然進んでないみたいやけど」

隣から呼び掛けられ、私の意識は現実を引き戻されます。

「す、すみません。昨日のレースのことを思い出して……」

「あ………掲示板にも載らんかったしなあ……」

私が今いる所はトレセン学園……レースに出るウマ娘の専門学校の食堂です。窓際の席で三人並んで座っています。

「やけど、あんまり気にしすぎなよ? 次もあるんやから」

さつきから私を気に掛けてくれているウマ娘はスーパージャーさん。私の2

コ上の先輩で、後輩は大体の人が「スパさん」という略称で呼んでいます。

スパさんは身長143cmの私よりもかなり大きく、多分身長160cm強ほどあります。右耳には星形のピアスを付けており、もみあげが二股に分かれているのが特徴的です。

スパさんは短距離を得意としているスプリンター。レースのグレードとしては最高峰のGIレースをいくつか制しているすごいウマ娘です。

スパさんは特にゴール前での末脚が非常に優れており、超前傾姿勢ですつ飛んでいく姿からファンの間では「ジェット機」とも呼ばれているそうです。

「ほら、ナイトからも何か言ったりや」

「……ノールはもう少し練習量を減らした方が良いと思う。オーバーワーク気味だから」

スパさんが話を振り、それに答えたウマ娘、彼女の名前はナイトグライダー。彼女は私と同じ年です。

身長はスパさんより少し高い170cm弱。ややカールした真っ黒の髪。そこに私と同じく前髪に白のメッシュが入っています。

左の耳にダイヤ型の装飾品を付けており、同性の私から見ても端正な顔立ちが特徴的です。

それと胸が大きいんです。何を食べたたらああなるんでしょうか……？

ナイトはマイルく中距離を得意としており、トリプルティアラを有望視されていたこれまで凄いうま娘です。先行策が得意で逃げウマに一度も勝利を許していない戦績から「追跡者」という二つ名まで付けています。

さきほど、「トリプルティアラを有望視されていた」と述べました。というのも、ナイトは桜花賞こそ取ったのですが……

「過度な練習は逆効果。……私みたいに怪我したら元も子も無いし……。だからノールはもつと休むべき」

オークスで膝を故障。トリプルティアラを逃してしまいました。今は秋華賞に向けて療養中です。

「「……………」」

三人の間に気まずい沈黙が流れます。

「……せ、せやけど今は雑誌モデルの方に専念できてるんやろ？」

沈黙を破ってくれたのは、スパさん。

「はい。レース前はどうしても足が太くなってしまうので、療養中の今は全身モデルを中心に出来るのが幸いです」

今話題に上がったように、ナイトは読者モデルとしても活躍しています。レースの場

だけではなく雑誌の場でも人気で、まさに才色兼備という言葉がぴったりでしょう。

「中距離ならまだ足は細い方やる。ふくらはぎが大事やからな。ウチなんか短い距離メインやから太ももが太うなってしゃあないわ!」

「世間がモデルに求めるのは、もっと細い足ですから……」

「それやとウチの太ももは太すぎるってか?」

「アスリートとしては機能的な太さだと思えますが」

「アスリートとしてやなくて女性として魅力的な足がええんやけどなあ……」

スパさんにナイト。二人とも私とは違い、確かな実力と実績を持っています。特にナイトは同い年かつ、適正距離も同じ、さらに寮の部屋も同室なため、どうしても自分と比べてしまうのです。

かたや桜花賞を取り、モデルもこなすG I Uマ娘。

かたやオープンクラスすら幸運で乗り切ったG I I I未勝利Uマ娘。

ナイトはモデル業も行っているため、私の方が多く練習できるし、おそらくしているはずなのですが、それでもこれだけの差が広がっています。

そんなことを考えてしまうと、いつも思う事があるんです。

やっぱりこの世は才能なんじゃないかって。

時と場所は変わり、今は夜のトレセン学園の中庭。ここには木のうろがあり、悩みを抱えたウマ娘が木のうろに思いの丈を叫ぶことで有名です。

かくいう私も勝てないのを悩んでここに来たわけで。

木のうろに手をかけて覗き込むと、中は真つ暗闇。底の見えない黒に一瞬怯みました。が、意を決して思いの丈を叫ぼうと大きく息を吸いました。

……でも、何を叫ぶ？ 自分に才能が無いことを嘆く？

一応、私もトレセン学園の編入試験に受かり、オープン戦までは実力で勝つことが出来たので、才能はある方だとは思いますが。

けれど上には上がいるのです。それこそスパさんやナイトのようなウマ娘が。

才能が足りないのなら練習の量を増やす……つまり努力で補うしかありませんが、そこにも落とし穴があります。

トレセン学園には「トレーナー」と呼ばれる人が在籍しています。

トレーナーとはウマ娘を走り方を教える立場の人です。トレーナーからスカウトさ



れたウマ娘は専属、またはチームに所属する形でトレーナーから直接指導が受けられます。

トレーナーはトレセン学園の難しい試験に合格する必要があります。その狭き門をくぐってきた彼ら、彼女らの指導はやはり的確で効率的です。それこそウマ娘達が自主練をするよりもよっぽど。

つまり効率的に練習をしたいならトレーナーにスカウトされる必要があります。しかしトレーナーにスカウトされるためには、選抜レースで、ある程度の実力を示さなければいけません。

つまり才能の足りなさを努力で補おうとすると、トレーナーにスカウトされるのが一番なのですが、トレーナーにスカウトされるのにも才能が必要になってくるというこの背反。

特に近年はトレーナーの人数が減っており、限られたウマ娘しかトレーナーにスカウトされていません。

この環境が、才ある者は更に能力を伸ばし、才無き者がますます伸び悩むという状態を作っているのです……勝手にそう思っています。

一応スカウトされていないウマ娘達は、チームや担当を持たないトレーナー、「教官」と呼ばれる人から指導を受けますが、教官は十数人の指導を一気に行うため、各ウマ娘

に適したトレーニングを行えるわけではありません。

……やっぱり才能なのかな……。けれど今ここで才能のせいにしてしまったら？  
私が今までしてきた努力はいつたい……。

「……勝ちたい」

ぐるぐると下手な考えが二周も三周もする中、私の口からはそれだけが言葉として出てきました。そんな時、

「こんな夜に何してるんだ？」

「っ！」

後ろからいきなり声を掛けられ、耳と尻尾を逆立たせながら顔を跳ね上げました。振り向くと、そこには灰色のコートを着た男性が。

その人は私より頭一つ以上大きく、身長は180cm前後でしょうか。つばがめくれ上がった丸い帽子に、サングラスをかけています。頬にはほうれい線が刻まれており、そこそこお年を召した方ということが予想できました。手に杖も持っていますし。

それにしても夜にサングラス……？

そんなことを思い浮かべていると、

「ん、悪い。少し驚かせちゃまったみたいだな」

「え、ええと……こんばんは」

見た目の年齢の割には、乱暴な話し方に面喰らいましたが、気を取り直して夜の挨拶をしました。

「おう、こんばんは。……とはいえ怪しい者じゃないぞ？ バッジの通り、トレーナー  
さ」

彼は胸に付けている蹄鉄をモチーフがあしらわれたバッジを見せてきました。

確かにトレーナーバッジ……

「こんなところで何してたんだ？ 寮の門限ももうすぐだろ」

「えっと、レースで勝てないのを悩んで、それで……」

「ま、そんなところか……ここに来るウマ娘はだいたいレースのことで悩みを抱えてるって聞くしな。けどこんなに夜遅くまで学園の中に残ってるのは感心しないな」

「え……あ！ す、すみません……」

中庭にある時計を見ると、時刻は21時。考え事に夢中で気づきませんでした。かなり遅い時間まで残っていたようです。

「すぐに帰ります。さ、さようなら……」

「……少し待ってくれ」

叱られたので大人しく寮に帰ろうとしましたが、トレーナーさんに呼び止められました。

「なんででしょうか？」

「お前はレースに勝てないと言っていたが、どうして勝てないんだと思う？」

「え、えっと……」

急な質問に戸惑ってしまいます。けれどもトレーナーさんと相談できるチャンスと考えると、幸運な事なのかもしれません。

「練習が足りないから……とかですかね？」

「具体的には？ どんな練習をどれだけしている？」

「一例ですけど……」

まずは教官から言われた筋トレ、レッグプレス100回、バーベルスクワット100回、同じくバーベルを抱えてのかかと上げを200回、下半身が終わった後は腹筋です。各種プランクを10分ほど……。筋トレはこれぐらいです。その後は実際に走るトレーニング……加速走を300mを50本にペース走2000mを20本、坂ダッシュ1000mを20本、インターバル走1500mを20本。それから自分で考えた自主練をします。60kmのランニングに、並走トレーニングを10本ぐらい。それからプールで泳いでますね。100mプールを……20往復？ ぐらいはしているので多分4kmぐらいは泳いでいるかと……」

「だいたいこんなものかな……？ 他に言い残したメニューは無かったつけ……多分

大丈夫なはず。

「そんな感じですか。どこか改善した方が良い所はありますか？」

話すことは話しました。さて、どんなアドバイスを頂けるのでしょうか。具体的な指摘を貰えれば、それを練習に取り入れてもつと効率的な練習が出来るはずです。

「……」

しかしトレーナーさんは黙ったまま。

一氣にしやべり過ぎたかな……？ もう少しゆっくり話した方が良かったかも……。

相手のことを考えずに捲し立ててしまった事を反省していますと、

「そりゃ、あれだな……」

ついにトレーナーさんは口を開きました。

「完全にオーバーワークだぞ……それ」

「え！ そ、そうですか……？」

「練習のしすぎは逆効果だ。怪我の恐れもある。サイボーグじゃないんだからもう少し自分の身体を大切にされた方が良いぞ」

「す、すみません……」

オーバーワーク、か。ナイトにも言われたっけなあ……。

具体的なアドバイスを貰う以前の問題でした。

けれど、もっと速くなろうとすれば練習するしかない訳で。勝てなくて焦っていた私が練習漬けの毎日を送るのはしょうがないと思います。

しょぼんと項垂れていると、トレーナーさんは更に話しかけてきます。

「……もう一つ聞いても良いか？」

「え、あ、はい」

「お前はいろんなトレーニングをしているようだが、何を目的としてそんなにトレーニングをしているんだ？」

「え、えつと……？」

何を目的としてトレーニングを……？

「それは……速くなってレースに勝つため、です」

「……」

答えを返しましたが、トレーナーさんは黙ったまま。

何か良くない返答をしてしまったのでしょうか？

「……少し質問を変える。お前は主にどの距離を走るんだ？ グレードは？」

「主に中距離、グレードは一応GIIIです」

「中距離か……それじゃあ2000mとするか。お前はGIIIの2000mを勝つウマ娘のタイムを知っているか？」

こんどは打って変わって、クイズを出されました。  
タイム……。

「それは……すみません。具体的には知らないです」

「2分」

トレーナーさんは二本指を立てて、続けます。

「コースにもよるが、平均はそれぐらいだ。お前の2000mの自己ベストは？」

「……2:00:34です」

「それだと、G111で勝つのは難しいな……それにさっきお前が言った自己ベストはおそらくだが一人で走った時のタイムだろ？」

「はい」

「なら、尚更だ。本番は複数人で走る。自由に走れない状態では自己ベスト以上の走りは絶対にできない」

「そう、ですね……」

淡々と私が勝てない理由を説明され、気分が落ち込んでいきます。

「タイムが足りていないって事は、もつと速くなる必要があるって事だ。その点じゃお前の速くなるという目的は間違っちゃいないが……そこで考えるべきなのは自分に何が足りていないかだ」

「何が足りないか……」

「そう。ラストスパートの速度が足りていないのか？ 中盤のペースが遅いのか？ それとも序盤の加速力が足りていないのか？ 遅い原因を分析し、そこを改善するためにトレーニングメニューを組むべきだな。けどお前はそこをはつきりとさせないまま、闇雲に練習しているように思える。さっきのトレーニングメニューを聞いた限りだとな。だからそこら辺をしっかりと考えた方が良くないじゃねえか？」

「は、はい……おつしやる通りで……」

トレーナーさんはやや遠回りな導入から、淡々とアドバイスをしてくれました。そしてその内容は私にとって耳の痛い内容でした。

今まで私は、ただ速くなればレースに勝てるものだと思い込んでいたのですが、それは間違っている事に気づかされたのです。

どこを改善するべきなのかも分析せず、目標タイムすらも知らず、無茶な練習をがむしゃらに重ね、ただ体を虐めていただけなのです。

それじゃ勝てないはずだ……。

何も考えず間違った努力を重ねていた自分が嫌になり、うつむいて下唇を強く噛みみました。

「あー……悪い。初対面なのに少し言すぎた」



しょんぼりした顔を見られたのか、トレーナーさんが私に謝ってきました。

「い、いえ！ そんなことないです！」

「けどな……」

「確かに自分って何も考えてなかったんだな、とヘコみはしましたけど……それに気づけたのはトレーナーさんのおかげですから。ありがとうございます」

トレーナーさんとしては、私の話なんか聞かずにそのまま別れてしまっても良かったはず。しかし、わざわざ私を呼び止めてまでアドバイスしてくれました。

人によってはその行為を大きなお世話に感じる人もいるでしょうが、私にとってはとてもありがたい事でした。

「それに才能のせいになくて済みましたから……」

「……才能のせいにな？」

私の言いぶりに疑問を覚えたのか、トレーナーさんは聞き返してきます。

「あ、えつと……自分ではたくさんのトレーニングをこなして努力していたつもりだったので、それでもレースに勝てないって事は自分に才能が無いんじゃないかと考えていたんです。それで、結局世の中は才能が全てなんじゃないか、とも考えました……。でも努力の仕方が間違っているだけだと分かりました。だから……」

両手で握りこぶしを作り、力強く言い放ちます。

「これでまた頑張れます！」

「……」

そう。どれだけ頑張っても実力が伸びず、悩んでいた私ですが、トレーナーさんのアドバイスによって突破口が開けました。

自分に何が足りないか、そしてそれをどうやって改善するか……さつそく寮に帰って考えないと！

「今日はありがとうございました！ それじゃあ……」

「あ、待て！」

急いで帰ろうと体を反転させたその時、再びトレーナーさんに呼び止められました。

「いったい何事？もしかして更にアドバイスしてもらえるとかな？」

「俺の担当になる気はないか？」

「……………え？」

しかし、トレーナーさんから発せられた言葉は私の想像を上回る物でした。

担当？ 担当ってことは……スカウトって事？ スカウトって事は、直接指導してもらえる……ってコト!?

「さつき」教官から言われた「トレーニング」って言ってただろ？ って事は担当はまだいないはず。だからお前が良ければ……」

「なります!!」

トレーナーさんの言葉に被せる形で即答しました。

だって、担当ですよ！ スカウトですよ！ こんな僥倖、この先あり得ないかもしれません。そんなの即答するに決まっています。

「も、もうちよい考えてからでも……」

「是非に！」

もう少し考えるまでもありません。直接指導してもらえる機会を逃すことなどあり得ません。

「そ、そうか……」

私の剣幕に若干引き気味のトレーナーさんですが、どうやら了承してもらえた様子。

ついに私にも担当が……！

感激のあまり嬉し涙が出てきました。

「しっかし、お前は どうして担当がいらないんだ？ G I I I のレースに出られるぐらいならスカウトされてもおおかしく無いと思うんだが……」

「えー、そ、それは……えつとお……」

感動していたのもつかの間、トレーナーさんの鋭い指摘にたじろいでしまいます。

「す、すみません……。G I I I に昇級できたのは運のおかげなんです……。オープンク

ラスのレースで前の集団がもつれてそれで……」

「一着を取り、出走資格を満たしたってわけか」

「は、……」

自分で話していて悲しくなってきました。今度は情けない方の涙が出てきました。

「G I I Iにしては自己ベストが遅いと思ったが、どうりで……」

「うう……すみません」

他人に指摘されると更にへこみます。私のメンタル滅多打ち。

「……その、トレーナーさんは本当に私が担当で良いんですか？ さっき話した通り、私は全然速くないですし……」

そこら辺の事情を説明する前にトレーナーさんが勘違いして私をスカウトしてくれて、首を縦に振ったというのは、なんとというかずるい気がしました。なのでそう聞いてみます。

「……」

トレーナーさんは何も言わず、何かを考えている様子。

やっぱりこんな私じゃ駄目なのかな……。

「……お前が良い。いや、お前が良い」

なんと、私が良いとまで言ってくれました。けど……。

「理由を聞いても？ 自分で言うのもなんですが、私なんかより才気あふれるウマ娘はいますし……。なんなら次の新入生が入ってくる時期まで待てば、将来有望なウマ娘をスカウト出来ますよね？」

藪蛇やぶへびかもしれないませんが、聞かずにはいられませんでした。するとトレーナーさんは帽子をずらして頭を掻きながら答えてくれます。

「……俺はこう見えても新人トレーナーなんだ。新人は普通ならどこかのチームでサブトレーナーとして経験を積むんだが……俺は早く実績を作りたい。そのためには誰かウマ娘を担当して勝たせるのが一番手っ取り早い。それも強いウマ娘よりはその……パツとしないウマ娘を勝たせる方が実績としては分かりやすい。だろ？」

「それは……そうですね」

「そういう打算的な考えだから、あんまり気にすんな。お前は俺を利用すれば良い。勝つためにな。代わりに俺はお前を利用する」

「はあ……」

なんといかすごくビジネスライクな理由でしたが、そういう事なら一応納得できます。私を選ばれたのは巡り合わせが良かったという事でしょうか。まさに僥倖です。

「そういえばまだ名前を聞いてなかったな」

トレーナーさんはそう言って手を差し出してきました。手のひらが汗で湿っていた

ので、ジャージで拭いてからトレーナーさんの手を握ります。

「ノール。ノールミサンガです」

「ノールか。良い名前だ」

こうして私はトレーナーさんと出会いました。私の人生……いえ、ウマ娘生を変えるきっかけとなったトレーナーさんと。

## 二話 目標

「それじゃあさっそく始めるか」

「はいー」

トレセン学園での授業が終わり、今は放課後。私は、昨日出会ったトレーナーさんと一緒にトレーナー居室にいます。

昨日の今日で指導してもらえとの事ですが、いったいどんな指導をしてくれるのでしょうか？

「とりあえず、ノールが2000m走った様子を録画させてもらった。今からそれを見て今のノールに何が足りないのかを分析するぞ」

昨日アドバイスを貰った通り、まずは私の欠点をはつきりさせるところから行うようです。

「分析する訳だが……その前に敬語は止めてくれねえか？　なんか堅っ苦しくて面倒なんだよ。それに俺だけ砕けた話し方ってのもなんか気持ち悪いしな」

「で、ですけど、その、年長の人にタメ口というのは……」

「年長つつつても俺なんかそんな褒められたもんじゃねえよ。だから適当に呼び捨てに

してくれ」

「え、えーと……」

「駄目か？」

「は、はい……すみません」

やはり自分より歳が上の人にタメ口を使うのは気が引けました。

「ま、そう言うなら強制はしねえさ。けど俺の言葉使いは勘弁してくれよ。育ちが悪いもんでな」

「あ、それは大丈夫です」

「そうか、なら本題に戻すぞ。今からノールが走っている映像を見て改善点を探すわけだが……まずはノール自身に考えてもらう」

「わ、私が、ですか？」

思ってもいない発言に少し驚いてしまいました。

「ああ。映像を見て俺がとやかく言うのは簡単だ。しかしそれじゃあ意味が無い」

「で、でもトレーナーさんにアドバイスしてもらって、そこを改善してもらおう事に意味が無いなんて……」

「確かにそうすればある程度の改善は見込めるかもな。けど、いくら俺がトレーナーで専門的な知識があるといえど、実際に走るのはノールだ。」



お前にしか分からない走りのニュアンスまで俺がアドバイスすることは出来ない。それに人間とウマ娘。認識の違いもあるだろ？ だからノールにも考えてもらう必要があるのさ」

「なるほど……」

いかにもな話に納得です。

「それに俺がアドバイスするだけでなく、ノールが自分自身にアドバイスできれば効率も倍加する。まあ、とりあえずやってみろ」

「はい。……け、けど大丈夫ですかね？ 私に自分の改善点を見つけれられるかどうか……。それに見つけても的外れな可能性も……」

昨日は自分の改善点を見つけよう、と意気込んでいたのですが、実際にいざやってみる段階になると、どうにも不安が募ってきます。

「大丈夫だって。一人きりなら自分の仮説が間違っていることに気づけないかもしれないねえが、今は俺がいる。明らかに間違っている時は口出しするから心配しなくて良い」  
「そ、そうですね。分かりました、やってみます」

そこまでフォローしてもらえらるなら、不安に思う必要はありません。私の了承を得て、トレーナーさんはビデオカメラをモニターに繋ぎ、大画面で私の走る姿を映し出しました。

ちよっと、恥ずかしいな……／＼／＼

自分の姿がモニターに映っているというのは、どことなく落ち着かない気持ちになります。

悶々としながら画面の中の自分を観察していると、すぐに気づくことができました。

「なにか気づいたか？」

「……コーナーで体勢が崩れてます。ここで無駄な体力を消耗してたんだ……」

「その通り。体幹筋に加えて外側の足の強化が課題だな」

「それに……後半になるにつれて、疲れからか足が上がりなくなってます。最後の方でスピードが出ないのはこのせいですかね……」

「ああ、それに腕の振りも小さくなっている。疲れたときこそ普段通りのフォームを維持するのが大切だ。その練習も取り入れるか」

「後は……あ、巻き戻してくださいますか？ ……そこです、第四コーナー」

第二コーナーでもそうでしたけど、コーナーから再びコーナーに侵入するときの進路が変ですね。無駄に外を回っているというか……」

「これは多分無意識の癖だろ。これからは意識して走ってみろ」

3つほど意見を述べた所で、ちょうど映像が終わりました。

「他に気づいた事はあるか？」

「今のところはこれぐらいしか……」

「いや、十分だ。なかなか良い着眼点だったぞ」

「い、いえ……／＼／＼」

褒められると悪い気はしません。トレイナーさんの口の悪さに加え、直接指導と言うからには厳しい指摘をされるものとばかり思っていました。意外と優しく指導してもらっています。

このトレイナーさんは褒めて伸ばすタイプなのかな……。

でもこの調子がこのまま続くと思い上がっちゃいそう……。

私には足りない所があるからレースに勝ててない訳で。

現に私の視点からでも欠点が3つは見つかりました。そんな私が褒められるというのはどこか違和感を感じてしまいます。

「トレイナーさんは他に気づいたことはありませんか？」

「ペース配分やスパートの位置、細かい点を挙げれば多々あるが……今はノールが挙げた三つの点を改善することに注力するぞ」

「はい。それにしても……」

「どうした？」

「あ、いえ、今初めて自分の走りを客観視したんですけど……こんなにはつきりと改善点

が分かるものなんですね」

「そうだな。走りの悪い所は走りの中からしか見つけられない。」

その中には自分の感覚も含まれるが、自分の走りを客観視するのも大切だ」

トレーナーさんがしたことはビデオカメラで私の走りを撮影しただけ。簡単なことですが、効果は抜群です。私の目からでも自分の欠点を自覚できるようになったのですから。

やっぱりトレーナーから指導を受けるのは速くなるための一番の近道なんだなあ……。

トレーナーさんの凄さを肌で感じていた私でしたが、彼は続きを話すので、そっちに集中します。

「それと基礎能力の底上げもする。筋トレメニューだが……これは俺が考えておく。」

筋トレは効率を考えるとやはり知識が必要になってくるからな。

ノールの年齢でこの時期だとまだ習ってないだろう？」

「そうですね」

トレセン学園では午前一般教養を、午後レースやウイニングライブについての授業があります。その中にはスポーツ栄養学やレースについての座学も含まれますが、トレについてはまだ習っていなかったはずです。

「……本来なら早めに教えるべきだろうが……いや、教官やトレーナーから指導を受ける事を想定しているから、先に他のことを教えているのか……？」

「えっ、と？」

トレーナーさんが何事か呟きます。けれどその声は小さく、内容までは聞き取れませんでした。

「あ、いや、こつちの話だ。何でもねえよ……」

「はあ……」

トレーナーさんはバツが悪そうに帽子の位置を直し、咳ばらいをしてから続きを話します。

「後話しておくことは……おっと、大事なことを忘れてた！ 目標の設定をしてなかったな」

「目標というと……どのレースに出るか、ですか？」

「そう。それを決めておかなきゃ、いつまでにどれだけ速くなる必要があるか分からないままだ。」

期日と目標がないと、毎日のトレーニング量なんかも決められない」

「するとどのレースをを目指すかが問題になりますね」

一応私が次に出るレースとして考えていたのは、一か月後のオープンクラスのレース

です。

G I I Iでは歯が立たなかつたので、ここはひとつ下のオープンクラスに出走しよう。そう思っていたのですが……

「今日は6月9日か……なら紫苑Sはどうだ？」

「えっ！ し、紫苑Sですか!？」

トレーナーさんの口から出てきたレース名は想像を上回る物でした。

「し、紫苑Sって確か……中山レース場で開かれる芝2000m、G I I Iの!？」

「く、詳しいな……そうだ。出場資格はあるんだろう？」

「そ、それはありますけど……でも私、G I I Iの下のオープンクラスでもまともに勝てないんですよ!？」 流星に難しいんじゃない……」

「そんな事ねえよ。紫苑Sまで3カ月程あるし、しっかり練習すれば勝負の土俵には必ず立てる」

G I I I……私にとってそれがどれだけ厳しいものかは一昨日のレースで良く知っています。

トップと大差をつけられたことは記憶に新しいです。

「ほ、本当に私でもG I I Iで戦えるようになりますか?」

「ああ、嘘は言わねえ」

本音を言えば怖いです。また大差をつけられて自分の無力さを思い知らされるのではないかと考えてしまいます。

けど……三カ月あれば。トレーナーさんがいれば。なんとかなるかもしれません。

「……分かりました。紫苑Sに出ます！」

それに何より自分を信じてみたかったです。私はG I I Iで戦える……いえ勝てるはずだ、と。

「よし。俺もそのつもりでトレーニングを組む。厳しいものになるが覚悟しておけ」

「もちろんです！」

「……とはいっても、バカみたいな量のトレーニングをこなしていたノールなら大丈夫だと思うがな」

「あ、あはは……」

バカみたいだな。そんな形容詞が付くほど、私の練習量は多かったです。

気まづくなつて頬を描いていると、トレーナーさんは更に続けます。

「それと後一つ。俺の方から提案したいトレーニングがある」

「トレーニング、ですか」

「そう。上手くいけばタイムの大幅短縮も出来るかもしれないトレーニングだな」

トレーナーさんはニヤリと口角を上げながらそう言います。

目標も決まり、後は練習するだけかと思っていた中、突然トレーナーさんの口から出てきた衝撃発言。

タイムの大幅短縮。とても魅力的な響きです。

「えっ！ そんな方法が！」

いったいどんな内容!?

やや身を乗り出してしまいう程、興奮してしまった私ですが、続くトレーナーさんの言葉が私をクールダウンさせます。

「けど当然上手くいくかどうかは分からない。この練習は走行フォームに関するものだ。」

下手すりゃ逆に遅くなってしまふ恐れもある」

「ぎゃ、逆に遅く……」

ハイリスクハイリターン、と言ったところでしょうか。

大幅なタイム短縮をノーリスクで出来る……なんて上手い話ではありませんでした。

「一応、説明だけはさせてもらおうぞ?」

「あ、はい」

とりあえず話だけは聞いてみて、そのうえで判断してみようと思います。

「簡単に言おうとフォームの追加だな」



「フォームの追加、ですか」

「さっきのビデオを見ても分かるように、ノールは上体を起こしたストライド走法で走っているだろ？」

「そうですね」

ウマ娘の走法には大きく分けると二つあります。身長に対して歩幅を大きくとる「ストライド走法」。身長に対して歩幅を小さくとり、足の回転を速くする「ピッチ走法」。「そしてラストスパート。やや前傾姿勢にはなるが、これもストライド走法で走っているな。」

細かく分けると、体を起こしたストライド走法と前傾姿勢でのストライド走法、この二つがノールのフォームになるわけだが……ここに3つ目のフォームを追加する」

「それにどういった狙いが？」

「その狙いは使う筋肉の分散にある。走るフォームによって使う脚の筋肉は違ってくるのは知ってるか？」

「少しなら聞いたことがあります」

「ストライド走法とピッチ走法ではかなり違ってくるし、体の倒し具合によっても少しずつ違ってくるな。」

ラストスパートで前傾姿勢になるのは空気抵抗を減らす狙いもあるが、それ以上に使

う筋肉を変化させる効果が高い。

レースの序盤中盤で使って疲れた筋肉とは別の筋肉を稼働させて、最後のスパートをかけるわけだな」

「なるほど、それで……いつものフォーム、ラストスパートのフォーム、それに加えて第三のフォームを習得することで使う筋肉を更に分散させられる。

その結果、スタミナの補強が見込める……ってことですよね？」

「その通り。呑み込みが早くて助かる」

今までの話だけを聞くと、フォームの追加はメリットしかない様に思えます。

しかし事前に説明された通り、当然デメリットもあるわけ。

「だが、新しいフォームの習得は難しい。その上、既存のフォームに影響を与える可能性もある。

最悪の場合は新しいフォームも習得できず、変な癖がついて現在のフォームは悪化……なんてことも起こりうるわけだな」

「……」

「リスクのある練習方法だから、最後に説明させてもらったが……どうする？ やるか？」

トレーナーさんの話はひと段落付き、私は選択を迫られました。リスクのある練習を

するかしないか。

「……やります」

「いいのか？」

「リスクがあつたとしても、出来ることはやっておきたいです」

私が目指すのはG I I Iでの勝利。そのためには多少のリスクは背負うべきです。というかそれぐらいしないと勝てないと思います。

「そうか……ならフォームの追加も通常の練習と並行して行うぞ」

「はい」

「色々話し合つたが、まとめるところだな。」

ノールは三か月後の紫苑Sで勝つことを目指す。

そのために確認できたお前の欠点、コーナーと後半でのフォームの乱れ、それと無意識の癖を直す事を第一にまずは練習する。

それと新規フォームの追加もだな。

「ここまでで抜けてる点とか分からない事はないか？」

「ありません」

「よし。目指すレースもやるべきことも決まった。ならば後は実践あるのみだ。早速コースに出るぞ！」

「はい！」

そうして私は紫苑Sに向けて練習を開始しました。

## 三話 新走法

トレーナーさんと練習を始めて早1週間が経とうとしています。経過は順調……とは言い難いです。

というのも普通の練習は特に問題なく出来ているのですが、いかんせんフォームの追加が上手くいっていません。

◇

少し前

「フォームの追加についてだが、何か希望はあるか？ 参考にできそうなウマ娘の心当たりとか」

「希望、ですか。……それだと先輩のフォームを参考にしてみたいんですけど」

「先輩？ 誰だ？」

「スーパーチャージャーさんです」

「スーパーチャージャーという、あの「ジェット機」か……」

「はい。超前傾姿勢でのピッチ走法……。あれなら私のストライド走法とは被りませんし、ラストスパートの速度も上がるのではないかと」

「追加フォームをラストスパートで使い、今の二つのフォームを序盤、中盤に持つてくるという訳か。しかしあの特異な走法、ただでさえ新フォームの習得は難しいのに、更に難易度が上がるぞ?」

「や、やっぱりそうですかね?」

「ああ。しかしあれを習得できれば、飛躍的にタイムが縮まるかもしれないねえな。そういう点では挑戦する価値はある」

◇

そういう話し合いを経て、スパさんのフォームを習得することになったのですが……  
「ハアツ……ハアツ……」

「お疲れさん」

「どう、でしたか?」

「さつきよりは体を倒せているが……その分歩幅が大きくなったな」

「ちよつと見せて下さい」

トレーナーさんからビデオカメラを受け取り、さっきの走りと一本前の走りを見比べます。

「……本当だ」

そして、私の走りとスパさんの走りを比較。

「しかもまだ前傾が足りてないですね」

「こうして比べるとよく分かるが、ジェット走法つてのは本当に規格外だな……」

「はい。体を前に倒すと重心が前に傾きます。なので普通なら体勢を崩さないために、歩幅を大きくしないといけないのですが……」

「ジェット走法は超前傾姿勢なのに、歩幅の小さいピッチ走法で走っている」

「そうなんですよねえ……」

そう、この問題を全く解決できないのです。

元々フォーム追加の目的は使う筋肉の分散。分散させるためには、今使っている歩幅の大きなストライド走法から出来るだけ離れたフォームで走ることが必要です。

なので、歩幅は出来るだけ小さくしないといけません。

しかし前傾姿勢でむりやり歩幅を小さくしようとすると、つんのめってこけそうになつてしまいます。

あ、ちなみに「ジェット走法」というのは、スパさんの走り方の事です。

名前が無いと呼ぶとき不便ですから、勝手に命名させてもらいました。

「一体どうやってこの走り方を実現してるんでしょうか……」

「もう一度手本を見てみる。映像の中に必ずコツが隠れているはずだ」

「はい」

再び「ジェット走法」の映像を見ます。しかしこれといった閃きはありません。

しいて言うなら……

「やっぱり腕の振りですかね？ 普通の走法だと腕を大きく前後に振ります。

けど映像を見る限りでは、腕を前に振るときは小さく折りたたんで振ってます。

そして腕を後ろに振るときは大きく振ってます。

これは多分、重心を出来るだけ後ろに持つてくるためだと思うんですけど……」

「実際にやってみてどうだった？」

「結構窮屈でした。それに腕の方に意識が割かれてしまつて、他がおろそかになつてし

まいましたね」

「そう簡単には行かぬえか……」

「ジェット走法」。実際に試してみると、想像以上に難しい走法でした。

この調子では習得できないところか、悪い腕の振りの癖がついてしまう恐れもあります。



「どうする？ 今からでも目標のフォームを変更するのもありだぞ？」

別にジェット走法にこだわらなくても、普通のピッチ走法を習得するだけでも十分……」

「いえ、もう少しだけ練習させてください」

トレーナーさんの言う通り「ジェット走法」は諦めて、他のフォームを身につけた方が良いのかもしれませんが。

しかし、この時の私は「ジェット走法」にしがみついて離れられませんでした。

ここで諦めてしまうと、一週間の間「ジェット走法」の練習に費やした時間を無駄にしてしまう。その思いが強かったのです。

「そうか……ま、ノールがそう言うなら止めねえが」

私のわがままに対してトレーナーさんは、特に何も言いません。

結果が出ていない現状、無理矢理メニューを変えられることも想定していたのですが、そこまではいきませんでした。

密かに胸をなでおろしていると、私とトレーナーさんの間に乱入者が

「呼ばれて飛び出てスパさん参上！ ……ってな」

その正体は乱入者自身の名乗り通り、スパさんでした。

「す、スパさん！ どうしてここに!？」

「俺が呼んでおいた。ちょうど良いタイミングで来たな」

「と、トレーナーさんが？」

「せやで。ノールに色々教えたって、って言われたんや」

「え、ええ！」

いきなりの急展開にやや置いてけぼりをくらってます。

「い、いつの間に声を掛けてたんですか？」

「昨日の内に。行き詰っているみたいだから、直接本人から指導してもらおうと思ってな。」

ダメ元だったんだが……まさかお前らが知り合いとは思わなかった」

「ウチの走り方マネしとるんやって？」

「は、はい……勝手にすみません」

「別に謝らんでもええって！ マネしとるってことは、それだけウチの走りを認めてくれたからやろ？」

間接的に褒めてもらつとる様なもんやから、いくらでもマネしてくれてええで！」

スパさんはフォームをマネされたことを好意的に捉えているようで、上機嫌です。

「けどいいんですか？ 本当にアドバイスを貰ってしまつて」

「ん？ どういうことや？」

「えっと……実際に試してみても良く分かったんですけど、スパさんのジェット走法。あれって難しくくて、きつとスパさんも苦勞して身に着けたものだと思うんです。

それを私がアドバイスだけ貰ってしまおうというのはちよつと……ずるいんじゃないかと」

他に類を見ない特別な走法。

それは当然スパさんの「武器」なわけであつて、見て盗むのならばともかく、おいそれと教えてもらうようなものではない……どうしてもそう考えてしまいます。

それに対するスパさんの反応はあつげらんかんとした物でした。

「なーんや、そんな事か！ 一子相伝の奥義つてわけでもないし、全然気にせんでもええのに。」

なんなら同じチームの奴らに教えた事もあるしな！」

「え、そんなんですか？」

「せやで。まあ、そいつらは習得するまでには至らんかったけど」

「そ、それつて習得がかなり難しいって事になりませんかね？」

スパさんと同じチームに入っているウマ娘というと、当然トレーナーからスカウトされたウマ娘。

そんな優れたウマ娘でさえ習得できないフォーム。ならば私が習得するのは限りな

く不可能に思えます。

「うーん……まあ確かにそうなるっちゃ、そうなるんやけど……ノールなら大丈夫やっ  
て！」

私が出会ってきたウマ娘の中じゃ、ノールが一番、この走り方に向いとるからな！」

「私が、ですか？」

「そうや。ウチの勝手な主観やけどな」

私がジェット走法向きとはどういう意味でしょうか？

本当に向いているのなら、この一週間でもうちよつと上達してそんなものですが  
……。

スパさんの言葉の真意を測りかねていると、

「後、ここまでスルーしたけど「ジェット走法」ってなんや？　なんか勝手に命名されと

るんやけど……」

突っ込みが入ります。

「あ、それは私が見つめました。トレーナーさんと話し合う時にいちいち「スーパーチャー  
ジャーさんの走り方」、とか長くなりそうだったので」

「ふうん？　ジェット走法、ジェット走法……」。

ま、二つ名の「ジェット機」から取つとるんやろうし、響きも悪くないから別にええ

か。ウチもこれからはそう呼ぼっと」

一応、本人の公認をいただけただけです。

「ちよつと話が逸れたな、本題に戻すで。これからノールにはジェット走法を身に着ける練習をしてみらうで。」

とはいっても私ができるのは練習方法を教えるだけやけど」

「練習方法？」

「フォームの練習って言ったら普通、実際にコースに出て走って悪い所を直していくのが一般的やな。」

けんどジェット走法を習得するなら体育館のピットで練習するべきや」

「ピット………というと、あのスポンジのプールみたいなのですよね？」

「せやせや。ま、そこでどんな練習するかは実際に行つてから説明するから、とにかく移動しよか」

「は、はい」

スパさんは私とトレーナーさんを引き連れ、体育館までやってきました。

中に入り、私はピットがあるレーンに立たされます。

「やることは簡単や。体を前に倒すのと、歩幅を小さくとることを意識しながらピットに向かつて全力ダッシュする……それだけやな」

「そ、それだけですか？」

「せやで。この練習方法の利点はコケても大丈夫なとこや。

芝の上で「ジェット走法」を練習するときは、体勢が崩れるのを恐れて体を倒しきれんかったり、歩幅を大きくとってしまふからな。やろ？」

「はい、そうでした」

「その点スポンジたつぶりのピットになら突っ込んで怪我せんから、体は倒し放題、歩幅も小さくし放題。」

「要はコケながら慣れていくっていう練習方法やな」

「なるほど……」

段階的に体を倒し、歩幅を小さくすることで「ジェット走法」に近づけていくのではなく、最初から「ジェット走法」で走ってみるといふことでしょうか。

「ま、実際にやってみたらどうや？ 習うより慣れろ、やで」

「は、はい！」

右足を引き、いつでもスタートできるように構えます。

「ピットまで半分くらいのところまで思いつきり体倒して、歩幅を小さくするんやで！」  
「分かりました！」

最後のアドバースを聞いた後、床を蹴って一気に加速します。

半分……ピットまで半分……ここ！

言われた通りにピットまでの距離が半分になったところで、これでもかというくらい体を倒します。

床……近いっ！

一気に木製の床が近づき、木目が高速で視界を流れていきます。

絶叫マシンに乗ったときの様に恐怖心を煽られますが、歯を食いしばり歩幅を小さくしました。

その瞬間、重心が崩れ、前につんのめります。

ヤ……ツバイ!!

前に放り出された体を何とか後ろに引き戻そうと、足の回転を早めます。すると一時的に体勢を保てたものの、前に行きすぎた重心は後ろに戻りません。

ぶつかると……!!

完全に体勢を崩し、床が更に近づいてきます。時速70kmにも達する速度で顔面から床に突っ込み、床の木目が嫌にはつきりと見えます。

死を意識したその時、視界にスポンジが広がり、私の体は柔らかいものにぶつかりました。

ドドドン!! ドフツ!

スポンジで体が跳ね、ワンバウンドした後、ようやく体が止まります。

「……………ツハア……………! ハアツ……………! ハアツ……………!」

仰向けのまましばらく動けませんでした。

止めていた呼吸を再開し、震える手を握りしめます。

ドクン、ドクン、ドクン……………。

自分の心臓の音がとても大きく聞こえてきます。

目を閉じ、しばらく心音だけを聞いていると、次第に落ち着いてきました。

「……………か……………大丈夫か!」

「……………あつ! はい!」

上から聞こえてきた声に反応し、ピット内で体を起こします。

「ケガは無いか!?!」

トレーナーさんが近くまで寄って来て、私の体を眺めながらそう聞いてきます。

「は、はい。どこも痛くありません」



「そうか……なら良い。床とキスしそうだったから心配したぞ」

目元がサングラスで隠れているので、感情を読み取りづらいトレーナーさんですが、今は私の心配をしてくれているのが良く分かりました。

心配かけちゃったな……。

そこにスパさんも混ざってきます。

「ふー……危なかつたなあ。見てるこっちがひやひやしたわ。」

思いつきり体を倒せとは言っただけ、さっきのは倒しすぎやったで」

「す、すいません……」

「ま、ケガがないなら何よりやけど」

どうやらスパさんにも心配をかけてしまったようです。初めての事だったので、しやうがないとはいえ、申し訳なく思います。

「実際にやってみてどうやった？」

「……その、とても怖かつたです」

「せやろなあ……ジェット走法は超前傾姿勢のせいで地面と顔が近くなるし、バランスが崩れるか、崩れんかのギリギリを攻めるから、ものすごい不安定や。」

特にさっきは肝を冷やしたやろ？」

「そうですね……」

「せやから技術とか慣れの前にまずは恐怖心の克服からやな」

その通りだと思います。というのも、いまだに先ほどの地面が近づいてくる感覚が頭に残っているのです。

これを克服しないことにはジェット走法の習得など夢のまた夢でしょう。

「ほら！ 精神的に疲れとるかもしれんけど、二本目いくで！ スタートラインに戻りや！」

「は、はい！」

▪

▪

▪

何十回ピットに突っ込んだか、分からなくなってきた頃。

「ふー………」

「うん、中々良くなってきたんやないか？」

「本当ですか!？」

「腕の振り方がええな。教えても無いのに理想的な振り方になつとる。結構センスあるやん」

「え、えへへ……」

センスがある、そんな褒められ方をしたのは初めてで、照れてしまいます。それもG  
Iを取ったことのあるスパさんからの言葉なら尚更です。

「練習方法は教え終わつたし、ウチの役目は終わりやな。ほな……」

そう言つてスパさんは帰る素振りを見せます。

「あ、ちよつと待つてください！」

しかし聞きたいことがあつたので呼び止めました。

「ん？ どうしたんや？」

「走つてる最中に思つたんですけど、つま先が大事じゃないですか？」

前傾姿勢かつ足の回転を速めるせいで、つま先しか地面につかないので、すごく重要  
だと思つたんですけど……」

「そうやな。つま先鍛えるにはかかと上げがおすすめやで。同時にふくらはぎも鍛えら  
れるしな」

練習中、疑問に思つたことを聞くと、答えが返ってきます。

やはりジェット走法の生みの親に色々聞けるのはとても効率的です。

「それに足首も大事や。それで走る時はつま先で地面を掴んで、土を後ろに蹴とばす感  
覚で走るのがええで。」

足を延ばす時は……」

私の質問から派生して、走り方のコツのようなものをスパさんが話し始めます。しかしそのタイミングで、

「ん、んん！」

トレーナーさんが大きく咳ばらいをしました。

「あー……つと、うん、まあとにかく足首とつま先は大事つてことや。ちゃんと覚えと  
き」

スパさんはどこか気まずそうに目線を反らしながら、そう言いました。

「は、はい」

スパさんの不自然な会話の切り方に違和感を覚えましたが、反射的にそう返事してしまします。

「他になんか聞きたいことあるか？」

「えつと……な、なにか走る時のコツつてありますか？」

私がまだ気づけてないこともあると思うんですけど……」

せっかくなスパさんが直接指導してくれているので、図々しいかもしれませんがコツを聞いてみました。

スパさんは練習方法など手取り足取り教えてくれましたし、きつとコツも教えてもら

えるはずです。

「うーん……そうやなあ………」

しかしスパさんは手を口元に当て、しばしの間考え込みます。

ちら、

そして私の後ろ……トレーナーさん？　の方に視線を送った後、こう言います。

「コツつていうと伝えるのが難しいから、ウチからは言えんけど……一番大事な事を教えたる」

「一番大事な事？」

スパさんの挙動を少し不審に思ったものの、一番大事な事というフレーズに意識を持っていかれました。

ジェット走法に一番大事な事、それはいったい……。

「それはやな……度胸や！」

「……………は、はあ……………」

度胸。

スパさんが溜めて言い放った割には期待外れというか、なんとというか……とにかく肩透かしを食らったような気持ちになりました。

「度胸つていうと……バランスが崩れそうな状態で歩幅を小さくすることを恐れないっ

てことですか?」

「そうやな」

「けど今の段階でも「ジェット走法」にはだいぶ慣れてきましたし、度胸が一番大事ってことは無いんじゃないですか?」

「ふっふっふっ……今はまだ分からんかもしれんけど、後になれば分かる! それまでの楽しみやな!」

「は、はあ……」

抽象的なアドバイスに加え、良く分からないスパさんの言い回しに、生返事しかできませんでした。

「一回こういう意味深なアドバイスしてみたかったんよな……」

スパさんは満足そうな顔で頷いています。

……内容にあまり意味は無くても、ただそれっぽいことを言ってみただけとか……?

意味があるにせよ、後でないと理解できないようなので、今考えてもしようがなさそうです。

「他になんかあるか?」

「いえ、聞きたいことは全部聞きました」

「そうか。また聞きたいことが出来たら気軽に声かけてや」

「はい！ 今日ありがとうございます！ 私はもう少し練習してきます！」

「気張りやー！」

私はスパさんにお礼を言った後、再びピットに突っ込むべく床を蹴りました。

(sideスーパージャージャー)

ノールがピットの方に走り出し、ウチとノールのトレーナーと二人取り残された。

「……あれで良かったんか？」

「ああ。わざわざすまん。助かった」

「可愛い後輩のためやから別にええけど。それに、途中で口を滑らしそうになつたしな」

昨日、ノールのトレーナーにジェット走法の練習の仕方を教えて欲しいと、一つ条件付きで頼まれた。

条件とは「ノールが質問してきたときは別だが、ウチから具体的なコツやアドバイス

をしないで欲しい」というもの。

親切心からついコツを教えようとしてしまった時、咳払いが無ければそのまま話してしまっていただろう。

それに直接コツを聞かれた時も、返答に困った。技術的な話じゃなくて度胸と言う精神論を話して何とか躲せたけれども。

「……後、本当に具体的なアドバイスはせんでも良かったんか？」

なんなら一から十まで全部教えたったほうが、すぐに習得できるやろ」

ノールのトレーナーから言われた「具体的なアドバイスをしない」という約束の真意が気になってそう聞いてみる。

「確かに手取り足取り全てを教えりや、フォームの習得は速くなる……が、それだと自分で考える力が付かない」

「自分で考える力、ねえ……」

「俺のことを意地悪だと思いかもしれねえが……ノールには自立したウマ娘になって欲しい。」

一人で自分の課題を見つけ、解決策を考え、実行できるウマ娘にな」

確かにトレーナーに言われた事をやるだけでなく、自分でもトレーニングメニューを計画することが出来るのは強みになる。



けどなあ……。

昔、自分のわがままでトレーナーから見放され、自力で練習していた身からすると、一人で試行錯誤する事の辛さは良く知っている。だから具体的なアドバイスをしないう方針には反対したいが……

でもまあ、ノールは一人きりってわけじゃないしな、トレーナーもおるし。

それに本当に困ってたらそれとなく助言させてもらおか……。

ノールのトレーナーの指導方針には反するが、それぐらいは許してもらおう。

「というかノールにはなんで敬語使わせてるんや？ 趣味か？」

「人聞き悪いな。タメ口で話せて言ったけどそれでも敬語が良いって言ったんだよ。

あいつの意思だ」

「ま、優等生なああの娘らしいなあ……」

「そういうお前は敬語使わせてるだろ」

「別にため口で話してもらってもええんやけど……敬語の方がなんか敬われてる感覚あるし、先輩扱いされてるみたいで気分ええから、なんも言つとらんだだけや」

年上の特権、つてやつやな。

「じゃ、そろそろウチは帰らせてもらおうわ」

「おう、今日はありがとな。また呼ぶかもしれんから、その時はよろしく頼む」

「そんな時はまた先輩面させてもらおか。それじゃあ……」

そう言つて体育館を出ようとしたとき、ふと気になったことが思い浮かぶ。

「あ……最後に一つ聞いてもええか？」

「何だ？」

「なんでノールのトレーナーになつたんや？　こんな言い方はあれやけど……ノールより優秀なウマ娘はおつたやろ？」

ノールは鼻根目無しで見ると、お世辞にも才能溢れるウマ娘とは言えない実力だ。

トレセン学園の中だと、良いところ「中の上」ぐらゐの評価。

まだ担当が決まつてないウマ娘の中にも、もつとポテンシャルのあるウマ娘が他にいたはず。

その中からいつたいどうしてノールを選んだのだろうか？

その疑問をぶつけてみた。

「……そんなに気になるか？　ノールにも聞かれたんだが……」

「そりや気になるやろ。なんで自分をスカウトしたのかぐらゐ聞かんと、納得もできへんし、トレーナーの事なんか信頼できへんで」

ウマ娘とトレーナーの間には信頼が必要不可欠だ。

ウマ娘がトレーナーのことを信頼できていなければ、練習に集中することは出来な

い。

逆にトレーナーがウマ娘のことを信頼できていなければ、あれこれ余計なことを口出ししてしまうだろう。

「そんなもんか？ いやー、つつてもなあ……」

ノールのトレーナーは困ったように、帽子の位置を直し始める。

「なんや、言いたくないことでもあるんかな……？」

「別にウチに言いたくないなら言わんでもええで。本当に興味本位で聞いてみただけやからな」

「悪い。説明するにはちよつと恥ずかしい話でよ……」

「恥ずかしい話。それを聞くと、ますます内容を聞いてみたい衝動に駆られたが、ここで無理矢理聞くのは野暮だろう。代わりに別の質問を。」

「それ、ノールに聞かれた時もはぐらかしたんか？」

「いや……それだと不信に思われそうだったから、適当な理由をでつち上げた。納得してくれていたから大丈夫だとは思うがな」

「ふーん……？ それって今は影響ないかもしれんけど、その嘘が後々ともない誤解を生むかもしれんやんか。」

「早いうちに本当の事を伝えた方がええんやないか？」

余計なお世話かもしれないが、一応そう言っておいた。

「あー……ま、大丈夫だろ」

しかしノールのトレーナーは楽観的な様子。

ほんまに大丈夫かいな……。

「それに本当の事を伝えても、それはそれで頼りないと思われて不感を買いかもしれねえんだよな……。

だから今のところはまだ話さなくていいだろ」

「……ま、そこら辺はあんたの匙加減やから、これ以上はなんも言わんけど……。

聞きたいことも聞けたし、今度こそウチは帰るわ。さいなら」

「またな」

いまだにピットに飛び込んでいるノールとそのトレーナーを背に、ウチは体育館を後にした。

## 四話　ズレる歯車

スパさんに手ほどきを受けてからまた1週間。

トレーニング方法を教えてもらい、順調にジェット走法を練習できている……わけではありませんでした。

というのも、最初の方は練習するたびに体の倒し方、歩幅の取り方、腕の振り方、それらを調節し、ジェット走法の完成度を高められました。

しかし、ある一定のところからどうしても体を倒しきれない、歩幅を小さく出来ないのです。

腕の振り以外にも何かコツがあるのかと思い、ジェット走法の元祖であるスパさんの映像を穴が空くほど見ました。

そして少しでも気になったことを実際に試してみたのですが、どれも上手いきません。

いくら考えていくら練習しても上達しない。その状況に私は焦っていました。

ドフツ!

「フー……」

「どうだった？」

「……いえ、手ごたえありませんでした」

「これもか……」

トレーナーさんが手元の用紙に×をつけます。

「どれも駄目だったな」

「そう、ですね……」

用紙には私とトレーナーさんで考えたフォームの改善案を箇条書きしており、実際に試してみて効果ありなら○、駄目なら×を付けているのですが、結果としてはオール×。つまり全体的外れという事でした。

「これだけやつても駄目か……ってことは原因は他にあるのか？ フォーム以外の所か、それとも……」

トレーナーさんは顎に手を当てて考え込み始めました。そこに着信音が。

プルルルル……

「ん？ 悪いな、ちよつと席を外すぞ」

「あ、はい」

そう言つてトレーナーさんは体育館から出て行つてしまいました。

私がピットの中でしばらく寝転んでいると、そこに来訪者が。

「どや？ 練習は順調か？」

この声は……

「スパさん？」

体を起こして声のした方に顔を向けると、そこには確かにスパさんの姿が。

「なんや二人して難しい顔しとったけど、上手くいってへんようやな」

急いで立ち上がり、ピットの外に出ます。

「またトレーナーさんに呼ばれて来てくれたんですか？」

「いや、別と呼ばれてないで。ウチが勝手に来たんや、そろそろ次の壁にぶち当たつとる頃やろうと思つてな」

「そ、それはその通りなんですけど……どうしてそんなことが分かるんですか？」

「いうてもウチはジェット走法の生みの親やで？ ノールが躓きそうな所と時期はまるつとお見通しや。」

「そんでちよつと失礼」

スパさんは私の方に近づき、体操服をめくつてお腹を触ってきました。

「……え、ちよ!? な、何するんですか!？」

いきなりの事に驚き、とっさにスパさんの手を払いのけました。

「ま、ええやんええやん、減るもんでもないし。先輩に触らせてみいや」

手をワキワキさせながらにじり寄ってくるスパさん。

「え、ええ……」

普段とは違う先輩の様子に思わず後ずさりします。

もしかしてスパさんってそっちの気が……

「そんな警戒せんでもええやん、腹筋の様子を見るだけやから。」

……そんなに触られるのが嫌なら、服めくってお腹見せてくれるだけでもええで」

「わ、分かりました！ お腹見せますから！ その手の動きは止めてください！」

今のスパさんに触られると碌なことにならないそうだったので、代案を受け入れることにしました。

体操服の裾を掴んで肋骨のあたりまでめくります。

「腹に力入れてみ」

「はい」

言われるままにお腹に力を込めます。

「あー……やっぱり腹筋足りてへんなあ」

「？ 腹筋とジェット走法に何か関係があるんですか？」

「ありまくりやで。ジェット走法はバランス感覚も大切やけど、それ以上に力技で何とかしてる所も大きいからな。」



つま先で踏ん張って、腹筋で身体を起こす感じ……って言うって分かるか？」

「えっと……」

あまりピンときません。

「そうやなあ……とりあえず片足立ちしてみい。

手は体の前でクロスや、使わんようにな」

「はい」

左足を上げ、バランスを取りながら片足立ちします。

手でバランスを取れないから意外と難しい……。

「そんで、片足立ちかつ、手が使えん状態で重心が崩れると……」

「わわっ……」

後ろからスパさんに押され、バランスを崩しそうになりましたが、つま先で踏ん張り、

何とか体勢を整えます。

「どうや？ つま先からお腹にかけて力入れたやろ」

「あ……この感じで無理矢理体勢を整えるってことですか？」

「そうや。もともとジェット走法はアホみたいに前傾姿勢になるから、腕の振り方とか

他の小細工じゃバランスが取り切れん。

最後は力でねじ伏せるんや。んで、その中でも不足しがちなのが腹筋やな」

「一応、お腹も鍛えてるんですけど……」

トレーナーさんが考えた筋トレのメニューには、脚を重点的に腕や背中、お腹を鍛えるものも含まれています。

なのでまったく鍛えていないわけでは無いのですが……。

「普通の鍛え方ではとても足りんのや。最低限これぐらいは出来んとな」

スパさんは床に寝そべり、腕立て伏せの体勢に。

そこから肩を前の方にスライドさせ、腕だけを支柱に足を浮かせました。

そしてバランスを取りながら徐々に足を上げ、ついには反動をいっさいつけずに倒立を果たしたのです。

今度は倒立の体勢からさつききの逆再生。ゆっくりと腕立て伏せの体勢にまで戻りました。

「ま、ざっとこんなもんやな」

「すごいです！ 体操選手みたいでした！」

「ん、褒められると悪い気はせんな。でも感心しとる場合か？」

「ノールもこれぐらい出来るようにならんとジェット走法は習得できんで」

「つまり筋トレをもっと頑張らないとダメってことですか……」

「せやなあ。とくに腹筋と体幹筋を鍛えや。」

あ、腕はそんなに鍛えんでもええで。

さっきの倒立には腕の力もいるけど、ジェット走法で走る分にはそんなに腕の力はいらんからな」

「分かりました。トレーナーさんに相談して筋トレのメニューを変えてもらいます」

スパさんから実演も交えてアドバイスを貰えました。

さつきまで全く上達の兆しが見えず、霧の中にいるような感覚でしたが、筋トレという明確な指針が見えたことで幾分か気が楽になりました。

ジェット走法の習得に一步近づいた気がします。

「今日もありがとうございしました。わざわざ私の所に赴いてまで……」

「ええって、ええって。……ちゆうてもなんでウチの所に相談しに来てくれんかったんや?」

行き詰った時にすぐ相談してくれれば、効率的やったろうに」

「……あ!」

スパさんの何気ない質問でしたが、それを聞いたとたん、顔から血の気が引いていきます。

「その……トレーナーさんに止められてたんです。

自分で考えた改善策が正しいかどうか質問しに行くのは良いけど、ただコツを聞くの

は駄目だつて」

そうなのです。

スパさんに練習方法を教えてもらった翌日、トレーナーさんから忠告を受けていたのですが、スパさんのいきなりの訪問にすっかり忘れていました。

「ふーん……あのトレーナーまだそんなこと言つとつたんか？」

忠告を忘れていた申し訳なさから眉をひそめる私とは対照的に、スパさんは眉を吊り上げて、やや怒つた様子。

「……人にアドバイス求めたらあかんなんて、いつの時代の考えやねん。

全部自分一人でやれつてか？ 昭和の職人かいな……」

トレーナーなんやから担当ウマ娘のことをちゃんと考えて、最速で成長できるように取り計らうべきやろ。ちよつと無責任やで」

普段陽気なスパさんが怒つた様子を見せるのは珍しいです。

「でもトレーナーさんにも考え合つての事じゃないですか。

試行錯誤する力をつけるために、と言つていましたし」

「試行錯誤ねえ……今はさつさと上達するのが先やないんか？」

試行錯誤してる暇があつたら聞けることは聞いて、その時間を他の事に費やした方が効率的やん」

「それは……確かにそうですけど」

「試行錯誤した結果、的外れなことを頑張ってもそれは無駄になるわけです。」

「ここ4、5日ほどはまさにその通りの足踏み状態でした。」

「あん時はノールに自立したウマ娘になつて欲しいなんて言つてたけど、ただ自分が楽しただけとかやつたら承知せんで、あいつ……」

スパさんの口がだいぶ悪くなつてきました。かなりヒートアップしてきたご様子。

今はトレーナーさんが一時離席しているので良いですが、本人の目の前でそんなことを言えば、気を悪くしてしまうでしょう。

それに今のスパさんと反対の意見を持つトレーナーさんが会うのは火に油を注ぐ結果になりそうです。

「お、落ち着いてください。そんなに喧嘩腰にならなくても……」

「戻ったぞ。悪かったな、結構時間かかっちゃって」

火を宥めようと試みましたが、それより早く油が帰つてきてしまいました。

「つて、なんでスパーチャージャーがここにいるんだ？」

「ノールにアドバイスしてきたんや、あんたにとつては都合が悪いかもしれんけどな」

「アドバイス、つてノールに教えたのか？ くそつ、俺が不在の間に勝手なことを……」

「ちよいちよいちよい！ 勝手はどつちや！」

ノールにウチんどこ来て相談するなつて釘を刺してたみたいやけど、なんの権限があつてそんな事強制してんねん！」

「ああ？ 何も相談しに行くなどは言つてねえぞ。

何も考えずにどうしたら良いですか、つて聞きに行くのを制限しただけだ。

それに権限つてのはいいすぎだろ。ノールを成長させるために必要だと思つたからそう忠告しただけだ」

「成長〜？ 逆やないんか!？」

「試行錯誤する時間があつたら、ばんばんアドバイス貰つてその時間を練習にあてた方がよっぽど成長できるやろ！」

「それは目先の事しか考えてなさすぎだ！

人から聞ける内はそれでも良いかもしれねえが、誰も手を付けたことがない事を練習するときはどうする!？」

貰つた助言が間違つてたら？

そんな時は試行錯誤してやるしかねえだろ！」

「そんなくらいウチかて分かつとるわ！ けど今はそんな場面やないやろ！」

ジェット走法の生みの親であるウチが間違いあらんように助言できる！ アドバイスの貰い得や！」

「本当にそう断言できるのか!? 間違いないって言うが、それはお前にとってはどう!?」

ノールに合っていない可能性もある!」

「そんな時はそんな時や! ほいたらウチがまた別の助言をいくらでもしたるわ!」

「なんだと!!」

「なんやあ!!」

二人の言い争いはあつという間に大炎上。今や二人は額を突き合わせるほどの距離で、メンチの切り合いを行っています。

「ああ……」

途切れの無い口論に、私は仲裁する暇すら与えられず、オタオタする他ありませんでした。

「……つていう事があったんだ」

「それは……災難だった」

場所は変わって今は自室。同室相手のナイトに今日会った事を話していました。

「どっちの意見の方が正しいのかな……ナイトはどう思う？」

「どっちが正しいとかは無いと思う。けど、どちらかと聞かれればスパさん、かな。」

「コツを聞けるなら聞いて、練習する方が効率的だと思う」

「そっかあ……」

「ノールは？ どっちが正しいと思ってる？」

「私は……本音を言えばスパさん、になるのかな。やっぱり早く上達したいし。」

あ、でも、トレーナーさんの意見も気になるんだ。

トレーナーさんと出会った時、自分がいかに考えていないのかを思い知らされたから

……」

「つまり、どっちつかず？」

「や、やっぱりそうなっちゃうのかな？」

どっちつかずと言われると、中途半端で悪いように感じてしまいます。

しかしどちらかの意見を選んでしまうと、スパさんとトレーナーさんのどちらかを選んでしまったような気がするので、ためらってしまうのもしようがないでしょう。

「そ、それよりも！ ナイトの膝は大丈夫なの？ そろそろ治るって聞いてたけど」

「うん。もう少ししたら練習しても良いって」



露骨な話題反らしでしたが、ナイトは乗ってきてくれました。

「ケガしたのがオークスだから……完治まで一か月以上かあ……。体がなまったりしてない？」

「足に負担を掛けないトレーニングはしてたから大丈夫。でも走るとなると怪しい……。ちゃんと感覚取り戻さない」と

「……ナイトは、トレーニンングできない1か月の間どうだった？」

「どう、とは？」

「その、練習できない焦りと不安で夜も眠れなかったりとか……」

「無いわけじゃなかった。療養している間に他の娘達が練習してるって思うといってもたってもいらなかったかな。」

でも、夜も眠れないって程じゃなかった。雑誌の仕事もあったし」

「そ、そっか……」

ナイトの返答を聞き、少し俯きます。

「……なにか悩み事？」

「えっ？」

「今、明らかに気分が沈んだ様子だったから」

わずかな所作から感情の機微を読み取られたようです。

しかし怪我が治ってこれからというナイトに心労を掛けるのは嫌だったので、明るく誤魔化します。

「き、気のせいだって！ 何でもないから、うん」

「……ノールがそういうなら、これ以上は聞かないけど……」

ナイトは不服そうな表情でしたが、一応は引き下がってもらえたようです。

目線を時計の方に向けると、短針が10時を指しています。

「あ、もうこんな時間だし、明日も朝練あるから、そろそろ私は寝るね」

「そうだね。私もそろそろ寝ようかな」

「じゃあお休み」

「お休み」

自分のベッドに寝転び、手元のリモコンで電気を消します。そして目を閉じて眠ろうとしました。

.....

体感時間にして10分ほどでしょうか。眠れる気配はありません。仰向けの状態から寝返りを打ち、体勢を変えてみます。

……………

そこからまた10分ほど。やっぱり眠れません。

早く寝ないと……明日も早いのに……。

そう思つて強く目をつむりますが、効果はありません。ここ数日はいつもこうです。眠れない間考えることは毎夜同じ。

早く……早く走りを上達させないと……

トレーナーさんに見限られるかもしれない……

トレーナーさんと出会つたあの夜、確かこう言つていました。

（俺は早く実績を作りたい。）

そのためには誰かウマ娘を担当して勝たせるのが一番手っ取り早い。

それも元々強いウマ娘よりはその……無名なウマ娘を勝たせる方が実績としては分かりやすい。だろ？）

つまりトレーナーさんが私の担当をしてくれているのは、私を勝たせて実績を作るためです。

しかし私が上達できず、レースに勝つ見込みが無かつたら？

きつと……いえ、確実に私の代わりのウマ娘を探し、その人の担当に変わってしまうはずです。

今トレーナーさんに見限られれば、練習方針の決定、効率的な筋トレメニューの計画、トレーニング中の手助けなどの幅広い支援を受けられなくなります。

それだけは避けなければいけません。でないとまたレースでの勝利が遠のきます。

トレーナーさんに見限られないためには走りを上達させ、レースに勝つ見込みがあることを示す必要があります。

けれどその猶予期間は？

私を勝てるかどうかを見極めるためある程度の猶予は貰えるでしょうが、かといって長い間猶予を貰えるとも思えません。

トレーナーさんは速く実績を作りたいので、見込みが無いと思えば、出来るだけ早く私のことを切るでしょう。

結局はその猶予がどれくらいの間なのか、私には分かりません。

まさかトレーナーさんに聞くわけにもいかないでしょう。

猶予期間が分からない以上、私は出来るだけ早く勝てる見込みがある事を示す必要があります。

しかしここ数日のトレーニングではずっと足踏みをするばかりで、前に進んでいる感

覚がまったくありませんでした。

早く上達したいのに、練習は上手くいかない。その状況に焦りだけが募り、夜も眠れないほどに。

こうして眠っていていいの……？

ただでさえ進歩が無いんだからもっと練習するべきなんじゃない……？

今の私には練習をしていない時間全てが「悪」のように感じられました。体を休めることが大切と分かっているもお、です。

明日……明日はもっと頑張らないと……。

今日、スパさんからアドバイスを貰ったので光明は見えました。しかしその課題は筋力不足。

なので筋トレに励むほかないのですが、筋トレなど一朝一夕で効果が出るものではありません。

そのことを考えると、胸のあたりが重くなってきました。

「…………ふ…………」

嫌なため息をついて、もう一度寝返りを打ちました。

## 五話 スカウト理由

ジリリリリリ!

アラームに反応し、私の手は最速で目覚まし時計の頭を叩きます。

「うー……」

癖で起床は出来たものの、いつもより体の調子は悪いです。

はい、もちろんここ数日なかなか寝付けなかったことによる寝不足が原因ですね。

特に昨日はひどく、3時間ほどしか眠れませんでした。

ピピピツ! ピピピツ!

部屋の反対側ではナイトの置時計のアラームが鳴っています。

3度目が鳴るか鳴らないかのあたりでアラームは止められました。

「んー……おはよう、ノール」

「おはよう……」

ナイトはベッドの上で大きく伸びをした後、きびきびと朝の支度を始めます。

一方、まぶたの重い私は、念入りに顔を洗って無理矢理目を覚ましました。

顔を上げて鏡を見ると、目の下にははつきりと隈が出来ています。

……  
どうしよう……トレーナーさんに見られたら体調管理出来ない奴って思われるかも

……  
そう思い、隈を化粧で無理矢理隠しました。

パッと見では分からない程度にはなっただと思います。

「ノール、先に出てるから」

「あつ、うん、行つてらっしやい……」

早くに準備を終えたナイトはどこかに行くようです。

私も遅れを取り戻すように、急いで運動着に着替え始めました。

「すみません！ 遅れました！」

「寝坊なんて珍しいな。目覚ましでもかけ忘れたか？」

「そ、そんなところですよ」

「ま、少しぐらいは良いさ。朝練始めるぞ」

「はい」

どうやら隈には気づかれなかったようです。

心の中で安堵しながら、朝のトレーニングを始めました。しかし……

「ノール、体調悪いのか？」

「えっ？」

しばらく練習をしていると、突然トレーナーさんにそう言われます。

「いつもより集中力を欠いてるように見える」

「そ、そうですか？」

「俺の気のせいだったらいいんだが……何か不調があるなら言ってくれ。今日は休みにするから」

隈は見破られませんでした。寝不足によるパフォーマンスの低下はすっかり見抜かれています。

「えっと……」

普通なら「すみません、ここ数日上手く寝付けなくて寝不足なんです」と言つてこの話はおしまいです。

しかし私は、トレーナーさんに体調管理も出来ない奴だ、と思われたくないのです。素直に話すことは出来ませんでした。

ただでさえ練習が上手くないのに、ここで駄目な所をトレーナーさんに見せて



しまうと、本当に見限られてしまうのでは……。

そんな強迫観念にも似た思想に今の私は囚われていました。

「その……」

何か良い言い訳を考えていると、トレーナーさんから切り出してきます。

「……昨日の事で悩んでるのか？」

「え？」

「俺がお前の先輩、スーパーチャージャーと揉めた件だよ」

「あ、ああ……」

そういえばそんな事もありました。昨日の今日なのに、私の頭からはすっかり抜け落ちていました。

「あれは俺もムキになりすぎた……次に会ったらちゃんと謝ろうと思ってる。」

だからその事で悩んでるんなら、要らねえ苦勞を背負わせちまった俺の落ち度だ。悪いな」

「わ、分かりました」

上手い言い訳が思いつきそうになかったので、トレーナーさんの理屈を借りてその場を切り抜けます。

「じゃあ続き、やるか」

「はい」

それからの朝練は不調を悟られない様に、一層集中してトレーニングに励みました。

キーンコーンコーン

時間は過ぎ、今4限目のチャイムが鳴った所。お昼休憩の時間になりました。

「ふわ……」

朝練から始業までのわずかな時間や、各休み時間に仮眠を取ったものの、未だにまぶたは重いです。授業中も船を漕ぐばかりで、全然集中できませんでした。

早いとこ何とかしないと……。

上手く働かない頭を回転させて、どうにか解決策を考えていると、

「ノール、ご飯食べに行こう」

「あつ、うん」

別クラスにも関わらず、ナイトがご飯に誘ってきました。

いくら眠いとはいえ、昼ご飯を抜くのは良くありません。誘われるままにナイトと一

緒に食道に向かいます。

その途中でスパさんに出会いました。

「おっ、二人とも今からメシか？」

「はい」

「ならウチも混ぜてもらってええか？」

「大丈夫です……というか大体いつも一緒だからわざわざ聞かなくても……」

「ま、一応な」

食道に着き、三人でそれぞれ料理を選びます。それからいつもの窓際の席に座ります。

「あー……というか昨日はすまんかったな、ノール」

「トレーナーさんと揉めた件ですか？」

「せや。あれはウチも熱くなりすぎたわ。嫌味言うだけのつもりがあればあれよあれよという間に……な？」

「スパさん、そんな事してたんですか？」

「お恥ずかしながら……あの後は色々大変やったわあ……」

「体育館中の人がみんな注目してましたからね……」

「お互いこつてり叱られたわ。ノールのトレーナーの方が指導する立場やからって事で

余計に怒られてたけどなあ……。

「今度会ったら謝つとくか……」

「あ、トレーナーさんもそう言っていました。スパさんに会ったら謝らないと、つて」

「うげ、変なところで気が一致してもうたわ……ちゆうても謝りはするけど」

そんなことを話しながら食事を進めます。

あらかた食べ終わり、一段落したころ。

「そういえば、ノールは大丈夫？」

「……つ、な、なに？」

お腹が膨れて寝そうになっていた私はナイトの声にも返事が遅れます。

「……今、うとうとしてたから……昨日眠れなかったのかなって思つて」

「なんや、夜更かしでもしたんか？」

「い、いえ、そう言うわけでは……」

今、夜更かしを認めてしまうと、トレーナーさんに謝ると言っていたスパさん経由で寝不足がバレてしまうかもしれないので、つい否定してしまいました。

「ならどうして眠そうにしてたの？」

「それは……」

不味いです。何か言い訳を考えようとしても、眠気で頭が全く働きません。

ウイルスに感染したパソコンの様にエラーだけを吐き出しています。

「……あ、そ、そういうえば私、先生に呼ばれてたからもう行くね？」

上手い言い訳が思いつかなかったのやや強引ですが、そう言つて席を立ちます。お盆を回収口に返して、食堂を後にしました。

「……行つてしもたな」

「なんで寝不足を隠すんでしょうか……知られて困るものでもないと思うんですが」

「確かにそうやけど……まあ、隠す以上はなんか理由があるんやろ」

「心配です」

「せやなあ……授業はともかく、練習中にこけたりせんとええんやけど……」

食堂で二人と別れた後、図書室で仮眠をとり昼休みを終えました。

午後の時間割は、二時限まるまるトレーニングの時間に当てても良いことになっています。

なので今はトレーナーさんと合流し、ジムで筋トレをしています。

「18」

「……っ」

「おい、呼吸が止まってるぞ」

「す、すいません……」

「息を止めて歯を食いしばれば確かに瞬間的なパワーは出る。

だが呼吸を止めれば酸欠になつて後が続かなくなるぞ。それに腹に力を入れて呼吸すれば、腹筋も同時に鍛えられる。一石二鳥だ」

「は、はい……」

「19」

今はバーベルスクワットの最中です。

バーベルスクワットとは文字通り方にバーベルを背負つてスクワットをします。

自分より重いバーベルを持つてスクワットをするだけでももちろんきついのですが、バランスを取るのにも一苦勞です。

寝不足の状態では負荷の高いバーベルスクワットをするのは不安でしたが、仮眠の成果もあってか、一セット目を終えることが出来ました。

「20。1セット目終わりだ」

「ふー……っ」

今度は呼吸を止めないように気を付けながら、バーベルを地面に降ろしました。ここからはしばし休憩の時間です。

「にしても、その華奢な体で良くこんな重い物持ち上げれるな……」

「ウマ娘の身体能力は人並外れてるって言われてますからね」

「ここまですごいと、補助するこっちの方が大変だぞ……ったく。ほら二セット目やるぞ。準備しろ」

「はい」

トレーナーさんに手伝ってもらいながら、バーベルを肩に担ぎます。

「安定したか？」

「大丈夫です」

「よし、じゃあ二セット目開始だ」

慎重に膝を曲げ、お尻突き出すようにしてしゃがみます。これで一回。そこからゆっくりと立ち上がったその時、頭から血が引いていく感覚が。

あ、これ……立ち眩、み？

視界が白く染まり、力の抜けた体はバーベルごと前に倒れていきます。

「おいっ！ つ!!」

ガン！ ガラン……！

膝を床に着き、何とか踏ん張ります。

そのまましばらくすると、段々と視界が明瞭になってきました。

……あ、あれ？ バーベルは？

腕と肩に重さを感じません。

というか本来ならバーベルを抱えてバランスを崩した時点で惨事になるはずなので

すが、私は無事です。

振り向くと、そこには床に落ちているバーベル、そして右手首を押さえているトレー

ナーさんの姿が。

「い、つてえ……!」

まだ立ち眩みの余韻が残っている頭でも、なにか不味い事態になっていることは理解できました。

堰を切ったように汗がにじみ出てきます。

「と、トレーナーさん!?! だ……!」



「ノール！ 大丈夫か!？」

「え……」

「バーベル！ 当たってないよな!？」

「は、はい!」

「そうか……なら良かった」

大きく息を吐き、安堵しているトレーナーさん。しかし私は何が起こったのかを把握しきれず、軽いパニック状態です。

「そ、その……え、えっと……」

「くそ……、手えちぎれてねえよな……」

「あ、あの……だ、大丈夫ですか?」

「かなり痛むが……多分大丈夫そうだ」

「と、と、とにかく保健室に……」

恐らく私のせいでトレーナーさんに怪我をさせてしまった事は理解できました。顔を真っ青にしながら、トレーナーさんを連れて保健室に向かいます。

「ただの捻挫ですね。2、3日安静にしていれば治りますよ」

保健の先生の言葉を聞き、ほっと胸をなでおろしました。重症では無いようです。

トレーナーさんに湿布とテーピングの処置が施された後、私達は保健室を後にしました。

「痛みの割には大したことなかったな……にしても慌てたぞ？」

急にバランス崩しやがって……とつきにバーベルを支えたのは良かったが、流石に片腕じゃ支えきれなかったな」

「す、すみませんでした！ わ、私のせいでトレーナーさんに、け、怪我を……」

「別にトレーナーの俺が怪我すんのは良いだろ。再起不能になった訳でもない。お前に怪我が無かったんだから良かったじゃねえか」

「で、でも……」

さっきのがただの事故ならともかく、完全に私の寝不足が招いた立ち眩みが原因なので、私の感じる罪悪感は相当なものでした。

顔に浮き出てきた脂汗を袖で拭きます。

「……………！ ノール、そいつは……………」

「な、なんですか？」

「目の下に隈……………道理で」

「あ、えっ!? な、なんで……………」

「化粧、取れてるぞ」

袖を見ると、そこにはファンデーションがべつとりと。汗と強く拭きすぎたのが原因で、化粧が取れてしまったようです。

「そんだけ寝不足ならバランスも崩すわな」

「あ、そ、その、これは……………」

トレーナーさんに怪我をさせただけでなく、目の下の隈もバレてしまい、いよいよパニックに陥った私。

「べ、別に寝不足という訳ではなくて、ただ……………その……………えっと」

吸う息より吐く息の方が多くなり、余計に頭がこんがらがってきます。

「つまり……………あの、化粧で隠してたのは、別に、その……………んぐー！」

「いったん落ち着け」

意味のない言葉を垂れ流す私の口をトレーナーさんが手で塞いでできます。ついでに鼻もつままれました。片手なのに器用なものです

「俺が手え放したら呼吸に集中しろ。何もしゃべるなよ」

首を縦に振って返事をします。するとトレーナーさんは手を離してくれました。

「はあっ……はっ……はっ……はっ……すー……はあ」

「落ち着いたか？」

「……なんとか」

呼吸を整え、何度か深呼吸をすると、幾分か気が落ち着きました。

「どうして寝不足になったのか、なんでわざわざ隈を隠してたのか……聞きたい事は色々あるが……ま、とにかくどこか座って話が出来る所に移動するか。」

「そこで聞かせてもらおうぞ。それでいいか？」

「……はい」

もうこうなってしまうては、すべてを話すほかないと思います。トレーナーさんの後に続き、移動しました。

トレーナーさんに連れていかれた所はトレーナー居室でした。トレーナーさんが扉

の鍵を開け、一緒に中に入ります。

部屋の中は良く分からない器具や資料、本などで散らかっていますが、机の周りだけは整頓されていました。

「ちよつと散らかってるが……ノールはそつちの椅子に座つてくれ」

私はトレーナーさんの反対側に座ります。

「……なら座つて話が出来るし他の人の目も無い。……早速だが寝不足の理由を聞いても良いか？」

「……はい」

私は全てを話しました。

早く成果を出さないと、トレーナーさんに見限られるかもしれないと思つていた事。

それが気がかりでここ数日寝付けなかつた事。

目の下の隈を隠していたのは、トレーナーさんに体調管理も出来ない奴だと思われたくなかつたからという事。

「私が至らないばかりに、トレーナーさんに怪我をさせてしまつて……本当にすみませんでした」

「ここまでやらかしちゃつたら見限られてもしようがないよね……」

他人事の様にそう思いました。

「……………」

トレーナーさんは黙ったまま何も言いません。

室内なので帽子は脱いでいますが、サングラスは掛けたままなので、上手く表情が読み取れません。

「はあー……………あいつの言った通りかよ、くそっ……………!」

やつと口を開いたかと思うと、頭をガリガリと掻きながらそう吐き捨てます。

「え、えつと……………」

トレーナーさんは悪態をつきはしたものの、どうやら私に向けたものではない様子。というよりどこか自虐的な印象を受けました。

「……………今からちよつと長い話をするが……………付き合ってくれるか?」

「は、はい」

「よし。……………つってもどう話すべきか……………」

トレーナーさんは顎に手を当て、少し考える素振りをしました。

「……………昔々、ある所に金持ちの両親のもとに生まれた男が居た」

トレーナーさんはサングラスを外し、物語調で話し始めます。トレーナーさんの目ははつきりと見たのはこれが初めてです。その瞳はどこか遠くを見つめています。

「その男は両親に甘やかされてぬくぬくと育った。」

勉強を頑張るわけでもなく、かといってスポーツに励むわけでもなく、だからだと毎日を過ごした。

まあ、人様に迷惑を掛けなかったのはまだましかもしれないな」

「そいつはそのまま年を重ねて、中学、高校を卒業したが、働くわけでもなく親のすねをかじりながら生活をしていた。いわゆるニートって奴だな」

「そいつはそのまま何をするでもなく、親の金を食いつぶして死んでいくかと思われたが……そんな奴にも転機は訪れた。

そいつはある日、暇つぶしにウマ娘のレースを見に行つたんだ」

「そいつはレースを見て、ひどく感動した。自転車でも、自動車でも、ボートでもない生身の体が時速60kmを超える速度で走る鋭さに震えた。

ウマ娘達の真剣さ、必死さを肌で感じて鳥肌が立った」

「ウマ娘達にいたく心を動かされたそいつは、一番近くでウマ娘を見たいという思いからトレーナーになることを目指した。

今まで夢中になれるものが何一つ見つからなかったその男にも、ようやく人生の目的のようなものが見えたんだな」

「だが世間で難関と言われるだけあって、トレーナーになるための試験は簡単じゃない。

…当然、そいつは何年も試験に落ち続けた。そりゃあもう落ちまくった。

トレーナーになる奴なんかだいたいエリートだからな。トレーナーの名門家があるくらいだ」

「どれだけ勉強しても成果の出ない状況が続く、その男はこう思った。

「世の中つてのは結局、努力なんかじゃなくて持って生まれた才能なんじゃないか」つてな。

……笑っちゃまうだろ。まずそいつは今までもろくすっぽ頑張つてこなかった分を取り返すところから始めなきゃいけないのにな。才能以前の問題だぜ……」

「……んで、そんな事を考えたそいつは案の定トレーナーになる事を諦めようとした。でもまたレースを見に行くと、もう少し頑張つてみようって気になった。

自分より年下の奴があれだけ必死になって、勝つために頑張つてるんだ、俺ももう少しやれるはずだ……そう思えた」

「その男はそうして勉強し続けた結果、なんとか試験に合格し、晴れてトレーナーになった。

そして6月にしては少し寒かった夜にあるウマ娘と出会った。

話してみると、何の因果かそのウマ娘は自分が過去に思つた事と同じような事を喋つたんだ、確か……」

「結局世の中は才能が全てなんじゃないか……、でしたよね？」



「その男」とか、「そいつ」とかの代名詞を使っていますが、さつきトレーナーさんが話した内容は恐らくトレーナーさん自身の話です。

なら「あるウマ娘」というのは多分私のはず。過去の自分の発言を思い出して、そう言いました。

「……そうだったな。ま、つまるところその男は過去にあった、いくら頑張っても成果が出ないが、それでもなお頑張った……そういう所をそのウマ娘に重ねて共感した。

そんな理由でそいつの担当をすることに決めた。だから……」  
今まで遠くを見つめていたトレーナーさんがこちらを向き、目が合いました。

「俺はお前を見限るような事はしない」

そしてトレーナーさんまた私から目を反らしました。

「……というか俺がノールに見限られるのが先だよな。」

恥ずかしい過去を語りたくないって理由だけで建前を騙り、担当ウマ娘の心労を増やしてただだ……余計な気苦労をかけて本当にすまなかつた」

トレーナーさんは怪我をしていない方の手を机につき、深々と頭を下げました。

「あ、頭を上げてください！ 別にトレーナーさんは悪くありません。勝手に私が思い悩んでただけで……」

「だがその原因を作ったのは俺だ。俺がきちんと本音を話してればこんなことにはなら

なかつたはず……10:0で俺が悪いよ。

「は、知らないうちに担当ウマ娘の負担を増やしてたってんだからトレーナー失格だぜ……」

トレーナーさんは自嘲するように乾いた笑いを漏らしました。それに対して私は立ち上がり反論します。

「そ、そんなことありません！ 間違つた練習をしていた私を前に進ませてくれたのはトレーナーさんです！

どんな理由であろうと私を担当してくれたことはとても感謝しています。だから……だからトレーナー失格なんて言わないでください！」

思つたより大きな声が出てしまいました。

「あ、す、すいません……急に大きな声出しちゃつて……」

再び椅子に座りなおします。

「……とにかく、私はトレーナーさんのことをトレーナー失格とは思いません。だからトレーナーさんがよければ、私の担当を続けてほしいです」

「……俺で良いのか？」

「はい、トレーナーさんが良いです。怪我を厭わないぐらいには私のことを思つてくれますから」

「……………そうか」

トレーナーさんは照れたように右腕を机の下に隠しました。

「……………というか、俺の過去は気にしないのか？」

「？」

「いや、普通引かないか？ 年取った男がトレーナーになるために何年も頑張ってたって話。

何かこう……………気持ち悪いというか、頑張るのが遅すぎるというか、頼りない感じっていうか……………」

「別にどうも思いませんけど……………きちんと試験に合格してトレーナーになったんですから、過程は関係ないじゃないですか」

「……………そうか」

そう言うトレーナーさんの表情は柔和なものになっていました。その様子を見る限り、トレーナーさんは自分の過去をかなり恥ずかしいものと思っていたようです。

それからはしばらく沈黙が流れました。私もトレーナーさんもこの流れから何をどう切り出せば良いのか分からず、無言のままです。

「……………ついでに話しておきたいことがある」

長い沈黙を破ったのはトレーナーさんの一言。

「なんですか?」

「俺の目的についてだ。」

もちろんお前を勝たせることも俺の目的だが……最終的には担当トレーナーがいなくてもウマ娘達が自力で成長できるような環境を作りたいと思ってる」

「……どうしてそれが最終目的なんですか?」

トレーナーさんがトレーナーがいなくても良い環境を作るといえるのは、どうにも解せません。

「……どう説明したものかな……ウマ娘はトレセン学園に入学したらまず何を目指す?」

「えっと……人に依りますけど、多くの人はトレーナーさんに担当してもらおうことを目指すと思います。やっぱりトレーナーさんに直接指導してもらおうのが勝つ一番の近道ですから」

「そうだな……多くのウマ娘はトレーナーに担当してもらおうことをまずは目指す。それ自体は別に悪いことじゃないが……このシステムは才能に依る所が大きすぎる」

才能に依る所……

「……入学試験の段階でトレーナーに一目置かれるウマ娘は、才能溢れるウマ娘。」

入学後の選抜レースでトレーナーの目に留まるのも、次点で才能のあるウマ娘……っ

てことですか」

「そうだ。入学段階じゃ才能の差がもろに出るからな。それで才能あるウマ娘はトレーナーに担当してもらい、すすくと成長できる。」

だが、ふるいにかげられたウマ娘はどうだ？」

「……教官から不十分な指導しか受けられない、ですか？」

「ああ。後は自主練するしかない……だが入学時点でウマ娘自身が適切なトレーニングに励めると思うか？ そのための知識もまだ教わってないの？」

「……無理だと思います」

私は無理でした。

「つまり一度ふるいにかげられたウマ娘が実力をつけることは難しく、実力をつけられなければその後トレーナーの目に留まる事はない……それが今の現状だと俺は考えている」

トレーナーさんはあの日の夜、私が思っていたことをほとんどそのまま説明します。

「それに今のトレセン学園はトレーナー不足だろ？」

「そうですね。確かウマ娘に対するトレーニング理論が発展してきたせいで、近年の試験が難しくなっているのが原因と聞いたことがあります」

「ま、大体はその通りだな。何年も試験を受け続けた俺が言うんだ、ソースはばっちり」

「や」

「……」

きつと、おそらく、多分、笑い所だとは思いますが、一応無表情を貫き通しました。

「……トレーナーが少なくなれば、それだけ担当してもらえるウマ娘の数も減る。

だからなおさらこの格差は広がっている。

だからこそ俺はウマ娘達にはトレーナーの手を借りずとも自分で成長できるように  
なつて欲しいと考えているし、それを目的にしている」

「……あ、もしかして私に試行錯誤させたのは……」

「その一環だな。……お前にとつちや不親切に感じたかもしれないが、この考えに基づいた指導だったわけだ」

「スパさんの意見に真つ向から反抗したのも……」

「……まあ、そうだな。答えを教えるのは確かに手つ取り早く成長させる方法だが……  
そいつから考える事を奪つてしまう。」

だから自分の目的を邪魔されたように感じてつい熱くなつちまった。悪い癖だな」

そういう思いがあつたのならあれほど熱くなつたのも理解できます。しかし、ヒート  
アップしたのはトレーナーさんだけでなくスパさんもそうでした。

……じゃあスパさんの方も何か確固たる思いがあつたのかな……。

面倒見の良い先輩に想いを馳せましたが、今はトレーナーさんとの話に集中します。「でもどうやってその目的を達成するんですか？ トレーナーさんが対象すべてのウマ娘を指導するわけにもいきませんし……」

「本だ」

「ほ、ほん？」

「ああ。どうやって自分の走りを上達させるか、そのためにどんな知識が必要かの要点をまとめた本を出そうと思ってる。まだ執筆中だがな」

本と聞くと、なんというかかなりハードルが高そうに感じます。しかし、多くのウマ娘に向けて情報を届けるなら本という手段は有効的でしょう。

「ま、本を出せたとしても読んでもらうためには知名度がいるから「早く実績が欲しい」ってのはまるっきり建前ってわけでもないんだが……」

あ！ 別に今のはプレッシャーをかけたわけじゃないぞ!？」

「分かってます……でも、期待はしておいてください。私、勝ちますから……多分」

「そこは嘘でも絶対勝ちます、っていう場面じゃないか？」

「そ、そこまではちよつと……」

この二週間でメキメキと上達していたのならそこまで断言できたのでしようが……。

「そして前もって言っておくが、来たるべき時になれば俺はお前の担当を降りる」

「え……？ あ、あれ？ や、やっぱり私、見限られる感じですか!？」

「いや、そうじゃない。お前が俺無しでもやっていけると判断したら、担当を降りるってことだ」

「……ということはこの関係もそれまでなんです」

トレーナーさんにも目的があるので、私にばかり構えないのはわかりますが、別れの時を思うと少し寂しい気持ちになります。

「つつても今生の別れってわけでもないだろ。一緒に学園にいるんだからいつでも会えるさ」

「……そうですね」

「長くなっちゃったが俺の話はこれで終わりだ。……これで、夜は眠れそうか?」

「はい。今日からはよく眠れそうです」

「そうか、なら良かった。……ふー……精神的に疲れた……」

人に本音を話すのってこんなにこっぴどくさしいものなのかよ……」

話にひと段落付き、トレーナーさんは椅子の背もたれに背中を預けます。私はトレーナーさんの顔をずっと見つめていました。

「……」

「……なんだ？ 俺の顔になんかついてるか?」



「あ、いえ、その……や、やっぱり何でもありません」

「なんだ、気になるな……もしかしてまだ何か悩みの種があるのか？」

「悩みつてわけじゃないんですけど……やっぱり藪蛇になりそうなので……」

「本当か？ またこじれてこんな事になるのはもうこりこりだ。藪蛇でも何でも良いから話してくれ」

トレーナーさんは体を机の上に乗りに出してきて、私を問い詰めてきます。

「そ、そこまで言うなら言いますけど……トレーナーさんって意外と童顔なんですね」

「……」

「……」

「……」

私が今思っていたことを素直に言うと、非常に長い沈黙が下りてきました。

トレーナーさんは机に置いていたサングラスをゆつくりと装着します。

「……言いふらすなよっ」

「は、はこ」

やっぱり藪蛇だったようです。

夜でもサングラスをつけてたのはこのせいかなぁ……。



## 六話 併走

トレーナーさんと腹を割って話してから数日。私の寝不足も解消され、改めてトレーニングに励めています。

坂路ダツシユを終えて休憩していると、トレーナーさんに声を掛けられました。

「ノール。今日から併走練習するって話だったが……相手は決まってるんだよね？」

「はい。もうすぐ来ると思うんですけど……」

時計を見ると、約束の時間の五分前です。彼女は律儀なので約束の時間に遅れることはないと思います。

そんなやり取りのすぐ後に、目的の人物はやって来ました。

「ノール。今日はよろしく」

「あ、ナイト。よろしくね」

「でも本当に大丈夫？ 怪我から復帰したばかりなのに併走なんて……」

「2、3日膝の調子を確かめてみたけど、特に問題なかった。今日からは本気で走れる」  
「そう言うナイトの顔はやる気に満ち溢れています。1か月以上も走れていなかったの、フラストレーションが溜まっていたのでしょうか。」

「あー……こりやまた凄い奴が併走相手に来たもんだ……」

「ノールのトレーナーですよ。今日はよろしくお願いします」

「こちらこそよろしく……というか、俺に対して敬語は使わなくて良いぞ。堅苦しいのは苦手だからよ」

「そうですか？　じゃあ普通に話す……本当にこれで良い？」

「ああ、大丈夫だ。そっちの方がやりやすい」

そんなやり取りが繰り返されます。

あれ？　年上の人に対してそんな簡単にため口で話せるものなの？　スパさんとはもかく、ナイトまで……もしかして私の方が異端？

「じゃ、さっそく始めるか？」

「あ、その前にアップの時間が欲しい。少し待ってて」

「それもそうだな。アップが終わったら声をかけてくれ。それまでノールと少し話すから」

「はい」

ナイトは離れたところで、準備運動を始めました。その間にトレーナーさんと話をします。

「今日から併走練習を始めるわけだが……やるべきことはちゃんと覚えているか？」

「はい。併走相手の斜め後ろについてよく観察する、です」

「よし……ま、お前から言い出したことだからわざわざ確認するまでもなかったか」

トレーナーさんが言った通り、併走練習は私から申し出たことです。

というのも今まで自分が走ったレースを振り返ってみると、コース取りがうまくできていない欠点を発見できました。

コース取りには素早い左右移動と急加速を可能にするパワーも必要ですが、それに加えてほかのウマ娘がどこにいるかを把握する視野の広さ、それに前を走るウマ娘がいつへばるか、垂れてくるかを見極める観察力も必要になってきます。

今回の併走練習は観察力を身に着けようという趣旨なので、併走相手……ナイトの斜め後ろで彼女の走る姿を穴が開くほど見させていただきましょう。

「……つってもまさかお前があんな大物を連れてくるとはな……」

「お、大物ですか？」

「そりやそうだろ。デビュー時からほとんど負け無し。」

ジュニア期にもG1レース取って、ティアラ路線で活躍したあのナイトグライダーだ。

おまけに読者モデルなんかもやってるらしいし、知らないトレーナーなんかいないぞ」

ナイトは同室相手ということもあり、結構身近な存在に感じていました。

そのせいで少し認識がずれていましたが、改めてトレーナーさんにそう言われると、ナイトの凄さを再認識できます。

「……オークスは残念だったけどな。

怪我さえなけりや、トリプルティアラも夢じゃ無かつただらうに……いや、こんなことは言ってもしょうがねえか」

トレーナーさんは帽子を被りなおします。

「ま、とにかくGI取ったウマ娘の走りを観察できるんだから、良いところはしっかりと盗めよ」

「そうですね……」

「アップ、終わりました」

そうこう話しているうちに、ナイトが準備運動を終えたようです。

「なら始めるか。二人とも並んでくれ」

ナイトがコースの外側に、私がコースの内側に立ちます。

「合図するぞ、構えて……」

トレーナーさんの声を受けて、右足を後ろに下げ、足の指で芝をしつかりとつかみました。

「始め！」

掛け声と共に地面を蹴ります。すぐに時速60kmまで加速し、フォームを安定させました。

「ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……」

鼻から吸って口から二回に分けて吐く。その呼吸法とフォームだけは崩さないようにしながら、少し前に行くナイトを注視します。

……やっぱりフォームがすごく綺麗だな……1か月のブランクを全然感じないや……。

ナイトの走る姿はそれだけで芸術品ののように綺麗です。一定の歩幅に足の回転、ぶれない上半身、腕の振りさえも常に同じ。まるでループアニメを見ているかのようです

「フー……フー……フー……」

ナイトの呼吸音も聞こえてきました。私とは違い、深く、透き通るような呼吸。なんだか上品に感じられます。

そう思う間にも第一コーナー。今回のコースは右回り、遠心力に負けないように左足を踏ん張りながら、速度を落とさないようにコーナーを曲がります。

……うん……前までは脚の踏ん張りが弱かったから体勢が崩れてたけど……今はちゃんと踏める。

2週間の練習の中での数少ない成長を感じながらも、ナイトからは目を外しません。とはいえさつきと変わりなく、完璧な姿勢で走る姿が目に入ってくるだけです。

その後も第二コーナー、第三コーナーとナイトを観察し続けましたが、特に変わりはありませんでした。

しかし最終コーナーに差し掛かり、ようやくナイトの走りに変化が現れました。

……あれ？　なんか……左足が上がらなくなってる？

今まで精密機械のように同じフォームで走っていたナイトですが、わずかに左足の回転が鈍くなりました。ずっとナイトの走りを観察していたので、間違いないと思います。

そんな中、ナイトは振り向いて私の方を一瞥した後、一気に速度を上げました。

っ！　もうスパート……!?

まだゴールまでは500mあります。私はいつも400mからスパートをかけるので、100mもスパートのタイミングが早いです。

慌てましたが、別にこれは本番のレースではありません。

ゴール前でスタミナ切れするかもしれないけど……少しでも食いついて行くっ！

そう思い、わずかに遅れて私もスパートをかけました。

まだジェット走法は習得できていないので、普通のスパート体勢ですが。



1600m分を走った疲労が体に蓄積されていますが、足を下げないように、腕の振りを小さくしないように、フォームを崩さないように注意しながら、ナイトの後をついていきます。

最終コーナーを曲がり終え、最後の直線をMaxスピードで駆け抜けていくその時、ナイトが一気に失速しました。

「えっ!？」

驚いてしまった私も速度を落とします。結局二人ともゴールラインを割ることなく、途中で停止しました。後方にいるナイトのそばに駆け寄ります。

「だ、大丈夫？　まさか怪我が……」

「……いや、そうじゃない。いつものタイミングでスパートかけたんだけど、足が全然ついてこなかっただけ。」

一か月も走ってなかったからかなり筋持久力が落ちてる。特に左足。

……まずはそれを取り戻すところから始めないと……」

そう言うナイトの口調は淡々としていますが、表情は芳しくありません。

それもそのはずです。今まで出来ていたことが出来なくなってしまうというのは、どれほどの喪失感が伴う事でしょうか……想像もできません。

そういえば途中からナイトの左足が上がらなくなっていたのも、コーナーで左足に負

担が蓄積していたからかもしれない。

一か月でそこまで衰えて……

「……」

今のナイトにどう声を掛ければ良いのか分かりませんでした。困った顔のまま黙っている、ナイトの方から話し始めます。

「……ごめん、途中で止まっちゃって。仕切りなおそうか」

「……ナイトは大丈夫なの？」

「休憩を挟めば大丈夫……今度はノールが先行で走ってほしい」

ナイトの曇った表情はすぐに引き締まったものになりました。

「……分かった。次は私が先行する」

「ん」

ナイトは私の返事を聞いて、すぐにスタートラインに戻っていきます。

……ナイトが速いのは、きっと才能だけじゃなくてメンタルの強さも寄与してるんだろうな……。

もし私が今のナイトの立場だったら、すぐに割り切れていたかどうか。ナイトの背中を見ながら、そんなことを思いました。

スタートラインに戻ると、トレーナーさんの隣にはスパさんが並んで立っていました。

「あれ？ スパさん、いつの間に来てたんですか？」

「ちょうど二人がスタートした時や。」

このトレーナーがナイト連れて歩いてるの見かけたから、ウチの休憩時間のついでに謝つとこうと思つてな」

「つてことは仲直りしたんですか？」

「ま、一応な」

ちらりとトレーナーさんの方に視線をやりました。

「ちゃんとお互いに謝つた。遺恨は残つてねえよ」

トレーナーさんからも確認が取れました。数日越しですが、二人がきちんと仲直りしたのは良いことです。

こういうのは目を置いた方が冷静に話をしやすいとも言いますし。

「それよりさつきは二人して止まってたけど……なんかあつたんか？」

「あ、それは……」

「私がペース配分を間違えてスタミナ切れを起こしてしまったんです。すみません」

ナイトが頭を下げながらそう言います。

「怪我からの復帰後で感覚つかめなかったんか？」

「はい……思ったより鈍っていました」

「そうかあ……がつくり来たかも知らんけど気張らなあかんで。」

体は衰えても元の状態を覚えてるもんやから、しっかり筋トレと練習すれば比較的短時間で元通りのレベルまで戻せるはずや」

「トレーナーからもそう言われました……頑張ります」

「ちゅうか復帰後やのにトレーナーがついておらんのか？」

「それは……今走っているのは私の独断なんです。一応、今日までは様子見をするようにと言われていたのですが……焦りからつい……」

「あー……」

ナイトの気持ちはよくわかります。一か月も練習できなかったのだから、一日ぐらい前倒しにしてしまう気持ちは。

でも……。

「その気持ち、ちゃんとトレーナーさんには話しておいた方が良く思うよ。」

怪我の様子見を一日前倒しにするぐらいなら問題はないかもしれないけど……自分の思いはトレーナーさんと共有しておかないと、後々大きな歪になるかもしれないから……」

気づくと、そう口にしていました。数日前に似たような感じで痛い目を見たばかりですから、つい。

「……あ、ご、ごめんね？ 何か偉そうに言っちゃって……」

「いや、ノールの言う通りだと思う。ちゃんと後でトレーナーに話してみる。」

……でも今は併走に集中したい。今の自分がどれくらいやれるのかをきちんと確認したいから」

「分かった。じゃあ休憩はこれぐらいにして、再走しよっか」

「うん」

二人でスタートラインに立ちます。今度は私が外側、ナイトが内側です。

「始め！」

掛け声と共に、再び地面を蹴りました。

ナイトとノールがスタートを切り、ウチとノールのトレーナーが取り残される。

「……で、さっきの話の続きやけど、まさかあんたにそんな目的があつたとはなあ……  
やつたら私が勝手に助言したのにキレたんも納得できたわ」

お互いに口喧嘩の件を謝罪した時に、ノールのトレーナーはどうしてウマ娘自身に考えさせることを重視してたのかについて話してくれた。

意外と大きい目的があつたんやなあ……。

「それにしてもあの時は大人気なかつた。悪かつたなあ……」

「何回も謝らんでええて。あん時は私も頭に血い上つてたし……ほんま堪忍な」

再度、謝罪の意をお互いに示す。

「ちゆうかわざわざ動機まで説明してくれんでも良かったのに……あー！

これやと、自分がキレた理由を説明してないウチがアンフェアみたいになるやん！」

「いや、別にそんなことはないだろ……俺が勝手に話しただけだ。そっちの方がわだかまりが残らなさそうだったし。

……というかお前にもなんか動機があつたのか？」

「そりやあるやろ……なかつたら急にキレるただのやばい奴になるやん、ウチ。更年期のおばさんか」

「口調は大阪のおばちゃんって感じだが……もしかしてアメちゃん持ってたりするか？」

「持つてへんわ！」

……つと、あかんあかん。このままやとまたヒートアップしてしまいそうや。

「ふー……」

一つ深呼吸をして落ち着きを取り戻す。

「……ま、ざっくりと説明しよか。あんまり自分語りは得意じゃないんやけんど……」

「無理して話さなくてもいいぞ？ わざわざ俺に義理立てしなくても……」

「いや、聞いてくれや。ここまで前振りしてもうたんやし」

今まで誰にも話せる機会がなかったから、自分の内にしまっていたけれど。

人に聞いてもらうことで気持ちに整理がつくかもしれない。

「ウチはあんたも知つての通り、短距離適性や。とつたレースは全部短距離」

「確か、お前が取つたG1は高松宮記念とスプリンターズSだったか……」

「よう知つとるな……トレーナーなだけはあるで。短距離では無敵の私やけど、短距離

から200、400m距離が伸びるマイルのレースはてんでダメやった。

きつとウチは根っからのスプリンターやったんやろうな」

たつたの200m距離が伸びただけでまったく勝てんかったのは、自分のことながら

びつくりやったなあ……

「ここでトレーナーにクイズや。GIレースの中でも八大競争に数えられる格式あるレースの名前をすべて挙げよ」

「なんだいきなり……」

クラシック三冠の皐月賞、日本ダービー、菊花賞。それにトリプルティアラの内二つである桜花賞にオークス……それで残りは天皇賞（春）と（秋）に有馬記念」

「正解や。ここで追加クイズチョン。その中に短距離のレースはいくつある？」

私がそう聞くと、ノールのトレーナーはハッしたような表情をする。

「……一つも無い」

「またまた正解や。正確には八大競争の中にマイルが一つ、中距離が四つ、長距離が三つやな。クイズの結果は100点満点、拍手拍手」

大げさに拍手してみせる。しかし、トレーナーが苦い顔をしているのを見て、おちやらけるのを止めた。

「……八大競争つてのはウマ娘なら誰もが憧れるレースや。ウチもそうやった。トレセン学園に入るからには、八つ全部制覇したる！ ぐらいの意気込みで入学したもんやで」

「でも悲しいかな、ウチは短距離向きの脚質をもって生まれた。」



やからトレーナーさんには見初められたけど、練習方針は短距離向けのもんやった。けど、八大競争で戦いたかった当時のウチはそれに反発したんや、「中距離、長距離で走りたい」ってな」

「中距離以上で戦うってわがまま言い続けた私は、ついにトレーナーから……見放されてな。それからは……それから……」

続きを話そうとしたが、上手く言葉が出てこなかった。

……自分の中では……決着つけれたと思ってたになあ……。

「……あんまり無理すんな。話したくないなら……」

「いや、話す。話させてくれや……ここまで話したんやから最後まで話してすつきりさせて欲しいわ……」

滲み出そうだった涙を何とか堪えて、続きを話す。

「……それからは一人で練習して中距離のレースに出てたな。けど全然成果は出んかった。いくらスタミナつける練習してもこの脚が1400m以上は走ってくれんかったんや」

自分の太ももに手を当てる。

ウチの脚……ウチを短距離で勝たせてくれた大事な脚であるのと同時に、それ以上の

距離を走れない呪いの脚。

「一人で練習して、結果が出なくて……それでもなお練習して、でもやつぱり結果が出て……あの時の私は精神的にやばかった。

どれだけ頑張っても報われん状態がずーつと続いて、何かに追いかけられてるような焦りと閉塞感に押しつぶされそうやった」

たぶん、精神科医にかかったら何らかの病気と診断されたかもなあ……。

「最終的には心が折れて、退学しようと思ったんや。

でも退学する前にせつかくやから一回ぐらいは短距離走ってみるか、とも思った。

結局はその下心が今の私につながったわけやからやるだけやってみるもんや……人生分かんないで」

「ま、長々と語ったけど言いたいのは「練習しても成果が出ん状態が死ぬほど辛いのを体験したことがあるから、ノールにはそんな目に合ってほしくないと思った」って事や。

せやからノールへの助言を露骨に邪魔されたとき、ムキになってもうたんや……ほんまにすまんかった」

全部を話し終え、再度謝罪を述べる。

「……そういう事情ならお前のあの態度にも合点がいった。若いのに苦勞してんだな……」

ノールのトレーナーはしみじみとそうつぶやく。

「ちよつと湿っぽい話やったけど、わざわざ聞いてくれてありがとうな。おかげで少しは気が晴れたわ」

胸に刺さっていたトゲが取れたような感覚。数年越しにようやく解放されたような気がした。

「どういたしまして。俺はただ話を聞いてただけだが……」

「それでええんや。たぶん言葉にするのが大事やったんやと思う」

「そんなもんか？」

「そんなもんや」

会話に一区切りつき、視線をコースにやった。反対側でノールとナイトが走っているのが見える。

その時、ふと頭をよぎった考えをトレーナーに聞いてみる。

「……なあ、ノールはこのままの調子で練習して、レースで勝てると思うか？」

「勝負は水物だ。勝てるとは断言できねえが……勝ちを狙えるレベルには到達できるだろ」

「……ウチはそうは思えんのか」

「……ノールは勝てないって言いたいのか？」

頭を縦に振った。

「これはウチの勝手な考えやけどな……人やウマ娘にはそれぞれ才能で到達できるレベルが決まってて、自分より才能のある奴には絶対勝てんのやないかって思うんや」

「……それは昔の経験に基づく考えか？」

「せやで。だってどれだけ練習してもウチは1200mより長い距離走ると、必ず足が動かなくなってたんや。」

けどその一方で1200m以下のレースなら敵無し……そりや才能信者にもなつてまうで」

40kmマラソン、遠泳、3000m走……持久力を鍛える練習は数え切れない程したが、本気で走ると1200m超えたあたりから急に脚が効かなくなる。

そんなバカみたいな経験をしたのだから、こんな偏った考え方をしてしまうのもしようがないと思う。

「それでノールはお世辞にも才能溢れるウマ娘やない。」

ウチの所見やとトレセン学園の中ではせいぜい中の上って所やな。

……ノールがいくら頑張ったとしても、ノール以上の才能を持つ奴も頑張つとる。同じ頑張つとるもの同士やったら才能がある方が勝つとは思わんか？」

「……」

ウチの問いかけに、ノールのトレーナーはしばし考え込む。そしてゆっくり口を開いた。

「……まあ、確かにそうかもしれないな。特にレースなんてのは駆け引きもあるが、ほとんどは単純な脚力がものをいう世界だ。才能がある奴が有利だろうよ」

「……やつぱりそうかいな」

帰ってきたのは予想通り、しかし期待外れの答えだった。

結局ウチがマイル以上の距離を走れんのも才能のせいやった、ちゆうこつちゃ……。

心のどこかでは才能を否定して欲しかった。必死に努力した私をあざ笑うように切って捨てた「脚質」という才能を否定して欲しかった。

少し落胆する。しかしノールのトレーナーは続きを話した。

「だが有利ってだけだ。努力で覆せる余地はあるんじゃないかねえか？ 才能ある奴が1を頑張る間に、ノールは2でも3でも頑張れば良い……俺はそう思う」

「……けどウチはどれだけ頑張っても1200m以上は走れんかったんやで？ その事についてはどう思うんや。これこそ才能が全てであることの証明にならんか？」

「それは才能に左右される部分がとんでもなく大きかったただけだ。練習したと言っていたが、わずかでも成長を感じなかったのか？」

「そりゃ少しは成長してたけど……」

一応1000mぐらいなら走れる距離が伸びたっけか……。

「ならそういう事なんじゃねえか？」

「……かもなあ」

「ノールの場合がどうなのかは新人の俺にはわからねえ。

けどノールは今必死で頑張ってる。

ならそれを手助けするのがトレーナーの役割……2、3どころか10でも100でも努力させてやるさ。

……あ、もちろん無理のない範囲でだぞ！俺が言いたいのは質を高めるって意味でだな……」

「あー、そんなくらいは分かるから詳しく説明せんでもええって」

「……といふかなんで笑ってんだ、お前？」

「え？」

ノールのトレーナーに指摘され、自分の顔に意識を向けると、口角が上がっているのが分かる。

「あー……何でもあらへん。ちゆうか長居しすぎたわ。ウチはそろそろ練習に戻るな」

「そうか？ じゃあな、練習頑張れよ」

手を軽く挙げて返事をしながら、その場を離れた。自分のトレーナーのもとに戻る最

中、思う。

才能の比重が大きいだけ、か。

……少しだけ距離伸ばしてマイルに挑戦してみよかな……。

惰性と偏見で短距離を走り続けていたウチは、そう決意した。

## 七話 敗北の辛気

「お……おお？」

トレーナーさんと出会ってから一か月以上が経った今日この頃。

お風呂上りにふと姿を見をみると前とは違う私の姿が映っていました。

ふくらはぎは一回り大きくなり、太ももの内側の筋肉……内転筋も成長しています。それにおなかも薄っすらと割れてます。

「ほ、本当に私？ これ？」

ペタペタと自分の体を触ると、鏡の中の私も自分の体を触ります。

こんなに筋肉ついてたんだ……。

「……ふへ」

今の私にとって、肥大した筋肉は数週間分の努力の結晶に思えました。

「鏡の前でニヤニヤして…何してるの？」

「ニヤーツ!!」

急に後ろから声を掛けられ、奇声を上げて驚きます。

「な、なな、ナイト!? ど、どったの？」



「次は私が風呂に入る番なのに、ノールが全然出てこないから様子を見に来た」  
「そ、そっか……／＼／＼」

鏡で自分の姿を見ながらだらしなく笑っている所を見られてしまいました。どんな顔に血が集まって来るのを感じます。

このままでは汗をかいて、もう一度お風呂に入りなおさなければいけなくなりそうです。

「……ノール、体、引き締まった？」

幸いにもナイトが別の話題を振ってくれたので、恥ずかしさからは解放されました。

「ナイトにもそう見える？　いつの間にか結構筋肉ついてたんだよね」

「うん……特にふくらはぎが目覚ましい。腓腹筋がすごく大きくなってる。」

目立たないけど腓腹筋下にあるヒラメ筋の増大も見逃せない。

ふくらはぎ周りが膨れたおかげで、より足首の細さが際立ってるし、下半身がしっかりと安定な印象を受ける。

総合的に見て非常に美しいと言わざるを得ない」

「そ、そう……／＼／＼？」

ナイトは私の足を触りながらそう褒めてくれました。彼女は読者モデルをやっているの、こういう肉体美にはこだわりがあるのでしょうか。

そんなナイトの目からもそう見えるということとは間違はなく筋肉がついたのでしょう。再び口角が上がってきます。

「これなら、ジェット走法も習得できちゃうかもなあ……」

課題だった腹筋もそこそこついてきたし、明日あたりからもつと前傾姿勢で走ってみよつと……。

「……ふへへ……」

「またニヤニヤしてる……脱衣所から出ていけないならもう横で着替えるから」

再びニヤける私の横で服を脱ぎ始めるナイト。ちらりとナイトの方に視線を向けると、彼女のしなやかな体が目に入ってきます。

私より一回り以上大きな背筋と胸筋。あれほどの上半身なら腕の振りも速く力強く行え、脚の回転力アップに加えて、前への推進力にもつながるでしょう。

そんな上半身に対して、下半身は平凡な肉付きです。

いえ、綺麗な事は綺麗なのですが、力強い走りが出来るようには見えません。

上がたくましくすぎて、ともすれば貧弱にも見えてしまいます。

やっぱりまだ本調子じゃないのかな……。

お風呂場に入っていくナイトを尻目に、脱衣所を出ました。

翌日

場所はトレセン学園。昼休憩も終わり、午後の授業が始まる所です。

今日の午後の時間割は、まるまるトレーニングの時間に充てても良いことになっています。

なので担当トレーナーの元に行くために教室を出ていくウマ娘達もいれば、教官に教わるために教室に残るウマ娘もいます。

私もトレーナーさんの元に向かうために教室を出ていこうとします。その時背中に視線を感じました。

振り向くと、目つきの鋭い一人のウマ娘が私のことを睨んでいます。

私を睨んでいる彼女の名前は「ジェミニシード」。

左耳にローマ数字のIIを模した耳飾りを付け、腰まである長い葦毛の髪を後ろで編み込み、肩ぐらいにまで短くしています。

目の掘りが深く、見方によっては目の下に隈が出来ているかのように見えてしまいます。

それに加えて目が細いので、無表情でも誰かを睨んでいるみたい、とクラスの誰かに良く言われていました。

しかし、今の彼女は睨んでいるみたい、ではなく明らかに敵意を持って私を睨んでいます。

「……」

ジェミニは無言ですが、あまりの目力に舌打ちの幻聴が聞こえてきそうな程です。

「……」

ガラッ……

対する私も無言のまま、ジェミニに背中を向けて教室から出ました。

彼女に睨まれるのはこれが初めてではありません。初めて睨まれたのは私がトレーナーさんに担当してもらった頃。

私とジェミニ、以前は同じ教官から指導を受けていました。走る距離が同じなことも相まって、一緒に併走練習をすることも多かったのです。

仲が良いという程ではなかったと思いますが、特別悪かったわけでもありません。

そんな関係だったジェミニが私を睨んでくるようになった理由はおそらく一つ。

私がトレーナーの担当になったのが気に食わないのでしょうか。

それもそのはず。私よりジェミニの方が速いのですから。実力を考えれば担当

されるのに相応しいのはジェミニの方。

そこを巡り合わせのおかげで私の方が先にトレーナーに担当してもらった……ジェミニが私のことを良く思わないのはしょうがないことだと思います。

……それでも、あの目で睨まれるのは慣れないなあ……。

蛇に睨まれる蛙の気持ちが良いわかりませぬ。

「うう……とはいえ、睨まれたからって担当を止めてもらうつもりもないけど……」

トレーナーさんは私が勝つ手伝いをしてくれます。その存在を多少の気まずさで手放すことなど論外です。

それに最近ではトレーナーさんに対して恩返しをしたいとも思うようになりました。

私がレースで勝てばトレーナーさんに箔をつけることが出来ます。

……まあ、G I I I のレースなのでそこまでインパクトのあるものにはなりません……一応トレーナーさんに実績が出来れば、彼の目的も達成しやすくなるはずですよ。

そんなことを考えながら、グラウンドに向かいました。

トレーナーさんと合流した後、一通りの基礎練習を終え、併走練習の時間になりました。

今日は相手が決まってるので、誰かを誘うところから始めなければいけません。

コースの周りにいる人達を片っ端から誘ってみたのですが、誰も領いてはくれません。

それぞれに予定があるのは分かりますが、それにしてもヒット率が悪いです。

「どうする？ 今日併走を止めてフォーム練習するか？」

「そうですね……」

相手が見つからなければ併走はできません。

相手探しでこのまま無駄に時間を消費するぐらいなら、ジェット走法の練習に時間を割きたいな……腹筋もついできたばかりだし……。

「じゃあ、今日はもう切り上げて……」

体育館に行きましょう。そう言おうとした時、

「相手がいないなら俺が併走してやろうか？」

後ろからそう話しかけられました。

「っ！ ジェミニ……」

「よう、ノール」

振り向くと、そこにいたのは教室で私を睨んでいたジエミニでした。その顔には不敵な笑みを浮かべています。

「二人は知り合いか？　なら話は早い。さっそく併走するか？」

「え」

「なんだ？　併走よりフォームチェックの方を優先したいのか？」

「そ、そういうわけではないんですが……」

今、ジエミニと併走するのはものすごく気まずいです。しかし強く否定する理由もないので、しどろもどろしていると、

「いいだろノール、一本ぐらい。3分もかからねえしよ」

やや馴れ馴れしい様子でジエミニがそう言いよってきました。

ジエミニは身長が170cmほどあるので、近くに寄られると圧迫感を感じてしまいます。

「……わかった。併走しよう」

少し気遅れしましたが、併走相手が見つかったのならやらない理由はありません。併走も大切なトレーニングです。

「オッケー」

私がそう言うと、ジエミニは満足そうに頷きました。

二人並んでスタートラインに立ちます。

「なんだ、ちやつかり内側取りやがって。いきなり吹っ掛けられた勝負にしては勝つ気満々だな」

「……え、勝負？」

ジェミニの台詞に引っ掛かる点があつたので思わず聞き返してしまいました。

「……お前、俺がわざわざお前と併走するためにここに来たと思つてんのか？」

「そ、そういう話じゃなかつたつけ？」

「勘が悪いな……」

俺は、今日、お前と、勝負しに、ここに来たんだよ」

「な、なんでそんなことを……」

そう返しますが、理由は何となく分かつていました。

「お前が気に食わねえからだ」

ジェミニは今まで薄ら笑いを浮かべていた顔を一瞬で無表情に染め、低いトーンでそう言いました。

「どういう縁があつたのかは知らねえが……俺より遅いお前がトレーナーに担当してもらっているのが心底気に食わねえ。」

だからこうして併走にかこつけてお前に勝負を吹っ掛けてんだよ」



むき出しの敵意をぶつけられて、身がすくみました。

……いけないこのままだと、走りに影響が出る。

その場で肩を回したり、もも上げをすることで、固まってしまった体を何とかほぐします。

「それに模擬レースの前哨戦にもなるしな」

「も、模擬レース？」

「あ……？ まさかお前知らねえのか？」

怖い顔つきから一転、呆れたような表情に。

「はあ……今月末にお前と俺を含む10人で模擬レースをやんだよ。

なんで本人が知らねえんだ……？」

「え、ええ……？」

模擬レースの開催・参加はウマ娘の一存ではできません。

トレーナーや教官達の協議の結果、模擬レース日程、組み合わせが決まります。なので私が模擬レースに参加するのならトレーナーさんからなにか連絡があるはずなのですが……。

「と、トレーナーさん！ 私、今月末に模擬レース出るんですか!？」

「ああ、そうだぞ。今日の練習終わりにでも言おうと思ってたんだが……そっちの娘か

ら聞いたのか」

何という間の悪さ。

「だ、そうだ。これで分かっただろ。

この併走は模擬レースの前哨戦でもあるんだよ。俺はこの併走でも模擬レースでもお前に勝つ。

完膚なきまでにな」

そう言つてジエミニは静かに首を親指で掻き切る仕草をしました。

それ、実際にやる人いるんだ……。

プロレスぐらいでしか見たことのないパフォーマンス。ジエミニは威嚇のつもりだったのかもしれませんが、逆に私は落ち着きを取り戻しました。

「……分かった。やるからには本気でやるよ。

だからジエミニも本気で来てね」

ジエミニが私と勝負をしに来た。

そう聞いて初めは戸惑いましたが、良く考えれば好都合です。

昔はジエミニの方が速かったけれど、今ここでジエミニに勝てたのならば、私は確実に成長していると言えるでしょう。

タイム上の成長だけではなく、今まで勝てなかった相手に勝つたという実感を手に入

れる為にも、今までの努力を無駄にしないためにも、私は勝ちます。

「言われなくても」

掛け合いはそれぐらいに、二人とも構えました。

「トレーナーさん、合図を」

かなりぶつきらぼうな声が出ました。しかし今はそんな事には気が回りません。

「あ、ああ」

トレーナーさんが旗を上げます。

「位置について……初め！」

掛け声と同時に私とジエミニがスタートを切りました。

(sideトレーナー)

「おいおい、どうなってるんだよこりや……」

始まるのは併走練習だったはず。

なのに俺がスタートの合図をかけた途端、二人とも全開ですつ飛んでいきやがった。

「これじゃ併走というよりは二人立ての模擬レースだな……」

二人の間で何か因縁でもあったのか、それともスタートラインでノールが併走相手に何か吹き込まれたのか……。

「ま、いいか。これはこれで良い練習になる」

……とはいえ後で事情は聞いておくか。またノールの寝不足の種になってもいけねえし。

そんなことを考えている間にも、二人は最終コーナーに差し掛かっていた。

「ハッ、ハッ……ハッ、ハッ……！」

不味い。遅れてる。

ちらりと内側の柵を見ます。

残り600m……。

目線を前に向けます。私の斜め前に位置取るジエミニ。

内側だったのに遅れてる……っ！

有利なスタート位置だったのに前を走られている。

その事に焦りを隠せませんでした。

このままじゃ負ける。自分のペースでスパートなんて言ってられない。ジエミニよりに先に仕掛けないと……!。

残り500m。スパートタイミングを図るために彼女の挙動に意識を集中させます。

「フツ……フツ……!」

芝を蹴る音、私の呼吸音、心音が混ざってうるさいはずなのに、ジエミニの息遣いが聞こえてきます。

良い……集中できてる。

「フツ……フツ……スウ……」

……(ハッ!)

ジエミニがひときわ深く息を吸った所で、最終コーナーの遠心力を生かして外からスパートをかけます。

私は今までの併走練習で、ウマ娘がスパートをかける時の一般的な癖をつかんでいました。

一つは後方確認、もう一つは呼吸の変化。ジエミニは後者でした。

「っ!」

ジエミニを抜かすと横から息を飲む音が。私が先行しながら最終直線を駆けていき

ます。残り200m。

「ハッ、ハッ……ハッ、ハッ……！」

早仕掛けでジェミニの前に出たものの、早めのスパートかつ、他人のタイミングで仕掛けたせいでかなり息が上がってしまっています。

脚も……重い……っ！

重りがついているかのような両脚。

それでも足が下がらないように気を付けながら、必死で走ります。

「フッ……フッ……フッ……フッ……！」

斜め後ろから私とは異なる呼吸音が。

くっ……！！

徐々に、徐々に近づいてくる「庄」。

どれだけ迫ってきているのかを目視で確認したかつてのですが、首を動かした時のわずかな失速すら命取りになるような気がしました。

振り向けない私は追ってくる脅威を肌で感じながら走り続けます。残り100m。

「ハッ、ハッ……ハッ、ハッ……！」

ふくらはぎがもうすぐ限界を迎えそうです。パンパンに張った筋肉が攣らないように祈りながら走り続けます。

その時、私の視界の端を横切る影が。

影はすぐに大きくなり、私の視界の三分の一ほどを占めるようになりました。

抜かされた。

それを意識した瞬間、レースは終わりを迎えました。

「ハアツ……ハアツ……！」

負けた。負けた……。負け……。

2000mを全力で走り、体温は上がり切っていました。

顔に熱が溜まって、溜まって、熱くてしよようがありません。炎症を起こしそうな程です。

額や頬からあふれる汗も肌にまとわりついて鬱陶しく感じられます。短い袖で乱暴に汗を拭きました。

顔の汗は何か出来たものの、体の汗は別です。

全身の汗が肌を伝うたびに、体をかきむしりたい衝動に駆られました。

……久しぶりだな……この感覚。

僅差で負けた後はいつも最悪な気分になります。どんな事すら気分の悪いものに感じられてしまうのです。

服や汗の感触、体温、心音、呼吸音でさえ。

逆に勝てば、すべての事象が私を祝福しているように思えたはずです。

体の倦怠感も、脚の疲労も、酸素の欠乏も。すべて心地よく感じられた記憶がありません。

……最近勝っていないので、とんとその感覚を味わってはいませんが……。

あれ、でもG I I Iのレースで負けたときは何とも思わなかったつけ……。

きつとあの時は先頭と差がつきすぎたからです。

もう少しで勝てた、僅差で負けて悔しい、そんな感情より、やっぱり勝てなかったか、という諦観や諦めが優先していたのでしょうか。

けど今回は僅差の負け。それも最後の最後に追い抜かされるという、一番悔しい負け方をしました。

「……っ！」

つい、手を強く握ってしまいました。爪が手のひらに食い込み、ジンジンと痛みます。

今はその痛みも特別鬱陶しく感じられました。



「……………っ！」

手のひらの痛みに腹が立ち、衝動的に頭を掻きむしってしまいました。

「すー……………ふーっ……………すー……………ふー……………」

このままだと自傷して、それに腹を立てて、また自傷する負のループに陥りそうだったので、深呼吸で何とか落ち着きを取り戻しました。

「おい」

感情の起伏にひと段落がついたその時、ジエミニに声を掛けられました。

「な、何？」

負けた私を煽りにでもきたのでしうか。

正直今の精神状態ではどんな煽りでもダメージを貰いそうだったので、つい身構えてしまいました。

「……………蹄鉄、外れたぞ」

ジエミニはそう言い、手に持った蹄鉄を私に差し出してきます。

「えっ？……………あ、ほんとだ……………」

慌てて靴の裏を見ると、右足の蹄鉄が外れていました。

蹄鉄は結構な重さがあるので外れれば通常気づくはずですが、ついさつきまでブルーな気分浸っていた私は、その変化に気づけなかったようです。

一応説明すると、蹄鉄とは靴底に打ち込む金属製の補助具で、これがあることで足の負担の軽減できる他、地面を踏みしめやすくなります。

「あ、ありがと……」

おずおずとジェミニの手から蹄鉄を受け取り、ポケットにしまいます。

「……」

その間、ジェミニは私の方を鋭い目つきで凝視していました。

「……ちっ」

そして最後に舌打ちを残して、去っていきました。

………な、なんで勝ったのにあんなに機嫌が悪いんだろう……。

「負けちまったな」

ジェミニの心情を図りかねていると、今度はトレーナーさんに声を掛けられました。

「……はい」

「どうして負けたと思う？」

「それは……」

負けの原因を探るために、目を閉じてレースの内容を思い出します。

そうすると私がジェミニに追い抜かれた場面も思い出してしまうわけで……

「……」か月の練習の成果を出し切ったんですけど……それでも負けました。

だから単純に実力不足だったんだと思います。

……しいて言うなら、もう少しスタミナがあれば最後の直線で抜かされなかったはず  
です……！」

負けのシーンを回想していると、また無意識に手を強く握ってしまいます。

「つつ……！」

その瞬間、爪が肉を割く嫌な感覚と共に鋭い痛みが。

「おい、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です。ちよつと手が……」

「手？」

自分の両手を確認すると、案の定皮膚が切れていました。

傷跡から血が溢れ、球を作ったのもつかの間、自重に耐え切れず、私の手のひらを流  
れていきます。

「傷は……深くないようだが、どうやったらこんな傷出来るんだ？」

「さつき手を強く握りすぎてしまつて……」

「それだけで傷が……ウマ娘の筋力ゆえか……？ いや、今はそんなこと考察してる場  
合じゃないな。」

「さつきと保健室行くぞ」

トレーナーさんは私の手を引いて、保健室に向かおうとしましたが、私は踏ん張りその場にとどまります。

「こ、これぐらい水で洗えば大丈夫です。」

「脚の怪我じゃありませんし、練習を続けましょう」

今は手当ての時間すら惜しく感じられました。最後の直線、もし私がジェット走法を習得できていたら、もつとスタミナがあれば。

きつと……きつと負けなかった。

だからもつと練習を頑張らないと。

「つつても痛いだろ？ それに化膿しても後々めんどうくさい。さつさと保健室行くぞ」

「ほ、本当に大丈夫ですから。体育館に行ってジェット走法の練習をしましょう！」

なおも私の手を引くトレーナーさん。私はそれに抵抗します。

「くっ……いや、止めとくか。」

このまま引つ張り合いをしても俺が負けるだけだ……」

この体格差で力負けとはな……。

そう呟きながらトレーナーさんは手を放しました。

「代わりに話し合いといこう。ジェミニ……だったか？ あいつとは何か因縁でもある

のか？」

「な、なぜそう思ったんです？」

「そりや、因縁でもなければあんなガチの勝負はしないだろ……それともあいつに何か吹き込まれたか？」

「ど、どっちもですね……因縁もありますし、挑発もされました」

かくかくしかじか。諸々のことをトレーナーさんに話しました。

「……担当がらみの因縁、か。難しいな……」

トレーナーさんは顎に手を当てて思案する仕草をします。

「……ノールは大丈夫か？」

「え、な、なにがですか？」

「後ろめたさとかを感じてないか？」

「……」

後ろめたさ……。

「……正直、後ろめたさがあります。」

実力的に劣る私がトレーナーさんに担当して貰っているのは少し……」

「……」

「でも今はそんなことを気にする余裕はありません。」

「負けた私のもっと頑張るしかないから……トレーナーさんでもなんでも使えるものは使います」

今日は勝ちと負けの価値を再認識できました。

勝ちが最高、負けは最低。

勝つためには後ろめたさとかそんなものを気にしている暇はないのです。

「……あー、そ、その、さつき発言は不適切でした。すみません！」

少し感情的になってしまったとはいえ、トレーナーさんを「使う」と言ったのは流石に不味い表現でした。

急いで謝ります。

「……いや、良しさ。お前自身が勝つために使えるものは使え。

たとえそれが俺だったとしてもな。というかそれぐらいの意気込みじゃなきゃ勝てんぞ」

しかしトレーナーさんは特に怒った様子も見せず、というか笑みを浮かべながらそう言います。

「は、はい……」

そんなトレーナーさんの様子に、返事がそぞろになってしまったのかもしれないでしょう。

「それより手の怪我についてだが……どうして自傷するほど手を握ったんだ？」

「それは……単純に悔しかったからです。ジエミニにゴール手前で抜かされて……っ！」

「お、おいおいおい！ また手を握ろうとするんじゃないやねえよ！」

「あ……す、すいません」

再び閉じかけていた手から力を抜きました。

「つたく、油断も隙もありやしねえ……」。

「つっても意外だな、お前がそんなに直情的だったとは」

「すみません……もつと感情をコントロールできないといけませんよ」

私が自傷していなければこうして練習が中断することもなかったはずですし。

「ま、限度はあるが……悔しいと思うのは悪い事じゃないさ。」

そういう負の感情は強いモチベーションになる。今だって怪我の事を放置してでも練習したがつてただろ？」

「はい」

「焦る気持ちは分かるが、手の痛みがある中じゃあ練習に集中できない。だから手当をちゃんと受けてくれ」

「……」

焦り……か。

確かに私はジエミニに負けて焦っていたのかもしれませんが。手の傷も無視して練習に励もうとするぐらいには。

手のひらに視線を落とすと、まだ血は止まっています。

頭の上った血が傷口から流れていく感じがしました。

「……わがままを言つてすみませんでした。ちゃんと手当を受けます」

「分かつてくれたか……じゃあ、保健室に行くぞ」

「はい」

今度こそ保健室に向かいました。

(side ジエミニシード)

「……………くっ!」

あの時ノールが落とした蹄鉄は鉄製の重い奴だった。それ自体は不自然な事じゃない。



練習用の蹄鉄は頑丈な鉄製の奴を用いるのが普通だ。

問題なのは俺が使っていた蹄鉄がレース用の軽いアルミ合金製の奴だったって事。

当然、軽い蹄鉄の方が有利なのは言うまでもない。

昨日タイム測定した後、鉄製の奴に変えるのを忘れたままだったから、今日はアルミ製の蹄鉄で走ったが……もし鉄製の蹄鉄で走っていたら？

……最終直線であいつを抜かせなかったかもしれない。

「……くそっつ!!」

ガッ!

近くにある柱を殴打する。

……何が完膚なきまでに勝つ……だ。

結果は辛勝じゃねえか。それも有利な条件で……。

実際はノールの方が内側スタートだったから、条件としてはどっこいどっこいぐらいか。

しかし今の俺はそんなことには気が回らなかった。

「……見てろ。次は文句なく勝つ。」

圧勝……そう、圧勝だ……!」

ノールと自分の差が詰まってきた焦りを隠すようにそう呟いた。

## 八話 勝ちたがり

ジエミニとの勝負から2週間ほどが経ちました。

あれ以来ジエミニは私に絡んでは来ませんでした。教室でたまに視線を感じるぐらいです。

2週間の間私は、特にジェット走法の習得に重きをおいて練習をしてきました。

というのも筋トレや基礎練習だけでは足りない……何か抜本的な走りの改革をしないとジエミニには勝てないような気がしたからです。

私は照る日も降る日も曇る日もピットに飛び込み続けました。

その結果、完璧とは言えないまでもジェット走法をモノにすることが出来たのです。そして今日、ピットではなく芝の上で実走します。

「体勢を戻すときは徐々に歩幅を大きくして、ゆっくり体を起こすんですよ。ええか？」

「はい」

「それと体育館の床と芝じゃ勝手が違う。そこも十分気をつけや。しっかり土を踏みしめるんですよ」

「は、はい」

「それと……」

「す、スパさん！ もう注意事項は大丈夫ですから！」

これでスパさんの注意事項は三回目です。

わざわざ私の実走を見に来てくれたのはありがたいですが、このままだと耳にタコができてしまいます。

「ほんまか？ ちゃんと頭に入ったか？」

「え、ええ、それはもうしつかりと！」

「そうか……ほんなら後は頑張つてきいや」

スパさんに背中を押され、スタートラインに向かいます。

「ノール！」

その途中スパさんに呼ばれたので、振り向きます。

「度胸やで！」

スパさんは胸を拳で叩きながらそう言います。

私は軽く手を挙げてそれに答えました。

度胸が大事……。

初めにスパさんから指導を受けた時もそんなことを言われました。

あの時はよく意味が分かりませんでした、今ならわかります。

スタートラインに立つと、硬い土の上に生えた芝がずっと続いているのが目に入ってきました。

いつもは200mも先にスポンジの海が見えるのに。

ここで走るのか……

ドクン……ドクン、ドクン……

さつきから胸の鼓動がどんどん大きくなっています。

手のひらの汗を体操服の裾で拭きました。

「すー……ふー……っ！」

大きな深呼吸を一つ。

それから地面を蹴りました。

一気にトップスピードまで加速。その勢いのまま体を前傾させようとします。

その瞬間、体育館の床に衝突しそうなったシーンがフラッシュバックしました。

床の木目が嫌に大きく見えたあの場面。

「っ！」

ぶわり、と額に汗がにじみ出ます。

次いでジェミニに負けたシーンがフラッシュバックしました。

「……っ！」

ギリギリ、と奥歯を噛みしめ、固まった体を無理やり前傾させました。そしてそのまま歩幅を縮小、足の指で地面を掴み、後ろに蹴とばします。

その瞬間、トップスピードから更に加速。

自分の限界速度を超えるこの感覚は何度味わっても心地良いです。

そして前傾の代償として、地面が近づいてきます。手を伸ばせば芝に触れられそうな程。

しかし、それ以上は近づいてきませんでした。

そのまま超前傾姿勢と狭い歩幅を維持したまま走り続けます。

なんだ……私、出来るじゃん……。

そりやそうだよ、だってピットでもできたんだから。

実走前は最悪の場合をイメージしてしまい、とても緊張していましたが、蓋を開けてみれば意外と簡単でした。

場所が変わっただけで、元々出来ていたことをやるだけですからそれもそのはずです。

それにしてもすごいや……私、こんなに速く走れちゃってる……。

視界が低いため、実際の速度より速く感じられます。

とてつもない体感速度の中で万能感を抱きながら、風を切って走ります。

いける……これなら勝てる！

自然と頬が緩みます。高揚した精神のまま、もうしばらくジェット機のようにすつ飛び続けました。

(sideスーパージャージャー)

「お、きちんと走れてるやん」

「だな。少し心配だったが全然問題なかったか……」

柵の内側でノールのトレーナーと一緒に頷く。

「それにしても一発で成功させるか……流石に肝が据わつるといふか、おそるべき執念というか……」

「……なあ、一つ聞いても良いか？」

「ん？ なんや？」

「前にジェット走法はノールに向いてるだとか、度胸が大事だとか言ってたが……詳しく教えてくれないか？ 考えたが良く分からなかった」

「ん〜……そうやな、まずは度胸の方から話そか」

ノールのトレーナーの疑問に一つ一つ答えていく。

「ウチのジェット走法は超前傾姿勢かつ、歩幅が狭いせいでもかなり不安定な走法や。」

しかも視界が地面に近いおまけ付き。

顔から地面にダイブするかもしれんからかなり怖い走法つてのはあんたも分かるや

ろ？」

「ああ。実際にノールもそうなりかけたしな……だがその恐怖心はピット練習で克服出来るんじゃないのか？」

「そこや。確かにピットで走ってたら恐怖心は克服できる。」

でもな、それはあくまでピットで走る時の恐怖心を克服してるだけなんや。

ピットというエスケープゾーンがある場合と、バランス崩したら終わりの芝の上じゃ

プレッシャーが全然違うで」

「なるほど……」

実際にウチも芝の上で走れるようになるまで追加で1週間かかってもうたし。

「そういうわけやから、ジェット走法には度胸が大事なんや」

「そこまでは分かったが……ノールに向いてるつてのはどういうことだ？」

「……まで言ったら分からんか？」

ジエツト走法には度胸が大事……つてことはノールは度胸があるからジエツト走法向きつて事や。

……ちゆうても正確には度胸というより……資質か？」

「……もつとはつきり言ってくれねえか？」

少し回りくどい言い方になったため、ノールのトレーナーにそう聞き返された。

「すまんすまん……。言いたかったのはノールは極度の勝ちたがり、せやからレースで勝つため、速くなるためなら恐怖も痛みも我慢できる娘、つてことや」

「勝ちたがり……。ねえ」

ノールのトレーナーは指で顎をさすっている。

「なんやピンと来てない様子やけど……。ノールはガチャやで!!」

……昔、暇な時にノール捕まえてオセロに付き合ってもらった事があった。

そんな時は予想外にノールが弱くて、圧勝するのも大人気ないと思つたからそこそこ接戦を演じてウチの勝ちで終わらせたんや」

「けんどその三日後にノールからオセロを挑んできた。

多分その間に勉強してきたのかそこそこには強くなつてたけど、まだウチの方が強かつた。

「そこでもウチが勝つた」



「そこからは三日おきにオセロに付き合わされたんや。多分勝つまでウチに挑戦するつもりやったんやろうな。

カバンの中には教科書に混ざってオセロの本がいつも入ってたし、昼飯誘いにノールのクラスに行ったら、席も立たずにマグネット盤でオセロの研究してたし、ナイト……ノールの同室相手に聞いた所、休日は寝食も忘れてずっとオセロと向き合ってたって話や……」

あん時はウチのせいでノールが変になってしまったかと焦ってたなあ……

「その話、単にノールがオセロに興味を持ったってだけじゃないのか？」

「それは明確に否定させてもらうで。

だってノールはウチに勝ったすぐ後から一切オセロをやらんようになったからな。

多分やけどあの娘はオセロをただの対戦ツールとしか捉えてなかったんやないか

……？」

あれ以来、たとえ遊びであっても対戦型のゲームには誘わない様になっている。

「オセロ、ねえ……」

「……あ、その顔、たかがオセロって顔やな。言っとくけどなあ、あの時のノールはほんまに怖かったんやで！

「まさか、勝ち逃げしませんよね？」みたいな表情でオセロ盤持ってくるし……」

わざと負けようかとも思ったぐらいやで……」

けどわざと負けたら、それこそどんな目に合うか分からなかったから、せんかったけど……

「それにもつとやばいエピソードもあるで！」

あれは確かファン感謝祭の時。そんな時は体育祭みたいな催し物やってて、クラス対抗でいろいろ競技やってたんや。

んで、ウチは保健委員任されてたから、救護テントから競技の成り行きを見てた」

「ほんで問題のシーンは綱引きやってた時やな。」

ノールが出とつたから、じーつと見てたら、途中からノールの顔が険しくなったんよ。

その瞬間は疲労が顔に出ただけかなーっと思ってたんやけど、いざ決着が着くとノールが救護テントの方に来たんよ」

「どないした？」って聞いたたら、ノールが「手の皮剥けてしまつて……」って言うんや。

ああ、やから綱引きの途中で険しい顔したんやなーって、のんきの事考えながら「そうかあ、ほな見してみい」って軽い気持ちで言うたら、見せられてびっくり！

想像の百倍怪我がひどかつたんやで！」

「手のひらのでっぱりというでっぱり部分はほとんど皮剥けとつたし、広範囲の皮が綱引きの途中に剥けたもんやから、皮が巻き込まれてズタズタ……」。

あ！ 剥けたっちゆうても薄皮やないで！ 肉が見えるぐらいまでズツパリとや！」  
「肉が露出した状態で綱引きなんかやってもうてたんやから、相当痛かったはずやで。  
しかも綱は古いやつやったから、ほつれが肉に食い込んで……って、思い出したこっ  
ちの手が痛うなってきたわ……」

怪我を詳細に思い出し、自分の手の皮まで剥けてしまったような感じがする。その嫌  
な感覚を手を振ることで誤魔化した。

「……とにかく、ノールはそんな状態でも綱引きを途中で止めんかった。

本人に「なんで中断せんかったんや!？」って聞いても、「もう少しで勝てそうだったの  
で……」って言う始末」

「そんな娘が転倒のリスクにビビると思うか？ いや、ビビらへん！」

勝つため、速くなるためやったらあの娘何でもやるんやないか……?」

ウチにそう思うくらいにはあの時の衝撃は大きかった。

「……そういえば併走で負けた時も爪が皮膚を突き破るぐらい手を握りしめてたっけか  
……」

「そうやろ！ そんぐらいはする娘なんやって、ノールは！」

トレセン学園に居る奴はたいていが負けず嫌いやけど、あそこまで極端な例はノールが初めてだ。

「……まあ、そういうわけやからノールはジェット走法向きって言ったんや」

ウチのチームメイトにもジェット走法を教えただけれど、全員芝の実走段階で躓いていた。

それぐらいには怖いはずなのだが、一発目で成功させるのは流石という他ない。

「それにあの娘が無茶せんか気い付けとった方がええで。」

「気持ちが先行しすぎてオーバーワークもしとったらしいし」

「……そうだな、改めて気を付けておくか」

「トレーナーさん！」

「そうこう話している内に張本人が帰ってきた。」

「見ててくれましたか！ 私、ちゃんと走れてましたよね!？」

「あ、ああ……端から見てもきちんと走れていたぞ。これならレースでも使えそうだな」

「ですよねですよね！ 良かったあ……模擬レースに間に合って……。」

「これなら私、勝てますよね!？」

「そうだな。練習の成果を発揮すればきつと勝てるさ」

「そうですね！ ……あ、スパさんも見ててくれましたか!？」

どうでしたか？ 私の走り！」

ノールはジェット走法を完成させて興奮しているのか、いつになくハイテンションでウチに迫ってくる。

「よ、良かったで、基本的なところはちゃんと出来た。

後は実際のレースやとラストスパートでジェット走法に切り替えるわけやから、自分がどれくらいの距離スパート掛けれるのかをきちんと知っておく必要がある。

そこだけ気い付けや」

「はい！ ……私がここまでこれたのもスパさんのおかげです！

本当にありがとうございました！」

「礼なんかせんでもええって。

この結果はノールが頑張ったからや、ウチの功績はほんの少しや」

「そんなことないですよ！ スパさんの指導が無ければ習得できるかも怪しかったですから……」

「まあそこまで言うなら素直に受け取つとこうか。どういたしまして……」

こうして改めてお礼を言われると若干照れる。

頬を人差し指で掻いた。

ここまで嬉しそうにしてくれると、こっちまで嬉しくなってくるなあ……。

指導した甲斐があったってもんやで……。

「私は感覚を忘れない内にもう一回走ってきます！ それじゃ！」

ノールはそう言ってもう一度コースの方に向かっていった。

「ああしてる分には無邪気でええ娘に見えるんやけど……。

薄皮一枚剥げば勝利に執着するモンスターやからなあ……」

ま、そこも含めて可愛い後輩なんやけどな。

「ひどい言いようだな……だがまるつきり否定もできない。

無茶しないように目を見張らせておくか……」

「頼んだで……じゃ、ウチはこれで帰らせてもらおうわ」

「おう。今日もありがとな」

「どういたしまして」

ひらひらと手を振りながらその場から去った。

(sideトレーナー)

「ノールが勝ちたがり……ねえ」

ノールの練習を見終えてトレーナー居室に戻る最中、そう呟き、スーパーチャージャーから聞いた話を思い出す。

勝つためなら怪我の痛みをも厭わない……か。

ノールは行儀が良い優等生なタイプだと思っていた俺にとっては、かなり意外な内容だった。

だがそれもそうか。俺とノールはまだ出会って1か月程度。

俺の知らない一面があってもおかしくはない。

にしてはかなり過激な一面だったが……。

「あの、トレーナーさん、今いいですか？」

思案していると後ろから聞きなれた声で呼びかけられる。

「ん、ノールか。どうした？」

「いえ、新しいトレーニングを試してみたくて、相談に来たんですけど……時間大丈夫ですか？」

「大丈夫だぞ。どんなトレーニングだ？」

「昨日トレーナーさんの居室で借りた本に高山トレーニングっていうのが載ってたんですけど……」

ノールは最近、こうして自分から新しい試みを提案してくれる。

積極的に取り組んでくれるのは俺が目的としている「トレーナーがいなくても一人で強くなれるウマ娘」になっているという事でもあるから、俺としても万々歳だ。

「酸素濃度の薄い高山で生活していると、体が適応して心肺機能や血流機能が向上するらしいんです。……これを取り入れられないかなと思ひまして」

「……確か、高山トレーニングってのは何週間単位でその低酸素の状況に身を置かないと行けなかったと思うが……ノールは寮生活で高山になんか行けないだろ？」

そこら辺をどうにかする方法は考えてるのか？」

「はい。一応前提として酸素濃度の薄い場所でトレーニングを行うと、トレーニング効果が低くなってしまう。

ですので実際行う場合には平地でトレーニングをして、睡眠時だけ高所に移動するのが良いというのがあります。

だったらタンクか何かに低酸素濃度の空気を詰めて、夜寝る時にその空気を吸えば良いんじゃないかな……って思っただんですけど、どうですか？」

たまにとんでもない発想をしてくるのは困りものだが。

「ま、まあ、できなくはないだろうが……寝る間といたら、大体八時間か？」

その間タンクの中身は持つのか？」



「一応調べたんですけど、10Lのタンクに圧縮した空気が約2000L入ります。

人の呼吸量が1時間で30L程度なので8時間程度なら余裕で持つかと……」

「時間は問題なさそうだが……問題は低酸素濃度の空気どうやって用意するかだな……」

「そこなんですよね……高山まで圧縮機を持っていくのも難しいでしょうし、低酸素濃度の空気を生成してくれる会社でもあれば良いんですけど……」

「そうだな……。俺も調べてみるが、あんまり期待せずに待っていてくれ。かなり難しいからな」

「はい。お願いします」

それにしても高山トレッキングに目を付けたか。よく本を読んてるな……。

俺の居室にある本はウマ娘関係やスポーツ医学についての本ばかり。

ノールがそれらに興味を持っていたから、好きな時に借りていつでも良いという許可を出している。

この突飛な発想も何かしらの本を読んで思いついたのだろう。

いや、待てよ……？ 確か高山トレッキングについての本は奥の方に突っ込んだ記憶が……。

わざわざ手前の本を取り出して、奥の本を覗いたのだろうか。

(無茶せんか気い付けとった方がええで)

ふとスーパージャージャーの言葉がフラッシュバックする。

「……なあ、ノール」

「はい、何でしようか？」

「お前、居室にある本どれくらい読んだ？」

「え、えつと……ほ、本棚の上段をある程度……」

ノールの目線が右上に泳いだ。

「……確か高山トレーニングの本は中段に入れていたはずだが？」

「ち、中段も少し……」

今度は左下に泳ぐ。

「少し？」

わざわざ手前の本をどけて、奥の本を見るのが少しか？」

「中段もある程度……」

次は右下に。

「……本当は？」

「う……じよ、上段から下段まで……というか大体全部に目を通しました……」

ついに自白した。

それしてもあの本棚を大体となると……トレーニングと学校以外の時間をほとんどそれに費やしてるんじゃないのか？

「もしかして勉強時間や睡眠時間は削ってたりは……」

「してないです！ それはもちろん、はい！

空いた時間に読んでいるだけです！

あ、ほら、化粧で隈を隠してもいけませんし、ね？」

ノールは手で目の下をこすって、化粧をしていないことを俺に示してくる。

「ならいいんだが……」

睡眠時間を削っていないなら、自由時間のほとんどを読書に費やしているはずだ。

……勝ちへの執着、か。

改めてノールの勝ちたがりを見せつけられた。

「他に話はないか？」

「はい、それだけを相談しに来たので。今日はありがとうございました」

「お疲れ様」

ノールは俺に背を向け、そのまま去っていかうとしたが、途中で足を止めた。

「あのー……ついでにトレーナーさんの居室に寄って、今日の夜読む本を借りていっても良いですか……？」

「……………」

頑張りすぎるってのも少し困りものだな……。

## 九話 緊張

私がジェット走法を習得してから月日は経ち、今日はジェミニとの模擬レース前日の夜です。

私は自室でナイトと一緒に明日のレースについて話し合っていました。

「明日はナイトも走るんだよね？」

「うん。どれくらい調子が戻ったか確かめないといけないから」

明日は私のレースだけでなく、他にいくつかのレースも執り行われます。そのうちの一つにナイトも参加するというわけです。

「それにしても意外だね……ナイトの出るレースの出走表」

模擬レースでは実力が同じ程度のウマ娘達が一緒に走ります。

なのでGIを取ったことのあるナイトがでるレースには当然名だたるメンバーが名前を連ねる……はずなのですが、出走表に書かれている名前は普段のナイトよりは確実に見劣りするメンバーです。

「怪我から復帰したばかりだからしょうがないかな……」

ナイトの言った通り、その点を考慮してこのレースが組まれたのでしょうか。

……けど私と併走してから一か月ぐらい経つけど、その間にどれくらい実力を取り戻せているのかな……。

あれからナイトと一緒に併走はしていません。

たまに練習している所を見かけた事はありますが、鬼気迫るといふ表現が当てはまるぐらいの熱量を感じました。

私が練習を終えた時でも、ナイトはコースを走っていたのも記憶に新しいです。ともすればオーバーワークなのではないかと心配するほどでした。

「それよりノールは大丈夫？ 一柁ノール、飛ばして六柁にジエミニシード……最近、と  
いうか結構前から彼女に睨まれてたでしょ？」

同じレースに出るみたいだけ……」

「あー……それは大丈夫。」

ちよつと因縁が出来てるけど、それはレースで決着をつけるから」

決着をつける。自然とそう言葉にしてみました。

まあ、決着なら併走の時にもう着いてるんだけど……それはそれ、明日は明日だよね。あれから一か月弱も経ちます。その間に私は基礎トレーニングに励みましたし、ジエツト走法も習得できました。

しかし、当然ジエミニもただ時間を過ごしていたわけではないでしょう。

どれだけ差が縮まっているのか……いや、縮めるだけではダメだ、覆さないと。でなければ……。

今でも目を閉じれば、僅差で負けたあの時のシーンを鮮明に思い出せます。その時の感情のおまけ付きで。

「……ノール？」

「えっ、あ、ご、ごめん」

ナイトの声が私を現実に取り戻してくれました。手のひらが少し痛みます。

ナイトの呼びかけが無ければ、レース前日だというのにまた手を怪我していたかもしれません。

「そ、それで何の話だった？」

「特に何も話しては無かったけど……そういえばノールはトレーナーと出会ってからすごく頑張ってるよね」

「い、いきなり何？」

唐突なナイトの台詞に少し戸惑いました。

「筋肉も良く付いて来たし、スパさんの走り方も身に着けたって聞いた」

「そうだね……でもそれがどうかしたの？」

「このままだと……」

ナイトは何かを言いかけたまま俯いてしまいました。

そのまましばらく動きがありません。

「ナイト？」

「……っ、ごめん……何でもない」

今度は逆に私が呼びかけると、ナイトが正気に戻ります。

しかし、その時のナイトの顔はどこことなく不安そうに見えました。

明日のレースが不安なのかな……。

でも呟いていた内容とは関係ないし……私の話だったよね……。

「もしかして私、気づかない内に何かした？」

「そ、そんなことは無い」

「でも、私の話をしてたのに急に黙っちゃったから……」

「ほ、本当に何でもない。少し考え事をしてただけだから……」

そう言うナイトですが、今のナイトからは寝不足をトレーナーさんに隠していた時の

私のようなイメーჯを受けました。

私に知られたくない事を隠しているような感じ。

「……本当に大丈夫？ 私に何か不満があるなら遠慮なくぶつけてよ。

それか悩みがあるなら私で良ければ相談に乗るよ。」



一人で抱え込んでもあんまり良いことないし……それに悩みが原因で寝不足になったら明日のレースに支障がでちゃうしき」

貴重な模擬レースを万全の体調で迎えられないのはもったい無いですし。

「……そう、だね」

ナイトは伏し目がちにそう言い、それから私と目線を合わせてくれました。

「……ノールは、友人とレースで競わないといけなくなったらどう思う？」

「ど、どうと言われても……競う以上は負けたくない、とかそんな感じのことを思う、かな？」

「……私は怖いと思う。だってレースで競うという事は勝ち負けを決める事だから。

勝つという事は他の人を押しにかけて、自分だけが勝利という一つしかない席を確保する事。

友人と二人並んで勝つ事は出来ない。

仲の良い人を押しにかけて勝つのは……とても気まずい事じゃない……？」

「……うーん」

「私も別にテストとか遊びの中で競う時にはそんなことは思わない。

でもレースは私たちがウマ娘にとっては特別な意味を持つ勝負。

その重要な場面で仲の良い友人とたった一つしかない勝利の席の奪い合いをするの

は……すごく怖い」

怖いというのは恐らく、友情にひびが入ってしまったことを指しているのでしょう。

確かに一つしかない席の奪い合いをすれば、仲が悪くなってしまう事はあり得る事でしょうが、そこまで神経質になるほどとは思いませんでした。

しかし、ここで大事なのはナイトがどう思うかです。

そういうえばナイトってサバサバしてそうだけど、結構人間関係に気を使うタイプだったっけ……。

「もしかして明日の模擬レースに友達がいるの？」

「あ、そういうわけじゃない。

というより友人とレースで競うのは嫌だから、同じ距離を走る人とは距離を置くようにしてるし」

「そうなんだ……」

確かにナイトが仲良くしている人は短距離を走るウマ娘や長距離を走るウマ娘ばかりで、同じ中距離を走る人はいません。

「……あれ？ でも私は？ 私も一応中距離適正だけど」

「ノールは同室相手だし。

それに……言いくらいけど、ノールと私じゃグレードがかなり違ってたから……」

「なるほど……」

確かに運の良さでG I I I出場していた私が、G Iでバリバリ活躍していたナイトと同じレースを走る事はまずないでしょう。

「……あ、もちろんノールが弱いとかそういう事を言いたいわけではなくて、ただそういう考えの元、同室相手と仲良くしないのは流石に不味いと思っただけで……あ、でもこの言い方だとノールとは同室だから嫌々、打算的に付き合っておこうとかそういう考えに聞こえるかもしれないけどもちろんそんなわけではなくて……とにかくノールは普通に良い人だから単純に友人になりたいと私は思いました！」

ナイトは先の発言で私が気を悪くしたかもしれないと思ったのか、物凄い早口で弁解してきました。

しかも内容が分かりそうで分かりません。

ナイトの額には汗も滲み出ていますし、きつとかなり混乱しています。

「そ、そんなに必死でフォローしなくて大丈夫だよ。」

ナイトの言ったことは事実だし、気も悪くしてないから」

「本当？」

「ホントホント」

私がそう言うのとナイトは胸をなでおろしました。

少し間を開けてから話を再開します。

「脱線したから話を戻すけど……結局何で悩んでたの？」

「最近ノールが速くなってきたから、将来私と同じレースに出るようになるかもしれないと思った。」

「そうだったらノールとレースで競わないといけなくなるから……それで不安になったの」

「そういう事かあ……」

何はともあれ、ナイトの悩みの源泉は分かりました。しかし……

「確かに私は最近速くなったとは思うけど、本気のナイトと張り合えるほど成長できるかと言われると……」

正直、自信はありません。レースの実力に限って言えば、ナイトははるか雲の上の存在です。

そんなナイトに私が追いつけるとは思えませんでした。

「そんな事無い。ノールは更に速くなる。だって毎日頑張ってるから」

「そ、そう？」

「うん。前みたいは無茶なオーバーワークもしてないし、ノールの情熱が正しい方向に向き始めたって言うのかな……？」

とにかくノールは今以上に速くなると思う。だから同じレースにでる機会があるかも……」

「うーん……」

そういう事でしたか。

私としては仮にナイトと同じレースに出て、勝った負けたをしても勝負は勝負、普段の関係は普段の関係と割り切れそうですが（負けて悔しいとは思うだろうけど）……、この場合問題なのはナイトがどう思うかです。

どう安心させるべきか……。

「……ナイトは秋華賞に出るんだよね？」

「うん。怪我をしてトリプルティアラは逃したけど、秋華賞単体でも勝ちたいから」

「その前にどのレースに出るの？ 流石に怪我から復帰したすぐ後にG Iレースには出ないでしょ？」

何かたまたま台のレースがあると思うんだけど……」

「それはG I IのローズSにしようかなと思ってる。」

「今年は秋華賞と同じ阪神レース場で開催されるし、距離も2000mだから」

「私は同時期に紫苑Sに出るんだ。」

「ってことはさ、今の段階で私たちが一緒に走る予定はないんだからそんなに悩まなく

ても良いんじゃないかな？

まだ起きてもないことを心配するのは疲れるじゃん。

悩むんなら実際にそういう状況になってからで良い……と私は思うよ」

悩みの解決にはなっていないませんが、ひとまずはそう言っただけを説得しようとする。

まあ、過去に杞憂の心配事で寝不足になった私が言うな、という感じではありますけど……。

「……それもそうだね。大事なのは目先の事、か」

「そうそう！ ナイトにとって明日は怪我から復帰して初めての実践的なレースなんだし、どうせするなら明日の心配の方が良いよ。」

あー……とは言っても心配しすぎたらそれはそれで意味がないのか……」

勢いでまくし立てたものの、良くない方向に話を進めてしまいました。ここからどう舵を取りなおすべきかと考えていると、

「ふふ……大丈夫、明日についてはあんまり心配してないから……」

「そ、そう？」

「うん。だって明日のレース、私が勝つから」

そう言うナイトは至って自然体でした。そこからは虚勢や過度な気負いなどは一切

感じられません。

カラスは黒い、1+1は2、地球は丸い、ナイトが勝つ……。

まるで自分が勝つ事が常識、あるいは世界の真理であるかのように語るのです。

怪我の件を考慮しても、ナイトは明日のメンバーなら必ず勝てると考えているのでしよう。

傲慢とも取れる発言ですが、少なくとも今の私にはそう感じられませんでした。

……きつとナイトは自分を信じてるんだ。

今までの努力とそれによつて培われた実力を。だからこれほど自然体で勝ちを宣言できる。

それに比べて私はどうか？

ジェミニや他のメンバーに絶対勝てるかと聞かれれば、自信を持って「はい」とは言えません。

ここら辺が私とナイトの差につながっていきたりするのでしょうか……。

「今日はありがとう」

「……え？」

「相談、乗ってくれたから」

「あ、その事……一応どういたしました」

色々考えていたところに急にお礼を言われて、少々困惑しましたが、定型文を返します。

ふと時計を見ると、時刻はもう11時です。

「あ、もうこんな時間。そろそろ明日に備えて寝ない?」

「そうだね……」

二人して、寝る前の準備を整えます。

「じゃあ、お休み」

「うん。お休み」

その声を皮切りに照明は落とされ、部屋は真っ暗に。そのまま目を閉じると、2分と立たずに眠りに落ちました。

翌日

私はトレセン学園のコースにいます。今日はいつもととは違い、コース上にゲートが設置されています。



それを見ると、これから本当にレースが始まるんだという気持ちになり、少し気がはやりました。

もうすぐ私の出る第一レースだから最後の準備をしないと……。

コースの横で蹄鉄の最終チェックを行います。

不備がないかを再確認。これで三回目です。それだけ今の私は神経質になっていました。

器具や装備の不具合で負けたとなつては悔やんでも悔やみきれませんから。

負けるとしても実力で負ける。そうでなければ納得できません。

「よし……」

「ノール」

最後のチェックを終えると、聞きなれた声が入から聞こえてきました。

顔を上げるとそこにはトレーナーさんが。

「トレーナーさん、なんででしょうか？」

「調子はどうだ？」

「万全です」

わずかな肩こりや腰の痛みなど、少しの不調もありません。

最高の状態と言えるでしょう。

「そうか……一応聞いておくが、レースのプランは覚えているよな？」

「はい。私は一棒なので、まずスタートに遅れない事。」

そして他の人のペースにつられず自分のペースで走る事。

ラストスパートは残り400mでかける事。

ジェット走法に切り替えるのは残り200m地点です……です」

「よし。それが分かっているなら後は全力で走るだけだ！ 頑張つてこい！」

「はい！ 死力を尽くして頑張ります！」

私はいつにも増して語気を強くし、そう言い放ちました。

「し、死力までは尽くさなくて良いぞ？」

もう少し肩の力を抜け。余計な力みはパフォーマンスを悪くするからな」

「は、はい……」

トレーナーさんは私の肩に手を置き、揉み解してくれます。

それに逆らわず自然体になると、余分な力が抜けていくのを感じました。

「確かに少し緊張していたみたいです。忠告、ありがとうございます」

「お、おう。あんまり気負いすぎずにな」

トレーナーさんの腫れ物に触るような態度に少し違和感を覚えました。次の来訪者の方に気を取られます。

「ノール、調子はどうや」

「ノール、準備できてる？」

「スパさんにナイト、来てくれたんですか？」

「私はノールの後にレースがあるからついでに」

「ウチは今回のレースには出んけど、後輩二人がレースに出るから野次馬に来てやったで。ウチと同じ走り方でノールがどれだけやれるか見せてもらおうやないか」

「スパさんは野次馬と言いましたが、恐らくは私たちを心配して身に来てくれたのでしよう。」

休みの日にわざわざ来てくれるほど私のことを心配してくれているのは、素直にうれしく思いました。

「はい、ジェット走法できっと勝って見せますから」

「おお、言うやんか。でもそこは「必ず」って言ってほしかったな」

「そ、そこまでは……ちよつと自信が足りなくて」

「そこらへんがノールらしいな……ま、練習通りの走りが出来れば十分勝てる見込みはある、気張りや」

「はい」

スパさんからは激励を。

「ノールなら勝てる。

もし緊張してるなら、今日までしてきた練習を思い出すのが良い。

自分が今まで積み重ねてきた物の量は自分に自信を与えてくれるから」

「今までの練習……平日は放課後からみっちり練習した後、夜寝るまでスポーツ科学やレース理論の本を読んだし、休日は朝から日が沈むまで練習と自分の走りの研究をしてた」

「それだけ努力してきたノールなら大丈夫」

「そうだね……うん！ 自信出てきた！」

ナイトからはメンタルケアをしてもらいました。

良い高揚感に包まれた状態でレースに臨む事が出来そうです。

「二人ともありがとうございました！ 私はもうゲートに向かいますね、それじゃあ……」

「あ、少し待て」

自分の枠番に対応した1番のゼッケンをつけ、意気揚々とゲートに向かおうとしたその時、トレーナーさんに呼び止められました。

「なんででしょうか？」

「最後に一つだけアドバイスだ。予期せぬ事態が起きて焦った時はペースを落とせ」

「ペースを落とせ……ですか。分かりました、心に留めておきます」

「ああ、頑張つてこい！」

「はい！」

トレーナーさんからはアドバイスを貰い、ゲートへ足を運びました。

「……珍しいやんか。自主性を重んじるあんたが助言するなんて」

「ま、これぐらいは許してくれ……焦つて実力を発揮できずに負けるのが一番悪い負け方だ。」

レースを振り返つてどこが悪かったのかを分析もできないし、何より本番でのパニック癖がついてもいけないからな」

「なるほど。それに練習量に比例して自信はつくけど、裏を返せば負けた時の失望も大きくなるからなあ……。」

必死に練習したのに本番でパニックになって負けたとなつたら、あの娘の事や、三日は眠れんようになるで」

「ありそうだな……。出来ればノールには勝つてほしいもんだ。

今までの努力が報われないとなると、そばで見えてきたこっちとしてもキツイものがある」

「あー、それはウチもやな……。今回は直接指導で関わりすぎたから、ノールが負けるとウチもへこみそうや……」

「……………お二人、結構仲良いんですね」

「別にそんな事無いで?」「だろ?」

「……………」

ゲートのそばまで来ると、先に待機していたウマ娘達がちらほら見えました。

その中には六番のゼツケンをつけたジエミニもいます。

「……………おい」

「な、何?」

ジエミニの横を通り過ぎようとすると、いきなり話しかけられました。

「お前、蹄鉄はちゃんと試合用のやつか？」

「え…………？」

「軽いアルミ合金の蹄鉄か、つて聞いてんだよ」

「そ、そうだけど…………」

「ふん…………なら良い…………」

それを聞いたつきり、ジエミニは私に背を向けます。

「今度こそ俺が勝つ。完膚なきまでにな」

そしてジエミニは背を向けた状態のまま、首を掻き切る仕草をしました。

そのまま離れていきます。

な、何だったんだろう…………？

勝利宣言はともかく、意図の読み取れない質問に戸惑いました。

しかし、その戸惑いも長くは続きません。

ふと緊張感を肌で感じました。周りを見ると、真剣な面持ちで待機しているウマ娘達  
が。

…………そうだ。模擬とはいえこれはレース。みんな本気で勝ちに来てる。

ジエミニのように分かりやすい圧ではなく、肌を指すようなピリピリとした場の雰囲気  
に、心のネジが閉まっていくのを感じました。

「ふー……」

場の重さに肺が押しつぶされたかのようです。大きく息を吐きました。

……レース、早く始まらないかな……。

レースが始まる前のこの緊張感。今日はいつてもより余計に大きく感じます。

走り出せばこの緊張感は闘争心に変わるんだけど……。

そんなことを考えながら、目を閉じていました。

「第一レースに出場する皆さん、ゲートインしてくださいー」

その声を聞き、私は一枠のゲートに入ります。ゲートインは通常、内枠から行うので私が一番です。

ゲートの中に立つと、隣にはフェンスが。前は開閉式の扉が首元まで覆っており、かなり窮屈に感じます。骨組みの屋根のせいで少し暗いです。

いつもなら狭くて暗い所にいると胎内回帰願望のせいか、落ち着くのですが、今日はいやに気が張ってしまいます。

落ち着け……今日まで頑張ってきたじゃないか。トレーナーさんと出会ってから



二カ月間、ずっと頑張ってきた。

一人で闇雲に練習してたんじゃない。トレーナーさんやスパさんにも色々教えてもらった……だから勝てるはず、勝てるはずなんだ……。

ナイトが教えてくれたように今までの練習を思い出し、緊張を自信で塗り替えようと思いますが、何故か緊張は増すばかり。

併走の時はジェミニに負けたけれど、あれから私はジェット走法を習得した。だから彼女に遅れは取らない……最後の直線、私が先頭を走れる、勝てるはず……。

「全員、ゲートイン終わりましたー」

係の人がそう告げるの聞くと、体は反射的にスタート体勢に入ります。

しかし、心の方は浮足立ったままです。

ドクン、ドクン、と心臓の音だけが頭の中に響いていました。

ガコン！ という音と共にゲートが開きます。

「……………!!」

ジェミニとの因縁、ジェット走法を身につける事ができた期待感、それにより膨張した負けれないという思い、内枠でゲートインしてから長く待たされた事。

これらのどれかが欠けていれば、私が出遅れる事はなかったかもしれない。

## 十話 模擬レース

不味いマズイマズい……っ！

模擬レースで出遅れてしまった私は、まだ200mも走っていないのに大量の汗をかいていました。

内枠で出遅れるという事は外枠の娘達に覆いかぶさられるという事です。

私の場合も例に漏れず、外枠から覆いかぶさられ一気に最後尾へ。自分がビリにいることを自覚すると、顔から血の気が引いていききました。

頭の中は真っ白。出遅れたのならそれを挽回するため、いつも以上に位置取りやペース配分に気を配らなければいけないのですが……

出遅れたから……出遅れたから……ど、どうすれば………？

そこから一向に思考が進みません。今はペースも考えず、ただ前を走るウマ娘についていくだけ。

「はっ……はっ……」

一回吸って、二回吐く。自分の呼吸法すら忘れて、無駄に体力を消耗するばかり。

その事がさらに私を焦らせ、ますますパニックに陥る……今の私は負のループに嵌っ

てしまっていました。

(sideトレーナー)

「ぐっ……………」

「出遅れよった!」

ゲートが開き、皆一斉にスタートを切った。

が、横一線の中で明らかに一人へこんでいる姿が。

それを見た瞬間、俺とスーパージャーザーは椅子から立ち上がり、叫んでいた。

「……………内枠で遅れたとなると厳しそうですね」

俺達とは対照的に、ナイトグライダーは冷静にそう評価する。

「あく……………ヤバイ! 今頃ノールはパニックやで! ここからでもペースがぐちゃぐちゃになってるのが良く分かるぐらいにな!」

「ああなると何か強いショックでもない限り、正気に戻るのには難しい……………」

「……………」

今、あそこで走っているノールは孤独だ。

レースが始まってしまえば、終了するまで誰からも助言を受けることはできない。いくら俺がノールの担当でもレース中にノールに干渉することはできない。

当然、焦りから抜け出すのもノール自身が行わなければいけないのだ。

「思い出せよ……俺のアドバイス」

成り行きを見守る事しかできないのを齒がゆく思いながら、手を強く握りしめた。

（焦った時はペースを落とせ）

「！」

第一コーナーに差し掛かる直前、トレーナーさんの言葉がフラッシュバックしました。なぜ、それを急に思い出したのかは分かりませんが、今の私は反射的にその言

葉に従います。

ペースを落とすと、前との差はますます開き、胸の奥が騒ぎましたが、それと引き換えにある感覚が。

後ろからだと前を走る集団の全体が良く見える……。

レースの全容を一目で理解できる位置につくと、まるで神様になったような気持ちになり、次第に余裕を取り戻してきました。

焦りが静まると、頭も回転し始めます。

遅れてしまった以上はしょうがない……このまま後ろで体力を温存してラストスパートに賭ける……！！

最後尾から行くとなると、スパートをかけるタイミングは難しくなりますが、位置取りは簡単です。

外からまくって、ぶち抜く。

ただそれだけですから。

(sideトレーナー)

「お………！ 大分余裕を取り戻してきたんやないか？」

「自分のペースを取り戻してますね」

「よし………！」

小さくガッツポーズをする。

「……にしてもハイペースな展開やな……先頭につられて全体的にペースが速うなつとる」

「本番になると周りのペースに影響されやすいですからね」

「だがノールだけは自分のペースで走れてる……この分なら」

ノールが有利だ、そう言おうとした瞬間、スーパーチャージャーに遮られる。

「いや、自分のペースで走れてるのはノールだけやないで。」

今、先頭を走つとる六番もや」

「そうですね……今のレースの流れはあの六番が作っているように見えます。」

行き過ぎたハイペースも彼女の作戦の内かと」

「自分のペースで走ると人のペースに乗せられて走るのやつたら、後者の方が断然消耗する……それに六番はあのペースでも後半垂れん自信があるんやろうな」

「補足するならこのレースのメンバーは逃げ、先行の脚質がほとんどですからね……そ

れもペースが速い原因でしょう」

ウマ娘である二人はそんなことを話し合っている。

「ここら辺の考察は新人トレーナーである俺より、一線で活躍している彼女たちの方が得意なのだろう。」

俺自身は実際にレースで走ったことは無いから、ここまで深い洞察は出来ない。

「……とにかく、このレースはノールと六番の勝負になりそうって事か？」

「まあ、そう言っても差しつかえはないんじゃないか？」

「それにあの中だとその二人が頭一つ抜けているように見えますし」

六番……か。

その番号のゼッケンを付けているウマ娘は、前に見たことがある。

ノールと因縁があり、併走練習を盾に勝負を挑んで来たウマ娘。

確か名前はジエミニだったか。

「……ノール」

あの時は負けたが、今度は勝てよ……！

残り1000m地点。私は体を少し前傾させ、ペースを上げます。

フォームが変われば使う筋肉も変わる……疲労で鈍った脚が余裕を取り戻す感覚を  
覚えました。それと同時にある違和感も。

——全体的にペースが速い？

後ろの方からレースを俯瞰していると、そんなことに気づきました。

もしかして私が遅い？

……いや、そんなことは無い。今の私はいつものペースで走ってる……。

歩幅、脚の回転、呼吸、全てにおいていつも通りです。

何度も何度も走りこんできたから冷静になった今、間違えるはずは無い。

その考えを元に、現在ビリである不安を押し込みました。

最初は脳死で前に付いて行つてたから気づかなかつたけど、あれはかなりハイペース  
だったんだ……。

そこから一段階ペースを落とした今、やっと通常ペースだし……。

つまり今は全体的にハイペース……そしてこれだけペースが速ければ前を走る者は  
後半必ずバテる。

問題は私が後ろから差し切れるか……。



私は基本的に先行脚質。今回のように後ろからまくる展開は初めてです。

スパートのタイミングが早ければゴール前でバテてしまう……かといつて遅ければ先頭に届かないかもしれない。

いつスパートを掛ける……？ いや、変に考えるのはよそう。

レース前にトレーナーさんと話した通りに走るんだ。

残り400mでスパートを掛けて、200mでジェット走法に切り替える。

それが今の私に出来る一番速い走り、それで勝負しよう……。

そう心に決めました。

レースは進み、残り500m。

ここまで来ると先頭集団は少しペースダウンしていました。やはり前半のハイペースが祟っているのでしょうか。しかしそんな中でも先頭のウマ娘だけはペースを保っています。ゼッケンは六番。

ジェミニ……

あれだけのハイペースでここまで走ってきたのです。

疲れていないわけではないでしょうが、その中でもペースを落とさず、フォームを崩さずに走れているのは素直にすごいと思いました。

きつと、私に勝った後も血のにじむような練習を重ねたから出来る芸当です。けど私だって……！

何もしていなかったわけではありません。

ジェミニに負けて以来、最終直線で抜かされるシーンを夢に見ない日はありませんでした。

その悔しさをバネに今日まで頑張ってきたのです。

残り400m。私は脚に力を込め、一気にペースを上げました。一段階目のスタート。前との差がぐんぐん詰まっていきます。

しかし、今の距離の詰まり具合だと、先頭のジェミニを抜かすまではいきそうにありません。

それでも私は焦りませんでした。だって私にはまだ今日までの努力の結晶、先輩から教えてもらったジェット走法が残っていますから。

(side ジェミニシード)

「はあっ……はあっ……！」

ちらりと後ろを見ても、苦しそうな顔をした奴らが目に入ってくるだけ。あいつはいねえのか……。

それもそのはず。ノールはスタートで出遅れるなんて間抜けた事をしてやがった。

そんな野郎が見えないのは当然。今頃後ろの方で四苦八苦しているはず。

……だつたら何なんだこの嫌なプレッシャーは……。

先頭を走る事、それ自体にはプレッシャーが伴う。

なにしろ競争相手の姿が見えないのだ、いつ後ろから抜かれるか分かったもんじやない。

だからプレッシャーを感じている事、それ自体はおかしい事じやない。

問題なのはプレッシャー源だ。

俺の後ろを走る奴ら、あいつらはもう俺の敵じやない。

俺のペースに惑わされ、勝手にスタミナを消耗しやがった。

もう俺に追いつく事は無い。だから後ろの奴らはこのプレッシャー源にはなりえない。

嫌な感じがするのはもつと後ろだ。それも外側。

もう一度後ろの様子を窺う。やはりあいつは見えない。

正確には少し振り向いたぐらいではどこにいるかを掴めなかった。

いや、もう振り向くのはよせ。悪戯に体勢を崩すだけだ。

ゴールまで後少し……ここからは前だけを見て走る……！

そう心に決める。だが俺の意識は後ろに向けられたまま。

くそっ……！ あの野郎が出遅れたせいでマークできずに、大逃げかましたが……こんな事になるなら後ろにつけば良かったか……？

「はっ、はっ……」

地面を凹ませる感触を足裏に感じながら疾駆します。

スパートを掛けた時は大外を回らなければいけないかと思いましたが、前の群集がい感じにバラけそうです。

これなら隙間を縫って突破できる……！

あの娘とあの娘、それとあの娘は垂れる……その後ろは駄目。

あつちとあつちはもう少し粘りそう……。

垂れるウマ娘ともうしばらく粘りそうなウマ娘を見分け、自分が前に出るためのルー

トを瞬時に予測します。

ここ……っ！

頭で描いたルート通りに群集を抜けると、残りは200m。ちょうど良いタイミング。

スパさん……借ります！

心の内でそう宣言しながら、一気に体を倒しました。

今まで上体で受けていた空気抵抗が一気に減り、もう一段階の加速。

最高速度の壁を超えるこの感覚が何度味わっても快感です。

しかし今はレース中。すぐに正気に戻り、私の前を走る六番のゼツケンを捉えます。

差は5バ身(約10m)ほど。射程圏内。

……この距離なら……差せるっ！

殊更ことさらつま先に力を入れ、大地を蹴り、芝を爆発させました。

(sideジェミニシード)

「はあっ……はあっ……！」

肺が痛い。心臓がうるさい。脚が重い。逃げはこれがきつい。

最初の方に速いペースで走るせいで、疲れた状態で長い距離を走らないといけない。だが、この苦しみもあと少しだ。

ゴールはもう目の前。このまま駆け抜けて俺の勝ちだ……！

勝利を原動力にだるい体を何とか稼働させていると、後ろから一陣の風が。

風？ 後ろから？ 走ってるのに？

その疑問はすぐに解消される。視界の端に一番のゼッケンが映った。

ノール……!?

バカみたいな低姿勢でノールは私の横をすり抜けていく。

なんだよあれ……っ!?

後ろから抜かれ、反射的にペースを上げようとするが、もう私の脚は限界だった。

動けと命令するのに、言う事を聞きやしない。

併走の時はあんな走り……隠してた？ それとも一か月で習得したのか？

そんなどうでも良い考えが頭をよぎっていく。

それはノールに負けた事実を脳が認識しなくなかったがための現実逃避だったのか  
もしれない。

ゴール……ッ！

ゴール板を通過。徐々に体を起こしつつ、速度を落とします。

速度を落とした途端、自分の肌を撫でる風の勢いが弱まりました。体感温度が一気に上がります。

前を見ても誰もいません。それも当然です。

だって私は先頭でゴールしたのですから。

先頭、一着、一位、トップ。

「はーっ……はーっ……はーっ……！」

燃えそうなくらい熱い体、酸欠気味でぼーっとする頭、張り裂けそうな心臓。

平常時なら疎ましいはずのそれらも、勝利を収めた今、全てが快感に感じられました。

ドーパミンやらアドレナリンやら脳内ホルモンやら何やらがドバドバ出てるせいで  
しょうか。

これだ、この感じ……。久しぶりの勝利の感覚……。

きつと今ならどんな感覚もプラスに感じられます。

首筋を伝う汗や、酷使してパンパンのふくらはぎと太もも、汗でべつとりと体に張り付いた服の感覚。

それらを堪能しながら、流しで走り続けます。

そういうえばみんなは……？

レース前にみんなと話していた場所に目をやると、そこに三人が座っているのを発見できました。

そちらに向けて軽く手を振ると、スパさんが大きく手を振って返してくれました。トレーナーさんとナイトも手を振り返してくれます。

良かった……ちやんと練習の成果を出せて……。

安堵しながら、もうしばしのウイニングランを楽しみました。



## 十一話 勝者と敗者

「みなさん見てましたか！ 私勝ちましたよ！ わぶ……」

「でかしたあー！ 流石はウチの一番弟子やなー！」

レースが終わり、三人の元に戻ると、まずはスパさんから熱烈な歓迎を受けました。タオルで顔をもみくちやに拭かれたのです。

そのままタオルを受け取り、自分でも汗を拭きとります。

「ありがとうございませす……スパさんのジェット走法があつたから出遅れた分を何とか取り返せました」

「せやろせやろ……と言いたい所やが、ノールが勝てたのはジェット走法だけのおかげやないで」

「え、でも……」

「そいつの言う通りだぞ、ノール」

そこにトレーナーさんが割り込んできます。

「出遅れたが、それに慌てず冷静に立て直したの良かったぞ。」

俺たちが出会った頃にあつた悪癖もきちんと改善されていた。

それに最後のほうで群を抜け出したあの動き、実にスムーズだった。

併走トレーニングの成果が出たな」

「そ、そうですか……？」

あ、でも出遅れてパニックになった状態から立ち直れたのはトレーナーさんのアドバイスのおかげです！　ありがとうございます！

言われたとおりにペースを落としたり、レースの全容を把握できて次第に落ち着いたんです……もしかしてあの展開を予想してたんですか？」

「そういうわけじゃねえが……とにかく、練習の成果が実った良いレースだった。

今までの努力が報われたな」

トレーナーさんはそう言いながら水筒を手渡してくれます。

「……ありがとうございます」

私はそれを受け取り、口を付けて水を飲みます。

カラカラに乾いた体に、冷たすぎず、ぬるすぎない水がしみ込んできました。

味のしないただの水ですが、今の私にとってはごちそうです。

ごくごくと水を飲み、火照った体を冷ましていると、さっきのトレーナーさんの言葉が頭の中でリフレインします。

（今までの努力が報われたな）

「……」

「そういえば今までは何となく勝ってたなあ……。」

「いや、努力してなかったわけじゃないんだけど……今回みたいに目的意識を持って、トレーナーさんやスパさんの力を借りて、努力を重ねて、その結果勝ったのは初めてだな……。」

「勝利による高揚感とは別種の達成感を感じていました。それに指導してくれたトレーナーさんやスパさんも一緒に喜んでくれたことで、不思議な温かさが胸を満たしています。」

「そう、ですね……。」

「ん？ 何がだ？」

「あ、いえ。大したことじゃないんです」

「？ ……ま、とはいえこれは模擬レースだ。」

「本番つてわけじゃない。今回の結果に満足せず、直せる所は直して、伸ばせるところは伸ばすんだぞ」

「はい！ とりあえず模擬レースが終わったら、ゲート練習ですね！」

「今日みたくに出遅れる事がないようにしっかり練習しないと……それに今日はひどく緊張もしたので、メンタル面の補強もしないといけませんね」

トレーナーさんの居室か図書館にそういう本あったかな……？  
そんなことを考えていると、トレーナーさんに止められます。

「改善点を見つけられているのは良いことだが今日は休め。模擬レースでかなり疲れているだろ？」

「確かに疲れてますが……2000m走っただけですよ？ 練習じゃもつと走ってますし、休憩すれば問題ないのではないですか？」

「肉体的にはそうかもしれないが、精神的にはどうだ？」

模擬レースとはいえ真剣勝負、結構消耗してるはずだと思うが……」

「そ、そうなんですかね……」

勝利後で興奮しているせいか疲れは全く感じません。

しかし言われてみれば、レース前は緊張でガチガチ、出遅れた時はパニックになり、すぐに正気を取り戻しました。

そしてゴール後は大はしやぎ……これだけ感情が乱高下したのです。

今の興奮が冷めた途端、ガクツと来てもおかしくはありません。

「そうですね……トレーナーさんの言う通り、今日はお休みします。この後は模擬レースの見学をしますね」

「それを休みと言うのかどうかは怪しいが……まあいい。俺はやる事があるからそれ

じゃあな」

「はい。お疲れ様でした」

「お疲れ様」

そう言ったつきり、トレーナーさんはこの場を離れていきました。その背中を見送っている、にんまりとした笑みを浮かべたスパさんが

「あのトレーナーな、ちつとカッコつけて、「トレーニングの成果が出たな」とか言ってたけど、ノールがゴールした時はそれはもう、えらい喜びようやったで」

「本当ですか？」

「せやせや。椅子から立ち上がって両手でガッツポーズ決め取ったわ」

口は乱暴だけど態度は落ち着いているトレーナーさんがそんな事をしてたんだ……。少し面食らってしまったが、すぐに嬉しい気持ちで湧いてきました。

トレーナーさんが私の勝利を自分の事のように喜んでくれた事がとても嬉しかったのです。

ふわふわとした気持ちでいると、

「……話に割り込むタイミングが無くて遅れたけど、今日のレース、一位おめでとう」  
ナイトからも祝福の言葉を貰いました。

「ありがとう、ナイト」

「すごかったね、ゴール前のスパート。スパさんと同じ走りを習得したって聞いてたけど、あれだけ速く走れるんだ」

「うん。とはいってもまだまだ未完成だから、練習すればもっと速く走れると思うよ」

「あそこから更に……もしかしてスパさんぐらい速くなれる？」

「どうだろう……？」

ナイトの問いに答えられないでいると、スパさんが助け舟を出してくれます。

「それは脚質にもよるかな……でも練習すれば今より速くなれるのはそのとおりやで。どや？ ナイトもウチから習ってみる気は無いか？」

「ありがたい申し出ですが遠慮しておきます。私には私の走りがありますから」

「ま、それもそうか。無理強いする気は無いからな」

スパさんは肩をすくめます。そのまま次の話題に。

「そんでこの後はナイトが走るんやっけ？」

「はい。正確には三つ後のレースです」

「実践的なレースはこれが復帰後初やったな……勝つ自信はあるんか？」

「無ければここには来ていません」

「ノールと違つて自信満々やな！」

そういう事ならナイトの勝利に期待しながら見学させてもらおか。な、ノール」

「ナイトも頑張つてね！　ここで応援してるから！」

「ありがと……そろそろアップしたいからトレーナーの元に行ってくる」

「うん、一旦バイバイだね」

「気張れよー！」

ナイトは私たちに背を向け、ナイトのトレーナーさんの元へ走って行ってしまいます。この場には私とスパさんだけが取り残されました。

「四人おつたのに、一気に寂しくなってもうたなあ」

「そうですね……ナイトはともかく、トレーナーさんの用事ってなんなんでしょうか？」  
「ん？　そりゃ、あいつもトレーナーやし、模擬レース運営で何か担当の係でもあるんじゃないの？」

「それもそうですね……あ」

そんなことを話していると、急に尿意が襲ってきました。走って汗をかいたとはいえ、水を飲みすぎてしまったのでしょうか……。

「すみません……ちよつとトイレ行ってきます……」

スパさんにそう断り、席を立ちました。

コースの一番近くにあるトイレに急行し、中に入ります。すると入り口近くにある洗面台の前にはレースと一緒に走ったジェミニの姿がありました。

洗面台に手をついてうつむいています。

「……？ つー！」

気配に反応したのか顔を上げるジェミニ。

鏡越しに私に気づき、勢いよく振り向きまます。

「……なんだ？ 俺のことを笑いに来たのか？」

「い、いや、普通にトイレしに来ただけけど……！」

「……そうかよ」

そう言ったつきり、ジェミニは再び下を向いて動かなくなります。

……気まずい。別のトイレに行こうかな……

そうは思ったものの、わざわざ遠くのトイレに移動するのも面倒だし時間もかかるので、素直にここのトイレで用を足すことにしました。



用を済ませ、個室から出ました。手を洗うために洗面台へ向かうと、そこにはジェミニの姿が。

まだいる……。

3つある洗面台の中央にジェミニは陣取っているため、間を空けることもできません。

かなりの居心地の悪さを感じることになりますが、しょうがなく洗面台を利用します。

ジャー……

センサー式の水栓に手をかざし、手を濡らします。

「……なあ」

「な、何？」

いきなりジェミニから話しかけられ、驚きながらも返事をします。

「どうしてそんなに速くなれた？」

「えっ？」

「お前は俺と同じく教官に指導してもらった時は、あんなに速くなかっただろ。」

少なくとも俺よりは遅かった。けど今日のレースはお前の方が速かった……」  
そこでジエミニは私の方に顔を向けてきます。

「お前が速くなったのはトレーナーに指導してもらい始めてからだ。

……なあ、お前はトレーナーに何を教えてもらったんだ？ 何をすればあんなに速くなれるんだ？」

ジエミニは虚勢を張るでもなく、負け惜しみを言うでもなく、私にそう聞いてきました。

その顔は出来るだけ無表情を装っていますが、悔しさを噛み殺しているのが分かります。

「私がトレーナーさんに教えてもらった事……色々あるけど、一番は自分で練習メニューを考える事、かな」

気づけばそう口にしていました。

ジエミニには睨まれたり、突っかかってこられたりしたので、問いかけに答える義理は無いのですが、さっきの悔しさを押し殺した表情を見ると、不思議と口が緩んだのです。

レースで負けた相手、それもレース前に挑発までした相手にアドバイスを貰う……それがどれだけ抵抗を伴う行為か。

少し想像すれば私にも分かりました。

それでもジエミニは私に助言を求めてきた……。

きつとそれだけジエミニは速くなりたいのです。速くなるために出来る事はすべてやる……そんな熱を勝手に感じ取った私は、彼女の力になりたいと思いました。

「……自分で練習メニユーを？」

「うん。自分が今出来ていない所はどこか、どこを改善すればもつと速くなれるか、見つかった改善点や新しい技術を身に着ける為に何をすべきなのか……そういう事を考えて、自分で練習メニユーを立ててるんだ。」

その過程でトレーナーさんに助けてもらおう事はあつたけど、基本は一人で「そう話しながら、目線を手に落としました。」

蛇口の横にある備え付けのハンドソープディスプレイに手をかざします。

「それで、その練習メニユーをこなすの。そうしたら私は速くなれた」

「……それだけか？」

「細かい事を言えば他にもあると思うけど……私はそれが一番大切だと思う。」

ある程度の所まではがむしやらに練習するだけでも速くなれる。

でも、そこからはフィードバックが無いと難しいんだ。

今の自分の走りを見返して、それを出来てないところを改善する……それが終わった

らまた課題を見つけて、それを改善して……って。そういう風に振り返りを挟まない  
と、躓いたまま前に進めなくなっちゃうんだと思う」

出てきたハンドソープを手で揉み、泡立てました。

「……トレーナーってのは特別な何かを知ってるわけじゃないんだな。

担当してもらった奴はどいつもこいつも速くなってたから、裏ワザみたいなのがある  
と思ってた」

「人によつては秘伝の技みたいなのを知ってるかもしれないけど……。トレーナーがい  
ると、第三者、それも専門家の目線で自分の走りを見てくれるから、フィードバックが  
上手くい。

だから担当してもらった娘は伸びるんじゃないかな？」

「なるほど……」

「具体的にはトレーナーさんに自分の走りを録画してもらって、それを見返して、どこを  
直せば良いのか、どんな練習をしてそれを直すのかを考える……っていうのをずっと  
やってたんだ。

録画は客観的な視点だから改善点を発見しやすいんだよね」

手首まで洗い終え、再びセンサー式水栓に手をかざします。

「もちろんトレーナーさんから指導してもらった部分もあったよ。

筋トレの内容はトレーナーさんが考えてくれたし、新しいフォームの習得もトレーナーさんの提案してくれた。

でも、自分でのフィードバックが大部分。

だからそこを意識すればジエミニも飛躍的に成長できるんじゃないかな……。

行き詰（づま）った時は教官に質問すれば良いし。忙しい教官でもそれぐらいなら付き合ってくれると思う」

手についた泡を水で流し、ペーパーホルダーから紙を引き出して、手を拭きます。

「こ、これで答えになったかな？ うまく説明できなかったかもしれないけど……」

「いや、十分だ……」

ジエミニは私の回答を聞き、ようやくトイレから出ていこうとします。

「……」

しかし途中で足を止め、

「……わざわざ教えてくれてありがとな……それと次のレースでは負けねえ。俺が勝つ。覚えとけ、ノール」

その言葉と首を掻き切る仕草を残して、ジエミニはトイレから出ていきました。

「……次も私だよ、ジエミニ」

ジエミニの捨て台詞に対して、いらぬ負けん気を発揮してしまいました。

(side ジェミニシード)

「……………」

ノールとトイレで別れた後、俺はレース場のそばにある会議室のような所に足を運んだ。扉を開いて中に入ると、

「ん？ ああ、来てくれたのか」

ノールのトレーナーが出迎えてくれた。

「ここにくればアドバイスが貰えるって話を教官がレース前に伝えてくれ………ましたから」

そう言いながらトレーナーの対面の椅子に座る。

「確か名前は………ジェミニ、で良かったよな？」

……敬語は使わなくても良いぞ。

俺は育ちが悪いもんで、タメ口の方がやりやすい」

「んじや、遠慮なく」

俺もあまり敬語が得意ではないので、タメ口で話して良いのは助かる。トレーナーはそのまま話を続けようとする。

「それじゃあ本題に入るが……」

「その前に一つ良いか？」

しかし、気になる事があつたので一旦話を遮つた。

「ん、なんだ？」

「お前はノールのトレーナーだろ？　こんな所で浮気してて良いのかよ？」

ノールのトレーナーならノールに対してアドバイスするべきじゃないのか？

わざわざこうして他のウマ娘に助言する必要はない。やるならトレーナーじゃなくて教官の仕事だろう。

「その事か……俺はノールのトレーナーであいつを指導するのも目的だが、他にも目的があるんだよ」

「他の目的？」

「ああ、つっても詳しい内容を説明するのはこつ恥ずかしいから割愛するが……とにかく俺は担当のいないウマ娘の手伝いをしたくてな。これもその一環さ」

「だったら教官になればよかつたんじゃないやねえのか？」

「それは……色々あつたんだよ。流れてノールのトレーナーになつちまつた」

「ふーん……」

その経緯の内容が気になったが、追及すると話が脱線しすぎるので相槌を打って終わりにした。

「話が逸れたな、本題に戻ろう。さっきのレースを他の教官に録画してもらった映像がある。」

今からそれを見て、お前の走りの短所や長所を見つけて、それをどう改善するかを話し合う……ってという流れで進めていくぞ」

「分かった」

トレーナーが説明した内容はノールから聞いてた通りだった。

……それで速くなれるならいくらでもやってみよう。



## 十二話 才能

「……次ですね」

「そうやな」

トイレでジェミニと別れた後、スパさんと合流してレースの見学をしていました。

三つのレースを見終え、次はナイトが走るレースです。

「ナイトは病み上がりやけど大丈夫なんかな……」

「昨日の夜は「どれくらい調子が戻ったか確かめないと」って言ってました」

「ふーん……どつちつかずのコメントやな」

「あ、それと「明日のレースは私が勝つ」とも言ってました」

「お、おう……自信満々やん……。ナイトがそこまで言うなら今日のレースは決まりか

?

面子的めんつにもナイトが有力候補やし」

「……でも本当に大丈夫なんですかね？」

怪我から復帰したばかりのウマ娘が勝ったという話はほとんど聞きませんけど……」

今までのデータからすると、怪我復帰後はどんなにすごいウマ娘でも成績が芳しくあ

りません。

「それはそうやが……ナイトもその道理が分からんわけでもないやろうし、その上で勝つて宣言したんや。」

「少なくとも勝てる算段はあるはずやで」

「……そうですよね」

友達としてナイトには勝ってほしい……なのでスパさんの言葉を聞いて安心しました。

「つと、そろそろ始まりそうやな」

レース場の方を見ると、全員がゲートインを終え、後はレース開始を待つだけでした。自分が走るわけでもないのに緊張してきます。

ガコン！

ゲートが開く音と共に、全員がスタートを切ります。3枠のナイトは私のように出遅れる事もなく、好スタートを決めました。

ナイトはその勢いのままに先頭に立ちます。

あれ？ でも……

「……ペース、速ないか？」

「そうですね……ナイトは先行タイプなのにあれじゃ逃げのペースです」

「んー……イレギュラーを恐れたんか？」

前に誰か居たら垂れてきたり、進路ふさがれたりがあるかもしれんだけど、先頭を走ればそういう紛れが無くなるからな」

「けど自分のペースを崩してしまつては、最後の方でへばつてしまうのでは？」

「確かになあ……」

ナイトの走りに一抹の不安を抱えたままですが、レースはどんどん進んでいきます。

ナイトが先頭のままで集団は第3コーナーに差し掛かりました。

「……ナイト、全然ペースが落ちませんね」

「……これはもしかしたら……」

「スパさん、何か気づいたんですか？」

「あーいや、タイム見てないからどうも言えんけど……」

会話の間にもレースは進み、集団は第四コーナーへ。そこで先頭のナイトが更にペースを上げました。

「スパート!!? 逃げで!!?」

思わず立ち上がり、大きな声を出してしまいました。

普通、逃げのペースで走れば必要以上にスタミナを消費してしまう。

最終直線で更に加速する体力なんて……

「……いや、逃げやないで」

「えっ?」

「ナイトは自分のペースで走つてたんや。」

「周りと比べてナイトが速すぎるから相対的に逃げのペースに見えてただけで」

「……っ!」

「先行のペースで先頭に? そんなとんでもない事が……」

「なんやナイトの奴、怪我する前より速なつてるんやないか……?」

「秋華賞での記事の見出しは「ナイトグライダー、奇跡の大復活!」で決まりやな」

「そのままナイトは何バ身差か分からない程の差をつけてゴールしました。」

「圧倒的な勝利。その走りには怪我の影響など一切感じられません。」

「速い……一体どうすればあんな走りが……併走の時にも思つたけど、腕の振り、脚の」

「回転、脚と腕を連動させる腰と腹筋の強さ。多分ほとんど全部が私より高い水準に」

「ある。」

「……足の筋肉はどうなんだろう? 頼んだら触らせてもらえないかな……。」

「……ノール、立つんか座るんかはつきりしたらどうや?」

「え? あ、す、座ります……」

「興奮して立った状態から考え事をしながら座ろうとしたせいで、半端な中腰の体勢に」

なっていました。スパさんに声を掛けられ、改めて座ります。

「えらい真剣な顔つきやったな。何考えてたんや?」

「えつと、どうしたらナイトみたいに速く走れるかなって考えてました」

「ふーん……ノールも進歩したなあ」

「何の話ですか?」

「前にウチらでナイトのレース見に行った時は、ナイトの速さにキヤーキヤー言うだけやったけど、今は何か盗める事は無いかと観察してるやないか」

「あ、そう言われれば……昔の私はずいぶんともつたいないことをしてたんです。

こんなに理想のお手本があるのにただぼんやりと見ているだけだったなんて」

「……」

またナイトと併走したいなあ……そしたら近くでナイトの走りを観察できるのに。

でも難しいかなあ……私が相手じゃ今のナイトにメリツトがないし……。

「……本当に変わったな、ノールは。これもあのトレーナーのせい……いや、おかげか」

時間は過ぎ、模擬レースの日の夜。場所も変わって私とナイトの部屋。

二人で今日の事を話していました。

「はあく……お風呂入ったら急に疲れが出てきちゃった……」

「今日はお疲れ」

「そつちもお疲れ……すごかったね、今日のナイトの走り」

「そう見えた？ ……自分でも驚くぐらいの走りが出来たんだ。」

周りの景色は白くホワイトアウトして、普通なら感じられない物が感じられた。

芝が何枚靴に噛んでいるか……血液の循環……踏み込んだ時の筋肉の収縮まで……」

「なんていうのかな、レースを走るために必要な情報しか脳に入ってこなかったと言えば良いのか……神経が髪の毛や爪、果ては靴や蹄鉄にまで拡張されたような……とにかく今まで感じた事のない感覚だった」

ナイトは自分の手のひらを見つめながらしみじみとそう言います。

「もしかして……それって「超過集中（ゾーン）」って奴？」

「ゾーン？」

「あれ、知らない？ スポーツとかでよく言われるんだけど……」。

人もウマ娘も本能的に一つの事に完全に集中するのは難しいって言われてるんだ。

周りに気が配れないと外からの脅威に気づけなくなっちゃうからね。

けどその本能を凌駕した極限の集中状態……それが「ゾーン」って呼ばれてるんだ」「周りの警戒に割かれていた脳のリソースを何か一つの事に注いだ時、とてつもない能力を発揮するんだって。

ナイトの場合は感覚の拡張かな。靴や蹄鉄を自分の体のように感じた……一流のサッカー選手がボールを自分の体の延長のように感じるのの上位版みたいな感じ?」「他にも周りの景色がスローモーシヨンに見えたり、ゴルフとかだとカップの穴が別の物に……アリジゴクの穴やうず潮に見えたりするらしいよ。

それで見えたもの通り、中心に引き寄せられるようにカップインさせられるんだって。

「研ぎ澄まされた五感の情報すべてを無意識に統合して未来視に近い事が出来るようになるって話もあったかな。

人が反応できないスピード、更に予備動作がほとんど無い状態から繰り出されるジャブをボクサーが避けられるのはこのおかげだって」

そこまで一気に語りました。それに対してのナイトの反応は、

「……ず、ずいぶん詳しいね」

結構引き気味でした。

「あ……さ、最近読んだ本に書いてたから……あはは……」

一方的に喋ってごめん……」

知っている事なので、つい熱く語ってしまいました。

前のめりになっていた体を戻し、ベッドに深く座り直します。

「とりあえずゾーンについては分かった。でもどうしたらゾーンに入れるんだろう……？」

いつでもあの走りができれば、怖いもの無しなんだけど」

「うーん……意識的にゾーンに入るのは難しいと思うよ。」

気が付いたら入ってたって事がほとんどらしいし……それにゾーンに入っている事を認識した途端に集中力が切れる事例もあったらしいよ」

「そうなんだ……ノールはゾーンに入った事、ある？」

「私？ 私は……それらしき体験をした事は無かったと思う」

靴や蹄鉄にまで感覚が拡張したなんて事もなければ、血液の流れを感じた事も当然ありません。

「でも一回は体験してみたいなあ……自分の意識が一つの事、ただそれだけに注がれる感覚。」

それにゾーンに入るって響き、何かカッコいいし」



「カッコいいかどうかは置いて……ノールならいつかきつと入れるよ」

「だといいんだけど……ゾーンに入れるかどうかは生まれつきの素質に左右される部分  
が大きいんだよね。」

本能が強いと注意が散漫になりやすくて一つの事に集中できない。だから本能が弱い人ほどゾーンに入りやすいんだ」

「本能の強さ……何か見分ける方法ってあるの？」

「うーん……例えば耳をどれだけ動かせるかどうかとか？」

天敵のいた昔は、音がした方向に耳を向けて危険がないかを探る必要があったんだけど、天敵のいなくなった現代では危険を探る必要が無いから耳の筋肉がだんだん衰えて来てるんだ。

だから耳を良く動かせる人ほど、より野生に近い……つまり本能が強いんだって」

「耳……私はあんまり動かせない。親にも「あんたはあんまり耳に感情が出ないね」って言われたことがあるし……」

……  
ナイトが試しに耳を動かしていますが、少しぎこちないです。それに比べると私は

「ぐるんぐるん動くや、自由自在だよこれ……」

その自由さたるや、縦も横もどんとこいの可動域270°です。

「すごいね……宴会芸で使えそう」

「そんなものよりゾーンに入りやすい体に生まれたかったよ……」  
耳を伏せて落ち込みます。

「そんなに落ち込まなくても……他に指標になるものって無い？」

「他？ ……足の小指の関節の数とか？」

人やウマ娘の祖先である猿は木に登るために、足の指が長くて小指の関節も三個あるんだけど、木に登る必要がなくなった人やウマ娘の指は退化して短くなり、小指の関節も二個になったって言われてるんだ。

今でも足の小指の関節が三個ある人は、より野生に近い……つまり本能が強いんだって」

「ノールは？」

「……………三個」

自分の足の小指を見ますが、三つの関節がはつきりと確認できてしまいます。再度耳を伏せて落ち込みました。

「……………ま、まあでも体つきが野生に近いなら足の指も長いんじゃない？」

足の指が長いとしっかり地面を踏みしめられるからそんなに悲観しなくても……」

「指の長さか……ナイトのと比較してみても良い？」

「うん」

ナイトの右隣にまで移動し、同じベッドに腰かけます。私は左足、ナイトは右足の膝を立て、互いの足を並べました。その結果は……

「……ナイトの方が長い」

「そ、それは……ほら、私の方が足が大きいから必然的に指も長くなるし……」

「足の比率込みでも明らかにナイトの方が長い！ それに小指の関節は二個だし……せ  
いぜい」

「せこい、って言われても……」

「だって良いところ取りじゃん……私なんか短指に関節三個、恵まれてなさすぎだよ  
……」

自分の肩に頭を乗せ、再再度落ち込みます。

耳は完全に力を失い、重力に負けてしまっていました。

「か、関節の数や耳が動くかどうかでゾーンに入れるかがはつきり決まるわけじゃないし、そんなに凹まなくても……」

「でもゾーンに入ったことのあるナイトは耳が動かないし……関節二個だし……それに

指長いし……」

「それはそうだけど……」

ナイトは苦笑いをしながら返答に困っています。その様子を見て、自分でも子供っぽいいことを言ってしまったと思いました。

「……ごめんねナイト、拗ねた事言っちゃって。生まれつきの物に文句を言ってもしょうがないよね」

「ノール……」

立ち上がり、自分のベッドに戻ります。

「また明日から練習頑張らないと。本番のレースが一月後に迫ってるし」

「紫苑Sだっけ？」

「うん、近々出走表も出る予定……後一か月。」

そう考えるとトレーナーさんと出会ってから結構時間が経ったんだなあ……約二か月か」

この二か月、トレーナーさんの力を借りたおかげで飛躍的に成長できました。

細かい走りの改善に、ジェット走法の習得、模擬レースでも一着を取りました。

もしトレーナーさんと出会っていなかったら、どうなってたんだろう……。

無理なオーバーワークを続けて体を壊していた？ 闇雲にレースに出て、負け続けて

いた？ 自分には才能が無いからと諦めてトレセン学園を去っていた？

いずれにせよ、あまり碌な事にはなつてなさそうです。

そんな事を考えると、私を指導してくれたトレーナーさんに自然と感謝の念が湧いてきます。

それと同時になにか恩返しが出来ないかとも思いました。

……やっぱり私がレースに勝つ事が一番の恩返しになるのかな……？

トレーナーさんが私を指導し始めてから、私がレースで勝つたとなれば、それはトレーナーさんの指導力の証明になるわけだし。

そうして箔が付いたら、トレーナーさんの今後の活動の助けになるはず。

そう考えると、ますますレースに勝ちたいという気持ちが強まります。

……でも本人にこういう事言ったら、きつと「お前は余計な事気にしないでレースにだけ集中しろ。もしそれが原因で負けたら大反省会だぞ」とか言うんだろうな……。

脳内で勝手にトレーナーさんの言動を妄想していると、なんだか可笑しくて口元が緩んでしまいます。

「ノール、どうしたの？ 急に黙つたと思つたら今度はニヤけて……」

「え？ あ、いや、何でもない……／＼／＼」

そ、それよりもうこんな時間！ 早く寝ないと！

締まりのない顔を見られて、恥ずかしい思いをした私は時刻を理由に、その場をはぐらかしました。

ベッドに横たわり、布団を被ります。

「じゃあ、お休み」

「お休み」

リモコンで電灯の灯りを消し、目をつむりました。 ▪

(side ナイトグライダー)

「……」

暗い部屋の中、寝る為に目を閉じる。そして眠りにつくまでの少しの間、考える。

……今日のノール、すごかった……。特に最後の直線。

1800mも走っているのにあれだけ加速できるなんて……。

オリジナルのスパさんほどではないにしろ、中距離であの追い込み速度は相当強い武器になる。

併走した時とはまるで別人の走りだった。私の想定をはるかに上回るノールの成長速度。

……ノールと一緒に競争する日もそう遠くはないかもしれない。

同じ芝の上に立てば敵同士、勝つか負けるかの真剣勝負。

一つしかない一着の座をノールと奪い合う事になる。けど……

怖い。友人の一着の座を奪うのが。

嫌だ。誰かに一着の座を奪われるのは。

もしもノールと同じレースを走る事になった時、きっとこの相反する感情を処理しきれそうにない。

その瞬間を想像しただけで憂鬱になる。

けれど昨日ノールが言っていた通り、近い内にどうこうなる問題ではないと思う。

……その時が来れば考えれば良い、か……。

そう思う事で一旦は心に整理を付けた。できればその時なんていうのは来ずに、杞憂で終わって欲しいものだ。

## 十三話 紫苑S 出走表

模擬レースの日から数日が経ちました。模擬レースにおいて勝利を収めた私ですが、改善すべき点はまだまだあります。

ひとまず、模擬レースでやらかしたスタートの練習と、メンタルトレーニングを新しく取り入れて頑張っています。

そんなある日のお昼。ナイトを昼ごはんに誘いました。

「ナイト、お昼一緒に食べない？」

「……っ、い、いや、今日も用事があるから先に食べて……」  
するとそう返されます。

内容は不自然なものではありませんが、私に声を掛けられた時の驚き様は変です。それに加えてナイトにお昼を断られるのはこれで三日連続。

基本的にお昼はナイトと食事をするのがほとんどなので、珍しい現象でした。

ともすれば避けられているような……。

「そう？ 分かった」

とはいえ三日連続で都合が合わない事も無いわけではないでしょうし、単純に人と距



離を置きたいだけかもしれませんが。

です。その場はすごとと退散しました。

「でも、ここ数日は夜にもあんまり会話しなくなっちゃったんだよね……やっぱり避けられてるのかなあ……？」

「知らねえよ……っーかなんでそんな事を俺に相談してくんだよ……」

場所は変わって食堂。

ナイトが捕まらなかったの、代わりに偶然見つけたジェミニの対面に座りました。そして最近あった事を吐露します。

ちなみにジェミニとは模擬レースの日以降、一緒に練習したり、お互いの走りを確認し合ったりするぐらいの仲に発展しました。

「だって他に知ってる人が捕まらなかったから……」

「だからって俺のところに相談しに来るか？ 普通？」

「迷惑だった？」

「迷惑、つてわけじゃねえけど……。あんまり得意じゃねえんだよな、そういう話……」

「確かにこういう悩みとは縁がなさそうだよな、ジエミニは」

「……どういう意味だよ」

「いやジエミニってズバズバものを言うタイプだから、こういう曖昧な悩みとは縁がなさそうだなって……」

「……遠慮のない奴で悪かったな……」

ジエミニは目を逸らしながらそう呟きます。

さっきの発言が受け取り方によっては社交性のない奴だ、みたいな悪口に聞こえることに気づいた私は急いでフォローします。

「け、決して皮肉とか悪い意味で言ったわけじゃないんだけど……」

「……はあく……まあ良いけどよ」

ジエミニは怪訝そうな目をしますが、諦めたようにため息をつきました。一応納得してくれましたようです。

「それで？ 飯に誘っても付き合ってくれないって？」

「うん。普通は二人で今日あった出来事とかを部屋で話し合うんだけど、それも最近は無くなって……というか、よそよそしくなったんだ。

部屋に帰ってきてからはずっと勉強したり、本を読んだりしてるし、寝る時間も

速くなったかな。

夜は早く寝て、その分朝早く起きて朝練行ってるみたい」

いつもは同じ時間に寝て、同じ時間に起きていたのですが、最近は私と生活リズムをずらしているのです。

「まるでお前を避けてるみたいだな」

「うう……やっぱりそうなのかなあ……？」

冷静に考えると、やっぱりそういう事になってしまいます。

「でも避けられる心当たりがないんだよね。失言をした覚えは無いし、いつも通りだったと思うけどなあ……」

「ホントか？」

「うん……多分……おそらく……」

「はつきりしねえなあ……」

「私が気づいてないだけで、もしかしたら気を悪くさせちゃったかもしれない可能性があるから……」。

いや、でもそんなことは無いと思うけどなあ……。

避けられ始めたのは夜からで、その日の朝はいつも通り接してたし、日中も珍しい事に全然話をしてなかったから」

顔を合わせてないのに避けられるという事態になるのはどうにも不自然です。それとも朝の私に問題があった？

とはいえ、数日前の自分の行動を逐一覚えてはいません。答えの出ない問題に頭を悩ませていると、

「……案外お前の方じゃなくて、相手の方に問題があったりしてな」

ジェミニがそう言いました。

「相手に？」

「お前に心当たりが無いならそうとは考えられねえか？」

「それは……そうかもしれないけど」

相手に問題がある。思いつきもしませんが、ナイトの方に何かがあつて、私を避けるようになったのなら今のこの状況も納得です。

「それはそれでもどかしいなあ……私からは何にもできないし」

ナイトが私に何も言ってくれないという事は、私に伝えにくい事が原因で今の状況に至っているはず。

であれば、私が理由を尋ねても答えてはくれないうでしょう。

「諦めて時間が解決するのを待ったらどうだ？ どうしようもない事に気を揉んでも損するだけだぞ」

「うくん、でも夜が気まずいんだよね……」

練習終わってから寝るまで同じ部屋に居るけど、一言も喋らないってのは……」

ここ数日は夜の会話時間をトレーナー居室から借りてきた本を読むことに費やして、時間をつぶしていますが、やはり居たたまれない空気に息が詰まりそうになります。

ナイトの方を気にしてしまい、読書がはかどらない事も。

「あゝ、同室相手だったっけか。……めんどくさそうだな、相部屋つてのは」

何となく引つ掛かるジエミニの台詞。

まるで彼女が相部屋ではないかのような言いぐさです。

トレセン学園の寮に住む以上は、基本的に二人部屋になるはずですが……

「ジエミニつて相部屋じゃないの？」

素直に思つた事を聞いてみます。

「俺は一人で部屋を使つてるぞ。たまたま寮の人数が奇数で、あぶれでもしたかな」

「二人……じゃあ部屋を全部自分のスペースに出来るじゃん！ 広く使えてうらやまし

いなあ……」

「つつても持ち込んだ私物が多いわけじゃねえし、そんなにスペースは必要ねえんだよな……、まあ頻繁に整理整頓しなくても良いのは楽だけだよ」

「つてことは部屋、散らかしてるの？」

「言い方……汚くはないが綺麗でも無えぐらいだな」

「ふーん、一人暮らしの部屋かぁ……少し見てみたい気もするな」

「だったら……」

と、そこでジェミニの口は固まりました。そのまま何も言葉を発しません。

「だったら……何?」

「……いや、何でもねえ。気にすんな。それより今はお前が抱えている問題の話だろ」

その後もジェミニと話しましたが、結局は様子を見るといいう無難な結論に落ち着き、

昼休みは終わりました。

午後の授業も終わって放課後。今日も練習前のミーティングのため、トレーナー居室に向かいました。

「失礼します」

居室の扉を開けながらそう言い、部屋の中に入ります。

「……………」

しかし、トレーナーさんからの返事はありません。いつもなら適当に声を掛けてくるのですが。

もしかしてカギをかけ忘れたまま、留守にしてる……？

一瞬だけそう思いましたが、部屋の中にトレーナーさんの姿が確認できたので、そうではないようです。トレーナーさんは自分の机に座り、プリントを一枚手に持っています。

「何見てるんですか？」

私はトレーナーさんの近くに寄り、手元を覗き込みました。見出しの部分には太文字で「紫苑S 出走表」と書かれています。

「あ、出走表！ 今日出たんですか!?! 見せて貰っても!?!」

「え、あ、ああ……」

目標レースである紫苑Sの出走表を前に浮かれた私は、どこか戸惑った様子のトレーナーさんには気づかないまま。

出走表を半ば強引に奪い取ります。

「私は……また一枠だ」

模擬レースと同じ一枠。走る距離は一番短くなりますが、スタートが遅れれば地獄を見る枠番。

あの時みたいに出遅れないように、スタート練習頑張らないとなあ……。

そんなことを考えていると、一瞬だけ目に入ってきた名前が私の視線を強烈に奪いました。

「……………え？」

見間違いかと思い、指でなぞりながらゆっくりとその文字を読み直します。

「……………なんで……………」

しかし、見間違いではありません。

2 枠 ナイトグライダー

私の名前の隣にそう書かれていました。

(side ナイトグライダー)

数日前

「え……………？ スケジュールの変更ですか？」

「はい。その……………大変情けない話ですが、予定を勘違いしております」



練習終わり、トレーナーの居室で明日のトレーニングの計画を立てていると、雑誌編集者から急に電話が掛かってきた。

曰く、予定を勘違いしていたらしい。

「いつの予定ですか？」

「それが……その……」

私がそう聞くと、電話の向こうで編集者は言い淀み始める。しかしそれも少しの事で、意を決したのかはつきりと告げる。

「……9月19日に入れていた写真撮影の予定ですが、本当は9月27日でした」

9月27日。その日は……

「ローズSの日……」

私が出場するつもりだったレースがある日。

「はい……本当に申し訳ありません。全てこちらの不手際です。私が責任を持って代役を探しますので……」

「ちよつと待つてください。少しトレーナーと相談してみます」

電話の方は一時保留にし、トレーナーの方を向いた。

「一体何があった？」

電話の内容が少し聞こえていたのか、私にそう聞いてくるトレーナー。

「実は……」

読者モデルの仕事と私が出場するつもりだったレースがダブルブッキングしている事を話した。

「それは間の悪い……しかし次のレースに出ないわけにも行かないだろう。」

模擬レースでは良い走りが出来ていたが、復帰後すぐに本命の秋華賞に出るのは準備不足が過ぎる。

間に一つレースを挟まないと……」

「それは分かっている。けど替えがきくならモデルの仕事もしたい。」

だから他に前哨戦に出来そうなレースがあればそっちに出ようと思う」

「他にか……少し待っていてくれ」

トレーナーは机に置いたパソコンを触り、私の予定とレースの予定を調べてくれる。

「にしても改めて見ると学生離れたスケジュールだなこれは……下手な社会人よりも忙しいんじゃないか？」

「モデルもレースも手は抜けないから」

「俺の半分以下の歳なのにしっかりしてるねホント……つと、一応候補があつたぞ。」

9月19日の紫苑S。GIIだからローズSと比べてグレードは一つ下がるが、同じ2000m」

9月19日……ちょうどモデルの予定とレースの予定が入れ替わりになるわけだ。

「会場は？」

「中山競技場だな。あいにく、今年の秋華賞と同じ阪神競技場とはいかないが……たまたま台には良いレースだと思うぞ。出走届提出もギリギリ間に合う」

「……分かった。じゃあ、そのレースに出る」

「了解。手続きはこつちでやっておく」

「ありがとう」

「トレーナーの仕事だ、礼を言われる程の事じゃない」

トレーナーはそう言いながら、電話をかけるような仕草を私にして見せた。

それを受けて、保留にしていた電話を再開する。

「仕事の話ですけど、大丈夫です。」

レースと入れ替わりで予定を立てる事が出来ました」

「そうですか……」

電話越しでも雑誌編集者の安堵の感情が伝わってきた。

「ナイトさんの方で都合をつけていただき、本当にありがとうございます。」

「これからはミスの無いように、二重、三重のチェックを入れますので……」

「はい、分かりました。今後よろしく願います」

「はい、それでは……」

それを境に通話を切った。

一時はどうなるかと思っただけ、丸く収まって良かった……。

自然と安堵のため息が出てきた。

それも束の間、すぐに気合を入れ直し、予定が変更されたレースの事を考える。

紫苑S……中山競馬場は高低差が激しい。明日からは坂の練習を取り入れて

……紫苑S……？

(私は同時期に紫苑Sに出るんだ)

脳内で、突然ノールの声が再生される。頭を殴られたような衝撃を錯覚した。

紫苑Sって……確かノールが出るって言った……。

その事実を今になって思い出し、顔から血の気が引いていく。

いつかの夜に杞憂だと切り捨てた可能性が、まるで悪魔に導かれたかのように現実の物となったのだから。

その事実にかなり動揺したが、何度か深呼吸をすると多少は落ち着いた。

今からでも遅くない、トレーナーとマネージャーに事情を話して……どうする？

「知り合いが出るレースで一緒に競いたくないので、さっきの話は無しにしてください」  
とも言うのか？ ……あまりにも幼稚な……。

それに編集者の人もがっかりするはず……ミスの埋め合わせが出来た所を私のわがままでまた掘り返す事になる……。

いやでも元々は向こうのミスで、それが元通りになるだけだから……。でも私のわがままってだけでそんな……。

「ナイト、どうした？ そんなところでぼーっと突っ立って」

「っ！」

情緒と思考が不安定な所に、トレーナーから声を掛けられ、体を硬直させてしまう。

しかし、すぐにトレーナーの方を向いて装いを取り繕った。

「……あ、いや、大丈夫。少し考え事をしてただけだから……」

「そうか？ なら良いが……」

不思議そうにしているトレーナーをひとまず放っておき、再度思考を巡らせる。

けれど交流のある人に迷惑を掛けることを極端に恐れる私は、いくら考えても決断を下すことが出来なかった。

結局、私は折り返しの電話をしなかった。

それはノールと戦う腹を決めたわけでも何でもない。ただ決断しなかっただけ。

そのままレースに参加が決まり、引き返せなくなるその時まで時間切れを待った。

## 十四話 弱気

出走表を見た日の夜。

私は自分の部屋で、ナイトと二人きりの気まずい空間に晒されていました。

「……」

「……」

ここ最近では会話のない夜を過ごしていた私たちですが、今日はそれにも増して雰囲気  
が重く感じられます。

今読んでいる本から目を上げ、ナイトの様子を窺います。

すると向こうも私の様子を窺っていたのか、目が合いました。

「っ……」

しかし、ナイトはすぐに私から目を逸らします。そのまま膝を抱え込み、ベッドの上  
で三角座りの体勢に。

まるで殻にこもってしまったかのよう。

……今日まで余所余所しかつたのは私と同じレースに出る事、気にしてたからなのか  
な……

ナイトが近しい人と競い合う事を嫌っている、と話してくれたのは少し前の事でしたっけ。

その時、私とは別のレースに出るといふ話もしてくれました。

それがどうして私と同じレースに……わざわざ私のレースに被せたって事は無いと思うけど……。

何か事情があるのかそれとも……

とにかく一人で考えてもしょうがないと思った私は、ナイトに話しかけることにしました。

「……その、一か月後だね。レース」

「……」

「出走表を見た時は驚いちゃった。

まさかナイトと一緒に走る事になるとは思ってもなかったから……」

「……」

「ナイト、模擬レースでは凄い走りだったから、私も一層頑張らないとね……」

「……」

適当に言葉を投げかけますが、ナイトから反応はありません。

気、気まずい……。

一方的に話すのに限界を感じた私は、口を閉じます。

その日はそれ以降、一言も交わすことなく二人とも就寝しました。

「……というわけなんですけど」

「なるほどなあ……」

ナイトとの気まずい夜を過ごした翌日。私はスパさんに相談しに行きました。

「競い合うのが怖い、か……難しい悩みやな」

「どうすれば良いと思いますか？」

「……………」

スパさんはかなりの間沈黙した後、

「……悪いけど、力にはなれそうにないわ。」

ウチはそんな事思ったこと無いからかけるべき言葉がまったく思いつかん」

そう言いました。

「うーん……そんなに気にする事じゃないと思うんやけどなあ……。」



走る以上、勝った負けたは当たり前。勝った方は嬉しい、負けた方は悔しい……そういうもんやないんか？」

「スパさんにとつてはそうかもかもしれませんけど。ナイトにとつてはすごく気にする事なんじゃないですか？」

同じレースに出る以上、そのメンバーで一着の奪い合いになるわけで。

競争相手と認識してるならともかく、友達からその座を奪う、つて考えると気が引けるのは何となくわかる気がします」

それに加えてナイトは人間関係に対しては神経質な所があるので、ひとしお、といったところででしょうか。

「ん〜……あかん。全然共感できへん。何か他に良い例えはないんか？」

「それなら……例えばスパさんが友達と二人で限定スイーツを食べに行つて、ウキウキしながら待つてました。

しかし「すいません。限定スイーツは残り一つしかありませんでした」と店員が言い、運ばれてきたスイーツは一つだけ。

それを友人そつちのけにして一人で食べる、またはそつちのけにされて食べられる……みたいな心境に近いんじゃないですか？」

「それは……い、いたたまれんわ……」。

飯にそんな事態になったら、食ってる方はスイーツの味なんかせんやろな……」  
スパさんはぞっとした様子で目を細めます。

しかし、すぐに切り替えて私に質問を投げかけてきました。

「ナイトがそう思つとるのは分かったけど、ノールはどうなんや？ ナイトと競争する事、どう思つとるんや？」

「私ですか？ 私は……ナイトと競い合う事がどうこの前に、まず勝てるかどうかか怪しいですから……。」

模擬レースを見ましたけど、あの時のタイムで走られたらまず私じゃ勝てません。

だから今はどうしたらナイトに勝てるようになるかを考えるので手一杯で、心情的な事は後回しですね……。」

私の自己ベストより速いタイムでナイトに走られれば、私には為すすべありません。

ならば私はどうするべきか。単純に練習を重ねて走力を伸ばすべきなのか、ナイトを徹底マークして本来の走りをさせないようにするべきなのか、はたまた他の方法を考えるべきなのか……。」

「ノール……ノール！」

「……え？ あ、すいません……考えこんじゃって……。」

スパさんが私の肩をゆすつてくれた事で、飛躍してしまった思考が戻ってきました。

そのまま話を戻します。

「……まあ確かにノールはその心配が先やな。

ナイトはクラシック世代の中でもトップクラスのウマ娘や。

それに勝つとなると……まあ尋常な事やないやろうな」

「じ、尋常って……でもそれくらいには遠い道のりつて事ですよね……」

難しい、とか困難、とか他にも言い回しはあつたはずなのに、「尋常ではない」という言葉選び。

しかし、その表現に納得してしまう程には、ナイトと私に走力の差がある事を感じていました。

後一か月足らずでその差を埋めるなんて、どうすれば……

再び思考の海に沈みそうになった意識を引き上げ、スパさんとの会話に集中します。

「ま、とにかくナイトがノールを避けとるんなら、ウチの方でナイトと話をしてみるわ。根本の解決は難しいやろうけど、気休めぐらいは出来ると思うしな」

「本当ですか？ そうしてくれれば助かります。ナイトにどうしたら勝てるかで頭がいっぱいとは言ったものの、やっぱりナイトが調子を落としていると、私も影響されちゃいますから……」

これから毎日あの気まずい夜を過ごすと思うと、それだけで気が滅入りそうです。

このままだと私もナイトも調子を崩して、レースどころではなくなるかもしれない。

……もし私だけ平気な顔が出来てれば、ナイトだけ調子を崩して勝ちの目が見えたりしたのかな……。

そこまで考えた所で、頭を振りました。いくら勝ちたいとは思っても、そういう事に期待するのはいけないと思ったからです。

「とにかく、ウチが出来る事はやっとかからノールは練習に集中しいや。」

変な悩み事に囚われて、二人とも全力が出せんような事態になったらレースを見に来る人も、見に行くウチもがっかりやで」

「そうですね……」

私の場合は今日まで指導してくれたトレーナーさんに対しても面目が立ちません。この問題は速く解決しないと……

しかし、有効な解決策を思いつく事なく、その場は解散しました。

「……って事だったんだけど、どうすれば良いかな？」

「昨日の今日で原因究明かよ……そんでまた俺の所に相談しに来んのな……」

時は変わってお昼時。昨日のようにジェミニの対面に座り、半ば無理やり昼食の席を共にしています。

「ジェミニには昨日も相談したから、説明が楽だと思つて……それで、どうすれば良いと思つう？」

「どうすれば、つて言われてもな……結局はそいつの問題だろ？ お前にはどうしようもねえよ」

「ど、どうしようもないって……」

かなり乱暴な言い分に、少しももってしまいます。

「流石にどうしようもないって事は無いんじゃないや……」

「どんな気休めの言葉を掛けた所で一時しのぎだし、説教臭く論したところで他人を変ええる事は出来ねえ。」

そいつ自身が、自分の意志で考えを変えなきゃ何の解決にもなりやしねえんだ。だからお前に出来る事は何にもねえよ」

「うゝん……」

あまりに極端な意見。ジェミニらしいと言えばそうかもしれませんが、私からすれば

とても賛同できる物ではありませんでした。

「そんな事無いと思うけどなあ……。」

他人を変えることは出来ない、って言うけど、私はトレーナーさんの言葉に影響されて考えが変わる事があったよ。

確かに与えられる影響は小さいかもしれないけど、出来る事が無いつてことはないんじゃない？」

私がそう反論すると、ジェミニは口元を手で覆い隠しました。

隠してはいるものの、手の隙間から口角が上がっているのが少し見えたので、どうやら笑っているようです。

「なんでそこで笑うの？」

「……いや、悪い。お前の意見を笑ったわけじゃねえんだ。ただ、俺が思った通りに話が進んでなんだか可笑しくなっちゃった」

ジェミニは手を机に降ろし、笑ったまま続けます。

「さっき俺はお前に対して持論を喋ったけど、お前はなんだかんだでそれに反論して聞き入れなかった……俺の言葉じゃお前を変えられなかったってわけだ。」

この展開がそのまま俺の考えを裏付ける根拠にならねえか？」

「それは……ん……確かに……。」

やりこめられたようで少し不本意ですが、自分自身が体験したことを引き合いに出されては納得せざるを得ませんでした。

……やっぱりナイトを説得するのは無理なのかなあ……。

そこで、ふと思いました。

「ん？ でも今、私、考え変わりそうだったよ!？」

他人の考えを変えられないのかな、って思った。ジエミニの言葉を受けてさ!

これって他人の考えを変えられる根拠にならないかな? ……あれ? 何か矛盾してるような……?」

自分で言っていてよく分からなくなってきました。

顎に手を当てて考え込みますが、上手く頭の中を整理できません。

「それ以上は堂々巡りだぞ……とにかく! 俺とお前、どっちの意見が正しいかは場合によるだろ」

「結局ケースバイケースって事?」

あれ程、「これが正しい」と言わんばかりに堂々と語っていた割には、場合によるという結論に。少し拍子抜けです。

「……それでも一つだけ言えるのは、感情に起因している考えを変えるのはかなり難しいって事か。」

いくらデータを並べて理論立てても、そいつがどう感じるかを变えるのは厳しいだろうしな」

「うーん……」

感情を説得するのは無理……か。

そう言われれば確かにそうだと思います。

「理論がダメなら……こつちも感情で対抗する、とか？ ……安易な考えかもしれないけど」

「それが良いんじゃないか？ お前が思ってる事全部ぶちまけちまえよ。」

「上から目線で偉そうに語りやがって、勝って心を痛める心配をするより、見下してるやつに負けて後悔する心配をするんだな、慢心野郎が。首を洗って待つとけ！ ……とか」

「そ、そんな事私思ってもないけど!？」

ジェミニは私の心を代弁するかのよう語りましたが、その内容は私の心にはかすりもしていません。

思わず声を荒げて反論してしまいました。

「それ以上から目線で見下してるって……勝手な事言わないでよ。ナイトの事を良く知りもしないのに」



そしてナイトの気持ちまで悪く推し量った事を非難しました。

しかし、ジェミニは毅然とした態度のまま話を続けます。

「お前からの話を聞く限りだと、そいつの言い分は勝つ事が前提じゃねえか。

お前に勝つのは大前提、それはそれとして友人から勝利を奪ってしまって心が痛む……って事だろ。

そのどこが上から目線でもなく、見下されてもないって言えるんだ？」

「……………それは……………」

ジェミニの言葉に対し、反論しようと思えば出来たはずですが、私の口は上手く動きませんでした。

それはジェミニの言葉が事実だからというわけではなく、自分自身がその言葉を認めってしまったところが大きいと思います。

私とナイトが普通に競走すれば、まず間違いないナイトが勝つ。

それが私の中に前提としてあったため、妙な納得感を得てしまいました。

「そこで黙っちゃおうのかよ……………」

ジェミニは面白くなさそうに頬杖を突きます。

「黙るって事は認めたって事だぞ」

そして私を責めるような口調でそう言います。

「……だってその前提、正しいから……ナイトがそう思ってるかどうかは置いておいてね」

「だったらレースを棄権したらどうだ？ 負けるのが前提ならレースに出る意味はねえ。」

「そうすりゃ相部屋相手の悩みも解決するぞ」

煽るようにそう言われ、私はかっとなつて言い返します。

「今の段階ではつて話！ まだ一か月あるからそれまでにかする……つもり……だけど……」

感情的に言い返したものの、勝つための具体的な案を思いついていないので、後半の方は尻すぼみになってしまいました。

「……その様子じゃ、どうにも出来なさそうだな」

ジェミニにも見抜かれたようです。

「うん……後一か月、普通に練習してもゴマ粒程度から米粒程度の勝算になるくらいだと思う。」

かといつて今から劇的に速くなる方法を知ってるわけでもないから……」

ジェット走法を習得することで、劇的に速くなれたものの、もうすでに習得してしまつた今、他に速くなる方法の見当は全く付いていません。

「一か月……後一か月……一か月かあ。……………あ〜！ 時間が全然足りない！」

画期的な練習方法を考える時間も、練習して上達するための時間も足りません。

制限時間がある事を意識してしまうと、嫌でも焦燥心が湧いて出てきます。その上ハードルも高いと来たものだから尚更です。

後一か月でナイトに勝つためには……。

そう考えると、自然に模擬レースでのナイトの走りを思い出してしまいます。

後続を寄せ付けない圧倒的な走り……追いつく妄想をするのすらおこがましいと思ってしまう程でした。

「……そもそもどれだけ時間があつて練習出来ても、あの走りとは勝負するなんて無理なんじゃない……」

「……」

模擬レースを観戦していた時は、ナイトの走りに感動し、少しでも何かを盗めないものかと謙虚な思いを抱きました。

しかし彼女と競争するとなつた今では、その感動の分、弱気な思いが溢れてきます。

ナイトはデビューしたての頃からトレーナーの指導を受けてGIのレースに出て、勝つて……対して私は最近トレーナーさんと会って、そこから頑張り始めて……大きな差があるのは当たり前で……

一度心の栓が外れると、ドンドン弱気な考えが湧いて出てきます。それにナイトはゾーンにも入れるし、足の指も長かったな……。

それに身長も高くて……私には無いものをいっぱい持つてる……。

どれだけ頑張っても埋められない差もあつて……。

持つて生まれた体の造り。それらで優位に立たれている以上、どれだけ頑張つても最終的にはその差が出てしまうのではないのでしょうか。

「やっぱり棄権した方が良いのかな……」

その瞬間、頬を引つ張られました。

「い、いひゃい……いきなり何!？」

「……別に、ちよつとイラツとしただけだ」

「ど、どこにそんな要素が……? 私、一人で考え込んでただけけど……」  
いきなりの事にそう聞き返します。

「独り言が漏れてんだよ」

「え……口に出てた?」

「ばつちりな。やっぱり棄権した方が良いのかな……なんて弱気なこと言いやがつて」  
「で、でもそれはジェミニから言い出したことじゃん……」

「阿呆、冗談に決まつてるだろ。そんな時はお前も言い返したじゃねえか」

「でもよく考えると、やっぱり勝ち目が無いと思って……」

「……だから諦めるのか？」

「……棄権、は言い過ぎだったけど、勝ち目が無い勝負に出る意味は無いのかな……って思った」

「……チツ」

ジェミニは大きく舌打ちをした後、私の方に大きく身を乗り出してきました。私とジェミニの間にはテーブルが挟まっているにも関わらず、ジェミニの顔がすぐ目の前にあります。

「あのなあ……お前がそうやってウジウジしていると、お前に負けた俺の方が情けなくなってくるんだよ。」

俺はこんな根性なしに負けたのか……ってな。

走る前からウダウダ言う前に、もっと考えろ、練習しやがれ。そうやってお前は俺に勝つたんじやあねえのか？」

ジェミニは私の首元に指を突き付けながらそう言います。

口調こそ落ち着いたものですが、強い怒りが伝わってきました。

「……そう、だね。……ごめん……」

ナイトと私の間には大きな差があるものの、それを理由に無理だと勝負を諦める事

は、ジエミニをないがしろにする事に繋がります。

それに、なにより私を担当してくれたトレーナーさんや、特別に指導してくれたスパさんをないがしろにしてしまうような気もしました。

そういうしがらみが、萎えかけた私の心を何とか支えてくれます。

「ふん、分かりやあいんだよ……」

私の言葉を聞いて矛を収めてくれたのか、ジエミニは椅子に座り直しました。

「ま、これで精神面は何とかなったが……とはいえ現実問題、勝つのは難しいんだろ？」

「うん……今のままだと多分、ナイトの不調かミスを待つしか勝ち目が無いかな……」

「それは……かなり消極的だな。」

何かこう、ジャイアントキリングを達成する方法でもありやあいんだが……」

そこからは無言の時間が続きました。

思案しますが、今まで思いつかなかったのに、ここに来て急にひらめくという事は当

然無く……

「……何か思いついた？」

ジエミニにそう聞いてみます。

「……いや、これといったのは思いつかねえ」

「だよね……」

しかし期待通りの返答は得られませんでした。やはり一筋縄ではない問題のようです。

「学力テストとかだったらヤマ張るなりして上振れを狙えるんだが……レースとなるとそうもいかねえだろうし……」

「……ヤマ、かあ……」

ヤマを張る。ジエミニの何気ない一言が少し引つ掛かりました。

しかしそれが具体的な何かに昇華される事はなく、予鈴のチャイムが鳴ります。

「もうこんな時間か」

「結局何にも思いつかなかったなあ……」

「というか話が凄い脱線してたような気が……初めは何の相談だったっけか？」

「えっと……同室相手についての相談、だね。……結局はその問題も残ったままだし

……」

「そつちについては放置でもいいんじゃないか？ 相手が勝手に調子崩してくるんなら万々歳だろ」

「私もその子に影響されて不調気味なの……今日のウジウジもそのせいかなあ……」

そう言った後、机に力なく突つ伏します。ナイトの事とレースの事。

一つでも手に余るのに、二ついつぺんに抱えてしまつて、正直キャパオーバー気味で

す。その事を再認識すると、改めて気が重くなってきました。

「……ま、弱った時はまた相談しに来い。喝ならいくらでも入れてやるからよ……」

お通夜ムードの私を見かねたかのか、そう言ってくれるジエミニ。

目線を逸らし、少し恥ずかしそうにはありますが。

私がナイトとの大きな差に打ちのめされそうになった時も、今さつき元気がなさそうにしていた時も言葉を掛けてくれたのは、やはり私の事を思つての事でしょう。

「……うん、ありがと。優しいね、ジエミニは」

今は素直にその厚意に甘え、お礼を言います。

「……べ、別に優しいなんてもんじゃねえよ。」

ただ、昼飯時の話し相手にちようど良いつてだけだ……／＼／＼ ほら、早く教室戻るぞ」

お礼を言われるのが恥ずかしかったのか、誤魔化すように席を立つジエミニ。その後にも続いた。



## 十五話 天啓

ジエミニに喝を入れてもらってから、午後の授業を終えて放課後になりました。今はトレナーさんに立ち会ってもらいながら、トレーニング前の準備運動をしている最中。

「あの、トレナーさん。ちょっといいですか？」

「ん？ なんだ？」

午後の授業中ずつと、ナイトに勝つためにはどうすれば良いかを考えていましたが、結局は昼休みの時と同様、何も思いつきませんでした。

そこでこの件について、トレナーさんに相談してみようと思ったのです。

「トレナーさんも出走表は見ましたよね？」

「ああ、見たが……」

「ナイト……ナイトグライダー。彼女に勝つためにはどんな練習をすれば良いと思いますか？」

正直な所、今のままの練習を続けても彼女に勝てるとは思えないんです。

模擬レースの時に見た彼女の走りと自分の走りを比べて、その差に途方に暮れるばか

りで……」

「……………」

私が思っていることを全て話すと、トレーナーさんはしばらく黙り込んでしまいました。

「……確かに、今のままじゃアナイトグライダーに勝つのはかなり難しいだろうな」

「やっぱりトレーナーさんから見てもそう思いますか？」

「ああ……あいつはお前の同期の中でも頭一つ抜けた実力を持つてる。」

普通にレースをすれば百回やっても一回勝てるかどうか……。

唯一、期待できそうなのは怪我復帰後の初レースという点だが……模擬レースで走っている映像を見た限りでは怪我の影響は見られなかったな」

「……………望み薄ですね……………」

トレーナーさんの口から私が勝てそうに無いという発言が飛び出し、私の心はどんどん落ち込んでいきます。

それでも何か起死回生の方法があるのでは、と期待して続きを聞きます。

「ここでお前の質問、彼女に勝つためにはどうすれば良いか、だが……はつきり回答すると、分からない、だな」

「え……………」

しかしその期待は裏切られました。

「後一か月という短い期間で、彼女に匹敵するだけの速さを手に入れるのは無理だ。俺が知っている知識の内ではな」

「そ、そうなんです……でも、私は二か月でかなり速くなれましたけど……」

「それは出来ていない部分が多かったからだ。少し気を付ければ直せる粗（あら）、それを改善していったから飛躍的に成長できた。」

それとジェット走法を習得できたことも大きい」

「だが今はすぐに直せる粗（あら）はほとんどなくなり、新しい走法の習得もこれ以上はメリツトが無い。」

ここからは地道な研鑽を重ねて走りを徐々に洗練させていくしかない。そしてそれは短期間で大きな成果が出るようなものじゃない」

「……」

トレーナーさんは淡々と今の状況を私に説明します。

「レースに出る以上勝ちたい、って気持ちは分かる。」

お前の場合は特にだろうが……勝負つてのは全部勝たなきゃいけないわけじゃないし、全ての勝負に勝てる奴なんかいない。

負けから学べる事もある。今回は相手も悪いしな」

「……だから今は地道に練習を積み重ねるべき、って事ですか？ 特別な事はせずに……」

「長い目で見ればな……」。

負けが濃厚だと分かっている、その次を見て腐らずに練習することも大切だ……俺はそう思うぞ」

「……そう、ですよね……」

トレーナーさんの話を聞いた私は自然と同意の言葉を口にしていました。

それはトレーナーさんの話が正しいと思ったのが半分、同意することで、楽になりたいたというのが半分でした。

どうしたらナイトに勝てるのか……それについて半日悩んでいましたが、答えは全く見えませんでした。

今までは自分のやるべきことがはっきりしており、それを毎日こなしていくだけ。

しかし、今は何をやるべきかを自分で見出さなければならず、それなのに何も思いつかない現状に、ひどい閉塞感を感じています。

例えるなら今までは亀裂の入った壁を登ろうとしていたのに対し、今は真つ平らな壁を登ろうとしているようなものでしょうか。

亀裂の入った壁は、亀裂のガイドに従って登っていくだけ。その道が険しくとも、進

むべき道が見えている以上、道中で迷ったりはしません。

しかし、真つ平らな壁を登るには、まず自分で亀裂なり突起なりの取っ掛かりを作る事から始めなければいけません。

どこにどれだけの亀裂を作れば壁を登れるのか……それがどれだけ考えても分からないのです。

仮に何かを思いついて、その道を進んだとしても壁を登り切れる保証は無し。しかも壁は山のように高いと来ています。

遠すぎる目標まで道なき道を切り開かなければいけないしんどさ……半日だけとはいえ十分味わいました。

それをこれからずっと感じるのか、と思うと胃がキュツ、と収縮するのです。

だからこそトレーナーさんの「負けても良い」という言葉を受け入れてしまえば、幾分か気が楽になります。

けど……。

その言葉を受け入れるのはただの甘えなのではないか、という考えも頭にあるのです。

トレーナーさんやスパさんの時間を割いてもらって指導を受け、ジエミニには相談に乗ってもらいましたし、励ましてもくれました。

それなのに「負けても良い」なんて気持ちで勝負に臨むのは、やはり皆をないがしろにしているような気がします。

それにやっぱり負けたくない……。

それらの相反する感情がもやもやと私の心を支配していました。そこにナイトとギクシヤクしている件も混ざって、パンクしそうです。

カオスな心情で俯いているその時、頭に何かが当たる感触が。その感触は次第に手や足にも広がります。

「ん……雨か。予報じゃ夜までもつって言うってたんだがな……とりあえず屋根のある所に避難するぞ」

「はい……」

トレーナーさんと一緒に校舎まで戻ります。少し濡れた体をタオルで拭いている間に、雨足はどんどん強まり、ザーザーとうるさい程になりました。

「まいったな、これじゃ外で練習出来ないぞ……」

「そうですね……」

「……ノール」

「なんですか？」

「今日はずっとパツとしない顔をしてるが……悩み事か？」

今日の私の態度はトレーナーさんから見てもはつきりと分かるぐらい変だったよう  
です。

「はい……ちよつと色々な事がこんがらがって、上手く説明出来ないかもしれません  
けど……聞いてくれますか？」

トレーナーさんに問い詰められ、素直に相談してみようと思いましたが。前にも一人で  
悩みを抱えて、勘違いの結果、寝不足になった経験がありましたし……。

「ああ」

トレーナーさんの肯定の言葉を聞き、自分の悩みをどう順序だてて話そうか、雨景色  
を見ながら考えます。

鉛色の積乱雲はまさに今の私のカオスな心持ちと一緒だな……なんて詩的な事を思  
い浮かべていると、

雨

その言葉が頭に焼き付いてきました。それと同時に昼休みのジエミニの言葉もフ  
ラツシユバックします。

(これが学力テストなら、時間が無い時はヤマ張るなりして上振れを狙うんだが……)

ヤマを張る……

「雨」そして「ヤマを張る」。

その二つの言葉は私の中で溶け合い、ある閃きをもたらしてくれました。壁に亀裂が。

「雨……不良バ場なら……」

「……ノール？」

ハッ、と目を見開いたかと思えば、顎に手を当てて何事かを呟く私を不審に思ったのか、再び声を掛けてくるトレーナーさん。

しかしその声は私の耳には入りません。ひらめきを具体的な考えに落とし込むので精一杯でした。

「……トレーナーさん」

そして、私のひらめきが現実的なモノなのかを確認するため、トレーナーさんに意見を求めます。

「なんだ？」

「雨が降った後の不良バ場でレースを行う場合……荒れますよね」

「まあそうだな。芝の場合は芝が濡れて滑りやすくなるのと、下の土壌が柔らかくなつて走りにくくなるからな」

「……もし私が今日から不良バ場での練習を続けたとして……レース本番が不良バ場になればナイトより速く走れるかも……」



「お前……」

私の言葉を聞いて、トレーナーさんはびっくりしたように眉を持ち上げました。

「今思いついた事なので、有効な手段かどうかは分かりませんが……トレーナーさんはどう思います？」

「……………必ず勝てる、とは言えないが……見込みはある。」

普通ならわざわざ不良バ場を想定して練習する奴はいないからな。

せいぜいが天気予報を見て、一週間前から急いで仕上げるくらいだろう。

お前だけ不良バ場に慣れておけば、大きな走力の差を覆すこともできるはずだ」

「なら……………」

トレーナーさんの言葉を聞いて自然と顔がほころびます。

「しかし、当然本番の日、その前日が雨という保証は無い。」

雨の日は一年の三分の一以下しかないからな。

それに最近の競技場は水はけが良くなるように改修もされている。大きな走力の差を覆すほどの悪路になる可能性はかなり低いぞ」

「それは……分かっていきます。確率が低い事は。……でも」

「それにだ。雨の日や不良バ場の練習をし続けるのは、変な癖を作る原因になるかもしれない。」

雨の日、不良バ場つてのは本来、異常な状況だ。だからこそ皆が全力を發揮できない。その異常な状況に慣れるって事は、正常な状況……晴れの日、良バ場で全力を發揮できなくなるかもしれないんだぞ」

トレーナーさんは諭すようにそう言います。

その内容は一切反論が出来ないほど正しくて、自分の意見がひどく幼稚な物のようにも思えました。

「トレーナーさんの意見は分かります。分かります……けど！ 自分の考えを信じてみたいんです。

……半日だけです。がどうやったらナイトに勝てるんだろう、つてずっと考えてたんです。

それこそ授業も手につかないぐらいその考えに占拠されてました。

でも何も思いつかなくて、さつき曇り空を見てやつとひらめいたんです。不良バ場なら勝てるんじゃないかって」

「……」

「多分、私の思い付きは幼稚で勝算も低いものだと思います。

けどやつと思いついた、大切にしたい思い付きなんです。

……自分で思いついた物だから良いアイデアだと思込んでるだけかもしれないで

すけど……それでも！ 私はこの思い付きと心中してみたいんです！」

後半の方は気づかない内に大きい声になっていました。

言い切った後、トレーナーさんはしばし口を閉ざした後、声を出します。

「……………きちんとデメリットは理解してるんだな？」

「は、はい！」

「そうか……なら良い。レースまでお前の考えと心中だ。不良バ場の練習をするぞ」

「え……………い、良いんですか？」

「良いも何も……お前から言い出した事だぞ？」

「それはそうですけど……もつと反対されるものかと。結構無茶な事言ってますし

……………」

私自身、結構無理な事を言っていると思っていたので、反対されなかったのはかなり予想外でした。

「無茶って自覚はあるんだな……………ま、俺の話を聞いて、それでもやってみたいとお前は思っただらう？」

ならそれ以上とやかく言わないさ。俺はお前の手伝いをするだけだからな」

「トレーナーさん……………」

「それに少し前まではパツとしない顔だったのに、今は吹っ切れた顔をしてるしな」

「え……………」

そう言われて自分の顔を触ってみますが、もちろん違いは分かりません。

「どんな悩みを抱えてたのかは知らないが、お前の思い付きはその悩みを吹き飛ばすくらいには、お前にとって大事な物なんだろうよ。

だったら無茶でもなんでもやってみればいいさ」

「……………はい！」

大きな声で返事をしつつも、自分の内側に意識を向けます。さっきまで押しつぶされそうなほど私の心を占めていた、何をすれば良いか分からない閉塞感は全くありません。

代わりに感じているのは高揚感。

ナイトと勝負出来る……………！ かも……………。

ぎゅつ、と拳を握りこむと、思ったよりも力がこもってしまいました。かなり興奮しているようです。

逸<sup>はや</sup>り気味の心を落ち着けるために、一つ深呼吸をします。それで少しは収まりましたが、高揚感は依然として引かないままです。

ふわふわとした心地よい気持ちを味わっていましたが、一つだけ心に引つ掛かっている事が。

あ……でもナイトと気まづくなっている問題はまだ解決してないのか……

彼女は私と競う事が辛いと言っていました。

私はこんなに興奮してるんだけどな……。私とじゃなければナイトも勝負に対して興奮するのかな……？

ナイトについて考えると、お昼にジェミニと話していた内容を思い出してしまいました。

(そいつの言い分は勝つ事が前提じゃねえか。お前に勝つのは大前提、それはそれとして友人から勝利を奪ってしまつて心が痛む……つて事だろ。

そののどこが上から目線でもなく、見下されてもないつて言えるんだ?)

「……」

それを思い出してまず浮かんできた感情は不満でした。あの時は弱気になっていたので何とも思いませんでしたが、勝負しようという気になった今は別です。

私は本気でナイトに勝とうと思つて、差を埋めようと不良バ場だけに焦点を当てて練習しようと思いました。

それなのにナイトは私とのレースを「勝負」とすら思っていないかもしれない……。

それはジェミニの勝手な推測が元なのですが、それをわかつていても心がモヤモヤします。

「……トレーナーさん。少し用事を思い出しました。

それが終わったら外を走るので、カツパを用意して待っていてくれませんか？  
いえ、ください」

「え、あ、ああ……分かった」

私はそれだけを言って、ナイトとの問題にケリを付けに行きました。

## 十六話 衝動

ナイト、まだ教室に残っているかも……。

まずはそう考え、教室のある二階に向かいます。その途中、階段の踊り場で偶然ナイトと出くわしました。

「！……」

いきなりの事に二人とも固まってしまいました。そのまましばらく膠着状態。

しかし気まずさに耐えかねたのか、ナイトが私とすれ違うように階段を下りていこうとします。

「あ、待って！」

私も遅れて正気を取り戻し、ナイトを呼び止めます。

「そ、その……一緒に走るレースの事についてなんだけど……」

「……っ、何……？」

私がそう切り出すと、明らかにナイトの顔が曇りました。

「えっと……つまり……」

呼び止めたのは良いものの、急にナイトと鉢合わせたせいで、上手く言いたいことが

まとりませせん。

彼女を見つめたまま、もごもごとしていると、ふと気づきました。

彼女が私からずっと目を逸らしている事に。

その瞬間私の身体は勝手に動いていました。

「……ナイト！」

一歩前に踏み出して、彼女の頬を手で挟み込みます。そして強制的に私の方を向かせました。

「な、何……!?!」

至近距離まで詰められ、なおかつ実力行使に出られたナイトはかなりびっくりした様子です。

しかしそんなことは気にも留めず、私は続けます。

「私は……弱い！ それこそナイトの足元にも及ばないぐらい。だけどみすみす負けるつもりはない！ 後一か月、死に物狂いで頑張つて絶対勝つから！」

だから私に勝つ心配なんかしなくても良いからね！ 分かった!?!」

自分でも何を言っているかはよく分かりません。ただ感情のまま、心のままに思った



ことをぶちまけました。

「…………うん…………うんうん…………」

私に詰められたナイトは、何度も首を縦に振ります。

「よし！ じゃ、その首、洗って待っててよね！」

それだけを言い残し、私はその場を去りました。

(side ナイトグライダー)

「……………」

ノールのあんな姿、初めて見た……。怒ってた…………よね……

それもそのはず。私は友人と競いたくないという自分勝手な理由で彼女を遠ざけていたのだから。

それに私は心のどこかで、彼女に勝つ事を申し訳なく思っていた。レースで競えば私が勝つという前提の元。

それは彼女を下に見ていたことに他ならないわけで…………。

（私は……弱い！ それこそナイトの足元にも及ばないぐらい。だけどもみすみす負けるつもりはない！ 後一か月、死に物狂いで頑張つて絶対勝つから！）  
そんな私の心を見透かされていたのかもしれない。

……ノールが怒るのも当然だ。彼女は本気で私に勝とうとしている。  
それなのに私は訳の分からない事で悩んで、勝手に彼女を遠ざけて、無意識に見下して……。

自己嫌悪でどうにかなりそうだった。自分の頬をギリギリとつねり、どうにか気を静める。

「ごめん……」

誰にも聞かれていないのに、その言葉を口にしていた。

「でも、やっと目が覚めた」

ジンジンと痛む頬の熱が体に広がっていくような感覚。それはまるで彼女の心の熱が私に分火したかのようなようだった。

……全力を尽くそう。そして勝つ。絶対に。

拳を握りしめ、そう心に誓う。

「お、こんな所に居ったんか」

そんな時に階段の上から聞きなれた声が。

「スパさん」

「探したで。なんやノールとおんなじレース走る事になつたらしいな」

「はい……もしかして、その件で励ましに来てくれたんですか？」

「ん、お見通しかいな。……ノールから話を聞いたんや。ナイトが悩んでるってな」

「そうですか……でも、もう大丈夫です」

「大丈夫？」

「はい。もう大丈夫ですから」

「……やせ我慢つてわけでもなさそうやな。」

解決したなら何よりやけど、何か心変わりするような事でもあつたんか？ 少し気に

なるなあ」

「ついさつきノールに宣戦布告されてしまいました。それで色々吹っ切れたんです」

「宣戦布告、ねえ。ふふ、って事はなんぞ策でも思いついたか……まあなにせよ気張  
りや。」

「一か月後のノールはきつと手ごわいでえ？」

「そう……でしようね」

……やってしまった。

やってしまった。数日に渡って悩み続けてきた反動なのか、変な思い込みを元に暴走してしまいました。

「はあ~~~~~」

大きなため息を一つ吐き出します。

ナイト、すごい戸惑ってたなあ……そりやそうだよ。

いきなり頬を挟まれて、挑発じみた滅茶苦茶な事言われて……。

しかも何? 「その首、洗って待って」……って!? どういう捨て台詞!?

自分の行いを思い出すと、全身が無性に痒くなってきました。

うう……これも全部ジェミニのせいだ。

ジェミニが変な事私に吹き込むから暴走したんだ……。それに捨て台詞もジェミニに影響されたせいだ……。

道中、責任転嫁をしながらトレーナーさんの元まで戻ります。

「戻りました……」

「……何かあったのか?」

少し肩を落としてしている私を見て、トレーナーさんはそう聞いてきます。

「いえ……ちよつと暴走してしまいました……」

「……本当に何があつたんだ？」

かくかくしかじか、さつきあつた事をかいつまんで説明しました。

「そういうわけで、感情に身を任せてナイトに宣戦布告してしまいました……」

ただでさえ雨の日に狙いを絞る戦法を取るつもりなのに、絶対勝つなんて大言壮語を吐いてしまいました。もう本当に申し訳ありません……」

手で顔を覆いながらそう言います。

「俺に謝つてもどうしようもないだろ……。後で本人に謝つとけよ」

「そうします……」

「ま、お前にできる最高の走りをして、それを認めてもらえば向こうも納得してくれるはずさ。とはいえ勝てなければ……」

「勝てなければ？」

「死ぬほどダサイ」

「……………レース前には雨ごいしないといけませんね……」

「テルテル坊主でも逆さに吊つとけ」

トレーナーさんの軽口を聞いて、少しは気持ちになりました。

今日の夜ナイトと同じ部屋で寝る事を考えると少し気が重いですが、今は練習に集中しなければいけません。

「あ、頼んでいたカップは……?」

「これで良いか? 出来るだけ動きを邪魔しない奴を用意したつもりだが……」

「ありがとうございます」

トレーナーさんから受け取ったカップを身に着けます。

「……」

その間トレーナーさんは神妙な顔つきで、私の方を見ていました。

「あの、どうかしましたか?」

「……お前、「死に物狂いで頑張る」って言うのは本当か?」

「え……?」

「宣戦布告の時にそう言ったんだろ?」

「それは……はい」

「本当に死に物狂いで頑張るなら、俺から一つ練習メニューの提案がある。

負担が大きいから今まで言いださなかつたが……」

「や、やります! 死に物狂いで頑張りますから! その練習メニューって言うのいい!」

ここにきて急にトレーナーさんが提案してきた練習メニュー、気にならないはずはありませぬ。

前置きをしてきたからにはかなりハードなトレーニングという事が予想されますが、ナイトに勝つ確率を高められるなら何だつてやる覚悟です。

「死に物狂い」というのは決して嘘ではありません。

「端的に言うとな底力を鍛えるトレーニングだな」

「底力……ですか？」

「根性と言い換えても良い」

「根性……」

今まで私がトレーナーさんとしてきたトレーニングは、どちらかというと効率的に能力を伸ばす理論的なものだったので、底力や根性という精神論チックな物言いにはピンときませぬ。

「説明するには……そうだな。ノールは筋トレの時に自分ではもう限界とと思って、俺が後一回と言えば、もう一回だけなら出来た経験は無いか？」

「……あ、あります。自分ではこれ以上は無理だ、って感じてるんですけど、トレーナーさんに言われてやってみると、意外と出来たって事があります」

「それはつまり自分では限界と置いていても、余力を残していることが多いって事だ。

すべての力を出し切って倒れないように無意識のうちに力をセーブする本能がそなわってるんだろうな。

そしてその余力は第三者に追い込まれると発揮しやすい」

「ははあ……」

私が相槌を打った後、トレーナーさんは続けます。

「それは筋トレだけじゃなくて走りにおいても言える事だ。

自分ではスタミナの限界とと思っていても、実は余力を残してた……ってケースは往々にしてある。

その余力を残さずに使い切ることが出来れば、実質的にスタミナが増加するのと同じことだ……違うか？」

「それはそうですね」

「しかし、レースでは第三者に余力を引き出ししてもらおう事は出来ない。

……自分より速い奴に引つ張られる形で余力が引き出されることはあるだろうが、それは偶発的なものだ。あんまり期待するものじゃあない」

トレーナーさんはさらに続けます。

「だからこそ、その余力を自分で使い切る能力……底力を鍛えるのは疑似的なスタミナ増強に有効な練習方法だ。」



しかもやろうと思えば短期間で身につく。特に雨の日は地面がぬかるんでいつも上にスタミナを消耗するからな。鍛えておいて損は無い」

「なるほど……！」

底力。意識したこともありませんでしたが、トレーナーさんの話を聞くととてもすごい能力のように思えます。

「そういう事なら底力を鍛えるとトレーニング……ぜひやってみたいです！」  
「そのかわり練習は死ぬほどきついぞ。誇張抜きでな」

死ぬほどきつい。いつになく脅すような言葉をトレーナーさんは使います。

しかし、私は怯む事なく答えました。

「大丈夫です！ 死に物狂いで頑張りますから！」

「ま、お前ならそう言うと思ったよ……。それじゃあやるとするか。あ、それとは別に一つ条件がある」

「条件、ですか？」

「ハードな練習をする以上は、疲労を貯めないようにマッサージが必要になる。そこで誰か心当たりは無いか？」

やり方は俺が教える。お前と相手、相互にマッサージしあえばお互いにとって良い話になると思うが……」

「心当たりですか……」

一番に思いついたのは同室相手のナイトですが、今の状況でそんなことを頼む気にはなれません。

それ以外だとやっぱリスパさんか、それともジエミニとか……あ、それよりも……

「トレーナーさんが私にマツサージするってのは無しなんですかね？」

「……しても良いが、お前のレースを檻の中から見る羽目になっちゃうかもしれないぞ」

「え？ ……あ！ はい、確かにそうなってしまうかもしれないね……」

私個人としては気にしていませんでしたが、男性トレーナーが担当ウマ娘に過度な身体接触するのはあまり外間が良いものではありません。

たとえマツサージだとしてもそうでしょう。

「そういうわけで悪いんだが、誰か候補を見つけておいてくれ。早めにな。見つけ次第練習を始める」

「分かりました……とりあえず今日は雨の日にどんな走りをすれば良いのかを掴んできますね！ それじゃあ！」

そう言つて、私は校舎の外に駆け出していきました。

外は雨の勢い強く、カッパに当たってはバラバラと小気味よい音を立てます。

いつもは気分の落ち込む雨模様景色も、今日ばかりは快晴の空にも負けないすがすがしいものに思えました。

## 十七話 必要な隔たり

「はあ~~~~~……」

雨のターフを意気揚々と走り回っていたのはさつきまでの事。練習を終えた私は自分の部屋の前で大きなため息をついています。

ナイト、もう帰ってきてるよなあ……どんな顔して部屋に入っていけば良いんだろ……

今日の練習前、感情に任せてナイトに詰め寄った件を引きずったまま扉の前をうろろと歩き回ります。

扉を開けて即、頭を下げようか……それともどれぐらいご立腹か様子を見た方が良いのか……

下手な考えを巡らせながら扉の前を20往復する頃、

「………何やってんだ、お前？」

廊下でジェミニと鉢合わせました。

彼女は私の奇行を目の当たりにし、目を丸くしています。

「いや、ちょっと、ナイトに宣戦布告しちやって部屋に入るのが気まずくて……」

「……………俺がそのかしたとはいえ、マジで啖阿切ったのか？」  
「うん」

「それは……………まあ、何か、悪かったな……………」

ジエミニには珍しく、目線を逸らしてバツが悪そうにしています。

「いや、結局は私のせいだからさ。別にジエミニそそのかされたせいとかじゃ無いよ」

「……………ま、なんにせよずっと廊下でうろちよろするわけにも行かないだろ。早いところなんとかしねえと」

「それはそうなんだけど……………」

やっぱり気が進まない。そう言おうとした時、

コンコン

ジエミニが私の部屋をノックしました。

「ちよ！ 何して……………っ!？」

「ほら、すぐ出てくるぞ」

ガチャ

「……………ノール?」

ジエミニに何かを言う暇もなく部屋の扉が開きました。

すると中からナイトが顔を出します。

「あー……えっと、その……きよ、今日はごめん！」

いきなり滅茶苦茶な事言いながら掴みかかっちゃって……何かもうホントにごめん！」

どもりながらですが、ナイトに謝ります。

「大丈夫、私は気にしてないから。それより私の方こそごめん。

私の勝手な都合でノールを避けて、怒らせちゃって……。でももう顔はそむけない。次のレース、私が勝つから」

ナイトは私の目を射抜かんばかりに強く見つめながらそう宣言しました。

放課後の時とは大違いです。G Iを取ったこともあるウマ娘の眼光に気圧された私は、自然と背筋が伸び、気が張り詰めました。

「……」 「……」

十数秒ほどの膠着状態。

バサッ！

それを打ち破ったのは部屋の奥から聞こえてきた大きな音でした。

「あ……教科書が落ちたのかな……。机の端の方に伏せておいたから……」

「そ、そうなんだ。今日の復習？」

「うん。理解が曖昧な所があったから」

「もしかして数学の公式の所？」

「そう。丸暗記のままだと問題に應用できなくて困ってたんだ……」

「あく確かに。例題1, 2はともかく例題3はちよつと捻くれてたつけ……」

落下した教科書を切つ掛けに話を広げます。しかし何とも言えない違和感が。

いつも通りたわいない会話をしているだけなのに、気が抜けていくというか、変な脱力感がするのです。

緊張の糸が緩んでいくとでも言えば良いのでしょうか。

「……」「……」

ナイトの方も同じように感じているのか、お互いに困惑したような顔を浮かべて黙ってしまいました。

「えつと……」

「ちよつと待った」

それでも会話を続けようと口を開きかけたその時、今まで後ろで待機していたジェミニが急に声を掛けてきます。そして私の肩に手を掛け、

「いっつ、しばらく借りてくから」

そう言いました。

「え？」

「それは……どういう意味？」

私もナイトもジエミニの突飛な発言に戸惑います。

「文字通りの意味だ。ノールを借りて、しばらく俺の部屋に泊める。そんなやな」

「え、え、え!？」

「あ……い、行つてらっしゃい……?」

そして話の流れも理解できないまま、私はジエミニに引きずられていきました。

「……質問よろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「どうして私はあなたの部屋に泊まる事になったのでしょうか？」

ジエミニに連れられるまま彼女の部屋に連行された私は、つい敬語になりながらそう聞きます。

「あのままあいつと普段通りに接するのが良くないから」

「良くないって？」



「二人で世間話してる時、どっちからも闘志が抜けていく感じがした。お前も気づいてるだろ？」

はたから見ても分かるほどだったのでしょうか。あの時感じていたことをズバリと言われてしまいました。

「……うん。何となくだけど変な感じはした。自分の中で何か小さくなっっていくような感じ。」

でもどうしてなのかな？ いつも通り話してただけなのに……」

「いつも通り話してんのが問題なんだよ。バチバチ火花散らせてライバル視してたのに、毒にも薬にもならない世間話なんかしたら、その気持ちも薄まるっつもんんだ」

「うーん……」

言われてみればそうかもしれせん。

「二人とも普段は仲よし面してレース当日だけ真剣勝負……っつてほど器用じゃねえんだろ。」

だから今は少し離れた方が良い。万全の状態でレースに臨みたいならな」

そういうえば顔なじみと一緒にのレースに出場する時も、レース前はどちらから口に出すでもなく自然と距離を置いていました。

しかし今回の場合は相手が同室にいるので、こうして宿泊する部屋を変えるでもしな

ければ距離をおけない状態と言うわけです。

「……うん、そうだね。でも良かったの？」

私がジェミニの部屋に泊まるって事になっちゃったけど……」

「別に。前にも言ったけど俺は二人部屋を一人で使ってるしな。本来あるべき姿に戻るだけだ。

お前はそっちのベッドを使え」

ジェミニは私が座っているベッドを指します。

「一人で暮らしてた分、少し散らかってるのは勘弁してくれな」

そうは言いますが……、

「そんなに散らかってるとは思わないけど……」

本心です。共用の棚がごちゃついているだけで、床に物を置いているとかではないですから。

「そうか。なら良い。他に気になる事があつたら言えよ。気を付けるからな」

「う、うん」

ジェミニはそう言った後、ベッドの上に寝転がりました。

「……ねえ、ジェミニ」

「なんだ？」

「ありがとうね」

「……なんだよ急に」

「色々気を使ってくれたから」

「……どういたしまして」

……あれっ？

私がお礼を言うと、ジエミニはそっけなく返事します。

お昼に私がお礼を言ったときはもう少し照れた反応を見せたのですが。

別にそういう反応を期待してお礼を言ったわけじゃないんだけど……。

とはいえ多少の違和感を覚える私。そこに今度はジエミニから話を切り出してきます。

「……なあ」

「何？」

「俺の想像だが、普通同室相手とは何か話をするもんだろ？」

「まあそうだね」

「どういう話をしてるんだ？」

「どうい、つて……それこそさつきナイトと玄関で話してたみたいな事を、かな」

「ふーん………」

そう言うときジェミニは視線を私からずらして口を閉じます。

そんな彼女が気になって観察すると、耳はせわしなく動き、尻尾も時々跳ねていました。

いつも自分のペースを崩さない彼女がそわそわしているのは珍しく、何事だろうと思っているとき、彼女は再度話しかけてきます。

「……なあ」

「今度は何？」

「今日の練習、何したんだ？」

「今日は……雨が降ってたから重バ場の練習をした。」

今まで雨の日に行ったことはあんまりなかったけど、いざ走ってみると難しかったかな。

土が柔らかくなってるから足が取られて走りにくいし、芝が濡れてるから滑りそうになるし……」

「重バ場の練習か……珍しいな。コースの整備が進んだ今だと、そうそうバ場が悪くなることは無いだろう？」

「ヤマを張ったの。今の私……いや、一か月後の私じゃ場が荒れないとナイトには勝てそうもないから」

「……二着を狙ったりはしないのか？ 下手にヤマを張るより、普通の練習を重ねて着順を少しでも上げる手はあるだろ」

「二着か……考えた事も無かったな」

確かに一着とはいかなくとも、重賞のレースで3着以内に入ればすごい実績です。

けど……

「……やっぱり一番じゃないとダメかな。二着を取った場面を想像したけど全然嬉しくなかった。だからナイトに勝つためにも賭けに出ないと」

「お前はレースで結果を残したいというよりは勝ちたがりなんだな」

「そんなこと無いと思うけど……いや、そうなのかな……？」

ジェミニの言葉について否定から入ってしまいました。冷静に考えるとその通りかもしれない。

皆が皆、一着だけを狙っているのであれば二着、三着に価値などありません。

しかし実際には二着も三着も実績として残るくらいなので、私のように一番以外ダメだと考える人の方が少数派なのかも……。

「ジェミニはどうなの？ 結果を残したい派？ それとも一番になりたい派？」

「俺か？ 俺は……敵と決めた奴に勝てれば良い派」

「何それ？」

「レースに出る誰かを勝手にライバル視して、そいつより着順が上だったら満足するか  
な。」

「極論そいつが最下位だったら、俺は下から二番目でも良い」

「それはまた……ジエミニらしいね」

「誉められてんだか、けなされてんだか……」

敵愾心の強いジエミニにはぴったりだと思えます。

しかし彼女に一方的にライバル視された娘は少しかわいそうです。レース前に睨ま  
れたりしてるのでしょうか……？

それからもジエミニととりとめもない話を話して過ごしたり、私物を部屋に取りに  
いってナイトと鉢合わせ、微妙に気まずい雰囲気を感じたりしていると、寝る時間が近  
づいてきました。

使つて良いと言われたベッドに潜り込みます。

「もう寝るのか？」

「うん。朝練があるから早く起きないと。ジエミニはもつと遅いの？」

「俺は結構夜型だ……とはいえこれを機に早寝早起きしてみるのも良いかもな。遅刻し  
なくて済む」

「一人だと寝過ぎしても相方が起こしてくれなくて大変そうだね」

「俺の相手はうるさいだけで体をゆすってはくれねえからな」

ジェミニは目覚まし時計をセットし、ベッドに横になります。

「電気消すぞ」

「あ、その前に」

「何だ？」

「明日、私と一緒にトレーナーさんから足のマッサージの仕方を習わない？」

練習後にお互いマッサージし合えば、翌日に疲労を残さなくて効率も上がると思うんだけど……」

ジェミニの部屋に泊まる事になったのも何かの縁。この際マッサージの件もジェミニに頼ってしまいましょう。

「そういう事なら分かった。俺も習うとするか」

「本当？ 良かった。これで明日から練習始められるや」

「じゃあ消すぞ？」

「うん」

今度こそジェミニは灯りを消し、部屋が真っ暗になりました。そのまま目を閉じて眠ろうとします。

「……もう寝たか？」

しかし3分ほど経つと、ジエミニが声を掛けてきました。

「まだだけど」

「そうか……」

なぜそんなことを聞いてくるのだろうと思ひ、ジエミニの方に目を向けます。すると暗所に慣れた目は、彼女の耳がせわしなく動いているのを捉えました。

「……………もしかして、こういうお泊り会みたいな状況に興奮してる？」

ジエミニはトレセン学園に入学した時から一人暮らしをしていたそうなので、誰かと同じ部屋で夜を過ごすのに憧れていたとか……？

「そ、そんなわけねえだろ！ ガキじゃあるまいし！」

慌てた声音で反論するジエミニ。何気ない疑問でしたが、どうやら凶星だったようです。

私がお礼を言っても照れなかったのは純粹な善意だけじゃなくて、そういう期待もあつたからなんだろうなあ……。

「別に恥ずかしい事でもないと思うけど。私も初めて相部屋になった時は夜寝付けなかったからさ」

「か、勝手にお前と一緒にすんな！ 俺は否定してんだろ！」

「ごめん。じゃあそういう事にしとくね」



「そういう事にしとくつてなんだ!? ぜんぜん悪いと思つてねえだろ!」  
「おやすみ」

「おい! おい!! 話を聞けえ!!」

その日は隣のベッドがやかましくて眠るのに少し時間がかかりました。

## 十八話 底力

なんやかんやでジェミニの部屋に泊めてもらう事になった日の翌日。

マッサージの件も解決しましたし、トレーナーさんが言っていた底力を鍛えるトレーニングが開始できます。

いったいどんな練習を……？

期待半分、怖さ半分くらいでその日の練習に臨みました。

とはいえそのトレーニングは最後に行くとの事なので、それまでは淡々と練習メニューをこなしていきます。

「はあつ、はあつ、はあつ……」

「よし。坂路ダツシユ10本、よく頑張ったな」

「いえ……これぐらいは……やって当然ですから……次のレースが行われる……中山競技場は勾配のきつい坂がありますし……それに坂が最終直線あるから……坂でのジェット走法も練習しないといけませんし……」

「それもおいおいだな。5分休憩だ。今は休め」

「はい……」

コースの横に座り込み、荒れた息を整えます。

「さて……次はいよいよ底力を鍛える練習だ。休憩中に説明するぞ」

ついに来ました。

「具体的に何をしますか？」

「あれを使う」

そう言つてトレーナーさんが指差したのは巨大タイヤ。どんな車に使われているのか疑問に思う程、巨大なタイヤです。

タイヤからはワイヤーが伸びており、先端には体に取り付けるためのハーネスが。

トレセン学園ではウマ娘がこのタイヤを引き、パワーを鍛えるトレーニングが良く行われています。

しかしそれを底力の練習に転用するととなるとどういった使い方をするのか……

「ダートの上でこれを400m引いてもらう。目標タイムは……とりあえず8分にするか」

「……それだけですか？」

「ひとまずはな。とにかく最低でも目標タイムを切るぐらいの速度でタイヤを引いてくれ。時間はこいつで確認しろ」

トレーナーさんは私にストップウォッチを渡してきます。

「……はい、分かりました」

制限時間があるものの、いたって普通の練習内容に疑問を持ちましたが、とりあえずは言われたようにやってみようと思いました。

休憩を終え、巨大タイヤに繋がれているハーネスを体に取り付けます。

「よし、それじゃあスタートだ」

「はいっ！」

トレーナーさんの音頭でスタートを切ります。

「ぐ……」

かなり重い……っ

重い巨大タイヤに加えて、砂に足を取られるせいで全然前に進みません。

400mを8分と言われると、かなり余裕がありそうに思いましたが、このペースだとまったく間に合いそうにありません。

「ぐ……っ！」

必死に地面を踏みしめながらペースアップします。

そのまま200m地点まで進み、残りは半分です。そこで時間を確認すると、残り時間は4分弱でした。

げ……もつとペース上げないとダメなのか……

「こなくそ……っ！」

今までの練習と200m分の疲労が溜まった足を無理やり動かし、更にペースを上げます。

「はっ、はっ……はっ、はっ……！」

ペースを上げればそれだけスタミナも消耗するわけで、後ろのタイヤがどんどん重くなつていく感覚を覚えます。

誰かが追加でタイヤを括り付けているのではないかと、つい後ろを振り向いてしまう程でした。

「ラスト……っ！」

「ゴールだ。よく頑張ったな」

「はあ……っ、はあ……っ、はあ……っ」

それでも何とか400mを歩き切り、その場にへたり込みました。動きを止めると疲労が一気に襲いかかってくるようです。

これは確かにキツイ……

全身が倦怠感に包まれ、下半身にも上半身にも力が入りません。持てる力を全部使い切ったようなそんな感じですよ。

でもこれが続けてたら確かに底力はずきそう……それにパワーも。

そんな事を考えながら達成感に浸っていると、トレーナーさんが声を掛けてきます。

「7分51秒。目標タイム内だ」

「それは……はあ、良かったです……はあ」

「返事はしなくて良いぞ。とにかく今は息を整えろ、5分後にもう一本だからな」

「はい……えっ?」

もう一本?

「えっと、その……もう一本ですか?」

「ああ。さっきは時間制限付きでタイヤ引きをしてもらった。

そのおかげで今は出来るだけの力を振り絞った……そう自分では思ってるだろ?」

「は、はい」

「底力を鍛える練習はここからがスタートだ。

疲れ果てた状態でもう一度タイヤ引きをして本当の限界ギリギリまでスタミナを使い切る。

そうして無意識にセーブしてしまう限界と、本当の限界を近づけるわけだな」

「そ、そうなんですな……」

ここからもう一本かあ……マジ?

つい心の中で口が悪くなってしまいました。

正直、これで練習は終わりだと思っていたので、そのギャップも相まって疲労が倍化した気がします。

それでも重たい足を持ち上げ、さつき来た道を引き返す準備をしました。

「次の目標タイムは疲労も考慮して10分にするか。目標タイムを切れなかつたらもう一本追加だからな」

「……え、っ?!? さ、更に追加ですか……?」

「こういう設定にすると嫌でも全力を出さないとイケなくなるだろう?」

「それはそうですね……」

一本だけでも相当キツイのに遅れたらもう一本……

これは否が応でも10分を切らないといけません。

「それとストップウォッチは没収だ」

「あ、はい」

こちらに伸びてきたトレーナーさんの手にストップウォッチを返します。

「でもどうしてですか?」

「時間を確認して10分が切れないと思うとその時点で手を抜く可能性があるからだ。

ま、お前はそんなことしねえだろうが……本人にそのつもりが無くても無意識に集中力が切れてしまうこともある。

初回はどれくらいのパースで走れるか知りたかったから、適当に目標を決めて時計を持たせたがな」

「なるほど……」

つまり自分の時間感覚だけを頼りに10分を切るようペース配分をする必要があるという事です。

……あれ？

でも目安が無い状態でペース配分は出来ません。

いつも走っている距離ならともかく、今日が初めての400mタイヤ引きなら尚更です。

……つて事はペースなんか考えず、全力でタイヤ引くしかないつて事？ 練習が追加

されるのに怯えながら……。

想像しただけでも少し血の気が引きました。

「じゃ、しゃかりきに頑張ります……」

「おう。体のエネルギーを全部絞り出してこい」

そして捨て鉢の二本目が始まりました。



「ぐうおおおおお……っ！」

年頃の女の子が出してはいけない唸り声を上げながら、懸命に巨大タイヤを引きま  
す。

全つ然前に進まない……っ！

気持ちとは裏腹に体は思うように動いてくれません。

一本目の疲労が残っているので、タイヤの重さが倍ほどにも感じられます。

それでも頑張つて前に進もうと足を踏み込んでいるのに、足元の砂がずぶずぶと靴を  
絡めとり、まったく推進力が得られないのです。

前に進む手ごたえが少ないのは一本目もそうだったのですが、二本目は特にえげつな  
く感じられます。

ぬかに釘、のれんに腕押し、豆腐にかすがい……

さらに言うとうくらのはぎの筋肉がやばいです。

ダートではつま先で砂を力強く蹴るのが有効なのですが、つま先を使いすぎてそこ  
に繋がっているふくらはぎの筋肉が悲鳴を上げています。

ジェット走法で使うため、つま先とふくらはぎは鍛えていたはずなのですが、予想以  
上の負荷に限界を迎えそうになっています。

「ぐるうううあああ……っ!!」

それでも何とか足を進め、残り200m地点に到達しました。しかし……  
い、今何分経つてる……?」

タイヤを引くことに夢中で、時間についてはほとんど頭にありませんでした。  
そんな状態でふと思いついても、残り時間が推測できるわけもなく……結局は残りも  
全力で行うしかありません。

10分切れなかったら……も、もう一本……  
「ぐうううう……っ!!」

歯を食いしばり、必死にタイヤを引き続けました。

「はあっ……!! はあっ……!! はあっ……!!」

「10分16秒。もう一本だな」

ダートの上に倒れこみ、全身を砂だらけにしている私に絶望の宣告が降ってきました。

「……………はい……………」

非常に重たい気持ちで返事を返します。

練習がこれほどキツイと思った事は今までありませんでした。トレーナーさんと会う前にオーバーワークをしていた時もありましたが、あれとは質が全く違います。

何ていえば良いのか……効率的に限界まで追い込まれてる感じが……。

スパルタはスパルタでも根性的なスパルタではなく理論的なスパルタ。

人はどうしたらキツイと感ずるのか、それを突き詰めて私に実施しているのではと思う程です。

「休憩は10分取る。流石に次のノルマは無しだ。400mタイヤを引くだけで良い」

「分かりました……」

あと一本……

そう思うだけで、鉛……いえ、白銀のように重い体が更に重たく感じられます。

動きたくない……

そのまま砂の中にも埋まってじっとしていたかったです、10分の休憩の後、何とか立ち上がり、ゾンビのようにタイヤを引き始めました。

「う〃お〃あ〃あ………」

「お疲れ様」

「……………」

「返事をする気力もないか」

瀕死の私の代わりにトレナーさんがハーネスを外してくれます。

「死んだままでいいから聞いてくれ。練習はこれで終わりだ。ストレッチをサボらず、しっかりと体を休めろ。」

激しいトレニングの後で体は相当疲弊しているはずだ。今日の夕飯はよく噛んでから飲み込め。下手すると戻すぞ。

それと今日の朝教えたマッサージも忘れるなよ。してもらうだけでなく、するのもな」

「……………ハイ……………」

じやり

蚊の鳴くような声で何とか返事をする、口の中に砂が入ってきました。

うつぶせのまま喋るものではありませんね。

「一人で立てるか？」

「……………ナントカ」

じやり

口の中で砂を鳴らしながら、電池の切れた体を無理やり動かして立ち上がりました。

「砂だらけだな……」

トレーナーさんはタオルで私の身体についた砂を払ってくれます。タオルがばさばさと当たるだけでも私の身体は倒れそうに。

「本当に大丈夫か？」

「一人でも寮に帰れるぐらいは、何とか……」

じやり、じやり

「……ま、とにかく口をゆすいで寮に帰ったらしつかり休んでくれ。タイヤは俺が片づけておく」

「はい……」

トレーナーさんと別れた私は、這う這うの体で寮まで退散しました。

「……って感じの練習があった」

「そんなにキツかったのか？」

「それはもう」

「具体的には？」

「今日の夕飯で吐くぐらいには」

「……マジか？」

「マジ」

やっとの思いで寮に帰り、一通りの身支度を済ませた私は、部屋でジエミニに足をマッサージしてもらいながらそんな会話を交わしていました。

「胃が私に反逆してた……いつものペースで食べ進めてたら次の瞬間にはトイレで吐いてた……」

疲れ果てていた私は、ついトレーナーさんの言いつけを忘れてしまい、普通に食事を食べ進めてしまいました。

その結果はリバース。人生で初めての嘔吐。料理を作ってくれた人と農家さんには悪いことをしてしまいました。

「あんな練習が続くと私、ウマ娘じゃなくてゲロ娘になっちゃう……」

「何言ってるんだお前は」

戻したとはいえ、夕食を抜くわけにもいきません。結局は無理やり食べ物を詰め込みました。

拒否反応を起こす私の胃でしたが、三桁も咀嚼すれば何とか食べ物を受け入れていた  
できました。

「ほら、終わったぞ」

「ありがと……」

筋肉が完全にくたびれていた私でしたが、マッサージを受けると多少は回復しまし  
た。

今度は私がジエミニにする番です。

しかしうつぶせの状態から起き上がろうとすると、だるい感じがします。練習から  
なり時間が経っているのに、未だに疲労感が抜けません。

いえ、疲労感と言うよりはエネルギータンクが空っぽで何をするにもしんどい感じ、  
と言えましょうか……。

でもこれがトレーナーさんの言ってた底力を鍛えている、って事だよな。

自分のスタミナを全て使い切るこの感覚、これを覚えていけば走りでも限界ギリギリ  
まで自分を追い込めるはずですよ。

未来に思いを馳せると、少しだけ軽くなった体を動かしてジエミニにマッサージを施  
します。

「戻したとは言ったが……お前はレース前で減量しないといけねえし、ちようどいいん

「じゃねえか？」

「嫌だよそんな減量……それに私は減量苦手じゃないし」

「そういうえばお前、あんまり食わねえもんな。」

「甘いもん食つてるところもみたことねえし……」

ウマ娘は大食いなのと甘味が好きなので減量するのが苦手な娘が多いです。

しかし私はウマ娘にしては珍しく小食で甘味も好きではないので、減量には困っていません。

逆に筋肉を付けようと励んでいた時期は、結構無理して食べる量を増やしていました。

「あんまり食べない奴は他にも知ってるから分かるが……甘いもん食わねえウマ娘はお前が初めてだ。何か理由とかあるのか？」

「ん……実家がニンジン農家だからかな？」

物心ついた時ぐらいに親が脱サラして始めたんだけど、そのせいで朝も昼も夜もニンジンばかり食卓に並んでたんだ。

そのせいでニンジンがちよつとうんざり……。んで、家が育ててるニンジンは糖度が高いやつだから甘い物もちよつと……。

味覚が出来る前だったら逆に大好きになってたんだろうけど」



ニンジンには根菜の中では糖が多分に含まれています。

そのため糖分が好きなウマ娘はニンジンを好んで食べるのですが、私は幼少期に嫌と言う程ニンジンを食べた関係で、ニンジンも甘い物も敬遠しがちになってしまいました。

「農家の子は育ててる作物の事あんまり好きじゃないって噂は聞いたことがあるが、お前がそうだとはい……」

「皆が皆、そういうわけじゃないと思うけど……」

「甘味が苦手なら間食はどうしてるんだ？」

「さきイカとかスルメかな」

「……感性がおっさんだぞ」

「そんなこと言っても甘いのがダメなんだからそっち系にいくしかないじゃん」

おやつについてはお父さんから影響を受けているところが大きいと思います。お酒のおつまみをよく拝借していたので。

「ジェミニも食べてみなよ。ケーキとかより絶対美味しいから」

「そう感じるウマ娘はお前だけだよ……」

そんなことを話しながらお互いへのマッサージを終え、二人ともベッドに寝転がりま

ハードトレーニングで疲れていた私は、横になるなりすぐに眠る事が出来ました。

## 十九話 二重奏

地獄のタイヤ引きが始まってから数日。その練習に私が慣れる事はありませんでした。

というのもトレーナーさんが目標タイムをどんどん短くしていくからです。

もちろん目標タイムに届かなければもう一本追加されるので、一心不乱にタイヤを引きました。

それでも目標タイムを切れない事はあるので、そのたびにゾンビのようになりながら追加練習を行い、夕飯を戻しかけたり戻したりする日々を送っていました。

それとかなりハードなトレーニングを行っているせいか、毎日のように保健室に連れて行かれ、保険医の診察を受けさせられてもいます。

「違和感があればすぐに言えよ。怪我したらシヤレにならんからな」

「はい」

後は重バ場を重点的に練習しているのですが……こればかりは雨が降らないと練習しようがありません。

ぬかるんだ地面で足を取られる事を想定してダートを走ったりはしていますが。

あれ？ 何か最近芝より砂の上で練習していることの方が多いような……タイヤ引きもダートでやるし……。

いつそのままダートでも走ろうかと思いついた頃、見知った顔と偶然出会いました。

「あれ？ ジェミニ？」

「ん……なんだ、ノールか」

「……ダートだけど……何してるの？」

「お前がそれを言うのかよ……そりゃ俺だつてダートでしかできない練習ぐらいする。

特にタイヤ引きなんか芝の上じゃ出来ねえからな。ズタズタになっちゃう」

「それもそうだね……というかジェミニもタイヤ引き？」

「パワーつけたくてな。も、つて事はお前もか？」

「うん。これからするつもり」

「……もしかして、例の吐くほどキツイ練習って奴か？」

「まあそうだね」

「タイヤ引きでねえ……どういふ練習してんだか」

呆れ気味にしているジェミニ。彼女は少し顎に手を当てて考えた後に口を開きます。

「……俺もお前と同じメニューを試してみるか」

「えっ?」

「別にいいだろ、どうせ俺もお前もタイヤ引きするつもりなんだ。」

「勝手に付いていくから俺の事は気にしなくても良いぞ」

「う、うーん……」

こうなつてしまつた以上は放つておいても私の横で併走し始める事でしょう。

でもどうしよう……このままジエミニを巻き込んで良いのかな……?」

「ほらノール、今日もタイヤ引き始めるぞ」

そんなことを考えているとトレーナーさんがタイヤを用意して現れました。

「ん? 横にいるのはジエミニか。マッサージを教えた時以来だから数日振りだな」

「どうも」

「あれからどうだ? お前はなまじ器用なばつかりに逃げでも追い込みでも走れてた

が、どれかに絞れたか?」

「いや、絞らない事にした。」

俺は誰かを徹底マークして集中力を高めるタイプだから、マークする奴に合わせて

ペースを変えるのが俺に合っていると思う」

「そうか……走り方が多い程戦法も増えるが、それに比例して練習量も多くする必要が

ある。無理しすぎんなよ」

「ぼちぼちやるさ」

二人は簡単な挨拶を交わした後、そんな事を話し合っていました。

あれ……？ 二人つて意外と交流がある？

そういうえば私とジェミニがマツサージの仕方を習った時も、慣れたやり取りしていました。

会話の内容からして練習のアドバイスを貰っているようですが……。

「ノール」

「……え、あ、はい！」

「何ポーつとしてるんだ、早くタイヤ引き始めるぞ。今日はジェミニと競ってもらおう。

負けた方が一本追加な。体格の良いジェミニの方が有利だが、数日練習してた分ノールの方にも分があるから、まあトントンだろう」

「は、はい」

私が考え事をしている間にそういう事に決まったようです。

巨大タイヤに繋がったハーネスを体に付け、ジェミニと横並びになります。

「模擬レース以来だな」

私の横で不敵な笑みを浮かべるジェミニ。

「絶対負けないから」

それに対して私は真剣な顔でそう返します。負けたら一本追加ですから。

「併走の時と同じ顔……いや、それ以上の気迫を感じる。いいねえ、こつちも燃えてくるってんだ」

それはそうでしょう。負けたらもう一本ですし。

「位置に付け。合図するぞ」

そしてトレーナーさんの掛け声で勝負が始まりました。

「はー……っ、はー……っ、はー……っ」

「はあ……っ、はあ……っ、はあ……っ」

結果としては私の負け。地面に膝と手を付いた状態のまま、砂を握りしめます。

あと少しだったのに……っ！ スパートを掛けるのがもう少し早ければ……！

ジェミニより慣れているはずのタイヤ引きで負けた事がとても悔しいです。

爪の間に砂が入り込むのも気にせず、砂の地面を引きちぎらんばかりに掴んでいます。

あ、でも負けてもう一本追加された事より悔しさが先に来るって事は、やっぱり私は負けず嫌いなのかな……

そんなことを考えていると、青息吐息のジエミニが話しかけてきます。

「へ……へへ……俺の勝ちだな……」。

……とはいえ……なんだこれ……キッツ……もう動きたくねえ……」

「今は……呼吸を整えるのに……集中した方が良いよ……まだ……一本あるんだから……」

「? 何言ってるんだ……あと一本……あるのは……お前だけだろ……追加の分……」

「? 私……二本だけ……」

どこか食い違いのある会話を繰り返していると、トレーナーさんがそばに寄ってきてきます。

「7分26秒、ほぼ同着。とはいえノールの方が僅かに遅れていたから、もう一本追加だ」

「ほら見ろ……」

「10分休憩の後、二本目を始める。水を飲んで休んでおけ。」

今度は……競争形式にするとノールの方が有利そうだから、目標タイム形式にするか。



ノールは9分30秒、ジェミニは10分だ」

「……………は？　ちよ、ちよつと……………待ってくれ……………俺がなんだって……………？」

「目標時間は10分だ」

「そ、そうじゃねえ……………え……………？　あと一本……………う？」

分からない、といった表情で聞きなおすジェミニ。

「しんどいならこれで切り上げてもいいぞ」

それに対してトレーナーさんは少し口角を上げて、そう言いました。

「……………っ、誰が切り上げるかよ……………！　10分くらい簡単に切つてやるからな……………！」

「せいぜい頑張ってくれ」

……………煽るの上手いなあ……………。

トレーナーさんのジェミニの扱いの上手さに舌を巻きながらも、慣れたやり取りをしている二人を見ると少し嫉妬してしまいました。

……………いや、別に私だけのトレーナーさんってわけじゃないんだけど……………

分かってはいても妬みを感じてしまうのは人の性とか何というか……………。

それだけ私がトレーナーさんの世話になっているという事でしよう。

それからは10分休憩を取り、二人で折り返しのスタート地点に立ちます。

「お前より目標タイムが長いのが気に入らねえ。次もお前より速くゴールしてやるから

な……」

私の隣でそう息巻くジエミニですが、その顔は少しだけひきつっていました。「まあ……あんまり無理しすぎないようにね？」

「はあ……っ！ はあ……っ！ はあ……っ！ はあ……っ！」

べしやっ！

二回目のタイヤ引きを終え、ボロ雑巾のようになった体で地面に倒れこみます。

「9分2秒……昨日よりかなり速くなったな」

「分かってきました……底力の出し方……」

私は砂を口に含まないように、うつ伏せの状態から横向けになって発言しました。

「スタミナが無くなっても……なんて言えば良いんでしょうか……予備のスタミナを持ち出す感じ……つかめてきたんです……」

「それがこの練習の目的だからな。できたのなら順調って事だ」

「はい……」

「ま、今は休め。まだ一本残ってるぞ」

「……ハイ……」

次の事を想像すると、成長の喜びも途端にしぼんでしまいます。

「……………！ はー……………っ！ はー……………っ！」

どしやっ！

そんな私の横に追加のボロ雑巾がもう一枚。

「10分54秒。ジエミニも一本追加だな」

それを聞き、ジエミニはピクリと指を痙攣させます。

「……………マジカヨ……………」

「二人とも10分休憩した後にもう一本だ。追加分にノルマは無いから自分のペースでやってくれ」

「はい……………」

「……………」

ジエミニはトレーナーさんの言葉に返事もせず、倒れ伏しています。タイヤ引きがよっぽどこたえたのでしょう。

そのまま10分休憩した後、二人して疲労困憊の身体を引きずりながら、タイヤも引きずり始めました。

「う〃お〃お〃お……………」

べしやつ！ どしやつ！

「お疲れ様」

トレーナーさんがいつものように私たちのハーネスを外してくれます。

「今日の練習はこれで終わりだ。夜はしっかり休めよ」

「はい……………」

「……………」

倒れたままの私たちを置いて、トレーナーさんはタイヤを片付けに行きました。横を向くと倒れたまま全く動いていないジエミニが視界に入ってきます。

「大丈夫？」

「……………死ぬほど疲れた」

私が話しかけると、ジエミニは仰向けになりながら返事をしてくれました。

「毎日これやってんのか？」

「数日前からだけど、そうだね」

「……マゾの素質十分だな」

「いや別に私も好きでやってるわけじゃないけど……!」

反論する時に体も起こそうとしましたが、へとへとと身体ではそれも叶いません。大人しく寝ころんだまま続けます。

「速くなるために必要だから。じゃなきや明日にでも止めちやいたいくらい」

「ま、そりやそうか」

「……いや、やっぱり好き好んでするかも」

「手のひら返し早くねえか?」

「今思いついたの……ハードな練習していると精神的に楽だから。」

これだけ練習してるからきつと大丈夫、成長してる、って思える。

練習のキツさとその効果が比例するわけじゃないのは分かっているけどね。

気持ち的にはすごい楽。夜もぐっすり眠れるし」

ナイトという目標は遠く果てしない。だからこそ何もしていない時間が不安でたまらなくなります。

もつと頑張らないと追いつけないのでは? いや、きつと追いつけない。

ふとそんな妄執に囚われて、不安で心配で後ろめたい気持ちになってしまう事があり

ました。

もし今も普段通りの練習をしていたとしたら、私は再び寝不足に悩まされていたかもしれませぬ。

しかしこのトレーニングを思い出すと多少は不安が和らぎますし、練習でへとへとになるおかげで、夜は目をつむれば自動的に体が眠ってくれます。

「練習の積み重ねは自信になる、か」

「うん……結果につながるかはまだ分かんないけど」

「……お前ならやれるさ。あのモデル野郎に雑草魂見せてやれよ」

「雑草魂って……全体的に見ればトレセン学園に入学できた時点で私、恵まれてる方だし、そこそこエリートだからね？」

「そのエリートの中じゃ雑草じゃねえか、俺もお前も。」

道端の雑草じゃなくて畑の中の雑草ってだけさ。あるいは不良品の作物か……」

「……確かに」

出来が良くなくなりそうな芽、出来の良い作物だけがトレーナーに目を掛けてもらえて、育ててもらえる。

そこから漏れていた私たちは確かに雑草、不良品と言えるかもしれない。

「ま、今は雑草に肥料を撒いてくれる好き者がいるんだ。その養分、根こそぎかつさらつ

て周りの作物を追い抜いちまえば良い」

「いや畑の例えでいくなら、肥料をばらまいてくれるというよりは根を張る手伝いをしてくれてる、の方が適切じゃない？」

トレーナーさんは私が一人で考えて、成長できるように指導してくれてるから。

……タイヤ引きに関しては完全に肥料ばら撒いてもらってるけどね……」

私は基本的に自分の練習メニューは自分で考えています。今は次のレースに向けての対策を中心に。

そしてその内容をトレーナーさんに吟味してもらって、適宜修正してもらおう。初めて指導してもらった時からこの流れを崩したことはありません。

他の誰から栄養を与えられずとも、大地から栄養や水分を吸い上げて大きくなっている。

そのためには頑丈な根っこが必要で、その根っこをトレーナーさんは鍛えてくれているのです。

「根っこね……俺のはまだ貧弱そうだ……」

「時間が経てば頑丈になるよ」

「二人ともまだ倒れてるのか」

そんな話で盛り上がっていると、タイヤを片付けたのかトレーナーさんが戻ってきてま

した。

「ジェミニはこれが初めてだし、ノールは大分ペースを速めたからな、それも仕方ないか」

確かに限界ギリギリまでスタミナを使い果たしたので、かなり疲れてはいます。しかし、ジェミニと話している間に少しは回復しました。

なので自力で起き上がろうとしましたが……

「立てるか？」

トレーナーさんがまだ倒れているジェミニに手を差し伸べるのを見て、動きを止めました。

あっちの方を先に……私の方が付き合いが長いのに……

浮かんた感情は嫉妬。

……いやいや、単に私よりジェミニの方がトレーナーさんに近かっただけでしょ……

自分で自分に突っ込みを入れて、妬みの感情を振り払おうとしました。

しかし、モヤモヤした感じは残ったままです。

「どうも……」

ジェミニはトレーナーさんの手を取り、引き上げられるようにして立ち上がります。

「ほら、ノールも」



「は、はい」

結局私は自力で起き上がらずに、トレーナーさんに手伝ってもらいました。

……将来めんどくさい女になりそう、私……。

そう思ったのは誰にも内緒です。

「にしても疲れた……歩くのすらだりい……」

「分かる……完全にガス欠状態だよね……」

練習を終えてシャワーを浴びた私達二人は、亡者のようになりながらも食堂にたどり着きました。私はカウンターで減量用の糖質と脂質を制限したメニューを頼みます。

後に続くジェミニはトレセン学園ではお馴染みのニンジンハンバーグに副菜数種、山盛りのご飯にエトセトラ e t c ……非常にたくさんの料理を頼んでいました。

「お昼一緒に食べた時思ってたけど、良くそんなに食べれるね……」

「ウマ娘だったらこれぐらいは普通だろ。これでも普段より少なえんだぞ。トレーニングのせいで食欲ねえからよ……」

私だと半分も食べられないであろう量を少ないと言うジエミニに、目からうろこが落ちそうな気持ちになります。

受け取った料理をテーブルに運び、席に着きました。ジエミニは私の対面に。

「あー……っーか流れで同席しちまつてるけど、良いのか？ お前は減量中なのに……」

「え？ ……あ、うん。別に良いよ。私、元からあんまり食べる方じゃないし」

減量中のウマ娘の前でたらふく料理を食べるのは基本的にNGとされているので、そこをジエミニは気にしたのでしよう。

「つつても、目の前でニンジンハンバーグ食べられてたら自分も食いたくならねえか？」  
「いや別に……前にも話したけどあんまりニンジン好きじゃないし。それにニンジンハンバーグって見た目が……ね」

普通ニンジンハンバーグといえば、お肉にニンジンを混ぜたものを想像すると思うのですが、トレセン学園の場合、ハンバーグのど真ん中にニンジン丸々一本がぶっ刺さっているという代物です。

正直に言うともあまり食欲をそそるものではありません。

何食べてたらこんな料理を思い付くんだらう……そりゃニンジンか。

とかど真ん中のニンジンってどう調理してるの？ 蒸し？ 焼き？ それとも煮込み？

入学当初はそんな疑問も浮かびましたが、今ではお馴染みの光景です。自分で頼もうとは思いませんが。

「ま、お子様ランチみたいで子供っぽい嫌いはあるけどよ。味は良いんだぞ?」  
「うーん子供っぽいとかそういう問題じゃないんだけど……」

ニンジンが大好きなウマ娘にとっては、魅力的に見えるのかもしれない。そういうものだと無理やり自分を納得させました。

例のニンジンハンバーグをナイフとフォークで器用に解体し、口に運ぶジエミニ。その寸前で彼女の手が止まりました。

「……………どうしたの?」

ジエミニはそのまま料理を口に押し込み、数度の咀嚼をした後に飲み込みます。そして私に返事を返してくれました。

「いや、何でもねえ。なんつーか……口の中に食べ物入れんのにちよつと抵抗があっただけだ」

「あ………満腹の時に無理やり食べようとしている感じ?」

「ん、それだ。まさにそんな感じ」

タイヤ引きの後には内臓にまで疲労の影響が及んでいるのか、体が食べ物を受け付けてくれません。ジエミニもそれを感じたのでしょうか。

「食事が楽しくねえな……味は普通に美味しいんだが、体が受け付けないせいでしょう。お前は数日前からこうなのか？」

ジェミニはげんなりした顔を浮かべながらそう聞いてきます。

「うん、そうだね」

「良くやるな……こんなのが毎日続くと気が滅入りそうだ」

「まあでもジェミニは今日限りじゃん。私に付き合ってトレーニングしただけだし。私は……レースまでこのままかあ……」

食事の手を止めて大きなため息をつきました。正直止めてしまいたいです。

しかしレースに勝つために必要な練習なので、どれだけしんどかろうと続けなければ。ば。

「……いや、今日限りじゃねえさ。俺もあの練習を継続させてもらう」

「えっ？」

「底力だったか？ そいつを鍛えるのなかなか身になりそうだ。」

このまま止めちまったら俺がキツイトレーニンングに根を上げたみたいになるのが我慢ならねえしな。

それには後はお前に負けた気がして内心穏やかじゃねえ」

理由を述べ、どんどん料理を食べ進めるジェミニ。

負けず嫌いなジェミニの事だから多分、動機として一番強いのは最後の項なんだろうなあ……

とは思いつつも内心、嬉しいとも感じます。

ハードなトレーニングでも一緒に行う人がいると想像するだけで、心持ちが軽くなるのは私が社会的生物であるがゆえの性でしょうか。

自然と顔が緩んできました。そんな時、

……あれ？ 何か忘れてるような……

ふとそう思いました。

しなきゃいけない事があつたはずなんだけど……

喉まで出掛かっている事を思い出せないでいると、

ガガ……ッ！

対面のジェミニが椅子を後ろに跳ね飛ばしながら突然立ち上がりました。

びつくりした私がそちらの方を向くと、真っ青な彼女の顔が目に入ってきました。

彼女は手で口を抑え、食堂から急いで出て行ってしまいました。

「……………あ、よく嘔んで食べるように、って言うの忘れてた……」

彼女が向かった先は恐らくトイレでしょう。胃の中の物を戻しに……

「うふ……」

なんか私まで気持ち悪く……。

ジェミニに釣られたのか、一気に吐き気が込み上げてきた私も席を立ちトイレへ向かいました。

## 二十話 決意

ジエミニと連れゲロしてから二週間ほどが経ちました。今日は念願の雨の日です。それもかなりのザーザー降り。

これで重バ場の練習が出来ます。今までも雨が降った日はありましたが、いずれも小雨で馬バが悪くなるほどの降水量ではありませんでした。

私は準備運動を終え、コースの上に立っています。

「タイム、きちんと計ってくださいね」

「まかせとけ。雨で滑らない様に気を付けろよ」

「はい」

トレーナーさんに短く返事を返し、構えます。

「始め！」

掛け声を合図に、私はスタートを切りました。

「はっ、はっ……はっ、はっ……」

ぬかるんだターフの上を薄いレインコートを着たまま力走します。

靴が地面につくたび、ぐしやりと水つぽい音を立てて足が沈みます。

重バ場は良バ場以上、ダート以下の柔らかさなので、最近ダートで慣らしていた私にとっては走りやすいと感じる程。

垂直に……そして強く……

雨の日は芝が濡れて非常に滑りやすいです。なので足は出来るだけ地面と垂直に、そして強く振り下ろします。

そのまま芝を踏み抜きながら土もろとも後ろに蹴り飛ばして体を前に進めます。

コース補修係の仕事を増やす走り方を続けながら、2000mの内1600mを走り切りました。普段ならここからスパートを掛けるのですが、

重バ場でいつも以上に体力を消費しているのにゴールまでもつか……

つい、そんな勘定をしてしまいました。

いや、それを確かめる為に今練習してるんだ。それに途中でスタミナが切れても底力で走りきる……!

一瞬で思考を切り替え、一気に速度を上げます。残りは400m。



「はあっ、はあっ……はあっ、はあっ……！」

スパートを掛けてから200m。すでに息は荒く、足も疲労で重たい状態です。予想以上に疲れる……。けど……っ！

体を思い切り前傾させ、歩幅は出来るだけ小さく。ジェット走法に移行します。

走法を変えれば使う筋肉も変化する……。そのおかげで足の疲労感が多少抜けたものの、スタミナの方はかなり限界で、思わずフォームが乱れそうです。

いや……まだ限界じゃない……！ もっと絞り出せるはず……！

しかしそこで底力を発揮します。すぐにでも休みたいと訴えてくる体に鞭を打ちながら、非常用にと取つてあるスタミナを無理やり引き出し、つま先でターフをえぐり続けます。

……ゴール……っ！

そのまま速度を落とすことなく2000mを走り切れました。体感で過去最高の走り。きつとタイヤ引きの練習のおかげです。

これなら……この走りが出来ればナイトにも……

確かな手ごたえを感じながら前傾姿勢の体を起こそうとします……。が、走り終えて気が抜けたのか、スタミナを使い切ってしまったのか。体に上手く力が入りません。

やば……っ！

あと2、3歩もすれば転倒してしまう、そう確信して焦る私。

パニックを起こす頭とは対照的に、防衛本能なのか体は合理的に動いてくれます。

予想できないコケ方をする前に体を捻り、側転、バク転、バク転、バク転の三回連続技。それで勢いを殺した後に尻もち。

「でう……っ！」

勢いを殺したとはいえ、まだまだ速度に乗っている体はそのまま後転。最終的には綺麗な女の子座りの形に落ち着きました。

「……………っぶはあっ！ はあっ！ はあっ……い！」

何とか無事に非常着陸できたのを認識した私は、いつの間にか止まっていた呼吸を再開させます。

それと同時に雨で濡れていた顔を洗い流す勢いで冷や汗が浮かんできました。

「はっ、はっ、はっ……」

バクン！バクン！バクン！

浅い息遣いと胸骨を突き破りそうな程うるさい心臓の音だけが今の私を支配しています。

思考はまとまらず、ただ膨大な恐怖とその状況から脱した安堵だけを感じていました。

「ノール！ 大丈夫か！ ノール!!」

放心していた私を正気に戻してくれたのは、トレーナーさんの声でした。

「……………え？ あ、はいっ！ 何とか大丈夫です」

「痛い所は!？」

そう聞かれて体に意識を向けると、部分部分の痛みを感じてきました。

「えっと、手のひらが……………少し擦りむいたぐらいです。後は腕とお尻がジンジンします」

「足は?」

恐る恐る立ち上がり、慎重に足を動かしてみました。特に痛みはありません。

良かった…………

今、足に怪我などをしてしまえば目も当てられません。胸を撫でおろしながら、返事をします。

「大丈夫です。問題無いと思います」

「そうか。……………ふ……………」

トレーナーさんも安心したのか、私にも聞こえるぐらいに大きく息を吐き出しています。

「すみません、心配かけてしまつて。スタミナを使い切つてしまつたせいで、上手く減速できませんでした」

私がそう言うのと、トレーナーさんは眉をしかめました。

「……とにかく保健室に行くぞ。体を診てもらえ。痛みがなくても異常があるかもしれない。それにこのままだと体も冷える。分かつたな？」

「は、はい」

トレーナーさんの有無を言わさない、といった態度に私はタオルで体を拭いた後、大人しく保健室に向かいました。

手当と検査を終えた私は、保健室の長椅子に座っていました。その向かいにはトレーナーさんが座っています。

「何事も無くて本当に良かった……」

「そうですね。骨にも関節にも以上ありませんでしたし」

「……」

「……」

そこから会話が続きませんでした。トレーナーさんは相変わらず眉をしかめたままなので、私からも話しかけづらい雰囲気です。

真つ黒なサングラスもその雰囲気から拍車をかけています。

「その……すみませんでした。レース前なのに無理に走って怪我しそうになってしまつて」

とりあえずトレーナーさんが不機嫌そうな原因に当たりをつけ、その事を謝ってみました。

「お前が謝る必要は無い。お前はただ懸命に走っただけだ。責任があるなら底力を鍛えさせた俺の責任だ。悪かった」

座ったまま頭を下げるトレーナーさん。

「べ、別にトレーナーさんのせいなんてことは……」

「いや、俺のせいさ。……お前がスパートで見せるジェット走法、あれは速いが不安定な走り方だ。」

参考元のスーパーチャージャーのように短距離で走るなら問題ないだろうが、200

0 mの最後、スタミナの乏しい状態で走るにはやや危険な走法だと思う」

「……つまり底力を発揮してギリギリまでスタミナを使い切ったから、転倒しかけた。だから今回の件は底力の強化を提案したトレーナーさんに責任がある、って事ですか？」

「ああ、そうだ。この事を危惧していなかったわけじゃないが……底力を鍛えると言っても本当にスタミナを使い切ってしまうなんて事はまずない。

無意識のスタミナセーブはかなり強い本能だからな」

「せいぜいスパートタイミングを少し早められる程度だろうと、おそらく大丈夫だろうと、高をくくつちまった。

けど俺の予想以上にお前は底力を発揮したんだ。それこそジェット走法から体勢を立て直せないぐらいにな。

……悪い、長々と言いつつ喋っちゃって。本当にすまなかった、この通りだ」

掛けていたサングラスを取り、再度頭を下げるトレーナーさん。

「……………」

それを前にして、私は少しの間黙っていました。机に伏せてあるストップウォッチに目を向け、口を開きます。

「……トレーナーさん、さっきの私の走りのタイム、どうでしたか？」

「それは……1：59：11だった」

トレーナーさんは机のストップウォッチをひっくり返し、そこに表示されている数字を伝えてくれます。

「私、雨の中で2分を切れたんですね……」

トレーナーさんと出会う前の自己ベストよりも速いタイム。それを重バ場で叩き出したのです。

「この結果はトレーナーさんのおかげです。効率的な筋力トレーニングをして、フォームを改善して、ジェット走法を習得して、重バ場の練習をして、底力を鍛えて……そうしてこのタイムを出せたんです」

弾むようにここままで語りましたが、ここからは声のトーンを下げます。

「……けどそこまでしてまだ1：59：11、でもあるんです。次のレースと一緒に走るナイトの模擬レースのタイムを覚えていきますか？」

「確か1：56：78……だったよな」

「はい、差は2秒以上。ナイトの記録は良バ場でしたし、単純に比べるのは間違っています……良バ場ではなく重バ場で走ったと仮定しても2秒以上タイムを落とすとは考えられません。せいぜい1秒か1.5秒か……」

「つまり狙い通り雨が降ってレース本番、重バ場になったとしても、ナイトが万全の走り

をすれば私は勝てない」

レース本番では様々な要因が絡んでくるので、万全の走りが必ず出来るわけではありません。

しかしその紛れを期待しなければ勝てないという状態はあまりに受け身で消極的で……。

「……私にはまだ足りないんです。危険だからと底力を捨てれば更に足りなくなってしまう」

「……」

顔を上げたトレーナーさんの目をしっかりと見つめます。

「だから私は足しません。今足せそうなのは重バ場への更なる慣れと底力ぐらいです。」

だから私はこれからも雨の下を走ります。タイヤを引きます。

たとえゴール前で力尽き果て、転倒する可能性があっても底力を鍛えます。

……そして私の全部を使い切っても勝ちたい、一番になりたい」

ただただしかったかもしれないが、私が今思っていることを率直に吐き出しました。

「……」 「……」

しばらく二人で見つめ合ったままいると、先に目線を外したのはトレーナーさんでし



た。トレーナーさんは少し俯いた状態でサングラスを掛け直し、

「……プールでの練習を更に多くしないか？ 心肺機能を高めれば疲労が溜まりにくくなる上にスタミナの消費も抑えられる。」

それにプール練習は骨や関節への負荷が少なくて済む。レースまで日が無いが、少しでもお前の足しになると思う」

そう言ってくれました。

「はいっ!! 是非そうしましょう! 今日からでも!」

私は大きな声でそう返事しました。

(sideトレーナー)

俺は正しい事をしたんだろうか……? ?

あれからノールのプールの練習に付き合った後、あいつと別れて居室に戻るなり、そう思う。

あいつが何と言おうと底力の練習は止めさせるべきだったのでは……? ?

確かに底力を強化すれば今日の……いや今日以上の走りも期待出来るかもしれない。しかしあまりに危険だ。今日ですら転倒しかけた、ならば今日以上の走りをすれば……。

最悪の想像をしてしまった。嫌なイメージを振り払うように頭を振る。

そこまで分かっているなら叱りつけてでもタイヤ引きを止めさせれば良い。しかし俺には出来なかった。なぜか？

あの目だ。あの強い瞳に気圧されたから。

(たとえゴール前で力尽き果て、転倒する可能性があつても底力を鍛えます。……そして私の全部を使い切つてでも勝ちたい、一番になりたい)

あいつが異常に勝ちたがりなのは分かつていたつもりだったが……認識が甘かったか。

転倒しかけて大怪我するかもしれない恐怖を味わったばかりなのにあの発言。勝利以外頭に無い、つて感じだ。

それに勝ちたいと宣言をした時のノールの目は、俺がトレーナーになる前にも見た事があつた。

あれは確か変な宗教にドはまりしていた知り合いだったか。

何かの思想を抛り所にし、それを遵守する以外は考えられないといった純粹な瞳。あ

いつの場合は勝利の二文字が抛り所だろう。

あれらの人種は純粋であるが故に狂信的で、周りの人物に有無を言わせない程の非常に強い眼力を携えるのだ。

じつと直視されればこちらまでが相手の思想、世界に引きずり込まれてしまう程の眼力を。

ノールに見つめられた後、目線を外しはしたが手遅れだったのだろう。

結局はノールが転倒しないようにスタミナを補強するトレーニングを追加するだけで、底力を鍛えること自体には反対でできなかったのだから。

椅子に思い切り体重を預けると、ギィと背もたれのバネがきしむ音がする。

……ノールには勝ってほしい。

普通なら根を上げかねないトレーニングをあの小さな体で必死にこなして、命を削るような走りをしようとしている。

少しは報われても良いはずだろ？

そう思うのはトレーナーになるのにとっても苦勞した自分の姿をあいつに重ねているからなのか、それとも単純に自分の担当ウマ娘だからと鼻負しているからなのか……。

どちらにせよあいつに勝ってほしいという思いも、練習を止めさせなかったのに一役買っていた。

しかし……

世の中には今のあいつがどれだけ頑張って走っても、届かない領域がどうしても存在する。

スタミナを振り絞って走ろうが、転倒寸前のギリギリの走りをしようが1分59秒を切る事は出来ない。

それが今のあいつの限界。次のレース、順当にいけばノールがナイトに勝つ事はまず無理だろう。

競バにおいてあいつの143cmという身長に加えて、体格の小ささはかなり不利だ。

肩回りが狭いせいでそこにある肺も小さく、それは心肺機能の低さに直結するだろう。

小さいせいで不意の接触にも不利だ。

背が低ければ、バ群の中で見通しが効きにくい。

脚力においても統計的に見れば160〜170cmあたりの娘が優れている傾向にあり、そこから身長が低くなるにつれて下がる傾向がある。

もちろんわずかな隙間をすり抜けられたりなど有利に働く点もあるが、そんなのは微々たるもの。

今まで上げた事項、そんな事はあいつ自身が一番良く分かっているはずだ。

だからジェット走法を習得したし、弱音も吐かずにタイヤを引いているし、重バ場をヤマを張る、なんて事も言い出した。

あの年で自分の能力の足りなさを自覚し、それを埋めるための方法まで考えて実践しようとしている……本当にタフな娘だと思う。

そこまで考えると目に涙がにじんできた。

……くそつ、なおさら底力の練習を止めろなんて言えるかよ。

眉間を抑えて涙腺が引き締まるのを待つ。

そこでふと、あいつが悲しそうな表情をしているのを見た事が無いのに気づいた。

悩んでいる姿は見た事あるが……ノールの奴、悲しい、と思った時は無いのか？

自分の素質の足りなさ。魂を燃やして走っても届かないライバルの存在。それらを嘆いた時はないのだろうか？

……いや、確か俺と出会った時は思いつめていたっけか。

けれどあいつは勝てないのを自分に才能が無いからだ、とはせずに努力する道を選んだ。

それはひたすら前向きで建設的でポジティブで……だからこそ端から見ていると無理しているように見える。

本当は自室で落ち込んでたり、泣いていたりしないのだろうか？ そんなことを想像してしまおう。

……駄目だ、下手な事を考えすぎだぞ、俺。

勝手な想像をするぐらいなら、あいつの手助けを全力でする。それだけがトレーナーとしての俺があいつにしてやれる全てだ。

俺は追加したプールトレーニングの詳細を詰めるべく、姿勢を正して机に向かった。

## 二十一話 ミサンガ

「あ、ノールミサンガさん。荷物届いてますよ」

私が転倒しそうになった日から数日。

坂路ダツシユ、タイヤ引きに水泳等のトレレーニングを終えて寮に戻ると、玄関口を超えた先で寮を管理する人にその声を掛けられました。

「段ボール箱に封筒が一通。はいどうぞ」

「ありがとうございます」

レース前に段ボールと手紙……きつとお母さんとお父さんからだ。

トレセン学園は全寮制なので、両親と会う機会は長期休みの時ぐらいです。なので親からの荷物や手紙には少し心が躍ってしまいます。

荷物を抱えて、部屋に戻ろうとしたその時、

「あ……」

今帰ってきたであろうナイトとぼったり会ってしまいました。

ジェミニの部屋に泊まる事になって以来、ほとんど顔を合わせておらず、5日後にはレースも控えているので結構気まずい雰囲気があります。

「先に行かんといてやナイト……つて、ノールヤン。何の荷物や、それ？」

遅れてスパさんが駆けつけてきます。ナイトと二人きりの状態から解放され、多少は雰囲気が弛緩しました。

「親からの荷物です」

「そういえばレース前に送ってくるんやつけ？」

ええなあ、ウチの親は連絡は頻繁によこすけど、荷物はあんまり送ってこんからなあ……」

「頼めば送ってくれるんじゃないですか？」

「ん……ま、いうてウチ、重賞とか勝つてて稼いだるから、送ってもらうより自分で買った方が速いんやけど」

「じゃあ、私の事を羨ましがらなくて良いのでは……？」

「いやいや、こういうのは気持ちが大切なんや。せめて手紙やとええんやけどな。」

メッセージだけやと何か軽うてしやあないわ。ナイトはどうや？」

「私は……親に送る方が多いですね。私がモデルとして出た雑誌を送ってほしいと頼まれるので。」

向こうからの荷物は無難に日用品とか。荷物が送られてきたら電話を返したりします」



そんなことを話ながら三人で並んで廊下を歩いていました。陣形としては私とナイトの間にスパさんが挟まっている形。

「あー……他の話題は……」

私とナイトが一緒のレースを走る事になり、仲が少し気まづくなっているのはスパさんも周知しています。

そのため私たちの間に入って会話を取り持つてくれようとしているみたいです。

「ナイトは天気予報、見た？」

そんなスパさんの気遣いを無に帰すかのごとく、私はナイトに直接話しかけます。

「……見た。雨、降りそうだった……」

そう。そうなのです。

神様が私に味方してくれたのか、日ごろの行いが良かったのか、それともこつそり作った降れ降れ坊主（テルテル坊主を逆にしたもの）が功を奏したのか。

とにかくレース前に雨が降りそうなのです。念願の雨が。

「もし重バ場になれば、当日は荒れそうだね」

一番人気のナイトじゃなくて私が勝つ、言外にそんな意味を込めて牽制しました。

彼女とまともに話をするのは久しぶりなのに、結構な喧嘩腰が出てしまって自分自身少し驚きます。

「荒れないよ。勝つのは私だから」

しかし、ナイトは確固たる自信をにじませながらそう返してきました。

「……………」

お互いに視線は合わせません。しかしその場に居合わせた者は二人の間に火花が散るのを錯覚したことでしょう。

間にいるスパさんが非常に居たたまれない顔をしています。

「…………あつ、ほら！　もう二人の部屋に付いたで！　それじゃあウチはこの辺で！　また今度な！」

スパさんは私たちの部屋の前に来るなり、すぐにその場を離れていってしまいました。

それを傍目で見送っていると、ナイトは自分の部屋の扉を開けています。

「…………次はパドックで」

「…………うん」

最後にそんなやり取りを残し、ナイトは部屋に入っていききました。私も居候させてもらっているジエミニの部屋に戻ります。

「ただいま」

「おかえり…………つてお前、何怒ってんだ？」

「え？ 何の事？」

先に部屋に帰っていたジェミニの急な問いかけ。その意図がつかめず、つい聞き返してしまいます。

すると彼女は自分の耳を指で指しました。

耳……？

荷物を床において自分の耳を触ると、いつの間にか耳が引き絞られていました。毛も少し逆立っています。

ウマ娘は眉や目、口元だけでなく耳や尻尾にも感情が出ます。耳が引き絞られているというのは、不快や怒りなどといった攻撃的な感情を表すものです。

「あ、ごめん。つい無意識で。」

別に怒ってるとかじゃなくて、さっきナイトと廊下で合っちゃったから闘争心がね……」

自分の耳を手で普通の状態に戻しながら謝ります。

「レース、五日後だったか？ そりゃ仕方ねえよ。……それより、その荷物は何だ？」

「親から送られてきた」

床に降ろしていた段ボールを再度持ち上げ、机の上に置きます。そして段ボールの上に乗っていた封筒を手に取りました。

「段ボールの中はニンジンか？ お前ん家、ニンジン農家だし」

「いや、違うよ。多分スルメ」

「……スルメ？」

「スルメ。あたりめとも言う」

「……開けて見ても良いか？」

「良いよ」

ジエミニはハサミを持ち出し、段ボールの封を切っています。その間に私は封筒の封を切り、中身を取り出しました。

封筒の中には手紙が三通、そしてミサンガとループが同封されています。

その内の一つの手紙を手に取り、開きました。中にはお母さんからのメッセージが書かれています。

（畑仕事で感じる風も心地よくなってきたとはいえ、まだまだ暑い日が続く今日この頃。ノールは元気でやっていますか？）

そんな書き出しから始まり、近況報告や次のレースについて触れられました。

お母さんは書き言葉においては誰が相手であろうと敬語になるタイプです。

（今度のレース、例によってご近所さんの収穫の手伝いなんかがあるので、現地に応援には行けません。

ですので父さん共々テレビの前で応援しています)

大変そうだなあ……

(それとあなたの好きなスルメも送っておきました。近所の駄菓子屋から出来るだけ買  
い占めて)

「うわっ！ スルメが入ったボトルがびっしりと……マジかよ」

ちようど良いタイミングで段ボールを開封したらしく、横から驚愕の声が聞こえてき  
ました。

(いつものようにお守りとしてミサンガも同封しています。レースの時は是非つけるよう  
に)

横に避けておいたミサンガを手に取ります。赤と白が交互に編み込まれたミサンガ。  
試しに腕に着けてみると、やはりと言うべきかぴったりフィットしました。

「ん……そのミサンガは？」

しばらく段ボールいっぱいのお守りを眺めて呆然としていたジエミニですが、正気を  
取り戻したのか、私にそう聞いてきます。

「手紙に同封された。お守り替わり、ってレース前にいつも送ってくるんだ」

「いつもって……ミサンガって切れた時に願いが叶うもんだろ？」

レース毎に新しいのに変えてたら意味がねえんじや……」

「うくん……そこらへんはお母さん、ルーズだから」

今も切れずに溜まったミサンガが1ダースほど手元にあります。とはいえお守り替わりなので、切れた時に云々（うんぬん）はあまり気にしてません。

「けど色は完璧だぞ。赤は勝負事、白は健康を意味するからレースにはぴったりだ。

……そこは合わせてんのにどうして……」

「あく、多分色は偶然だよ。前のレースの時は黄色と黒だったし」

「金運と魔除けだなそりゃ……」

レースの賞金を得られるように、それと怪我をしないための魔除け。そう考えればギリギリ意味が通らないわけでも……」

「さらにその前は灰色と茶色だった」

「仕事と家庭……だったらレースには関係無いか。

ってことはお前の母さんマジでミサンガに対しての知識無いんだな。なんで良く知らない物をお守り替わりに……それも子供に対して……」

得心がいけない様子のジェミニ。彼女は少しの間頭を悩ませていましたが、考えてもしようがないと思つたのか、話題を切り替えてきます。

「……なあ、さつきから気になつてんだが……」

「何？」

「その……もう一通の手紙は何なんだ？ 全体的に黒いんだが……」

ジェミニは恐る恐るといった様子で黒い手紙を指します。

「これ？ お父さんからの手紙だよ。黒いのはペンのインク。お父さん小さい文字で裏までびっしり書いて送ってくるから」

「わざわざ裏まで使って一枚に収めなくても、2枚目3枚目に書けば良くねえか？」

「18枚」

「18？」

「私が寮に住んでから初めて届いたお父さんの手紙の枚数」

「……なるほど。枚数を制限されたわけか」

「そ、お母さんにね。代わりに小さい文字でびっしり書いてくるようになったけど……」

封筒に入っていたルーペを手に取り、小さな文字を一つ一つ読んでいきます。

まあ手紙の内容は「元気にしてるのか？」「会えなくて寂しい」「次のレース頑張れ、応援してる」「次はいつ実家に帰ってくる？」といった内容を、表現を変えて何度も繰り返し書いてあるだけですが。

「大変じゃねえか？ 小さい文字読むの」

「めんどくさいのは確かにそうだけど……お父さんが私の事を思ってくれているのは伝わるから読んで楽しいよ。」

特に初めと真ん中と最後に「いつ帰省するんだ」って内容の文が無理やり挟まってるんだけど、ここまでされると何かお父さんの事、可愛く思えてきちゃう。

「どれだけ寂しいんだ、って感じ」

「父親に対する評価としては間違ってるような気もするが……。というか今時手紙なんだな。メッセージアプリとかじゃなくて」

「急な連絡とかはメッセージアプリとか電話で済ませるけど、レース前は手紙だね。風情重視で」

「……確かに便箋も凝ってる。父親からの無地だがこれは……」

「模様が入ってたら書ける量が減っちゃうからでしょ」

「だな」

「二通の手紙とループを封筒に戻し、残った何も書かれていない便箋を机に広げました。」

「で、お前はそいつで返事を書くってわけか」

「そうだね。本当なら便箋も選びたいけど、学内の売店だと最低限の品ぞろえしかなくて、でも便箋のためだけに外出許可取るのもね……。だから送ってもらってる」

シャーペンを手に取り、下書きを書いていきます。

ジェミニは私が作業をし始めると、ベッドの上で胡坐をかきながら骨伝導イヤホンで



音楽を聴き始めました。

何を書こうかな……。明日の朝、郵便に出したらレースの二日前に向こうに着くだろうから、近況報告にレースの事に……。よし、決めた。

（日暮れが日に日に早くなり、トレーニングコースで夜間照明のライトを浴びる時間が長くなってきた今日この頃。

お父さんとお母さんは元気にしていますか？ 私は変わりありません。

今は何やかんやあつて新しい友達の部屋に居候させてもらっています。

寮生活なのに居候とは何事か、と思われそうですが説明すると長くなるのでここでは割愛します。

新しい友達は見えた目が厳つく、最初は一匹狼と言う印象を覚えました。しかし接してみると意外と気立度が良く、今では仲良くやっています。

五日後……。この手紙が届くころには二日後くらいになっているでしょうか。

とにかく次のレースは必ず勝ちます……。そう言い切れれば良かったんですが、正直な所、あまり自信がありません。

前にも話した通り、幸運にもトレーナーさんに指導してもらった機会に恵まれたので、飛躍的に走りは上達できました。

しかし同じレースに出る娘はとても速く、彼女が最高の走りをすればおそらく私は勝てないでしょう。

それでも私は全力で走ります。本番で練習以上の走りが出来れば私が勝つ目も出てきますから。自分の全てを出し切るつもりで頑張ろうと思ってます。

とはいえ当日は重バ場になってくれるとレースが荒れて勝ちやすくなるでしょうから、雨ごいでもして祈っていてください。

次に帰省できるのは正月になりそうです。二人とも季節の変わり目で体調を崩さないように気を付けてください。

この手紙が実家に届いた後、お父さんの部屋が降れ降れ坊主で埋め尽くされた画像が送られてきたのはもう少し後のお話。

## 二十二話 傘の下で

「はっ、はっ……はっ、はっ……」

「よし。最後の調整も問題ないな」

私が出走するレース、紫苑Sの前日。本番に疲れを残さないように今日は軽めのトレーニングで終えました。

うつすらと額に浮かんだ汗をタオルで拭き終え、私は空を見上げました。すると今にも雨雫が落ちてきそうな、重たい灰色の空が視界いっぱいに広がります。

「……………」

「天気が気になるか」

「……はい」

今にも雨雫が落ちてきそうと表現しましたが、現実にはただの曇り空なわけで。

もしかしたらこのまま雨が降らないかもしれないかもしれません。雨が降って重バ場になって欲しい私として気が気ではないのです。

今日の降水確率、90%なんだから降ってくれてもいいのに……

このまま雨が降らなかつたら気象庁に電凸してしまうかもしれません。

だって期待させておいてがっかりさせるのは悪質だと思います。私が勝手に期待してるだけなんですけどね……。

「こればかりは祈るしか無いな。降らなかつたら、そんな時はそんな時だ。

とはいえ雨が降らなくて良バ場のままだとしてもお前は十分に走れると思うがな。前とは見違えるぐらい速くなった」

「それはそうですけど、やっぱりナイトに勝とうと思うと雨が降らない事には……」

「……少し忠告いいか？」

「何でしょうか？」

トレーナーさんにしては珍しい切り出し方。素直に言葉を待ちます。

「お前はナイトをライバル視して彼女に勝つ事を第一に考えているようだが……他の出走者達も警戒しておけよ。

皆、勝つために努力して来ているはずだ。ナイトに勝つても他の奴に一着をかつさわれたら元も子もないぞ」

トレーナーさんの至極当然な指摘。

「はい。それはもちろん分かっているつもりですけど……」

それに対して私は実に曖昧な返事をしました。

「つもり？」

「……ナイトの模擬レースの走りがずっと頭の中に残ってるんです。

それを思い出すと、ナイトが先頭を走るイメージしか湧かなくて。

彼女に勝てばそれすなわち一番、みたいな感じでどうしても目の敵にしちゃうんですよね」

我ながら視野が狭い考えだとは思いますが、それほどまでにナイトの走りは私の中では印象的な物でした。

「そうか……。競技者のそういう勘は良く当たるとも言う。

それに実力的にもナイトが一番なのは疑いようがない。まあ好きにしてみろ」

「はい」

練習のかたわら、同伴競技者の情報も分析していました。

ナイトを中心に色々なレース展開を考え、自分なりの作戦を考えたので次のレースではそれを実行しようと思っっています。

トレーナーさんにも目を通してもらったので、まるっきりの外れな物は無いと思いません。

「……そういえば、見せて貰った作戦は全て先行策だったが、差しは考えなかったのか？ ジェット走法を習得した関係でスパートの最高速が上がったから、模擬レースみたいの後ろから行くこともできると思うが」

急にトレーナーさんがそんな質問をしてきました。

どうしてレース前日に今更そんな質問を……？

そう疑問に思いましたが、とりあえず答えます。

「それは私も考えましたけど……次のレースで走る中山競技場には最終直線に上り坂があるせいで、後ろから捲るのは難しいと思います。

それに差しは後ろで脚を溜めておく関係で、底力を発揮しづらいですし」

言つてから少し生意気だったかもしれないと思いました。

自分の考えは正しいと思つていますが、トレーナーさんは所謂、教師に当たるような立場。

その言葉に反論するのは気が引けてしまうのです。しかしトレーナーさんはわずかに口角を上げて、

「確かにその通りだ。良く考察出来てる」

そう褒めてくれました。少し照れくさくて目線を逸らしながら頬を人差し指で掻きます。

再びトレーナーさんの方を向くと、いつの間にかトレーナーさんは空を見上げていました。

「……お前の担当になってからもう三か月か。時間が経つのは早えな」

「……確かに。もう三か月も経ったんですね」

振り返ってみると、寝不足になったり、ジエミニに併走で負けたり、ジェット走法を習得したり、模擬レースで一着を取ったり、ナイトに宣戦布告しちやったり、胃の身を戻したりと、色々な出来事がありました。

それら全てが昨日の事のように鮮明に思い出せます。

……思い出したくない記憶も結構混ざっていますが。

「この三か月、お前はよく頑張った。今となつては一人で練習メニューを考えられるようになったしな。」

レースの作戦もそうだ。俺の質問にも自分なりの意見をきちんと返せてた」

「それは……トレーナーさんにそうなるように指導してもらいましたから」

ウマ娘自身が考え、一人でも成長できるようにする。それがトレーナーさんの方針です。

トレーナーの付いていないウマ娘が皆、一人でも成長して行けるようにしたい。それがトレーナーさんの望みでした。

本来なら私の専属になるつもりはなく、本を出したり教官となつて多くのウマ娘を指導したいとも言っていました。

「……………」

そこまで考えると、この後にトレーナーさんが何を言おうとしているのか、なんとなく察しがついてしまいます。

悲しさが表情に出ないように我慢したまま、トレーナーさんの次の言葉を待ちます。

「……明日、お前が勝つにしろ負けるにしろ、次のレース限りで俺はお前の専属を辞める」

トレーナーさんはサングラスを外し、私と目線を合わせてそう言いました。

「……………はい」

やはりと言うべきか、私が想像していた通りの内容をトレーナーさんは口にしました。

予想はしていたものの、実際に言葉にされると、悲しき、寂しき、切なさ、それらの感傷的な気持ちでいっぱいになります。

「……そんな顔をするな」

自分では表情が崩れないようにしていたつもりでしたが、どうやらダメだったようです。

「レース前にわざわざこの話をしたのは、お前に自信を付けてもらう狙いがあったんだがな……………」

「……………自信、ですか？」



「ああ。俺は前にも「お前が俺の力が無くてもやっていけると判断したらお前の専属を止める」……そう言ったよな」

「はい」

「だから俺が専属を止めるのは所謂（いわゆる）「免許皆伝」にあたるわけだ。

この三か月でお前は本当によく成長したよ。それを次のレースの自信にして欲しいと思っただが……」

トレーナーさんは私の顔を見ます。

「逆効果だったようだな。……悪い、お前の気持ちを上手く汲み取れてなくて」

「いえ……いつかこんな時が来るのは分かっていましたから。覚悟の出来ていなかった私が女々しいだけです」

「お前は女だから女々しいも何も……すまん、今はそういう話じゃないな。

とにかく、そこら辺のメンタルケアも今は俺の仕事の内さ。

この件は単純に俺がトレーナーとして未成熟だったただけだ。

……あれ以来上手くやれてると思ってたが、まだまだ新人ってことか……」

自虐的な発言をするトレーナーさん。

私は思わず口にしていました。

「あ、ありがとうございます！」

それを聞いてトレーナーさんは怪訝な表情をしています。

「……どういう思考の飛躍でお礼が出てきたんだ？」

「え、えっと、それは……と、とにかく！ 三か月という短い間でしたけど、トレーナーさんにはとてもお世話になりました！」

ここまで私が速くなれたのはトレーナーさんのおかげです！

私はトレーナーさんをすごいトレーナーだと思います！

他のトレーナーと比較したわけじゃないので絶対的な評価ですけど……私の顧客満足度は100%ですから！

トレーナーさんがトレーナーで本当に良かったです！」

私はそう畳み掛けました。とにかくお礼が言いたかったのです。

トレーナーさんがあの夜に私の専属になってくれた事で、私は大きく変わったのですから。

「そ、そうか。なら良かったが……」

グイと距離を詰めた私に若干引き気味のトレーナーさんですが、眉間に寄っていた皺がすっかりなくなっているのです、少しは気分を持ち直してくれたようです。

身乗り出しすぎた私も正気に戻り、適切な距離を取り直しました。

「……俺もお前が担当で本当に良かったよ」

「へ……?」

距離を取った所へトレーナーさんのいきなりの不意打ち。変な声が出てしまいました。

「似た者同士って奴なのか……俺はお前に良く自己投影してしまう。」

お前が早く成長したいと焦って寝不足になった時があっただろ? あの時もお前の

苦しみは良く分かった」

「そ、そうなんですか?」

「ああ。俺もトレーナーになるための勉強をしていた頃に、「俺は昔遊びまくっていたハ  
ンデがあるから、夜寝る間も惜しんで勉強しないと」って毎日ボロボロになるまで勉強  
していた時期があった。」

何もしていない時間が後ろめたかった」

「そ、そうですね! 努力してない時間は甘えだ、って考えが頭にこびりついて離れな  
くて……」

「それにお前が模擬レースで勝った時も自分の事のように嬉しかった。お前の努力が報  
われた瞬間、トレーナー試験に受かった時を想起しちまったんだよ」

「あ、確か両手でガッツポーズしたんですね」

「み、見てたのか?」

「いえ、スパさんから聞きました」

「あのやろ……………と、とにかく。俺はお前の悩みも苦しみも成長も勝利も、自分の事のように感じるんだ。」

人バ一体とはこの事を言うのかもな。お前は俺にとって最高のウマ娘なんだよ、ノー。

だから俺からも言わせてくれ、ありがとうな」

サングラスを外したトレーナーさん。

それだけでも結構珍しいのに、トレーナーさんがサングラスを外した時は大体が重々しい話をする時なので、サングラス無しで柔らかな表情を浮かべるのは初めて見ました。

「あ、え、いえ、ど、どういたしまして……………／＼／＼」

レアな表情に加え、面と向かってお礼を言われたのも相まって、しどろもどろになってしまいました。

気恥ずかしさから体温が上昇していくのも感じます。

二人の間に出来た妙な雰囲気。

ポツリ……………

その時、手の甲に何かが当たる感触が。

「……………もしかして」

「雨、だな」

私もトレーナーさんも空を見上げます。するとポツポツと水滴が額や手のひらに当たってきたのも束の間、すぐにボタボタボタと大きな雨粒が私の全身を打ち据えてきました。

スコールのような雨に、周りの人たちは急いで校舎の方に避難していきます。

しかし私は避難するどころか、逆に手を広げ、目を閉じて空を仰ぎ、雨に打たれるままにしています。

照れで温まっていた体が雨で冷やされて心地よいです。

しばらくそのままの状態でした。体操服が余すところなく体にへばり付く頃、急に雨が止みました。

不思議に思い、目を開けると、黒い布と金属製の骨組みが目に入ってきました。

「何やってんだお前は。呼んでも上の空でずぶ濡れになって……」

声が出た方を向くと、呆れた顔をしながら私にバスタオルを差し出すトレーナーさんが目に入ってきました。

「ま、雨が降って感極まる気持ちには分からなくもないがな」

内心を言い当てられた私は、口元を綻ばせながらバスタオルを受け取り、羽織りまし

た。

「……明日はゴール前で待っていてください。トレーナーさんに一着を贈りますから」  
私がそう言うと、

「それは嬉しい申し出だが……余計な事をあんまり考えんなよ。」

下手な事で気負って、またスタートをミスリやがったら免許皆伝も無しに放逐するぞ」

トレーナーさんの返しに私の口はますます綻びます。

「余計な事じゃありませんよ。とても大切な事です」

飾らない笑顔でそう言いました。

## 二十三話 紫苑S 当日

カチツ

目覚まし時計がアラームの時刻になった瞬間に鳴る僅かな機械音。それをきっかけに私は目を覚ましました。

眠っていた頭は一瞬で冴え、すぐに体を起こし、目覚まし時計がうるさくなる前にアラームをOFFにします。

そうして静かに迎えた朝は紫苑S当日。

いつも通り朝の身支度を済ませていると、遅れてジェミニも目を覚ましていました。「あ、ごめん。起こしちやった？」

「いや別に……」

ジェミニはそれだけ言うと、ベッドの上で胡坐をかきながら目を閉じてしまいました。

瞑想しているのか、単純にエンジンが掛かっているのかは定かではありませんが、彼女の朝はいつもそうです。

「今日のレースは昼からだろ……。なのに朝早えな……」

「本番の日こそ普段通りにした方が良いかな、って。

それに蹄鉄のチェックとか、作戦のおさらいとかやる事はいくらでもあるし」

財布、スマホ、着替え、タオル、水筒、折り畳み傘、レース用具一式、その他諸々……  
良し。

「じゃあ行ってくる」

「ああ……気が向いたら応援に行ってやるよ……」

荷造りを済ませた私は玄関の扉を開きました。

「ふー……」

時と場所は変わって昼過ぎの中山競技場ウマ娘控室。

あれから寮を出た私はトレーナーさんと最後のミーティングをした後、中山競技場まで来ました。

消化の事を考えて、お昼前に食事を済ませ、最後の栄養補給も万全。

今は20分後に始まるレースに備えて体を温めていました。レース前はパドックで



お客さんに顔見せをするので、それより前にはウォーミングアップしておく必要があります。

とはいえ室内では派手に動けません。ですので本や動画を見て学んだ太極拳で体を温めていました。

「調子はどうだ？」

「……良い、と思います。体の不調はありませんし、気も研ぎ澄まされてますから」

「不調が無いのは良い事だが、研ぎ澄まされてるつてのは一体……」

「何と言いますか、普段なら気づけない事に気づけるんです。朝は目覚ましが鳴る前に目を覚ましましたし、人の気配とかにも敏感なんです」

「……緊張しているわけじゃないのか？」

「緊張してるわけではないと思います。……不思議と落ち着いてますし」

胸に手を当てて心拍を計りますが、平常より少し速いぐらいです。ウォーミングアップの効果が出ているだけでしよう。

「そうか。なら良いが……」

……ツ……コツ……

その時、トレーナーさんの声に混ざって足音がしました。

これは……部屋の外、それもパドックの方から。足音的に多分革靴かな……。

「どうした？」

急に扉の方を向いた私を疑問に思ったのか、トレーナーさんが声を掛けてきます。

「係の人が来ました。呼びに来たと思うので行ってきますね」

「あ、おい……」

控室の扉を開けて外に出ると、やはり革靴を履いた係の人がいました。

その人は私が急に出てきたせいなのか少し驚いています。

「パドックですか？」

「え、あ、はい！ もう行けますか？」

「大丈夫です」

「それではお願いします」

私は係の人に促されるまま、パドックの方に歩いていきます。トンネルのような通路を抜けると、山ほどの喧騒に包まれました。

視界には人、人、人。今までに見たことが無い超満員を目の当たりにして、少し怯んでしまいます。

「一番、ノールミサंगा。——……」

しかし実況の声が響き渡ったのをきっかけに正気を取り戻しました。

まあ、このお客さんたちが見に来ているのは私なんかじゃなくて、この後に出てくる

ナイトか……。

トリプルティアラを有望視されていたウマ娘の怪我からの復帰戦。

彼女のファンが一齐に押し掛けていたのでしよう。自分に注意が向いていないと思うと、大勢の目もあまり気にならなくなりました。

冷静に客席を見回すと、スパさんの姿が見えました。その少し横にはジエミニの姿も。

応援、来てくれたんだ……。

二人の方に手を振ると、スパさんは大きく手を振り返してくれます。ジエミニの方は、まさか見つかるとは思わなかったのか、驚いた表情をしていました。

ちらりと空を見ると、雲間が見えない程の曇天空が見えます。

昨日の放課後から降り出した雨は今日の昼前には降り止みました。

重バ場は望んだものの、雨の中走るのは視界が悪くなるので、今の状態は私にとってベストだと言えます。

そんなことを考えている間に私のバドック時間は終わりました。踵を返して通路に戻ります。

控室に戻る道中、次に顔見せをするナイトが前から歩いてきました。

「……………」

お互い、一瞥<sup>いちべつ</sup>するだけ。言葉も無くすれ違います。

それだけのコンタクトでしたが、私は尻尾を逆立てて身震いしていました。

レース前のウマ娘が纏う張り詰めた空気。GIを取った事がある彼女のそれは一層すさまじいです。

なまじ同室相手として彼女の普段の姿を知っている私だからこそ、ギャップをモロに受けてしまった気がします。

あれと競うのか……

自分より20cm以上も高い身長。強靱なトモ。鋭い黒の瞳。その全てが私を威圧します。

一か月前には毎日見ていたはずのものなのに。

勝てるのか……？

……ダメだ、いけない。下手な事を考えるな。

見ただけで実力差を感じ取ってしまい、見切りをつけそうになった自分自身を諫め<sup>いさ</sup>ます。

思い出せ。

練習した日々を。

転倒も厭<sup>いと</sup>わないと誓った覚悟を。

自分が満足するためにも、トレーナーさんに報いる為にも……私は勝つ。

目を閉じ、再び開いたときにはもう迷いはありませんでした。そのまま振り返らずに自分の控室に戻ります。

(side ナイトグライダー)

「ふー……」

逆立つ耳の毛を手でほぐしながら短く息を吐く。

パドックでの牽制は今まで何度もあったけど、さっきのは過去一だった……

同室相手のノール。彼女と本番のレースで走るのは今回が初めてだが、彼女の威圧は過去にやり合った事のあるどんなウマ娘より鋭く、深く突き刺さってきた。

あの小さな体のどこからそんなオーラを発するのだろうか。

牽制された私だが、不思議な心地よさも同時に感じていた。

ノールとは同じ部屋に住む者として仲良くやっていたが、レースで競う事が決まっただけから、その友好的な関係が終わってしまうのではないかと思った。

しかしこうしてお互いに威圧し合った後でも、彼女と仲が険悪になった感じはしない。

日常から隔絶された勝負の世界で、普段見せない好戦的な一面をお互いに見せ合った……その事に奇妙な絆を感じていたのだ。

………勝つ、ノールには負けたくない。

心の蠟に火が灯るのを感じながら、私はパドックへ向かった。

ガチャ

「お帰り……っ」

控室に戻った私を迎えるトレーナーさんは、私の顔を見るなり息を飲んでいました。

「トレーナーさん、ゴール前で待っていてください。……一番に向かいますから」

「……分かった」

トレーナーさんはドアノブに手を掛けて扉を開きます。しかし外には出ていかず、その場で少し立ち止まりました。

「……頑張れよ」

「……はこ」

私が返事をする、トレーナーさんは外に出て行きます。

それからはゲートインで呼ばれるまで、無心でウォーミングアップの続きを行いました。

(sideトレーナー)

「……ん？ ノールのトレーナーやん」

ノールの控室を出た後、俺はあいつとの約束通りゴール前の観客席に陣取ろうとした。

しかしあまりの人の多さにどうしたものかと困っていると、聞いたことのある関西弁の声が聞こえてきた。

「スパーチャージャーか」

「こんなゴール前で何やつとるんや？ 第四コーナーはあっちゃやで」

競バ観戦において、勝負が決まるゴール前は人気のポジションだ。

しかしスパート前の位置取り、駆け引き、スパートのタイミングが重なる第四コーナー付近もレースが盛り上がる場所として人気がある。

競バの知識が深い者にとつてはゴール前よりも人気かもしれない。

そこら辺の事を前提にスーパージャージャーはそう言ったのだろう。

「ゴール前で待つててください、つてノールに言われたんだよ。だからここに陣取ろうと思つたんだが……いかんせん人が多くてな」

「そういう事かいな。……しゃーない、ここはウチが一肌脱いだるか」

指をチョイチョイと動かして俺についてくるように促しながら、人ごみの中に割つて入るスーパージャージャー。

ウマ娘と言えどこの人ごみの中に押し入るのは無理ではと思つたのも束の間。

「ちよいとごめんよ〜」

彼女が声を発すると、周りの観客は驚きながら彼女の前を開けていく。

「あれつて……」

「スーパージャージャーだよな……」

「えっ！ どいどい？」

モーセのように人の海を割る彼女の後ろに付いていくと、すぐに観客席の先頭にたど



り着いた。

「ほい、到着」

「助かった、ありがとな。……けど良かったのか？　こんな強引に……」

「ええってええって、有名人の特権や。ネットの匿名掲示板でアンチにボロクソ言われたりするんやから、こんぐらい恩恵が無いとな」

ケラケラと笑う彼女の発言に苦笑をしながらもスタートゲートの方を向いた。

ウマ娘達が次々とゲートインをしている。一枠のノールはもうゲートインしていた。

「ノールはまた一枠か。長い事ゲートの中で待たされて、模擬レースの時みたいに出遅れんとええけどな」

「あいつなら大丈夫だ。二度同じ失敗はしねえよ」

「ふくん……大した自信やな。本人でもないのに」

「その本人の頑張りなら一番間近で見てきた」

模擬レース以降、ノールはスタート練習にも力を入れていた。

ゲートが開いた瞬間に飛び出す、面白くも何ともないその練習を何百回と繰り返した彼女なら技術面に問題は無い。

そして精神面もおそらく大丈夫だ。控室では普段見せる年相応の顔は鳴りを潜め、代わりに勝負師の顔が覗いていたから。

そんなことを考えていると、去り際に残した言葉を思いだす。  
頑張れ、か。

……もつと気の利いた事言えなかったのかよ俺は……

月並みな言葉しか掛けられなかったことを後悔する。ここからはトレーナーの俺にはもう何もできない。さっきの声掛けが俺にできる最後の事だった。尚更気が落ち込む。

後は祈る事しか出来ないか……

手を強く握り、レースの始まりを待った。

狭いゲートの中、私は足元に意識を集中させていました。

つま先やかかかとに体重移動させるたびにその部分が沈んでいきます。

かなり湿ってる……でも感触は分かった。

それと水たまりもできてる。足を入れないようにしないと……

「さあ、各ウマ娘ゲートに入りました」

バ場の感触を確かめて顔を上げると、丁度実況の声が聞こえてきました。もうじきレースが始まります。

ちら、と左を見ると、前を見据えているナイトが見えます。私が様子を窺うかがっているにもかかわらず、彼女はこっちには全く気が付きません。

超過集中、か……

今はスタートにだけ集中しているのでしよう。私もポジションにつき、ゲートが開くのを待ちます。

この時ばかりはお客さんの歓声も鳴りを潜めています。わずかな静寂。

ガコン！

視界が開けると同時に、大地を蹴り飛ばしました。

## 二十四話 逃げけん制

(sideトレーナー)

ガコン!

ワアアアア!!!

「ゲートが開いて各ウマ娘、良いスタートを切りました。ステイオーシャン、やや遅れたか、最後方からのスタート」

ついに始まった。ゲートが開いた途端、さっきまでの静寂が嘘のように騒々しくなる。

よし! スタートは良いぞ……。

ノールが出遅れなかった事に、胸をなでおろす。大丈夫だと信じてはいたが、事なきを得るとやはり安心する。

「先頭はブルースクリーン。アウトルック、コンティニユアム、ライゼンインテル、続いてここにいるぞ、一番人気ナイトグライダー」。

逃げ馬の後ろ、追跡者が得意な位置に付いた。以前と同じような走りを見せて欲しい」

実際は一番人気のナイトグライダーを中心に展開されていくが、俺の意識はノールに注がれる。

あいつは最内からのスタート。午前のレースの影響で内側ほどバ場は荒れているはず。

心配だったが上手い位置に付けていた。ナイトの斜め後ろ。

「軍団は第一コーナーに侵入。ここからは上り、パワーのあるアウトルックが少し前に出てきた」

実況の声に釣られ、先頭の方に目を向ける。そこで俺は違和感を覚えた。

「……前が遅い？」

「……確かに」

俺の独り言に隣のスパーチャージャーも同意する。

「第一コーナーを抜けて第二コーナー、先頭から殿まで約9バ身、詰まっている。昇りで速度が出ないか、それとも後ろを気にしているのか。」

序盤から良く逃げるブルースクリーン、アウトルックの二人にしては珍しい展開」

「……包囲網やな」

スパーチャージャーは不意に呟く。

「包囲網？」

「前の四人、ナイトを覆うように位置取りしとるやろ。逃げの奴らが結託してナイトを塞いどるんや。」

「そこで意識的にスピードを抑えてレース全体をスローペースにしとる。ナイトをブロックしつつ、後ろから差し切られんように足を溜めるレース展開やな」

「なるほど……」

彼女の解説を聞きながら感心する。実際のレースを経験しているウマ娘の方がレース中の駆け引きについてはやはり詳しい。

「とはいえ、このままだとノールもブロックされたままに……」

彼女はナイトの斜め後ろに付いている。包囲網のとぼつちりを受けている状態。

つい手に力が入ってしまう。そんな俺の呟きに、

「別に心配せんでも大丈夫やで。向こう正面で崩れるやろうから」

スーパーチャージャーは当然といったようにそう答えた。

「どうしてわかるんだ？」

「見とれば分かる」

詳しい説明をする気は無いらしい。焦る心を落ち着けながら、第二コーナー終わりに差し掛かっている軍団を見た。

(sideナイトライダー)

前が遅い。そして横に広い……ずいぶん警戒されてる。

ブロックされている事を認識したその時、私の前の娘が徐々に速度を落として垂れてくる。否応なしに速度を下げざるを得ない。

外に逃げようにも横は塞がれている。内側はバ場がかなり荒れている。悩んでいる内に、前の娘は加速して前の方に行ってしまった。

ここで私が加速してもまた垂れてくるはず……面倒。

走り以外の事に気を取られたその時、濡れた芝で足が滑りそうになる。

「……………」

何とか体勢を立て直す、少し位置が下がってしまった。

落ち着け……

「すー……はー……」

思ったように走れず、ささくれ立ちそうな心を長い呼吸で落ち着ける。

レース中は自分の内側に意識を集中させる方だが、ここまで牽制されると流石に無視

できない。

……退けるか。

自分の走りが出来ないなら、出来るように場を整える。それが私の走り方。

邪魔者の排除を決めた私は再加速し、前の娘の後ろに位置付ける。すると彼女はまた垂れてきた。

それを予想していた私はさらに加速し、彼女の隣に位置付ける。いきなり横に並ばれ、前の娘は驚いた表情に。

私に抜かされまいと加速する彼女。そこでささやく。

「……遅い、逃げウマの癖に……だからGIIII止まり？」

「……っ！」

それだけで彼女は一気に速度を上げ、前の方に上がっていった。

まずは一人……。

次は横の娘。私をブロックする彼女に肩が触れ合いそうなほど近寄る。

「きゃ……っ！」

接触を恐れた彼女は私から距離を取る。離れ際に彼女を睨んだ。

「ひっ……っ！」

すると彼女はペースを上げて私から逃げるように前へ飛び出していった。



「つ、くそ……!」

「なんで先に……つ!」

四人のうち二人が崩れると、もう包囲網は役に立たない。残された二人も私をブロックするのは諦め、前に出た二人を追いかけ始めた。

(sideスーパージャー)

「さあ、第二コーナー終盤に差し掛かってここからは長い下り坂。我慢の時間だ。」

向こう正面に入って……つと、ここでブルースクリーン飛び出した。遅れてコンティニアムも前に出る。焦ったか。

下りでこの加速は脚に負担がかかる。最後までもつのか。後ろの二人も釣られて後を追いかける」

「な?」

「……………」

向こう正面で包囲網は崩れる。ウチが言う通りの展開になった。ノールのトレイ

ナーは目を丸くしている。

「……どうして予想できたんだ？」

「ナイトは速いだけやなくて、強いからや。駆け引きが上手いと言い換えてもええな」

「包囲網を崩したのはナイト自身だと？」

「そうや。ウチらウマ娘はレース中、前後左右に動いたり、他の娘に声を掛けたりして駆け引きをする」

「レース中に声を出すのか？ 走りながら？」

「呼吸が乱れるけど、少しなら大丈夫やで。」

さつきもナイトと前の娘との距離が詰まった時、何かささやいたんやろな。ナイトのささやき、結構えぐいでえ。相手の心に刺さる言葉を的確に選ぶからなあ……」

えぐい駆け引きする奴がどの口で「友人と競うのが怖い」なんて言うのか疑問にも思ったけど……そういう手段を取るナイトやからこそ、仲の良いノールとは戦いたくなかったんやろな……」

そんな事を考えながらも話を続ける。

「その後に横の娘とぶつかるくらい距離を詰めて威嚇。ナイトに牽制けんせいされた二人は焦って前に飛び出してしもうた、つちゆう事やな」

「わずかな時間でそれだけの事を……ううん……」

まだ得心が言っていない様子のトレーナーに、補足を加える。

「元々逃げの娘は気性難が多い。周りを囲まれて走るのが嫌いだったり、誰かに前を走られるのが落ち着かんかったりな。」

衝突を怖がるのも、煽り耐性が低いのもしょうがないんや」

「……なるほどな」

「それに下りになつとる向こう正面で仕掛けたのも上手いとこやで。言わずもがな下りは脚に負担がかかりやすい。」

そこで相手のペースを崩せば包囲網を破れるだけやなくて、消耗も狙える」

「逃げウマに勝ちを許した事が無い「追跡者」……二つ名は伊達じゃ無い、って事か……」

「ほんまにおつそろしい後輩やで」

そこで会話を中断し、ウチとノールのトレーナーは再びレースに集中していった。

(sideナイトグライダー)

前は片付いた……後ろは……

後方を確認すると、私の斜め後ろにノールが見える。彼女はレースが始まってからずっとその位置にいる。

私から何かを仕掛けるには難しい位置。かといって彼女から私に仕掛けられる位置でもない。

前は開けた。このままいけば純粋な走力勝負になるだろう。

それなら私は負けない……。

そう考え前を向いた。とはいえ不気味なほど静かな彼女に、一抹の不安を抱きながら。

(sideトレーナー)

「さあ、向こう正面抜けて第三コーナーに差し掛かる。序盤とは打って変わって縦長の陣形。

先頭を逃げるのは変わらずブルースクリーン。二番手と5バ身以上離している。最後方のデルタールンとは20バ身以上だ。果たして後ろは追いつけるのか」

多くのウマ娘がスパートを掛ける第四コーナーが近づき、バ場だけでなく客席の緊張感も高まっている。

ここまででは良い……！

ノールは理想の位置で自分の走りが出てきている。

逃げの集団は途中のペースアップが原因で十分なスタミナが残っていないはずだ。

差し、追い込みの集団も序盤のスローペースを引きずっているのか、かなり後ろに位置している。

直線が短く、おまけに上り坂まである中山競技場では、あそこからだと恐らく差し切れない。

残るのは先行集団。ここからは小細工無しの力勝負になるだろう。

ノール……！

第三コーナーを睨みつけながら彼女の力走を祈るほか無かった。

「はっ、はっ……はっ、はっ……はっ……」

第三コーナー中腹、残りは700m。ここまでのレース展開は予想の範疇です。

他の娘達がナイトをマークするのも、それをナイトが蹴散らすのも予想の範囲内。私はその後ろでぬくぬくと足を溜めていました。

序盤、スローペースだったのも合わせると早めにスパートを掛けれるはず……500から行こう。

いくらスタミナを温存出来ているとはいえ、普通より疲れる重バ場。さらに高低差2m以上もある坂もが待ち受けている状態でスパートタイミングを早めるのは、賭けでもあります。

しかしギリギリを攻めなければ、恐らくナイトには勝てません。

垂れるのが先か、ゴール板をくぐるのが先か……

「ふー……」

大きく息を吐き、スパートを掛けるその時を待ちます、

(side ナイトグライダー)

「フー……フー……フー……」

前の邪魔者を退かしてからは自分の走りが出来ている。ノールが静かなのが少し気になるものの、自分の内側に意識を集中させていると段々と研ぎ澄まされてきた。

すでに観客の姿や歓声は一切見えないし聞こえない。

見えるのは前を走る四人の姿と、少し先の地面だけ。他の部分は何もない白の背景に見える。

聞こえるのは自分の心音、呼吸音、地面を踏みしめる水つぽい音だけ。

削減された視覚と聴覚の代わりに他の知覚能力が鋭敏になっている。

湿ったターフを踏むたび、足がどれだけめり込んでいるのかがミリ単位で分かる。

自分が今時速何kmで走っているのかが小数点の単位まで分かる。

何枚の濡れた芝が靴の裏に挟まり、どれだけ力を入れるとスリップしてしまうのかが分かる。

慣れない重バ場も、過敏なほどに研ぎ澄まされた五感のおかげで良バ場と変わらないくらいに走れる。

超過集中中、だつたつけ……

模擬レース以来感じる事の出来なかつたその領域に、足を一步踏み入れているのを感じた。体の感覚が拡張、発展したとても心地の良い状態。

体が軽い、今まで走ってきた疲労を全く感じない。ここからずっと全力疾走出来そう  
なぐらいに……

前の四人をぶち抜いて先頭に立った時、きつとゾーンに入る事が出来る。  
妙な確信を持ったまま、私はスパートを掛けようとした。

残り600mを切り、そろそろスパートを掛ける準備をしなければと思ったその時。  
ナイトが振り向いてこちらの様子を窺ってきました。

その表情は心ここにあらずといった、虚ろな感じでしたが、そんなことは全く気にな  
りません。

肝心なのは彼女が振り向いたという事。

ナイトは後方確認する時、出来るだけ頭を動かしません。しかしスパートを掛ける時  
だけは大きく振り向いて後ろを確認します。

彼女と併走した時に見つけた僅かな癖。

つまりナイトは残り600mからスパートを掛けようとしているという事。



まさかここから？ 最後まで持つ？ 坂もあるのに？ バ場も悪いのに？

一瞬で複数の思考が想起されました。そしてそれらの思考は一つの結論に集約されます。

スパートが早すぎる……ここからだ絶対 Stamina切れを起こすはず……

ナイトがミスをした。それなら最後の直線、垂れたナイトを差して勝てるはず。ここは我慢の時。

……けど、ナイトのスパートが最後まで持つとしたら……？

私も同じタイミングでスパートを掛けないと追いつけません。

今スパートをかけるのか、それとも自分のペースを守るのか。

「……………」

逡巡しゅんじゆんは一瞬。

ナイトがスパートのタイミングを逃すなんてことはあり得ない……！

そんな妄信を根拠に、分不相応なロングスパートを掛けました。その先に地獄が待っているとも知らずに。

## 二十五話 全身全霊

(sideトレナー)

「さあ、第三コーナー終わって第四コーナーに差し掛かる。前の娘の脚は鈍っている。やはり下りでのペースアップは無謀だったか。」

……つと、ここで示し合わせたように二人のウマ娘が仕掛けた。ナイトグライダーとノールミサンガ。最後まで持つのか、坂も残っているぞ」

「っ！ 早い！」

想定より早いノールのスパートに、思わず身を乗り出してしまった。

「……二人とも持つんか？ いくら序盤がスローペースやったからって流石に……」

スーパーチャージャーも顔をしかめている。彼女から見てもかなりの早めの仕掛けであるようだ。

「共倒れにならんとええんやけどな……」

共倒れ。その言葉は二人ともがゴール前でスタミナ切れを起こし、失速してしまう事を指しているのだろう。

しかし、底力を鍛えてスタミナをギリギリまで使い果たせるノールにとっては、早め

のスパートは文字通りの倒れる結果に終わりがねない。

「第四コーナーも中腹。後ろの娘達もスパートを掛け始める。しかし早めに仕掛けた二人に追いつけるのか。」

二人はもう先頭に追い付きかけている。オーバーペースにも見える速さ」

つ……………！ ノール……………勝てよ……………！

最悪の想像を振り払い、彼女の勝利を祈る。

彼女のこれまでの努力を思い出すと、「勝たなくても良いから無事に帰ってきてくれ」とは心の中でさえ思えなかった。

「はっ、はっ……………！ はっ、はっ……………！」

全力に近い走りを200m程続け、残りは400m。

……………スタミナはまだある。

呼吸は荒れ、足も重たくなってきましたが、まだ走れます。しかし後400mを走れるかどうか……………。

……考えるな。

今は前を走るナイトに置いて行かれないように全力で付いていくだけ。

暗い不安を胸の内に押しやり、垂れてきた逃げウマ娘達を躲かわしてさらに走り続けま  
す。

「先行二人の勢いが止まらない。

内のノールミサンガは前を上手く躲してコーナーに逆らわず外に膨らんだ。外にい  
たナイトグライダーは力強く内へ切り込む。

二人はクロスの軌道を描いて最終直線へ。後ろを寄せ付けない速さ」

「はっ、はっ、はっ……！」

さつきよりも呼吸は荒くなり、ズキズキと肺が痛み出しました。

一度吸って二度吐く呼吸法も維持できません。疲れで足の回転が落ちそうになるの

を意識的に防ぎます。

スパートを掛けてから300mを走ると最終直線に差し掛かり、残りは300m。いつもなら400m地点でスパートを掛けていたので、300mも走れば100m先にゴールが見えていたはず。

しかし今のゴールは300mも先。さらに高低差2mの坂が目の前にあるせいで、ゴール板の上の方しか見えません。ゴールがより遠くに見えます。

「……………」

前を見ると残りの距離とそびえたつ坂に心が折れそうになるので、ただナイトを走つめて走り続けます。彼女の背中がこれ以上遠くならないように。

「ナイトグライダー、怪我の影響を全く感じさせない力走。後ろに続くノールミサンガも恐ろしい。あの小さな体でナイトグライダーに食らいつくと誰が予想したのか。

その差は二バ身、残りは200。後ろは上がってきていない。このまま一騎打ちだ。

しかし中山にはここから坂がある。どちらが先に根を上げるのか。それともこのまま二人、ゴールまでもつれ込むのか」

「はあっ、はあっ、はあっ……!!」

体感的には2000mを走り切ったぐらいの疲労感を抱えたまま残りは2000m。

足がまるで自分の物ではないように重たいです。鉄製の義足に変わってしまったかの様。

さらに呼吸をするたびに肺に針が刺さったかのような鋭い痛みが走ります。

今すぐ足を止めて休め。

私の体は痛みを以て、そう主張してきます。

けれど残りは2000m。先に行くナイトとは約2バ身差。

なら……

射程圏内だろうがっ!!!

体を倒して超前傾姿勢、足の回転をさらに速めて坂に差し掛かりました。

(side ナイトグライダー)

「フー……フー……フー……！」

ドクン、ドクン、ドクン……

ズシヤッ！ ズシヤッ！

私は一人で走っていた。周りは真っ白に染まり、観客も同伴競技者も見えない。

視界に移っているのはゴール板とそこまでの道のりだけ。

身体を全て自分の制御下に置けている。今ならしゃっくりが起きても横隔膜を制御して止められそうだ。

そして五感はず靴や蹄鉄、果てはターフにまでも拡張されていた。私は今、中山競馬場と一体化していると言っても過言ではない。

そんな最高の仕上がりの中、思う存分走れる贅沢をただ噛みしめていた。

ゴール前の坂にさしかかり、登坂用のフォームに切り替える。コースと一体化している私は、ターフの状態、坂の傾斜も全て手に取るように分かる。

最適なフォーム、最適な歩幅、最適な腕の振りで走っていたその時。突然、後ろに大きな気配が現れた。

振り向かなくても分かる……ノールだ。

「……ッ、ハアッ、ハアッ……いー」

……ヤッ！グシャツ！グシャツ！

パドックで感じたのと同じ気配、威圧感。

それを知覚すると、彼女の呼吸、足音が聞こえ始めた。しかもそれが徐々に近づいてくる。

耳の毛と尻尾が逆立つ。首の後ろがチリチリと落ち着かない。

彼女は真つ白な私だけの世界に侵入してきただけでなく、私を威圧して止まない。その上、私とリズムの違う呼吸音と足音をまき散らしている。

しかし私は、不思議とその存在を鬱陶しいとは感じなかった。

私は負けず嫌いな方だと思う。

レースを走る時はいつも、誰にも負けたくないと思っていた。

だから勝つためにたくさん努力をした。

幸運な事に才能に恵まれていた……いや、恵まれ過ぎていた私は努力も相まり、怪我をしたオークスを除いてはレースで負けた事が無い。

それだけでなく、僅差での勝ちも経験してこなかった。勝つ時は大差で勝つ。

そんな状態が続くと、いつからか勝負に熱を感じなくなつた。できる限りの練習を修



めれば、予定調和のように勝ってしまうのだからそれも当然か。

勝つてもどこか物足りない感覚。

だからだろうか。

今、私を脅かす彼女の存在について口角が上がってしまうのは。

最高の走りをしてても距離を詰めてくる彼女に心が躍ってしまうのは。

私だけの世界ではなく、私と彼女、二人の世界。

そこでお互いの全力をぶつけ、しのぎを削り合う。それがゴールまで続く。

疑いようもなく過去最高の時間だった。

「速い、速いぞノールミサンガ。まだ余力を残していたのか、ここに来て更に加速。坂をものともしていない。スパートからのスパート。」

まるで二段ロケット、前とグングン距離が詰まっている。これだけの走りをする彼女がなぜ私の記憶に残っていない」

「はあっ！はあっ！ えぐうっ……はあっ……!!」

苦しい。肺が痛い。

口呼吸を繰り返したせいで喉が乾燥してえづきそうに。

えづきそうになれば、呼吸が止まり更に苦しく。

苦しいから多くの酸素を取り込もうとすると、さらに喉が乾燥してしまいます。

足が重い。芝の上でなく泥の上を走っているかの様。

足を上げようとすれば柔らかな地面が靴に絡みついてきて邪魔をしてきます。

昔、田植え体験をした時みたいに足がおぼつきません。

坂を上り終え、傾斜が無くなりました。

……っ!!!

痛む体を酷使して更に加速します。

痛みでリミッターが外れているのか、それともボロボロの身体が灯滅せんとして光を

増しているのか。

たった一步で私の身体は最高速に到達しました。

差は縮まつてる……！ あと、少し……っ!!

痛みと引き換えに私はナイトと距離を縮めていきます。

「先を行く二人に後続は全く追いつけない。坂を上り終え、ノールミサングの加速が凄  
い。鬼の猛追、三段ロケット。

しかしナイトグライダーも粘る、粘る粘る。ここに来て差が詰まらなくなってきた。  
意地を見せる。

漆黒の追跡者が中山に夜の帳を下ろすのか。それとも無名のロケットが夜を切り裂  
くのか。一着はどちらだ」

(sideトレーナー)

「っ……!!!」

レースは最終局面。ゴール前にいる俺の所からでもノールの表情が伺える。彼女の  
様々な感情が混ざった狂気的な顔を見た途端、俺の中から思わず何かが溢れてくる。

気づいたときには柵から身を乗り出し、叫んでいた。

「はあっ！ おえっ、はあっ！ えうっ……はあっ！ く……っ、はあっ!!」  
痛みが薄まってきました。えづく頻度が多くなり、脳に酸素が回っていないからでしょうか。

脳だけでなく体も酸欠なのか、体が上手く動きません。

ナイトとの差はあと僅か。

あと僅かなのに縮まらない。

その僅かが縮まらない。

ここまで……なのかな……………。

スタミナも酸素も底を突き、私の筋肉の糧となる物はもうありません。

体が限界に達し、精神もそれに引つ張られたのか、諦めの言葉が浮かんできます。

諦める……？ ……嫌だ、諦めたくない……けど……もう体が……

力が抜けていきます。そのまま体は失速……

「勝てツツ!!!」

ノールツツ!!!」

.....っ!!!

聞きなれたトレーナーさんの声が私の耳じ朶だを打ちました。

雷に打たれたように気が冴え、停止しかけていた体も再起動を果たします。

それと同時にトレーナーさんとの思い出が走馬灯のように頭をよぎりました。

(息を止めて歯を食いしばれば確かに瞬間的なパワーは出る)

いつかのトレーナーさんの台詞。

それを思い出した私は反射的に大きく息を吸い、歯を食いしばり、呼吸を止めました。  
ベキツ!

奥歯から嫌な音が鳴ったのも、もう耳に入ってきてません。

ほんのわずかな酸素を燃料に、命を燃やしながらゴール板を駆け抜けました。

ウワアアアアアアアアアア  
「大接戦のゴール！ 私の目からは同着に見えました。写真判定は……っ!!」

……

……っ！ 今、意識飛んでた!? レースの最中に!? いや、もうゴールし

たんだっけ？

……あれ？ 何で地面がこんなに近くに……やば  
ドグシャツ！ズジャツ！グジュツ！ズシャツ……………





た。  
9月12日14時32分。!!!!!!  
千葉県船橋市中山競技場で天を衝くような悲鳴が上がつ

二十六話  
創痕

………痛い。………痛い。………痛い。首の後ろが焼けるように熱い。

鈍痛が私の意識をヘドロの底から引き上げました。反射的に痛む部分を押さえようとしますが、体は全く動いてくれません。

特に右腕。指を動かさそうとした瞬間、手首に激痛が走ります。そのまま首の後ろと同じような熱を持ち始め、私を苛み始めました。

「………つがぼ、こぼ………つ　ぶく、こぼ………つ」

苦しい。息を吸いたい。

しかし口から入ってくるのは酸素ではなく水。水たまりに突っ伏しているせいで、呼吸がおぼつきません。

鼻呼吸をしようとしたのですが、何か粘着質な物が詰まっているせいでそうはできません。  
ん。

首を動かして水たまりを避けようとしたのですが、首の後ろが激痛を訴えてくるせいで

そもそもできません。

もそもそと芋虫の方がまだ機敏な動きを何度も繰り返し、何とか顔を浮かそうと体勢を変えますが上手くいきません。全身の痛みが増すだけ。

首の後ろと右手首の高熱とは裏腹に全身が冷たくなってきます。

ぼんやりと死が迫ってくるのを感じていたその時、私の身体がひっくり返されました。

「あぐ……っ!!!」

再び沈みかけていた私の意識が激痛によつて引き上げられました。

「げほっ！……げほっ！……げほ、げほ……っ！」

直後、肺に入ってしまった水を排出しようと体が勝手に咳き込みます。そのたびに全身が痙攣し、耐えがたい痛みが襲ってきました。

「はっ、はっ、はっ……っ！」

とはいえ満足に息を吸えるようになった私は、必死で酸素を取り込み、生命活動を維持しようとします。

「……っ！……っ！……っ！……っ！」

まったく焦点の合わない視界の中で、黒い塊が何かを叫んでいました。

(side ナイトグライダー)

私とノール、二人だけの世界でしのぎを削り合う最高の時間を過ごしていた。

ド グシャツ

しかしその音が私を最低な気分に引きずり落とした。

今までの人生で聞いたことのない異音に振り返ると、ノールの身体がありえない体勢で宙に浮いていた。

彼女はそのまま、走行中の車から捨てられたゴミのように何度か地面に叩きつけられた。

慣性の乗った体に急ブレーキをかける。私の50m程後ろで彼女が倒れている。それを私は棒立ちで眺めていた。

「……………はっ…はっ…はっ、はあっ、はあっ……………！」

体は動かないのに息だけはひどく荒れていく。

……………ツキイヤアアアアアア  
!!!!!!

「……………っ！」

誰かの悲鳴を皮切りに私の身体はようやく再起動した。ノールの元まで駆け寄り声を掛ける。

「ノール！ ノール!!」

彼女は虚ろな目で水たまりに突っ伏している。

鼻からは血が流れ、水たまりが赤く染まっている。

口元には血混じりの泡が立っている。

とにかく呼吸を確保するため、彼女の体勢を仰向けに変えた。

「あぐ……っ!!」

その途端に顔を歪ませるノール。その時初めて、彼女の首がどす黒く腫れているのに気づいた。

罪悪感と痛ましきで思わず目を逸らしたくなかったが、声を掛け続ける。

「ノール！ ノール!!」

彼女の瞳がこちらの方を向いた。

声のする方にただ反応した、意志の感じられない虫のような瞳。

魂が抜けた彼女の姿に手が震える。

「ナイト！ ノールの状態は!？」

「ス、スパさん……く、首が腫れてて、酸欠で、目が虚ろで……」

いつの間にかバ場に乗りに込んできていたスパさんの問いに答えるが、口が上手く回らない。

スパさんは、一見無事そうなノールの左手を握り大声で呼び掛ける。

「ノール！ 聞こえるか!?! 聞こえるんなら指動かしてくれ!」

彼女の瞳がスパさんの方を向き、左手が少しだけ動いた。

「意識はある。けんどだいぶ朦朧しとる。」

「……………ちつ、早よ担架持つてこんかい…………!」

スパさんは競技場本部の方を睨みつけている。

「ノール！ 大丈夫か!?!」

遅れてノールのトレーナーも駆けつけてきた。

(sideトレーナー)

ノールが転倒した瞬間、俺は柵を飛び越えてコースの中に乗り込んでいた。彼女の元まで全力で走っていく。

後ろからスーパーチャージャーが俺を抜かして先にノールの元まで駆け寄る。人の身に生まれた事を今ほど呪った事は無かった。

永遠にも思える時間を走り続け、ようやく彼女の元に駆け寄る事ができた。

「ノール！ 大丈夫か!？」

「……………トレ……………ナ……………さ、ん……………？」

俺が声を掛けると、彼女は小さく俺を呼び返してくれる。

反応がある事に安堵したのも束の間、彼女の惨状を確認して思わず目を逸らしたくなった。

死に体、瀕死、末期……………嫌な表現でしか今の彼女を表せない。

「……………っ!!」

……………何が勝て、だ……………。

こんな状態になってまでもノールに勝ってもらおう事が俺の望みだったのか……………？  
そんなわけないだろ……………そんなわけ……………。ただ無事で帰って来さえすれば……………!

レース前、彼女が勝てるように限界まで追い込んでおきながら今更。

レース中、あれだけ彼女の勝ちを願っておきながら今更。

今更遅すぎる。

「トレ……………ナーさん……………」



彼女が左手を動かそうとする。彼女の左手を握っていたスーパーチャージャーが驚いて手を放した。

自由になった彼女の左手は俺の方へ。

「私……レース………」

ズタボロの身体で無理をする彼女。

叫んでしまったかった。そうでもしなければ心が破裂してしまいそうだった。着ているコートを引き裂かんばかりに握りしめ、その衝動をなんとか抑える。

空いているもう片方の手で、こつちに伸びてきた彼女の手を掴み、元の場所に押し戻した。

「じゃー！ 喋らなくても良い……！ 無理するな……！」

恐慌をきたしそうな内心を必死で押し殺し、出来るだけ落ち着いた口調で声を掛ける。

「……私……勝ち、ましたか……？」

しかし彼女は話し続ける。彼女の視線が俺の後ろ、着順を示す電光掲示板に注がれる。

「掲示板……よく、見えなくて……一着……どうなりましたか……？」

彼女の視線に釣られるようにして俺も振り返る。

「どう、ですか……?」

「ま、まだ結果は出てないで!」

突然スーパーチャージャーがそう叫んだ。

「じゃ、斜行スレスレの走行があつてな! 今は審議中や! ランプも灯つとる! やから今は休んどけ!」

「そう……ですか……」

それを聞くなり、ノールは目を閉じて動かなくなつた。

「っ……………」

一瞬慌てたが、呼吸も脈も正常。気を失っただけだ。

スーパーチャージャーの方を向く。

「なんで嘘を……………」

審議ランプなど灯つてはいない。掲示板には結果がしっかりと出ている。

「……勝手に嘘ついてすまん……けんどこで勝負に決着をつけたらそのまま死んでしまいうでな……」。

何も言わなかったら負けず嫌いなノールの事や、勝負の結果を知るまでは死んでも死に切らんやろ……」

彼女の言い分も分かる。

今のノールは、勝負の結果を伝えてしまえばそのまま死んでしまいそうなほど儂く見えた。

俺の……俺のせいで……。

「ぐっ……………」

気持ち悪い。今すぐにも吐いてしまいそうだ。思わず地面に手をつく。

「救急隊です！ 横を空けてください！」

そこでようやくやく担架が運ばれてきた。

………パチ

私は穏やかに目を覚ましました。アラームを設定せずに思う存分寝た後の様な、平静な目覚め。

「っ、目え覚ましたかー！」

「ノールー！」

寝起き早々、スパさんの声とトレーナーさんの声が聞こえました。

あれ……？ 何で二人が私の部屋に……というか察ってトレーナー立ち入り禁止じゃ……

そう疑問に思いながら体を起こそうとすると、

「いつー！ ででで………？」

首の後ろがひどく痛みます。

なんでこんなに痛みが……？ 私、いつ怪我して……？

自分の身体に意識を集中させると、首の後ろだけでなく右腕、肩、体の節々の痛みを  
知覚しました。

「動かなくても良い！ ……じ、じっとしてろ……」

「は、はい……」

いつもよりトレーナーさんの語気が強いです。

素直に寝転がっていると、ベッドの上側だけが傾き、寝ながらにして座ったような体  
勢になります。

すると、ベッドの横にある椅子に座っているトレーナーさんとスパさんの顔が無理な  
く目に入ってきました。

「だ、大丈夫か……？」

「え、えつと……大丈夫かと言われれば大丈夫じゃないです。

寝違えたのか首が痛いですし、全身も妙に痛くて……」

いきなりのトレーナーさんの質問。

意図を掴みかねた私は、とりあえず自分の状況を説明しようとしています。その時、私の  
身に何があったのかを急に思いました。

「…っ！ レース！ レースは!? 結果はどうなりましたか!? あ、でで……」

質問の回答もほっぴりだし、勝負の結果をトレーナーさんに聞きます。思わず体を動

かしてしまい、首に痛みが走ります。

「う、動くなといっただろ！」

……派手に転んで気絶したかと思えば、すぐにレースの事を聞くか……。本当にお前は……」

「う……す、すみません……。それで、その、結果の方は……」

私が転倒してしまったせいで、トレーナーさんには大変な心配をかけてしまったのでしよう。

それについては悪く思いながらも、しつこくレースの勝敗を聞きます。

トレーナーさんは相変わらずサングラスをしているので、表情は窺えませんでした。

「……………二着……だった……………」

トレーナーさんは室内だというのに、帽子を深くかぶりながら、小さな声でそう言いました。

一方で、私はトレーナーさんの言葉を上手く受け止め切れていませんでした。信じられない、信じたくないからでしょうか。

ピッ

「……今日の第9レースを振り返っていきます。一着は2枠、ナイトグライダー。二着は1枠ノールミサンガ。三着は6枠ウィザードリイ。以下はこのようになりました」  
スパさんがテレビを付けると、丁度私のレースの結果について報道されていました。  
テレビに「二着ノールミサンガ」と映っているのを見ると、嫌でも認めざるを得ません。

私は負けたのです。

「ノールミサンガはゴール後に転倒してしまいましたが……大丈夫なのでしょうか？」  
「命に別状はないようですが、あれほど派手な転倒となると、後遺症が残るかもしれませ  
ん。心配です」

「あれは骨折や怪我が原因というよりは、スタミナ切れで転倒したよう見えましたか？」  
「そうですね。ゴール前ではひどく消耗しているように見えました。一部では……」  
プツン……………

そこでテレビは消えました。部屋に静寂が訪れます。

「……………私、負けちゃったんですね……………」

言葉にすると更に悔しさがにじみ出てきて、苦しくなってきました。

左手を張り裂けそうな胸に置き、押さえつけます。

「やっぱり……ナイトは強いなあ……私の全部を出したのに……勝てなかったんだ……」

涙腺が緩み、涙が溢れそうになるのを、目を見開くことで防ぎます。

「ゴール前で……トレーナーさんの声が聞こえて……」

あれのおかげで最後まで頑張れたんです……けど……っ！

応援してくれたトレーナーさんの期待も裏切っちゃって……」

トレーナーさんの方を向いてそう言います。情緒が不安定な私は、時々抑えきれずに声が大きくなってしまいます。

「ばっ、馬鹿野郎!! 俺の期待なんて……っ！

そんなもののせいでお前は……っ！ お前は……！ そんなになっちゃって……」  
「せい」じゃないです！ 「おかげ」なんです！

自分以上の力を発揮できたのはトレーナーさんの声のおかげなんです！

トレーナーさんのおかげで、こんなになるまで頑張れたんです……」

「最終直線、トレーナーさんは私に頑張る権利をくれただけです。」

諦めて失速することだって出来たのに、怪我を恐れず権利を行使したのは私……。

トレーナーさんに責は一つもありません。





「ぐっ……うううううううううう……！」  
トレーナーさんも私と同じように号泣しています。  
そのまましばらく、二人で涙を流し続けていました。

## 二十七話 病院で

(side ナイトグライダー)

ノールが病院に運び込まれてから、私は彼女の病室の前の椅子にずっと座っていた。病室の中にはノールのトレーナーとスパさんが居るが、私はとてもじゃないが入つていけなかった。

私には勝者が敗者に掛ける言葉も、見せる顔も分からないから。

ゴール直後に疲労で転倒してしまうほどノールは頑張ったのに、その努力を私が無慈悲に断ち切ってしまったのだから尚更。

それでも彼女の身体が心配なので、病室前で待機するという中途半端な行動をとつて  
いる。

そうしていると、

「あ……」

「げっ……」

長い葦毛の髪を後ろで結っているウマ娘が通路から出てきた。彼女は確かノールを

連れて行った……ジエミニ、だったか。

彼女は私を見るなり、踵を返してしまふ。

「あ……待ってください。ノールの見舞いに来たんじゃないんですか？」

私がそう声を掛けると、彼女は足を止めてこちらに戻ってきた。

「……………もうそろそろ誰もいなくなると思ってたんだがな……あいつはまだ目を覚まさないのか？」

彼女は私の対面の椅子に座る。

「ノールのトレーナーとかスパさんが出てきてないから多分まだ……」

「……………お前はあいつの様子、見てないのか？」

「うん……」

「そうか」

「……………あなたは入らないんですか？ 病室……」

「まだ中に先輩がいるんだろ？ 会った事も無いし気まずい。あと俺達同い年だろ。敬語は使わなくても良い」

「分かった……」

「……………」

今日がほとんど初対面な彼女との会話はまったく弾まない。特に私は人付き合いを

むやみに増やしたくないので、いつもより口数を少なくしている。

「……お前は どうして 中に入らないんだ？」

そうして黙っていると、向こうから話しかけてきました。

「私は……ノールが目を覚ました時、どんな顔すれば良いか分からないから……。なんて声を掛ければ良いのかも……」

「そんなの何食わぬ顔で思ったことを話せば良いだろ」

私の台詞に、彼女はあっさりとは答えを返してきました。

「でも……」

「病室前でモジモジしてるって事は、あいつが心配なんだろう？」

「それは……うん」

「だったら声を掛けてやれば良い。大丈夫か、ってな」

「けど……」

「大怪我するまで頑張ったノールに対して、結局レースで勝った私が何様のつもりだ、……か？」

「……っ！」

彼女は躊躇<sup>ためら</sup>う私の内心をズバリと言い当ててきた。

「そんなの気にすんな」

そして事もなげにそう言う。

「全力で走ったけど負けた。悔しい。でも次は勝つ。あいつが目を覚ませばこんな単純な思考をするだろうよ。」

だからお前は余計な事考えずに堂々と会ってやれば良い」

彼女の発言は断定的で、決めつけとも取れる。実際は違うかもしれない。けれど今の私にとってとはとても勇気づけられる発言だった。

「うん……そうかも……」

ガチャ

そこで病室の扉が開いた。中からノールのトレーナーとスパさんが出てくる。

「ナイト、まだ居ったんか。それと……そっちの娘はノールの友達かいな？」

「……どうも」

ジエミニは軽いお辞儀をスパさんに返す。

「ジエミニ……ノールの見舞いに来たのか？」

ノールのトレーナーが彼女に話しかける。二人は面識があるようだ。

「ああ。……あいつは無事か？」

「骨の異常も酸欠とむち打ちの後遺症もなかった。医者が言うには重バ場で下が柔らかかったのが幸いしたんだと」

「そうか……」

「けどよお……っ！　ぐ……っ！　すまん……俺はもう帰る……」

「……また今度な。外はマスクミがうるせえから気を付けろよ。裏口から出てった方が  
良い」

「ああ……分かった……」

それきりノールのトレーナーは去ってしまった。

「それで、ナイトは顔見せるんか？」

「はい……まだ完全に気持ちの整理が付いたわけではありませんが……」

スパさんはそっか、とだけ言っつてこの場を去っていった。

ジエミニと二人、取り残される。

「先どうぞ」

ジエミニはそう言っつて足を組んでしまった。どうやら私と二人で病室に入る選択肢は無いらしい。

私は病室のドアを開け、中に入る。

病院特有の白と橙、二色の部屋。部屋の中にはベッドが一つあり、そこにノールはいた。  
首にはギプスが巻かれており、右手首には包帯がぐるぐる巻きで痛々しい。

ベッドの大きさに対して彼女の体軀が小さすぎるのにも、どこか儂はかなさを感じてしま  
う。

「あ、ナイト……」

彼女は私に気づき視線だけを合わせてきた。私はベッド横の椅子に座る。

じつと見つめてくる彼女に躊躇ちゅうちゅうよしたものの、意を決して話し掛けた。

「……後遺症は無いって聞いたけど……怪我は大丈夫？ 痛くない？」

「大丈夫だよ。動かない分にはあんまり痛くないから。ごめんね、心配かけちゃって……私たちの組はライブも中止になっちゃったみたいだし」

「いや、大丈夫。私もあんまりライブは好きな方じゃないから。ミスしたら取り返し付かないし……」

「……………」

しかし後が続かない。言いたいことはある。

けれど、どうしても私がこんな事を言える立場なのかと考えてしまい、口にできない。

「……ねえ」

私が口を閉ざしていると、彼女の方から話しかけてきた。

「な、何？」

「そこにあるリモコン取ってくれない？ それでベッドのリクライニングを調節できる



みたいでさ。それが手元に無いと皆が帰った後、横になれないから……」  
「あ、うん。分かった」

私はリモコンを手に取り、彼女の方に差し出す。

その途中、突然彼女の左手が伸びてきて、私の手を掴んだ。

「……………」

カシャツ、カシャ……

驚いた私はリモコンを床に落としてしまった。軽い落下音が部屋に響き渡る。

「……………」今日は負けちゃったけど……次は私が勝つから……」

怪我が治ったら……必ずリベンジするから……！」

そう言う彼女の手にはとても怪我人とは思えない程の力がこもっている。

ボロボロになってベッドに横たわっているのに、気力だけはパドックやレース本番で

感じたそれと大差ない。

彼女の力強い瞳に惹かれてみると、目の周辺が薄っすら腫れているのに初めて気が付いた。

きつと泣き腫らしたのだろう。それを見た途端、今まで言えなかった言葉が喉から出てくる。

「……………」うん！ 待ってる……………っ！ ずっと待ってる……………っ！

だってノールは凄いウマ娘だから……！

倒れるぐらい必死で走って……！

今までずっと独りで走ってた私の世界に割り込んできて……っ！

私は全力で走ってるのに、どんどん差を詰めてきて……！

最後の100mなんか気が気じゃなかった！ ギリギリの競り合いに息が止まりそうなくらい緊張して、でもそれが楽しくて……！

だからまたリベンジして欲しい……！ また私と戦ってほしい……！

だってノールは初めて出来た私のライバルだから……!!」

酷い事を言ってしまったかもしれない。彼女にもう一度私と走るのを期待するのは、また彼女に無理をさせるといふ事でもある。

それでも私は、初めて体験した競り合いでの高揚感や緊張感が私にとってはとても印象に残った事。それをもたらししてくれたノールは凄イという事を伝えたかった。

いつの間にか彼女の手を両手で握りしめていたのに気が付き、慌てて緩める。そして再び彼女の顔を見ると、

「え……あ、そ、そうなんだ……／＼／＼」

少し照れたような表情をしていた。さっきまでの闘志が鳴りを潜め、可愛い顔をしているのに肩透かしを食らう。

「わ、私、ナイトに迫れるぐら<sup>せま</sup>いの走りが出来てた？ レースの最後の方、あんまり記憶になくてさ……」

「う、うん……後でレース見返したら分かるけど、ハナ差で本当にギリギリの勝負だった」

「そ、そつか……。それにライバル、かあ……じゃあ尚更りベンジしないとね。ライバルが負けっぱなしじゃ、恰好つかないし」

さつきとは打って変わって、普段、同じ部屋でおしゃべりしている時のような雰囲気  
に包まれる。

「そうだね……でもりベンジ戦でも勝つのは私。その先もずっと。ノールは私のライバルだけど私には全敗する予定だから」

私は冗談でもこういう事を言う方ではなかったが、ノールにだけは言っても大丈夫かな、と思ってしまった。

「そつちも怪我なんかして不戦敗、なんて事にはならないようにしてよ？」  
「今のノールがそれを言う？」

「う……わ、私は一応走り切った後の怪我だからノーカウントで！」  
何となくだけれど、以前よりノールのとの仲が深まった気がした。

(sideジエミニシード)

ガチャ

病室の扉が開き、黒毛が病室から出てきた。

結構長かったな……やつと俺の番かよ……。

黒毛を見送ってから病室に入ろうとしたが、肝心のそいつは俺の前まで寄ってくる。

「……何だ？」

疑問に思っそう聞く。

「あ……その……ありがとう」

「……は？ いきなりなんだよ……」

いきなりお礼を言われ、戸惑う。

「あなたに勇気づけられなかったら……なあなあで済ませて、ノールと微妙な関係になつてたかもしれないから……」

「……別に。お前がウジウジしてるのが見てられなかったただけだ。気を悪くしてないよ  
うで何よりだよ」

感謝されるのはあんまり慣れてない。だから変な受け答えをしてしまう。ほとんど知らない奴にお礼を言われたのなら尚更。

「私はもう帰る。それじゃあ」

「……また機会があれば今度な」

ようやく黒毛は帰っていった。病室のドアを開ける。中に入るとノールがベッドで横になっているのが見える。

「おいノール、大丈夫か……って寝てんのか」

ノールはベッドがせりあがっているのもお構いなしに寝ている。

俺とあいつが話してた少しの間に……まあ、それだけ疲れてたって事か。

床に落ちてた物に気が付き、それを拾う。どうやらベッドのリモコンのようなので、それを操作しベッドをあるべき姿に戻した。

「……お疲れさん」

リモコンをベッド横の机に置き、聞こえてはないだろうがノールに労いの言葉を掛ける。

その後は椅子に座って、寝ているノールをずっと眺めていた。

その間考えるのはさっきのレースの事。ノールが転倒する瞬間を回想してしまい、思わず肩を抱いて身震いする。

……っ！ ……ウマ娘は時速60km以上で走るんだぞ？　なのに転倒も恐れずにあそこまで自分を追いつめられるモノなのかよ……？

俺だつて一緒に底力を鍛えてはいたが……あんな走りは出来るような気がしねえ。

端から見ただけでも、圧倒される走りだった。

速さは置いておいて、すさまじさだけで言えば一着の黒毛のあいつよりもはるかに上。嫌でも印象に残る走り。

……正直、憧れたよ……。お前の走りに……

ぼんやりとそんな事を思った。

## エピソード①

キーンコーンカーンコーン……

5時限目の終わりを告げるチャイムが鳴りました。6時限目は走りの練習に当てて良い事になっているので、筆記用具や教科書をカバンにしまい、チーム「プロキオン」の準備室に向かいます。

校舎から出て外廊下を歩いていると、街路樹として植えられている桜の綺麗さに目を奪われます。

桜……もう4月かあ……。

あ、少し自己紹介が遅れました。どうも、ノールミサンガです。

9月にターフで転んで以降、学年が一つ上がるほど時間が経ちました。

あれ以降、レース中の転倒について連日取材を受けたり、ナイトがセンターのウイニングライブを中止させた元凶としてアンチスレができていたり、色々ありました。私は元気です……。

それらのイベントを乗り越えた後は怪我を治すのに注力しました。

怪我を一月で治した後は、三か月ほどのリハビリ期間を経て、選抜レースに出走し

ました。その結果は一着。しかも結構な大差で勝利を収めました。

しかし私の担当になりたいというトレーナーはほとんどおらず……。

まあ、レースで転倒するようなウマ娘をわざわざ担当しようという物好きはあまりいないでしょう。トレーナーさんも私の件で叩かれてしまいましたし。

レース中の転倒は基本的にレース中での怪我が原因です。

しかし私の場合は疲労弊のし過ぎが原因で、外から見てもそれが明確でした。そのせいでトレーナーに問題があるのでは、という方向に話が進んだのです。

「実績欲しさに担当に無理な練習を課したり、精神的に追い詰めた事実がありますか？」  
「そのせいで彼女は転倒したのでは？」

「担当に対する管理体制が杜撰ずさんだったのでは？」

とかそんな風に。トレーナーさん自身もそれを否定しませんでしたし、一部は肯定していました。

そのため、一時はトレーナー資格剥奪という所まで話が大きくなるうとしていました。

私のせいでそこまで話が大きくなってしまったので、その尻ぬぐいは私がやりました。

これ見よがしに包帯ぐるぐる巻きで会見を開いて、トレーナーさんは私の望みに全力



で付き合ってくれただけです、と話せばトレーナーに対する悪感情が収まったのです。痛痛しい姿での言葉は影響力が強いですね、やつぱり。

会見中に痛がる素振りを見せながら主張をすれば、私に同意してくれる意見がかなり寄せられていました。

ウマ娘を追い詰めた悪徳トレーナー！ から ウマ娘の願いに寄り添ったトレーナー！ と言う風に美談風に仕立て上げられたりも……。

……お父さん、お母さん……ごめんなさい……。私は公衆の面前で嘘をつく悪い子になってしまいました……。

ジェミニがトレーナーさんを擁護する署名を集めてくれたのも大きかったと思います。

トレーナーさんは私の担当をしながらも、ジェミニの他に担当のいないウマ娘を目に掛けていたようなので、その娘達からの協力が得られたのは大きかったです。

#### 閑話休題。

私を担当してくれるトレーナーが見つからなかったのは、そうして悪目立ちをしたのも大きいのでしょうか。

とはいえ、そんな厄介者の私にも引き取り手がありました。ジェミニのトレーナーです。彼女は私が入院している間に選抜レースで結果を出し、専属のトレーナーを見つけ

ていました。

そこに私も入った事でチームを設立することになりました。それが今、私の所属する「プロキオン」です。

「……ちよわっ!」

桜に見とれていた私はわずかな段差に蹴躓けつまつき、派手に転んでしまいました。

「何やってんだお前は……」

後ろからは聞きなれた声が。

「うえ……ジエミニ。タイミング最悪……」

友人に転んだ所を見られ、気恥ずかしくなります。

急いで立ち上がり、彼女と並んで目的地へ向かいます。その途中で話すのは今日の予定について。

「今日、練習前にちよつといいか? 最高速が思ったように伸びねえからフォームを変

えようと思ってるんだが……途中でフォームを変更したお前の意見が聞きたくてな」

「分かった。でも練習前は無理かも……。今日は新入生の子がチームに入ってくる日だ

から、自己紹介とかチームの規則の説明とか色々やる事あるかもしれないし。

それにトレーナーの研修生も来るみたいだしね」

「ん？ 今日だったか、それ？」

「覚えてないんだ……ジエミニ、予定表作ってなかったっけ？」

「えつと……？ ……興味なさ過ぎて予定に書き込んでなかったわ」

「ええ……。後輩が出来るんだよ!？」

今までは私とジエミニの二人だけだったけど新入生が入ってくる事によって私達、先輩になるんだよ！」

「クソどうでも良い」

心底どうでも良いという表情をするジエミニに呆れながらも、チームの準備室にたどり着きました。

扉を開けて中に入ります。

「こんにちは」

「こんにちは……」

準備室の中にはチーム「プロキオン」のトレーナーこと、黒腐くろふ 闇十あんとさんがすでにいました。

彼はハイライトの無い死んだような目に加えて間を取る話し方をするので、初めて見

た時はとつつきにくそうだなと思いました。

しかし接する内に、彼は見た目と話し方の印象が悪いだけで、中身は非常にまともな人だと分かりました。……いや、やっぱり私の担当を進んでやっているので少し変わっているかもしれません。

「今日は新入生が来る日だから、何かあった時は声を掛けるかもしれない……。その時はよろしくね……」

「はい。分かりました」

「了解。……つつーか、その顔の悪さで良く新入生を勧誘できたな……」

「勧誘は出来てないよ……。気になる娘にはかたっぱしからスカウトを掛けてみたけど全員に断られた……」

ウチに来てくれる事になった娘は所謂逆スカウトの形だね……。なんでもノールと同じチームが良いって……」

「えっ!? 私ですか?」

いきなり会話の矛先が自分に向き、驚きました。

バン!!

「おはようございます!!」

「ギャア!!」

それに加えて元気の良い闖入者ちんにゆうしやが現れたものですから尚更です。

「マネキクローバー君……ドアが痛むのもう少し優しく開けて欲しいな……」

「あつ、それは失礼致しました！　以後、気を付けます！」

突然部屋に入ってきたウマ娘。恐らく新入生でしょう。彼女は敬礼まが紛いの姿勢で、謝罪を述べます。

「それより……はあああ………！　生っ！　生ですよ、生！」

「えっ、ちよっ、な、何ですか……？」

彼女は生、と言うたびに私の方に距離を詰め寄ってきます。彼女の方が身長が高いので正直怖いです。

年下なのについて敬語が出てしまいました。

「あつと、これまた失礼しました！　憧れの人が目の前にいるのについて興奮してしまいました！」

「え………？　わ、私が憧れ………？」

「はい！　紫苑ステークスで見たあの走り！　素晴らしかったです！」

ゴール前の鬼気迫る必死の形相！

ゴール後の糸が切れたかのような転倒！

全身全霊で走った事が痛い程伝わってきました！

私は先輩の真剣さ！ ひたむきさ！ 勝負に掛ける執念！ そこに惚れ込んだので、このチームを選んだのです！」

「えつと……あく、うん……ありがとう……／＼／＼」

どうやら私の走りを見て憧れを持ってくれたようです。純粋な好意をぶつけられ、照れくさく思いましたが……

「私も毎レースごとにつつ倒れる覚悟で走っているのですが、どうしても倒れる所までいきません！」

どうすれば先輩の様にありつただけの力を使い果たして走れるようになりますか!？」

彼女は突然おかしな事を言いだしました。

ぶつ倒れる覚悟、つて……

「あ、いや、倒れるのは普通に駄目だよ……？ 怪我して痛いし、後遺症が残る可能性もあるし、周りの人にも心配かけるし……」

心配をかけるといえば、転倒したその日にはお父さんとお母さんが病院に飛んできたっけ……。

畑仕事の手伝いはどうしたよ。こつちが逆に心配したわ。

とはいえ泣きながら無事を喜ばれては、無茶な走りをした事に対しての罪悪感が凄かったです。

なので新入生にも私のような走りはしてほしくないのですが……。

「いえ！先輩の走りを見て以降、倒れる程走らないのはレースに対して本気ではない！と思うようになってしまいました！」

是非、その奥伝を私に伝授していただきたいのです！」

「え、ええ……」

ストイックすぎるでしょ、この娘……。

彼女は結構危険な思想を持っており、ドン引きしてしまいました。

コンコン

そこにノックの音が響きます。

「どうぞ……」

「し、失礼します！」

入ってきたのはパリつとしたスーツを着た男性。

「ああ、研修生の……。とりあえず全員揃ったので始めましょうか……。

マネキクローバーくんもノールから離れて……」

「はい、分かりました！」

……先輩！後でじっくり聞かせてもらいますからね！」

「あ、は、はい……」

ひとまず場が落ち着き、皆で自己紹介を行いました。

新入生はマネキクローバー、研修生の方は眞生田<sup>まにゆうだ</sup>明臣<sup>あきおみ</sup>と言うようです。珍しい苗字なのですぐに覚えられました。

「それじゃあさつそくだけど眞生田<sup>まにゆうだ</sup>君にはマネキクローバー君の走りを見て練習メニューを考えてもらおうかな……」

「い、いきなりですか？」

「まあ、事務仕事なんか教えてもあんまり意味無いしね……やっぱリトレーナーらしい事しないと……」

「し、しかし私にはまだ少し荷が重いかと……」

「別に眞生田<sup>まにゆうだ</sup>君のメニューをそのまま採用するわけじゃない……私達で適宜<sup>てきぎ</sup>修正するか気楽にね……。それじゃあ私達はコースに行こうか……」

「分かりました！」

「わ、分かりました」

「あ、ノールとジェミニはいつも通りやっていいから……」

「はい」「了解」

そうして三人は部屋から出て行ってしまいました。

「……変なのに目を付けられたな」





「なるほど……………」

先輩は画面をじっと見つめて、私の練習メニューを確認する。自信はあるが先輩にこうしてチェックされると、やはり緊張してしまう。

「……………うん、基本的にはOK……………。良くてきてるね……………」

「あ、ありがとうございます！」

先輩からお墨付きをいただき、安心する。

「でも……………はこうした方が良いね……………。実践は初めてだからこの間違いはしようがないと思うけど……………」

そこからは細かい添削を受け、ひとまずの練習メニューが完成した。

「じゃあこれをマネキクローバー君に伝えようか……………。おい……………！ マネキクローバー君……………」

「はい！… 何でしょうか？」

「では眞生田君まにゆうだからどうぞ……………」

「は、はい。えっと、私と先輩で君の練習メニューを考えてみたんだけど、画面を見てくれるかな？」

「はい！… 拝見させていただきます！ ……すごく綿密なトレーニングメニューですね！…これが私専用のですか!!」

目を輝かせて練習メニユーを見ている新入生。先輩に手直ししてもらったとは言え、自分の作ったメニユーを見て喜んでくれる事が素直に嬉しかった。

「うん。でも君にはさつき2000mを全力で走ってもらったから、今日は負荷の少ない水泳をしようと思うんだけど……」

「分かりました！ 早速練習を行いましょう！ 善は急げです！」

新入生は私の手を引いて室内プールの方まで引きずっていかうとする。

「ちよ、ちよつと……あの……！ 待って……ち、力強……っ！ せ、先輩！」

腰を落として踏ん張るものの、そのままズルズルと引つ張られてしまう。ウマ娘の力が強いのはもはや常識レベルだが、実際に体験すると想像以上のパワーだ。

「マネキクローバー君、ストップ……。まだ話が残ってるから……」

「あ、そうでしたか！ これはまたまた失礼を！」

先輩がそう言うと、新入生がようやく止まってくれた。

「あ、ありがとうございます……」

「どういたしました……。といっても、ただ君を助けただけじゃないよ……」

さつきの新入生とのやり取りについて言いたいことがあるから……」

「れ、練習メニユーの伝え方に何か間違いがありましたか？」

思わぬ所でダメ出しされそうになり、少し緊張してしまう。

とはいえさっきのやり取りのどこに問題が……。

「トレーニングメニユーを伝えるときは……いや、分かりにくいか……あの二人が居れば……。」

あ、丁度いい……おーい……!」

しかしすぐにはダメ出しは飛んでこず、先輩は私の後ろに向かつて手を振り始めた。釣られて後ろを向くと、そこには準備室にいた二人のウマ娘の姿が。

二人は先輩に呼ばれ、こちらに近寄ってくる。

「なんですか?」「なんだ?」

「いきなりだけどここの練習メニユーを見て欲しい……。」

そう言って先輩は私が最初に作った添削前の練習メニユーを二人に見せた。

「これが新入生向けのメニユーなんだけど……二人の意見を聞きたい……。」

「その前に新入生の走りを見せろ。ビデオ、撮ってんだろ」「あ、私も。後で見せて」

目つき鋭い葦毛のウマ娘……ジェミニシードは先輩からビデオカメラを受け取り、

さつき撮った新入生の走りを見始めた。

もう一人の小さいウマ娘……ノールミサンガはパソコンの画面をじつと見ている。

この二人は新人の私でも名前を知っている。確か少し前にあった騒動で会見に出ていたっけか……。

先輩に見られていた時とはまた別の緊張感を感じていると、

「新入生の適性距離と脚質は何ですか？」

ノールミサンガがそう聞いてきた。先輩は黙ったままなので、私が答える事にする。

「中長距離の逃げだよ」

「……」、トレレーニングの合間に水泳が挟まってますね。坂路ダツシユの後にあるので脚を休めつつ、心肺機能を高める狙いでこうしてると思うんですけど……。

実際には移動や着替えの時間が無駄になるので、コースでするトレレーニングの合間に挟むのは現実的でないと思います。

トレレーニングの最後に持つてくるとか、水泳の日を作るとかした方が良いんじゃないでしょうか」

驚いたことに、彼女は先輩が指摘したのと同じ部分を指摘してきた。

「水泳の場所には……代わりにLSDトレレーニングを入れるのはどうでしょうか？ 全身持久力、筋持久力ともに鍛えられますし、ゆったりと走るので脚への負担も少ないと思います」

しかも代案まで出してきて、それが的確なものだから更に驚きだった。

「待て、LSDじゃなくてペース走の方が新入生には適してねえか？」

私からすると彼女の代案は非の打ちどころがないと思っていたが、ジェミニシードは

また別の代案を提案してくる。

「え、どうして？ ペース走だどちよつときつすぎない？」

「だから普通のペース走よりはペースを落として走る」

「でもそれじゃトレイニング効果が中途半端にならない？ ペース走はエネルギーの

……えつと、何だっけ……？」

ノールミサンガが頭を押さえて悩み始める。

「ペース走は長距離を走る時に使うエネルギーである有酸素系の強化に役立つ……。

しかしそれを鍛えるためにはキツ過ぎず、楽過ぎずのペースで走るのが最も効率が良い……。

だからペースを落としてしまうと、ノールの言う通り効率が落ちてしまうね……」

そこに先輩がフォローを入れた。

「あ、そうそう、有酸素系だ。思い出した」

彼女の口調から知ってはいたけど、単語が思い出せなかったのだろう。

……と言う事は、結構専門的な知識を知ってるんだなこの娘は……。

「ジェミニも知らない訳じゃないでしょ？」

「んな事は承知の上だ。それでも新入生はペース走をやるべきだと俺は思う」

そう言うジェミニシードに動揺はない。自信満々だ。

一体どういう理由で……？

つい身を乗り出して彼女の次の言葉を待つてしまう。

「その理由は？」

「私も気になりますね……」

先輩やノールミサンガも同じように気になるようだ。

「結論から言うと、ペース配分の上手さを鍛えた方が良いと思ったからだ。

ビデオを見た限りでは新入生のテン3ハロンと上がり3ハロンには約5秒も差がある。最初はぶつ飛ばして、後半垂れる……逃げ馬の典型例だな。

ペースを乱してスタミナを無駄に消費している事は言うまでもない。ま、こいつの場合天性のスタミナのおかげで何とかなってるがな」

ビデオを一回見ただけでそこまで分析できたのか……

「あ、だからペース走なんだ。一定のペースで走らせて、体感速度の感度を鍛えれば序盤の飛ばしすぎにすぐ気づけるからね」

「ああ、ペース配分を改善出来たら、疑似的にスタミナが増える。チマチマ基礎練習するよりもよっぽどな」

なるほど……ペース配分の上手さによる疑似的なスタミナ強化は知っていたけど、こういう形で練習に組み込めるのか……。

先輩の訂正にも無かった、ジェミニシードの話に素直に感心してしまう。

「なるほど……それは良いですね……。さっそく取り入れましょうか……」

先輩も感心したのか、トレーニングメニューが更新されていく。

「……つーか俺たちがマツサージしてやりやあ、もう少しハードなトレーニングでも大丈夫なんじゃねえか？ それこそペース走を普通のペースで走っても良いだろ」

「マツサージで解消できる疲労は筋肉だけでしょ？ 骨とか関節が強くないと練習強度を上げるのは危険じゃない？」

「それは……確かにそうだな。つってもどうやって骨とか関節の強さを知るんだ？ レントゲンでも取るのか？」

「そこなんだよねえ……私は入院中、ついでに骨密度とか調べてもらったから分かるんだけど……」

「そんなことやつてたのか……で、結果は？」

「カッチカチ。というか全身が異様に頑丈だ、つて言われた」

「ま、あの転倒でくたばつてねえんだからそれもそうだろ」

「ひ、ひどい言われよう……」

「はいはい……二人ともそれぐらいにして……。話が少し脱線してるから……」

二人で話し始めた所に先輩がストップをかける。



「とりあえず、二人には貴重な意見を頂けたので練習に戻ってもらって大丈夫だよ……」  
「分かりました」「へいへい……」

「あ！先輩！練習終わりに先輩の秘訣、教えてください！忘れないでくださいよ！」

「う、うん。また後でね」

そうして二人はコースの方に歩いていく。その背中を眺めていると、先輩が声を掛けてきた。

「……それで？さっきのをどう思いましたか……？」

「さっきの、ってあの二人の事ですよね？」

「ええ……」

「……正直すごいな、と思いました。個々のトレーニング効果に対しての理解が深いですし、改良策まで考えられるなんて。」

中央のトレセン学園って学生に対しても高いレベルでスポーツ科学を教えるんですね。

「……自信無くなってきました」

指導する学生自身のレベルがあれだけ高いと、自分がトレーナーとしてやっていけるのかと不安になってきた。

「まあ、あの二人は同年代の中でも頭一つ抜けている方だから、あんまり気にしなくても良いと思うけどね……。」

「とはいえ、ウマ娘側にもある程度の理解があった方が効率的な事は今ので分かったよね……。」

「はい」

「それを踏まえて、さっきの練習メニューの伝え方……どこが良くなかったと思う……？」

「どこが良くなかったか……」

「……ただ練習メニューを伝えるだけだったのが良くなかったと思います。」

「個々のトレーニングの意味を説明してウマ娘側にも理解してもらい、練習に取り組んでもらう必要がある……そういう事ですか？」

「その通り……。あの二人のレベルまでとはいかなくとも、トレーニングの特性、どの能力を鍛えているのか、どういう原理で鍛えられるのかを知ればそれだけで練習の効率は上がる……。」

「原理が分かれば、練習中特に気を付ける部分も分かるから……」

「ペース走を例に挙げると、ただトレーナーに「このペースで走れ」と言われるより、有酸素系の強化をするために一定のペースで走る必要があると理解した方が、練習中、よ

り適切なペースで走ろうと思える……。

ウマ娘側のモチベーションにもつながるしね……」

ウマ娘側にも理解を、か……。

今までに習わなかった事を先輩から教わり、この人の元で研修して良かったと心から思えた。

「それにウマ娘側の理解が深まると、あの娘達みたいに自分でメニューを立てれるようになるから、こつちとしても楽なんだよね……。

チェックするだけで良いし……。私の仕事はほとんど雑用になってしまったよ……」

「は、はは……」

笑って良いのだろうか……

先輩の言葉にとりあえず苦笑を返す。

「だから他の事に時間を割ける……まにゆうだ眞生田君の研修にもね……。

それと彼女たちがさつき言ってたけど、骨密度の測定か……。入学時の身体測定にその項目を追加してもらおうよう理事長に掛け合ってみようか……」

冗談で少し気が緩んだが、続く先輩の言葉に気が引き締められた。時間が空けば休むのではなく、その時間を利用して別の仕事に取り組む。

しかも担当ウマ娘の雑談からヒントを得て。

「……つと、ごめんね、少し脱線してしまった……彼女たちの事を言えないな……。とにかく、ウマ娘側にもトレーニングの理解を推し進めるようにね……」

「はい！ 分かりました！」

姿勢を正して大きな声で返事をした。

2か月ほどの研修期間だけど、このチームから出来るだけの事を学ぼう……  
そのような決意を込めて。

「マネキクローバー君も少しずつで良いから勉強するようにね……」

自学したいなら……確かノールが分かりやすい図書のリストをまとめていたはずだから、彼女に聞いてみると良い……」

「はい！ 承知しました！ 先輩にはこれから非常にお世話になりそうです！」

「ノールだけじゃなくてジエミニにもお世話になるようにね……」

彼女、目つきは悪いけど面倒見は良い方だから、頼れば良いようにしてくれるはずだ……。

それに独自のレース理論を持っているからそれも参考になると思うよ……」

「はい！ 承知しました！ どちらの先輩にも後で菓子折りを届けようと思います！」

「そこまではしなくても良いと思うけど……。まあとにかく、練習メニューの伝達からやり直してみようか……」

「はー！」

新入生の指導が終わってからは、先輩と少し話をした。

「……ノールミサンガとジェミニシード。あの二人を育てたトレーナーって今もトレセ  
ン学園に居るんですよね？」

「うん、そうだね……今は教官をやってるみたいだけど……」

「報道とかを見る限りは悪人扱いされる場面が多かったですけど……あの二人を育てた  
のなら本当は凄いトレーナーなんだろうな」

「……指導力だけなら優れていた、そう言えるかな……」

「……どういう意味ですか？」

含みのある言い方に意図を聞く。

「ノール、彼女は昔、オープンクラスのレースですらまともに勝てなかった……」。

それが少しの間で、G Iを取った事のあるナイトグライダーに迫った……。

そのために彼女は無茶な走りをして怪我を負った……。無論、それを望んだのは彼女

自身で、それに答えた彼の指導力は優れた物だと思うよ……。

けどね、彼は彼女には無茶をさせるべきでは無かった……。教育者としては赤点だったと思う……」

「それは……」

「まにゆうだ眞生田君はあの二人と接してどう思った……?」

「え、えつと……ありきたりかもしれないですけど、すごく自立した娘達だなど……」

「そう……彼女たちはとてもよく自立している……。年相応ではないくらいには大人だね……。」

それは彼がそういう指導をしていたからだと思うんだけど……彼女たちが大人過ぎてあんな事件を起こしてしまったのかな……」

「……どういふことですか?」

「ごめんね、分かりにくい言い方をして……。」

……そうだね……例えば、まにゆうだ眞生田君の同期の友達が、脱サラしてラーメン屋を始めた  
いと言ったらどうする……?」

「それは……応援しますけど」

「ラーメン屋が一年以内につぶれる確率は90%以上だと知ってもかい……?」

「……それでも応援します。そんな事は友達も承知の上でしょうし。承知の上でやりた

い事をやるというのなら、私は喜んで応援します」

「そうか……。なら中学生の子が高校に行かず y o u t u b e r になりたい、といったら君はどうする……。？」

「それは……。止めますね」

「どうしてかな……。？ 友達の際は応援してあげてたのに……。？」

「……。上手く言葉にするのは難しいですけど、やっぱり中学生ともなると感情や偏見だけで判断する事が多いので……。無茶な事をしようとするれば止めますよ。」

それに高校に行かず、y o u t u b e r としても成功できなかつたら、その子の将来が良くない物になってしまいますから」

「そうだね……。大人と子供、両者に対しての態度は違うものであるべきだ……。」

大人には責任能力が問われるけれど、子供の場合は成育の過程として、責任能力は大人である親に問われる……。」

ならノールに対してはどうだろうか……。？ 大人びていて自立しているから、勝つために怪我を承知の上で走る事を君は応援するのか……。？」

「それは……。」

「……。ノールの元トレーナーはそこを混同してしまったのかなと、私は勝手に思ってる……。」

今担当している私ですら、彼女たちを大人扱いをしまいそうなのがあるぐらいだ……。

けどね、いくら自立しているように見えても彼女たちはまだ子供なんだ。ましてや、後遺症が残るかもしれないリスクを彼は犯させるべきでは無かった。

……だからマネキクローバー君にはしっかりと言い含めておかないとね……。

とはいえ私から言うよりはノールから言ってもらった方が効果がありそうだ……後で頼んでおこう……」

「……」

「……ごめんね、変な話をして……」

「いえ、話を振ったのは私の方ですから……」

その後の研修は少ししんみりしたムードで行われた。



## エピソード②

「お、ノール……って、何か疲れた顔しとるけどどうしたんや？」

「あ、スパさん。それとナイトも」

「お疲れ」

練習を終えて食堂に向かうと、二人が先に食事を終えていました。同じ席に着きま  
す。

「いえ……今日チームに新生が入ってきたんですよ。それで練習終わり、その娘に根  
掘り葉掘り質問攻めにありました……」

それはもう、本当に根掘り葉掘り。

練習やレースの事だけでなく、私の好きな物から趣味、走る理由……拳句の果てには  
心理テストまで受けさせられました。

その上私のように走るためにはどうすれば良いのかを永遠と聞かれました……。  
とはいえその点に関しては、はつきりと止めるようにと言いました。

倒れたらこうこう、こうなるよ、というのを実体験を交えながらしっかりじっくり  
こつてりと。

それでも納得いってなさそうだったので、しばらくは言い含める必要があるかもしれない。

……紫苑S前の私もあんな風に聞き分けがなかったのかな……。

そう思うと反省です。人の振り見て我が振り直せ……。

一方で研修生の人はジェミニに質問をしに行っていました。

研修生はトレーナーになるべく様々な勉強をしていますが、ウマ娘にきちんと相対した事がある人はあまりいないので、人とウマ娘の違いを良く理解するべくジェミニに話をしに行ったのでしょうか。

「お、おう……質問だけでそんなんなるとは。ずいぶん熱心なのが入ってきたようやな」  
「はい……けど慕われるのは素直に嬉しいですね。菓子折りまでもらいましたし」  
手に持った紙袋を机の上に置きます。

「それはちよつと過剰な気もするけど……」

ナイトは紙袋を見てあきれ顔です。

「スパさんの方はどうでしたか？ 新入生、入ってきましたか？」

「ウチの方は変わらないなあ……。抜けてく奴もおらんし、入ってくる奴もおらんかった」

「ナイトは？」

「私の方は一人抜けて三人入ってきたかな……数が増えたのに合わせてサブトレーナーも入ってきたし」

「三人もか!? そんなにおるなら一人ぐらいウチの方に融通してくれや」  
「でしたら関西から来た新入生を……」

「それはあかん。ウチのチーム、ただでさえ関西出身が多いのに。これ以上関西ウマ娘が増えてもうたら、かろうじて標準語のトレーナーが完全に汚染されてまうわ……」

雑談もほどほどに、それからレースについての話が展開されていきます。

「んで、二人はこれからの目標とかあるんか?」

「私は……やっぱり秋の天皇賞ですかね。」

そこで勝てば中距離では世代最強を名乗れるでしょうし、それにふさわしいメンバーとも戦えますから」

「ま、ナイトならそこが妥当やろな。ノールはどうや?」

「私は……オールカマーか毎日王冠か京都大賞典、ですかね」

「ノールも秋天に出たいんか?」

私が上げた三つのレースは、一着を取れば秋の天皇賞への優先出走権を得られます。

なのでスパさんが秋の天皇賞へ出たいのか、と聞いて来たのは自然な事でしょう。しかし私の目的は少し違いました。

「いえ、私はナイトにリベンジしないとなので……ナイトが秋天に出る予定ならこの三つのどれかには出るでしょうから」

「なるほどな、そういうわけか……。ほら、目の敵にされとるで。言い返したれやナイト」

「……………ノールはどのレースが良い？」

「えっ？」

「三つとも距離と開催場所が違うから。好きなレース、選んで良いよ。」

それで勝負しよう。勝負の場は挑戦者が決めるべき」

そう言つてナイトは私を横目で見てきます。受け取り方によっては舐められているとも取れますが、私を見る彼女の目には闘志が溢れていました。

私の事をライバルとして認めてくれているのでしよう。

紫苑S以降、ナイトは交友関係を制限しなくなりました。友人と戦えば必ずしも疎遠になるわけでは無いと分かったからなのだと思います。

今もこうして私に好戦的な態度を取ってきますし。

「そういう事なら遠慮なく。毎日王冠で」

三つの中では一番距離の短い毎日王冠を選びます。

……距離が伸びると、またスタミナ切れ起こしてコケそうだし……。

それに毎日王冠が開催される東京競馬場では500mにも及ぶ最終直線があります。ゴール手前200mには坂も無く平坦な道が続くので、ジェット走法を最大限生かせるはずです。

「分かった。……ふふっ」

それ聞いてナイトは了承した後、怪しく笑いしました。

「……あ、今の笑いは別にノールを侮ったとか、何か含みがある訳じゃなくて、単純にまたノールと戦えるのが楽しみで、あの時の後ろから追いかけられる緊張感を味わえるんだな、って思うと無意識に笑みがこぼれただけで……と、とにかくそういう事だからあんまり気にしないでください！」

「う、うん……。分かってるから大丈夫だよ……」

彼女が交友関係を制限しなくなっただけとはいえ、神経質な面はまだ残っています。

「スパさんはどうなんですか？ これからの目標。やっぱりスプリンターズSの連覇ですか？」

「ん？ そうやな……ウチは安田記念が目標やで。行けるかどうかはまだ分からんけどな」

「安田記念という……マイルですよ？ 1600の……」

「そうやで……何や？ そんなにウチがマイルを走るのが不思議か？」

「あ、いえ。そういうわけでは無いんですけど……。」

でもスパさん、前に「ウチは短距離以外、能が無いからな！ 1400ですらへ口やで」なんて言っていたので……。」

一度私の前で1400mを走って見せてくれた事もありました。

1200mだと鬼のように速いスパさんですが、たった200m伸びるだけで、最終直線での失速がひどかったのを記憶しています。

「それは本当やで……でもそれを言ったのは半年以上前やろ？」

ウチかてそれだけ時間があれば少しは進歩するわ。

スタミナを重点的に強化した結果、もう少し長い距離を走れるようになったらやで？」

自慢げな顔をするスパさん。確かにスパさんの最高速にスタミナが備わればマイルのGIを取る事も夢ではないでしょう。

「……ちゆうても今は1400mがギリギリやけどな……。正直嫌んなるで。半年練習して200mしか伸びんとは……。」

しかし一転、げんなりとした表情を浮かべるスパさん。

確かに200m分のスタミナをつけるのに半年かかるのは異常なレベルです。スパさんは本当に短距離特化の脚質、体質なのでしょう。

「それでも半年で2000m伸ばせたんじゃないですか！ 安田記念が10月だからあと半年……もう2000m伸ばして、挑めますよ！」

「えらい単純な計算やけど……まあそうやな。時間はまだある。焦らずじっくり行こか……。」

まずは5月の京王杯で1400m走れることを示さんとな。安田記念への優先出走権も貰えるし」

「頑張ってくださいね」

「無理はしすぎないようにしてください」

「おう……後輩からエールも貰ったし、ウチはそろそろ寮に戻るわ」

「私も先に寮に戻ってる。また部屋で」

「うん。スパさんもお疲れさまでした」

そう言って二人はお盆を返却口に返し、食堂を出ていきます。残された私は夕飯のメニューを選びに席を立ちました。

夕食を食べた後、ある目的のために私は一人で食堂に残っていました。今日の授業の復習などで時間を潰します。

食堂が閑散とする頃、私の目当ての人が食堂に入ってきました。

「あ、トレーナーさん」

「ん？ ノールか、奇遇だな。少し話すか」

奇遇と言うよりは待ち伏せていたのですが、わざわざ言う事でもありません。……ありませんよね？

トレーナーさんは私の対面に座ります。

「それで……最近どうだ？」

「今日は新入生と研修生が入ってきて、色々ありましたけど……まあぼちぼちです。」

それよりトレーナーさんの方はどうなんですか？ 新入生が入ってきて教官としての仕事が大変になったのでは？」

トレーナーさんは私の専属を止めてからは教官に立場を変えました。

そこでトレーナーさんの当初の目的、「ウマ娘が一人でも成長できるようにする指導をする」を果たしているようです。

「そうだな、あんな騒動を起こした後でもお前の会見のおかげで指導を求めてくれる娘が結構いてな……一人一人にますます時間を割けなくなつた。」



とはいえ書いた本があるから、多少はマシだ。当分はその本と他の図書を参考に自主練習してもらってる。

分からない所があれば質問しに来てもらうようにしてな」

「本、私も読みましたけど……あの本、私を例にして書いてる部分が多々あるので万人向けとはいかないのでは？」

「そう、そこが少し問題だな。ここからは例を増やして汎用性を高めていかないといけない。ま、幸いにして例はたくさんいる。

後は執筆する時間をどれだけ確保できるかなんだよな……」

トレーナーさんは頭を抱えてしまいました。その様子を見る限り、相当忙しいようです。

「あ、じゃ、じゃあ、こうして私と話してるのも迷惑ですかね……？」

「そんなことはない。元担当と話をする時間くらいはある」

「そ、そうですか……」

その返事を聞いて内心ホツとします。少しの沈黙が訪れたので、水を飲んで間を持たせました。

するとトレーナーさんから話を振ってきてくれます。

「……着けてくれてるんだな。それ」

「あ、これですか？ はい。免許皆伝にトレーナーさんから貰ったものですから」

耳飾りに手を伸ばし、話題に上がった物を触ります。それは動物が刻印された小さなコイン。

「……気になったんですけど、このコインに刻印されている動物って何ていう名前なんですか？」

刻印されている動物、パツと見る限りはタヌキに見えます。とはいえ、タヌキとはちよつと違うような……。とにかく知らない動物です。

「今更だな……クズリだよ」

「クズリ？」

聞いたことのない名前に首をかしげます。

「イタチ科の生物で別名クロアナグマ……つつつても分からないか」

「そうですね……どうしてクズリなんてマイナーな生物を？ 何か特別な意味があったりするんですか？」

「お前に似合ってるからだ。クズリは怪我や死を恐れない好戦的な生き物でな。」

小さい体にも関わらず、自分より大きな捕食者にもひるまず立ち向かう。相手としては怪我をしたくないからクズリとは争いたくない。その結果、クズリには天敵がほとんどいない。

死ぬことを恐れない事が生存戦略に繋がっている珍しい動物だ」

「はあ……それで私に似合ってるって、どこがですか？」

「怪我や死を恐れない好戦的な所と小さい所」

ひどい評価を貰いました。

「……小さいのは否定しませんが、死ぬのは当然怖いですし、怪我ももちろん怖いですよー」

トレーナーさんは私を何だと思っているのでしょうか。

「紫苑Sであんな走りをしておいてどの口が言うんだ」

とはいえ、あのレースの事を引き合いに出されると弱いです。

「うう……あれはコケたくてコケたわけじゃないのに……。あのレースはああでもしな  
いと勝てそうに無かったから、しようがなくああ走ったただけで……」

「普通の奴は勝つただけに時速60kmで転倒するリスクを犯そうとはしない」

「それは……確かにごもつともで……」

淡々と反論され、ついには認めてしまう私。

また少しの沈黙が訪れたので、水を飲んで間を持たせます。

「……………私、将来はトレーナーになろうと思ってるんです。」

私みたいに伸び悩んでいた娘を助けられるようなトレーナーに……」

今度は私から沈黙を破りました。

「そうか……トレーナー、良いんじゃないか？」

というよりウマ娘の指導を俺らみたいな人がやってるのがそもそも不自然だよな……普通、引退したウマ娘がトレーナーをやるべきだろ……。

それだけじゃ人手が足りないから次いで人も、ってんならまだ理屈は通るが」

「それは確かにそうですけど……昔から言われてるじゃないですか。人とウマ娘の間に生まれる絆がウマ娘の力を最大限に引き出す、って」

「絆、か……。ノールは絆の語源、知ってるか？」

急にそんなことを聞いてくるトレーナーさん。

「絆の語源ですか？ ……いえ、知りません」

「古語に「絆ほだ」って言葉がある。それが語源だ。

人情などにひかれて自由に行動出来ない物を指す……。

絆ってのは、本来マイナスのイメージを持つ言葉だ」

「……」

「……俺とお前の絆は良くない物だったんじゃないか、って今でも思う。俺はお前に勝ってほしいばかりに冷静さを失い、あんな参事を招いて……。

お前の会見後は美談風に仕立て上げられたりもしてたが……そんな訳は無い……そんな訳無いんだ……ただ俺がどうしようもないバカ野郎だったってだけで……」

「トレーナーさん」

私はトレーナーさんの言葉を遮りました。

「……トレーナーさんと私の縁は良い縁でした。間違いなく。絶対に」

「……………そう、だな…………。悪い、引きずつちまつて……」

そうは言うトレーナーさんですが、表情は暗いです。私が怪我したのは自分の責任だと今でも思っているからなのでしょう。

事実、トレーナー資格剥奪騒ぎが起こった時も、トレーナーさん自身から資格を返納しようとした、という話を後から聞きました。

それは私を怪我させてしまったという後ろめたさからそう思っただと思えます。

とはいえトレーナーさんは今でもトレーナーを続けている。それもきつと私のせいです。

私がトレーナーを止めることを望まなかったから。会見で大立ち回りを演じたから。私を絆ほだしとして、トレーナーさんは今もトレセン学園に残っているのだと思います。

その事を考えると、私も暗い気持ちになりました。

「……………」

再び沈黙。コップに口をつけます。

「……それと……ありがとうな」

トレーナーさんから沈黙を破ってきました。

「……何の事ですか？」

「会見についてだよ」

「あれについてはもうお礼して貰ったと思いますけど……」

「何回言っても足りねえよ。お前やジェミニ達のおかげでこうしてトレセン学園に居られるんだからな……」

「それは……」

トレーナーさんはトレセン学園から去ろうとしていたのに、引き留めてしまったという後ろめたさが私の言葉を詰まらせます。

「……指導した娘が模擬レースや選抜レースで結果を出して喜ぶんだ。それを見るたびにトレセン学園に残れて良かった、って思うよ。」

それにお前の時のような失敗は二度としない。絶対に無茶だけはさせないように気を使ってる。

だから……ありがとうなノール。そして本当にすまなかつた……」

「……とんでも、いたしまして……？」

「……なんだその返事……？」

「とんでもないです」と「どういたしまして」を同時に言おうとして合体してしまいました……」

「欲張りすぎだ……」

私のドジで、重い雰囲気が少し和らぎました。

「…………ま、レースもトレーナーになる勉強も頑張れよ、元担当さん。俺はいつでも応援してるからな」

少し茶化すように言って席を立つトレーナーさん。食事を取りに行くのでしょうか。

「は、はい！ 頑張ります！」

私はその背中に大きく返事をしました。